

文化をつなぐミュージアム ―伝統を未来へ―

第25回 ICOM（国際博物館会議）京都大会 2019
9月1日〈日〉－7日〈土〉

報告書

ICOM international council of museums

ICOM KYOTO 2019

目次

ご挨拶 3

概要 9
- 数字で見るICOM京都大会 10
- タイムテーブル 12
- 大会テーマ 14

プログラム 15
- ICOM委員会等リスト 16
- ICOM規約に基づく会議 17
- 式典 26
- 基調講演 34
- プレナリー・セッション 40
- パネルディスカッション 48
- ワークショップ 51
- ネットワーキング・セッション 54
- メモリアル・レクチャー 55
- 国際委員会セッション 56
- その他委員会セッション 116
- 新たな国際委員会 121
- ソーシャル・プログラム 122
- ミュージアム・フェア 126
- エクスカーション 128
- ポストカンファレンスツアー 129
- マンガでみるICOM京都大会 130

運営 131
- 大会への歩み 132
- 主催者 136
- 開催都市及び開催会場 138
- ボランティア 139
- 参加助成 139
- パブリックリレーション・コミュニケーション 140
- 登録 144
- アクセシビリティ・参加者サービス 146

参加者アンケート 149
- アンケート結果 150

財務報告 155

大会後のイベント 159

参考資料 161
- 各種委員会名簿 162
- 協賛・協力一覧 165
- 出展者一覧 168
- オフサイトミーティング 171
- エクスカーション・ツアー 173
- 制作物一覧 175
- 主要国内メディア掲載 178
- 参考資料 180



ご挨拶



未来に向けて

ICOMは1946年の創立以来、博物館の専門家が一丸となって一つの目標に向かって邁進してきました。その目標とは、より良い社会に向けて博物館を発展させることにあります。3年に1度開催されるICOM大会は、この目標の実現に向けて常に中心的な役割を果たしてきました。本大会は、ICOMにとって最大のイベントであるだけではなく、世界各国の博物館や文化財の専門家にとっても重要なイベントです。

新たな10年の幕開けとなる2020年をまもなく迎えようとする今、ICOMは目標達成に欠かせないより大きな問題に直面しています。それは、気候変動が緊急事態に陥り、地球上の生命にとって史上最大の脅威となっていることです。進むべき未来なくして、一体どのようにして世界の文化財を後世のために守れるというのでしょうか？ そのため、本大会は、文化財分野の課題を討議する一大イベントとして、それだけに留まらないさらなる高みを目指しました。2019年のICOM京都大会は、これまでの活動を振り返ると同時にターニングポイントにもなり、持続可能な開発のための2030アジェンダを達成するためにICOMのコミットメントを明確にする機会となりました。

京都大会は、120の国と地域から過去最大の4,590人が参加し、持続可能な開発を目指して様々な課題に取り組みました。例えば、デコロナイゼーションと返還の問題、文化の多様性、災害リスクの管理、地域発展などについて会議が行われました。会場外でも、SNSのライブ動画配信により、96の国からたくさんの人々が大会に参加しました。

大会期間中の1週間で新たな発想を喚起するディベート、プレナリー・セッション、ワークショップそして各ICOM委員会による231もの会議が行われました。その結果、私たちは多くを学び、段階ごとに実施すべき多くの変革について確認することができました。その中には、環境に配慮したICOMの活動や博物館において明確でオープンなディスカッションの奨励を継続することなどが含まれています。

ICOMは、博物館の定義だけでなく博物館の存在意義における議論を牽引していることに誇りを持っています。持続可能な発展にとっての意味、デコロナイゼーションにおける役割、社会の豊かさに与える影響など議論しています。こうした議論は、ICOM委員会と会員の皆さんのお力添えとたゆまぬ努力なしには成り立ちません。心から感謝申し上げます。

私たちの活動は博物館の中だけに留まるものではありません。路上での抗議や各国議会での討論、SNSでトレンドとなっている話題など、世界のあらゆる事柄は、博物館の壁を越え私たちに伝わってきます。私たちの対応や取り組み方次第で、社会における私たちの役割のみならず、社会が私たちに寄せる信頼もまた、決定されるのです。

ICOM京都大会が与えた前例のない影響力は、ICOMがこの1週間で取り組んだ課題に人々が関心を示している証しだと信じています。彼らは本大会で議論された課題が自らに関わると考え、何よりも、博物館が課題解決の一助となることを信じてくださっているのです。この思いこそが、ICOMを、世界各国から博物館の専門家が一堂に会して、イノベーションを生み出し、ベストプラクティスや専門知識を共有し、社会正義や地球環境を守る活動を推し進め、様々な文化や国家の架け橋となり、ひいては平和な世界を実現していくという目指すべき姿であらしめているのです。



ICOM会長
スアイ・アクソイ
Suay AKSOY

ICOM京都大会に ご参加いただいた皆様へ



2019年9月1～7日の1週間にわたって開催された第25回ICOM（国際博物館会議）京都大会2019は、ICOM大会としては過去最大の120か国・地域より4,590名の参加者をお迎えし、無事、終了することができました。主催者の一人として、ご協力いただいた皆様には、心より御礼申し上げます。大会では活発な議論が行われ、日本及び世界のミュージアム界にとって、大変、有意義な大会であったと自負しております。

大会を振り返りますと、9月2日は秋篠宮皇嗣同妃両殿下をお迎えして開催された開会式に始まり、建築家の隈研吾氏による環境との調和を目指したミュージアムについて基調講演をいただきました。その後、プレナリー・セッションでは、ミュージアムと持続可能性の関係性について深く議論する機会となりました。9月3日は、写真家・活動家の立場から、セバスチャン・サルガド氏がアマゾンの森林破壊の現状について基調講演を行い、その後、プレナリー・セッションとして、ICOMによる新たなミュージアムの定義を巡る議論が活発に行われました。9月4日はアーティストの蔡國強氏によるミュージアムが芸術に果たす意義について基調講演をいただくと同時に、災害時のミュージアムの役割や世界におけるアジア美術の捉え方についてプレナリー・セッションがありました。その後もマンガのミュージアムにおける可能性やミュージアムの地域発展について、議論が行われました。9月5日は関西圏を中心に各地で国際委員会によるオフサイトミーティングが、9月6日は地元、京都府市のご協力のもとエクスカーションが行われ、最終日である9月7日には、京都府知事・京都市長の手からICOM旗が次回開催地であるチェコ・プラハへと引き継がれ、盛大なフィナーレを迎えることができました。

博物館の定義の改定は2020年以降に持ち越しとなりましたが、プレナリー・セッション、ラウンドテーブル、そして4時間半にもわたる臨時総会において、ミュージアムの果たす役割について、歴史に残る、実りある議論ができたかと思います。また、大会決議として、日本委員会から提案され採択された「『Museum as Cultural Hubs』の理念の徹底」、「アジア地域のICOMコミュニティへの融合」は、今後のミュージアムの活動にも影響を与えうる重要なものであったと思われます。今回議論された熱気を次回開催地であるプラハに、そして、開催地である京都から日本全国へと伝えていくのが我々主催者の次なる責務ではないかと考えております。

最後になりましたが、今回の開催の地元である京都府・京都市には多大なるご協力をいただきました。重ね重ね御礼申し上げます。

佐々木丞平

ICOM京都大会2019組織委員長
佐々木 丞平

第25回ICOM京都大会報告書の刊行について



日本の博物館界が全力をあげて取り組んだ第25回ICOM京都大会2019は、大会史上最多の参加者を得て、無事、終了いたしました。全世界の博物館関係者が、博物館を取り巻くさまざまな課題を国際的な視野で議論するICOM大会が日本で開催されたことは、日本国内の博物館を巡る課題解決と今後の振興に向け、大きな糧となったと確信しております。また、海外から訪れた参加者に、日本、そして京都が育んだ伝統と文化を、広く発信し異文化交流を促進する機会を提供することもできました。参加者をはじめ、ICOM本部、文部科学省・文化庁、京都府・京都市、ボランティアなど、関係各方面のみなさまからの多大なるご支援に、あらためて深く感謝申し上げます。

何より、日本で初めて開催された本大会に、当初の予想を大きく上回る1,900名近い日本人が参加してくださったことは望外の喜びでした。本大会の開催を目指し、国内会員の増加に取組んだ結果、2016年のミラノ大会の時、個人と団体を合わせて234だった会員数は、現在500を大きく超えるまでになりました。さらに、ICOM会員のみならず、多くの日本の博物館関係者が京都大会にご参加いただけたことは、今後の日本の博物館について議論するに際し、ICOMを中核とする国際的視野が必要であることの認識を共有できたものと思います。

国内に目を向ければ、文化財保護法の改正を契機に今後の博物館制度のあり方についての検討が本格化する中で、博物館に期待されるさまざまな新しい役割を担い、一方で、博物館の基本機能の充実が求められている現状に鑑みても、今回のICOM京都大会は、今後の議論の柱となる多くの示唆を与えることができたと考えております。

本報告書は、「文化をつなぐミュージアム―伝統を未来へ―」のテーマの下に開催されたICOM京都大会の全体を網羅する報告書として刊行するものです。

京都大会の成果を一過性のものとせず、今後の博物館の持続的発展につなげるためにも、この大会を記録にとどめ、後世に残す報告書の意義も大きいかと思います。

大会にご参加いただいた方のみならず、ご参加いただけなかった方を含め日本の博物館関係者が広く大会の概要を把握し、大会で議論された多くのテーマ・課題について共有しつつ、今後の博物館を考える議論に、本報告をご活用いただければ幸いです。



ICOM日本委員会委員長
青木　保

ICOM京都大会を終えて



ICOM京都大会は、内閣府、文化庁、観光庁などの政府機関や、京都府、京都市など関係地方自治体、145社におよぶ協賛・協力企業団体のご支援、のべ849人のボランティアの参加など多くの関係者のご協力を得て実施できたものです。お陰様で、参加者の満足度90%という調査もあり、ここに改めて関係の皆さまのご支援ご協力に感謝申し上げます。また、京都推進委員会、運営委員会はじめ大会の運営に当たられた方々のご尽力に心から敬意を表します。

顧みれば、私が3年に1度のICOM大会に初めて参加したのは、2010年の中国・上海大会でした。2004年の韓国・ソウル大会に次ぐアジアで2回目となる上海大会は、国家戦略として博物館の充実発展に取り組んでいる中国の強い意気込みが感じられました。

ICOMは1946年の創立で、日本は1950年の第2回大会から毎回先達が参加してきました。日本から執行役員が選出されたり、日本でASPAC大会を開催したりしてきましたが、3年に1度の大会はまだ日本で開催されていませんでした。そこで、ICOM日本委員会と日本博物館協会は、上海大会出席者を中心に2012年にICOM大会招致検討委員会を設置し、2013年に報告書を取りまとめました。そして、同年のリオデジャネイロ大会への参加とICOM大会招致準備委員会の設置を通じて本格的な招致運動を開始しました。そして2015年6月にパリで開催されたICOM諮問委員会で、ICOM大会の日本開催が決定されました。

私は、ICOM京都大会は、博物館活動のみならず、日本の文化芸術を広く世界に発信し、訪日した多くの博物館関係者に日本の歴史や文化伝統を感じていただく良い機会であったと考えています。とりわけ、今回の大会で明らかになったのは、西洋と東洋、南と北の交流と相互理解のさらなる深化の必要性、アジアの中の日本の立ち位置を考えることの重要性、博物館がSDGsなど地球規模の課題とどう向き合うか、Society5.0と言われる未来社会の中で博物館の果たす役割は何か、地域振興、産業、観光、教育など博物館機能の拡張をどう図っていくか、といったことなどへの対応が求められていることでした。

ICOM京都大会は、人類の遺産の継承発展、文化財の調査研究、保存、修復、公開展示の充実というこれまでの博物館の役割に加え、未来志向の博物館の在り方を考える上で意義深い大会となったと思います。

私たち博物館関係者は、京都大会の成果を踏まえ、日本の博物館振興を推進することが求められています。関係の皆さまにおかれましては、今後とも引き続きのご指導とご支援を心よりお願い申し上げます。

銭谷眞美

公益財団法人日本博物館協会長
銭谷　眞美



概　要

数字で見るICOM京都大会

120
国・地域





31 オフサイト・ミーティング

49
エクスカーション











147
出展者

150+
関連イベント

5
採択された決議



145
協賛・協力

ICOM KYOTO 2019

1476
スピーカー



231
セッション

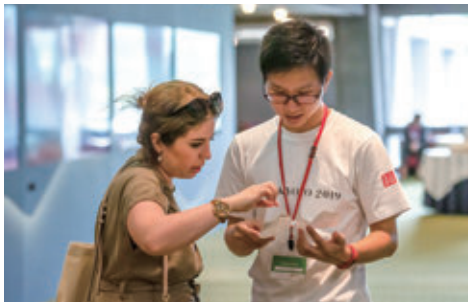


4590
参加者



849
ボランティア
（延べ）







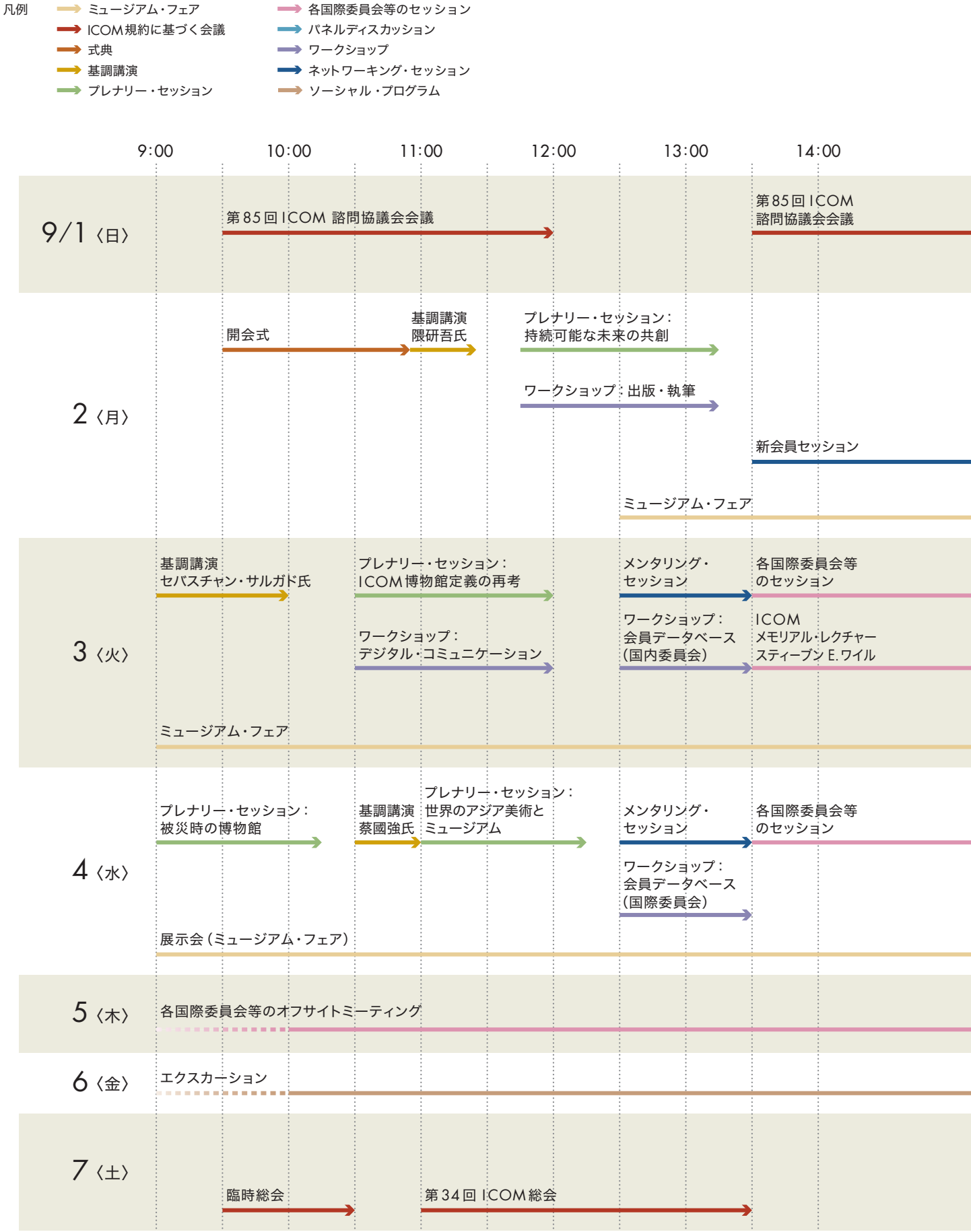


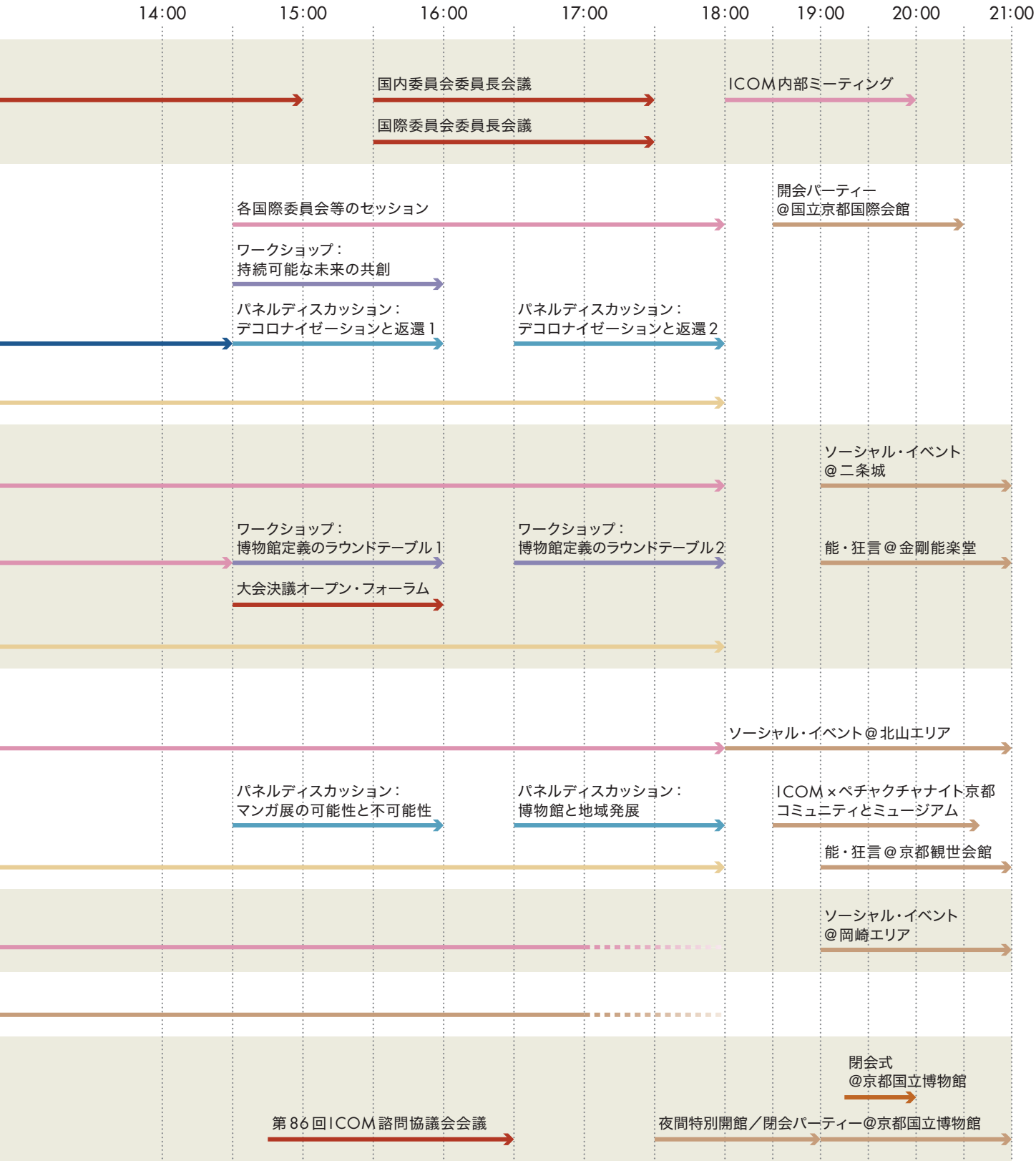


2 国際委員会の設立

90%
総合満足度

タイムテーブル


凡例
ミュージアム・フェア
ICOM規約に基づく会議
式典
基調講演
プレナリー・セッション
各国際委員会等のセッション
パネルディスカッション
ワークショップ
ネットワーキング・セッション
ソーシャル・プログラム
9:00
10:00
11:00
12:00
13:00
14:00
9/1〈日〉
第85回ICOM 諮問協議会会議
第85回ICOM 諮問協議会会議
2〈月〉
開会式
基調講演 隈研吾氏
プレナリー・セッション：持続可能な未来の共創
ワークショップ：出版・執筆
新会員セッション
ミュージアム・フェア
3〈火〉
基調講演 セバスチャン・サルガド氏
プレナリー・セッション：ICOM博物館定義の再考
メンタリング・セッション
各国際委員会等のセッション
ワークショップ：デジタル・コミュニケーション
ワークショップ：会員データベース（国内委員会）
ICOM メモリアル・レクチャー スティーブン E. ワイル
ミュージアム・フェア
4〈水〉
プレナリー・セッション：被災時の博物館
基調講演 蔡國強氏
プレナリー・セッション：世界のアジア美術とミュージアム
メンタリング・セッション
各国際委員会等のセッション
ワークショップ：会員データベース（国際委員会）
展示会（ミュージアム・フェア）
5〈木〉
各国際委員会等のオフサイトミーティング
6〈金〉
エクスカーション
7〈土〉
臨時総会
第34回 ICOM総会


14:00
15:00
16:00
17:00
18:00
19:00
20:00
21:00
国内委員会委員長会議
国際委員会委員長会議
ICOM内部ミーティング
開会パーティー
@国立京都国際会館
各国際委員会等のセッション
ワークショップ：
持続可能な未来の共創
パネルディスカッション：
デコロナイゼーションと返還1
パネルディスカッション：
デコロナイゼーションと返還2
ソーシャル・イベント
@二条城
ワークショップ：
博物館定義のラウンドテーブル1
ワークショップ：
博物館定義のラウンドテーブル2
能・狂言@金剛能楽堂
大会決議オープン・フォーラム
ソーシャル・イベント@北山エリア
パネルディスカッション：
マンガ展の可能性と不可能性
パネルディスカッション：
博物館と地域発展
ICOM×ペチャクチャナイト京都
コミュニティとミュージアム
能・狂言@京都観世会館
ソーシャル・イベント
@岡崎エリア
閉会式
@京都国立博物館
第86回ICOM諮問協議会会議
夜間特別開館／閉会パーティー@京都国立博物館

文化をつなぐミュージアム
― 伝統を未来へ ―

ICOM京都大会のテーマは、「Museums as Cultural Hubs: The Future of Tradition（文化をつなぐミュージアム―伝統を未来へ―）」です。

今、世界中の博物館で、博物館職員やその関係者が、どうすれば博物館が社会に貢献することができるのかを必死に考える時代となっています。地球規模の気候変動や貧困、紛争、自然災害、人権の抑圧、環境問題などを背景に、国際的に政治・経済・社会が大きく変容を遂げている中で、平和で持続可能なよりよい未来を構築するために博物館が果たすべき役割を考えることが、ますます重要になってきているのです。

博物館は、歴史系、美術系、自然史系、科学系、文学系等多種多様な館種が存在し、その設置者や形態、規模も様々ですが、それこそが博物館の特色であり、それぞれの博物館が有機的に連携し、「Cultural Hubs（文化の結節点）」として各地域、さらには国内外の多様な人々や組織とネットワークを構築することによってその存在価値を示し、過去から未来へと社会的役割を果たしていくことが求められています。

ICOM京都大会は、これらの期待に応えるために博物館が何を為すべきかを議論する場としたいと考えました。博物館と博物館、あるいは他の文化・教育・研究施設、地域社会、専門家など、様々なステークホルダーとの連携・協働、国際的な課題の共有、そして、世界中の関係者との議論を通じて考える博物館の定義の再考、さらにそこから見えてくる各国・地域における博物館の課題と今後に求められる改革の在り方など、これらを考える「場」のキーワードとして掲げたのが「Museums as Cultural Hubs（文化をつなぐミュージアム）」です。

一方、博物館がその力を発揮するために最も重要な要素は、過去から継承した有形無形の文化遺産の保存と活用です。博物館は未来を考えるための貴重な糧であり、人類共通の宝である文化資源を守り、次世代に引き継ぐとともに、現代に生きる人々のために活用することによって、「Cultural Hubs（文化の結節点）」としての役割を果たすことができます。「The Future of Tradition（伝統を未来へ）」には、過去の文化遺産が今も息づき、伝統として受け継ぎつつ、新たな文化を創造している千年の都・京都でICOM大会が開催されるに際し、伝統を大切にしながら新しい未来を創造するために博物館が果たすべき役割を考えたいという願いが込められています。

このテーマを通じて、様々な文化の繋ぎ役としての「博物館」の可能性を世界各国の博物館関係者と一緒に考えるため、ICOM京都大会では、3人の世界的に著名な知識人による基調講演と4つのプレナリー・セッション（全体会合）、パネル・ディスカッション等を設けました。持続可能性（Sustainability）や多様性（Diversity）、包摂性（Inclusion）等をキーワードとし、参加者全員で活発な議論が展開され、新しい時代の博物館のビジョンを考察する場となったのではないかと思います。



プログラム

ICOM委員会等リスト

国際委員会

AVICOM	オーディオビジュアル及び ソーシャルメディア新技術国際委員会
CAMOC	都市博物館のコレクション・活動国際委員会
CECA	教育・文化活動国際委員会
CIDOC	ドキュメンテーション国際委員会
CIMCIM	楽器の博物館・コレクション国際委員会
CIMUSET	科学技術の博物館・コレクション国際委員会
CIPEG	エジプト学国際委員会
COMCOL	コレクション活動に関する国際委員会
COSTUME	衣装の博物館・コレクション国際委員会
DEMHIST	歴史的建築物の博物館国際委員会
DRMC	博物館災害対策国際委員会
GLASS	ガラスの博物館・コレクション国際委員会
ICAMT	建築・博物館技術国際委員会
ICEthics	倫理問題国際委員会
ICDAD	装飾美術・デザインの博物館・ コレクション国際委員会
ICEE	展示・交流国際委員会
ICFA	美術の博物館・コレクション国際委員会
ICLCM	文学と作曲家の博物館国際委員会
ICMAH	考古学・歴史の博物館・ コレクション国際委員会
ICME	民族学の博物館・コレクション国際委員会
ICMEMO	公共に対する犯罪犠牲者追悼のための 記念博物館国際委員会
ICMS	博物館セキュリティ国際委員会
ICOFOM	博物館学国際委員会
ICOM-CC	保存国際委員会
ICOMAM	武器・軍事史博物館国際委員会
ICOMON	貨幣博物館国際委員会
ICR	地方博物館国際委員会
ICTOP	人材育成国際委員会
INTERCOM	マネージメント国際委員会
MPR	マーケティング・交流国際委員会
NATHIST	自然史の博物館・コレクション国際委員会
UMAC	大学博物館・コレクション国際委員会

地域連盟

ICOM ARAB	アラブ地域
ICOM ASPAC	アジア太平洋地域
ICOM EUROPE	ヨーロッパ地域
ICOM LAC	ラテンアメリカ及びカリブ海地域
ICOM SEE	東南ヨーロッパ地域
CIMAO	西アフリカ地域

加盟機関

AEOM	ヨーロッパ野外博物館会議
AFRICOM	国際アフリカ博物館会議
AIMA	国際農業博物館協会
AMMM	地中海海洋博物館協会
CAM	博物館英連邦協会
CIMAM	国際美術館会議
EXARC	国際考古学野外博物館・実験考古学組織
FIHRM	国際人権博物館連盟
HANDS ON!	国際こども博物館協会
IACCCA	国際現代美術に関する企業コレクション協会
IACM	国際税関・税博物館協会
IAMFA	国際博物館施設管理者協会
IAMH	国際歴史博物館協会
IATM	国際交通・通信博物館協会
ICAM	国際建築博物館連合
ICMM	国際海事博物館会議
ICSC	良心のサイトの国際連合
MAC	カリブ海博物館協会
MINOM	国際新博物館学運動
PIMA	太平洋諸島博物館協会
SIBMAS	国際演劇図書館博物館連盟

特別委員会

MDPP	博物館の定義・展望・可能性委員会
DRMC	災害リスク管理委員会
ETHCOM	倫理委員会
FIREC	財務・資産委員会
LEAC	法務委員会
NEC	推薦・選挙委員会
SAREC	戦略的配分評価委員会
SPC	戦略的計画委員会

ワーキンググループ

MWG	メンバーシップワーキンググループ
WGS	持続可能性ワーキンググループ
ICWG	国際委員会将来構想ワーキンググループ

ICOM規約に基づく会議

※各会議の位置づけについては、pp.180 ～ 184のICOM規約をご参照ください。

第85回ICOM諮問会議

9.1〈日〉9:30–12:00/13:30–15:00

第85回ICOM諮問会議には、各国内委員会、国際委員会、地域連盟および加盟機関の委員長等が出席した。ICOM会長、ICOM諮問会議長、ICOM京都大会2019組織委員長、ICOM日本委員長による挨拶の後、ICOM事務局より、加盟機関、文化遺産保護、人材育成(キャパシティ・ビルディング)、出版物、広報、博物館と社会との関わり、法務、EU一般データ保護規制(GDPR)への対応等を中心とした2018年中の活動内容の説明が行われた。

続いて、戦略的配分評価委員会(SAREC)、倫理委員会(ETHCOM)、博物館の定義・展望・可能性委員会(MDPP)、戦略的計画委員会(SPC)、災害リスク管理委員会(DRMC)による活動報告、国際委員会将来構想ワーキンググループ(ICWG)および持続可能性ワーキンググループ(WGS)による提言の提案が行われた。

さらに、「21世紀グローバル社会における現代美術の貢献」(CIMAM)、「人権や女性の権利をテーマとする芸術」(ICOMナイジェリア)、「東部アフリカでのICOM改革」(ICOMケニア)、「英国内の博物館とブレグジット」(ICOM英国)などのテーマ別プレゼンテーションや、ICOM国際研修センター(ICOM-ITC)事務局による同研修センターでの研修活動に関する動画の上映が行われた。

最後に、ICOM事務局長による2022年のICOMプラハ大会の準備状況の報告、大会決議委員会による決議手順および委員会活動の説明があり、閉会となった。

臨時総会

9.7〈土〉9:30–10:30

ICOMは、博物館の定義の見直しを目的とする博物館の定義・展望・可能性委員会(MDPP)を2016年に立ち上げた。それ以降3年間にわたり、参加型のプロセスにより複数の会議、ラウンドテーブル(円卓会議)、世界的な意見交換が行われてきた。第139回ICOM執行役員会は、ICOM京都大会の最終日に開催される臨時総会での議論に向け、新定義案(p.185参照)を了承した。

出席者が定足数に達していることを確認後、ICOM会長が臨時総会の成立を宣言。MDPPのJette Sandahl委員長に、委員会の活動報告と博物館の新定義案の紹介を促した。

これに続くオープンディスカッションでは、会員全員に発言権が与えられた。国内委員会や国際委員会、地域連盟および加盟機関により多くの意見や提案が出され、世界のあらゆる博物館が直面する21世紀の課題に関する議論の重要性だけでなく、ICOMの重要性も改めて認識された。

本ディスカッションに続き、臨時総会中に出された全提案の留保および議決の延期からなる決議修正に関する投票を実施。各委員会の投票権を有する代表者562名が投票し、うち70.4%が議決の延期に賛成した。

ICOM会長は、民主的なプロセスにより出された本決定を採択。臨時総会による健全な議論への感謝と国内委員会・国際委員会との今後の対話の重要性に触れたうえで、会議を締めくくった。

その後の予定として、2020年6月の臨時総会で議決の方法やプロセスが示され、翌年6月の同総会で博物館の定義が議決される見通しが、2020年1月にICOMより発表された。





ICOM規約に基づく会議

第34回ICOM総会

9.7〈土〉11:00–13:30

会議冒頭では、ICOM会長による挨拶の後、2018年度の会長報告を実施。続いてEmma Nardi財務担当役員が2018年度の財務結果を報告し、報告内容が承認された。

大会決議委員会のMarlen Mouliou委員長が、参加型のプロセスにより策定された5つの決議草案を発表。これらすべてが投票により決議され、承認された。

Hughes de Varine氏およびPer Rekdal氏が、いずれも大多数の賛成を得てICOM名誉会員に選出された。

推薦・選挙委員会(NEC)のStéphanie Wintzerith委員長が、2019～2022年の執行役員の投票結果を発表。Laishun An氏とAlberto Garlandini氏が副会長、Emma Nardi氏が財務担当役員にそれぞれ再選されたほか、Hilda Abreu de Utermohlen氏、Vinod Daniel氏、Carlos Roberto Ferreira Brandão氏、Carina Jaatinen氏、Léontine Meijer-Van Mensch氏、Maria de Lourdes Monges Santos氏、Terry Simioti Nyambe氏、Carol Ann Scott氏が役員として再選された。ICOM諮問会議長を務めるRegine Schulz氏も引き続き再選。また、新たにNicholas Crofts氏、Eric Dorfman氏、Tayeebeh Golnaz Golsabahi氏の3名が役員に選出されたほか、Suay Aksoy氏もICOM会長として2期目の再選を果たした。Aksoy会長は再選に際し、心からの感謝の意を述べた上で、世界中の博物館・文化遺産の発展と保護に向けた継続的な取り組みを全会員に呼びかけた。

第86回ICOM諮問会議

9.7〈土〉14:45–16:00

会議冒頭では、まず退任予定のGustavo Ortiz副議長が挨拶し、2019～2022期も議長に再選されたRegine Schulz氏による開会の挨拶を促した。臨時・通常総会の延長により予定より遅い開始となったため、投票により、議事の修正および2020年6月パリで行われる次回会合まで「項目2：国内委員会および国際委員会の個別会合による提言」を延期することが、可決された。

会議では、2019～2022期の諮問会議の新議長の選出を目的とする投票が行われ、Alec Coles氏(オーストラリア)およびChristian Nana Tchuisseu氏(カメルーン)の2名の候補者から後者のTchuisseu氏が副議長に選出された。

Schulz委員長は、Ortiz前副議長による在任中の尽力に改めて感謝の意を伝え、Tchuisseu氏の副議長選出を祝福した。最後にICOM事務局長が、会長、執行役員各位、ICOM京都大会2019組織委員会、ICOM日本委員会、ICOM事務局による大会中の協力に謝意を表し、閉会した。





国内委員会委員長、国際委員会委員長会議

9.1〈日〉15:30–17:30

第85回諮問会議に続きICOM国内委員会および国際委員会の委員長会議が同時開催された。全国内委員会スポークスパーソンのKidong Bae氏（ICOM ASPAC委員長、前ICOM韓国委員長）、国際委員会スポークスパーソンのKristiane Straetkvern氏（ICOM-CC委員長、ICWG委員長、ICOMデンマーク会員）により、それぞれ現在の重要問題について各委員会の委員と議論し、諮問会議への提言を作成する機会が与えられた。2つの会議では特に、国際委員会将来構想ワーキンググループ（ICWG）の提言および報告書、国内委員会・国際委員会の一般的な法的見解、EU一般データ保護規制（GDPR）、委員会文書の保管に関する現状および計画、チェコ共和国プラハで2022年に開催予定の第26回ICOM大会に関する最新企画情報をテーマとするプレゼンテーションや議論等が行われた。さらにICOM事務局から、2020年の年会費に関する連絡事項が国内委員会に伝達された。また、ICOM京都大会の主要テーマの一つである博物館の新定義案に関する臨時総会での投票についても、両会議で議論された。





ICOM規約に基づく会議

大会決議オープン・フォーラム

9.3〈火〉14:30–16:00

本フォーラムにおいて、参加者は世界の博物館のコミュニティが直面している課題解決のために提案された大会決議案について議論した。ここで議論された決議案は9月7日の総会に提出され、議決に付せられる。まず、本フォーラム冒頭でICOM大会決議委員会のMarlen Mouliou委員長が以下の6つの決議案を参加者に提示した。

1)「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」の履行
ICOMノルウェー、ICOM英国による提案
2) アジア地域のICOMコミュニティへの融合
ICOM日本による提案
3)「Museums as Cultural Hubs」の理念の徹底
ICOM日本による提案
4) 博物館における文化遺産の保管
ICOMイタリアによる提案
5) 全世界に収蔵されているコレクションの保管リスク削減対策
ICOM-CC・ICAMT・COMCOLおよびICMSによる提案
6) 博物館、コミュニティ及び持続可能性
ICOM EUROPE及びICOM LACによる提案

続いて委員長は参加者のコメントを促した。議論は決議案4および5に集中した。ICOMイタリア代表によると、決議案4の最初の草案は2016年にミラノで開催された前回のICOM大会で提示されたものの却下され、その後同じ議題がマテラとナポリで取り上げられ、この決議案がさらに深く論じられた。また、本大会では「保管(deposit)」・「コレクション(collection)」・「予備コレクション(reserve collection)」・「収蔵(storage)」の用語定義についても議論が進められた。

決議案5に関しては、ICOM-CCの代表が本決議案も2016年のミラノ大会で最初に提示されたことを報告した。同代表は、博物館は歴史の保護者であり、ICOM-CCは本議題を特に重視していることを明らかにした。

その結果、本大会では決議案4と5は統合すべきだと提案された。ICOMイタリアとICOM-CCの両者は既に互いの決議案を支持しており、両決議案を合わせて1つの決議案とするべく積極的に協力する姿勢を示した。Mouliou委員長はICOMイタリアとICOM-CCに対し、決議案統合のために残された時間はわずか2日であることを告げ、両者は期限に間に合わせるよう尽力することに同意した。さらに決議案4の第2パラグラフは世界中の博物館における収蔵庫の状況分析を専門の特別委員会に委託することを提案した決議案5に追加することが決定された。

決議案6については、臨時総会で博物館の新定義案が採択された場合に文言を更新する必要があると認識された。

なお、大会決議委員は8人で構成され、佐々木丞平ICOM京都大会2019組織委員長もメンバーであった。



大会決議の採択

ICOMの決議とは、現在博物館コミュニティが直面している課題について、専門家および関係機関に示される提言であり、ICOM総会で採択されるものである。

2019年9月7日に行われた第34回ICOM総会では、9月3日の「大会決議オープン・フォーム」を経て6つから5つに集約された決議案が提示された。ICOM大会決議委員会のMarlen Mouliou委員長は同委員会の役割と運営方針について簡単に説明した後、ICOM総会で議決される各決議案の全文を1つずつ読み上げた。

決議案1「『我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ』の履行」は人間が地球に対して持続不可能な要求をしている現状を報告し、環境および社会のかつてない危機的状況とその影響について論じている。さらに本決議案では、博物館は信頼できる情報源としてコミュニティの活動のために不可欠な資源であり、現在のグローバル社会において全ての人々にとっての持続可能な未来をイメージし、設計し、実現するにあたり理想的なポジションにあると述べた。会員からのコメントはなく、本決議案は76%以上の賛成を得て採択された。

決議案2「アジア地域のICOMコミュニティへの融合」では、アジアは多様な文化が存在する広大な大陸であり、その国や地域の多くに多様な民族が複数の言語を話しながら生活し、それぞれ信仰している宗教も多様であることを論旨としている。本決議案はアジア諸国を国際的な博物館のコミュニティによりよく融合させるため、ICOMはアジアの博物館同士の相互理解を深めると同時に地域の自主性・特性・多様性が尊重されるよう尽力すべきであると提案した。会員からのコメントはなく、71%以上の賛成を得て採択された。

決議案3「『Museums as Cultural Hubs』の理念の徹底」はICOMに「Museums as Cultural Hubs（文化をつなぐミュージアム）」の理念を適用することで柔軟かつ融合的な論議を図るべきであると提案した。さらに本決議案では、博物館の役割である“Cultural Hubs”のコンセプトは歴史および政治的な世代を超えて継承される情報交換の主軸となることであり、博物館は多様な分野を縦横無尽につなぐ役割を担うべきであると述べている。本決議案は71%以上の賛成で採択された。

決議案4「世界中の収蔵庫のコレクションの保護と活用に向けた方策」では、博物館と文化遺産の専門家に、世界各国に収蔵されているコレクションの保管リスクを低減するべくあらゆる対策を採ることを要求している。さらに同決議案は現在と未来の世代にとっての研究・教育・楽しみに貢献するという博物館の使命を果たすために、文化遺産の専門家には資金の割当に加え、ツールや手法を最大限に活用してほしいと述べた。

本決議案に対しては、国内委員会が最終文書を精査する時間が十分とれないなど数件のコメントが寄せられた。これに対しICOM大会決議委員会の委員長は、文書の内容を変更する時間はないので総会が議決するしかないと答えた。この点については会長が確認し、賛成60%以上で採択された。

決議案5「博物館、コミュニティ及び持続可能性」は、1973年のUNESCOによるチリ・サンティアゴ宣言を引用し、コミュニティ・持続可能性・文化的景観に関するICOM決議を再確認した。さらに2016年のミラノ大会で採択された「拡張された博物館」に関するICOM決議を参照した。この決議案は博物館が単に伝統建築やコレクションを有し、確立された学芸の実践を行う場というだけに留まらず、社会・文化・環境・経済の発展に価値をもたらし、国連が2030年に向けて実施している持続可能な開発目標（SDGs）に直接寄与することを主旨としている。本決議案は69%以上の賛成を得て採択された。

第34回ICOM総会で採択された決議　全文（仮訳）

1.「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」の履行

ICOMノルウェーとICOM英国による提案

人類の欲求全てを満たすことは持続不可能であり、地球上の生物は、人間かそうでないかに関わらず、環境と社会が複雑に絡み合った未曾有の危機に晒されている。不平等の拡大、戦争、貧困、気候変動、生物多様性の損失による影響は、そうした危機を増幅させる要因となっているということを考慮すべきである。

国連の加盟国は、危機に対峙し、持続可能な未来への道筋を立てるために、「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」の履行について全会一致で合意したということを認識する必要がある。

知の源泉として地位を確立している博物館という存在は、コミュニティを活性化するうえで貴重な資源であり、すべての人にとって持続可能な未来を協業し形作っていくにあたり、国際社会を支える理想的な場所である。

第34回ICOM総会は、ICOM、ICOM各国内及び国際委員会、地域連盟、関連組織並びに事務局が以下を遂行することを提唱する。

・すべての博物館は、ICOMの多岐にわたるプログラム、パートナーシップ、運営を通じて、持続可能な未来を形作る上で果たすべき役割があることを認識する。

・博物館の価値・ミッション・戦略を再考し再構築するために、ICOMの博物館の持続可能性に関するワーキンググループが呼びかけた緊急動議に賛同する。

・国連SDGsの目標と目的に精通し、可能な限りの方法で支援し、個々の内外の活動や教育プログラムに持続可能性を組み込むため、「我々の世界を変革する：2030アジェンダ」をフレームワークとして活用する。

・「我々の世界を変革する：2030アジェンダ」という目標の達成に積極的に貢献し、二酸化炭素排出量を含む環境への影響を認識して削減し、地球上のすべての住民（人間とそれ以外の生き物）の持続可能な未来の確保に貢献することにより、我々自身、来館者、そしてコミュニティによい影響を与える。

2. アジア地域のICOMコミュニティへの融合

ICOM日本による提案

アジアは、多様性によって特徴づけられる広大な大陸であり、国と地域の多くは多言語・多民族・複数の宗教によって構成されている。それゆえ、文化的遺産は豊かで多様であり、様々な環境や歴史を反映している。

近年もしくは過去に植民地を経験したアジア諸国も多く、組織的に確立された博物館もあれば、新たに創られた施設も数多く存在する。近年、多くのアジア諸国において博物館が次々に創設されているが、その博物館に収蔵されたコレクションの管理・保存・整理・研究の進展具合には顕著な隔たりが見られる。中には、基本的な資源や基盤さえ不十分な博物館がある一方で、非常に高いレベルの活動を行っていながら、言葉の壁や国際交流の不足のために国外ではほとんど知られていない博物館もある。同様に、世界中の様々な地域に存在するアジア美術のコレクションは、伝統的な知識を有するアジア美術専門家たちに知られることなく死蔵されている。

アジア地域を国際的な博物館コミュニティにより一層融合させていくため、我々は、ICOMがアジアの各地域の自主性と特殊性、多様性を尊重すると同時に、アジア美術を扱う博物館同士の相互理解の促進に努めることを提唱する。

具体的には、以下に掲げるような博物館専門職としての意識を更に強化することを提唱する。

・2016年のミラノ大会決議「文化財の国際貸与と活用・保存」に沿ったアジア関連の展覧会を促進する。

・国や地域の垣根を超えた世界的なアジア美術に関するデータベースとデジタルコンテンツを構築する。

・アジアと世界中の専門家の間で、国際的な学術交流を促進する。

・アジア美術に関する知識と経験を共有し、世界中の博物館においてアジアに関連するコンテンツの存在感を高めるため、アジアの美術と文化に焦点を当てた専門家ネットワークを設立する。

※本提案は、ICOMアジア太平洋地域連盟、ICOMバングラデシュ、ICOM中国、ICOMパキスタン及びICOMモンゴルによる賛同を得ている。

3. 「Museums as Cultural Hubs」の理念の徹底
ICOM日本による提案

25回目を迎えるICOM大会が、「Museums as Cultural Hubs」のテーマのもと、1997年に国連の気候変動枠組条約に関する京都議定書が採択された会場と同じ場所で開催されたことは、重要な意義を有する。

「Cultural Hubs」には、博物館が何世紀もの時を超え、政権交代や世代をも超えて知を交流するうえで中核を担う場であるという意味が込められている。

博物館定義や持続可能性、そして博物館と地域発展に関する活発な議論が、この長期的な概念上の枠組みのもとで行なわれたことでICOM大会はより意義深いものとなった。さらに、「Cultural Hubs」には、国家的、地理的な境界を超越し得る博物館の能力という意味が込められている。

概念的には、このテーマは、博物館がどのように多様な分野を横断的に連携する役割を果たし得るか、ということを示唆している。博物館は、人文科学と自然科学が相互補完的な関係であることを私たちに気づかせてくれる。その意味において、東アジアで3回目となるICOM京都大会の議論において、災害対策やアーカイブのような学際的なテーマが含まれていることは、非常に重要なことである。

時を超え、国を越え、そして学問分野を超えて新たな時代のニーズに応えるため、我々は、ICOMが「Museums as Cultural Hubs」の概念的枠組みを取り入れた柔軟かつ融合的な論議を行うことを提唱する。

※本提案は、ICOMアジア太平洋地域連盟、ICOMバングラデシュ、ICOM中国、ICOMパキスタン及びICOMモンゴルによる賛同を得ている。

4. 世界中の収蔵庫にあるコレクションの保護と活用に向けた方策
ICOM-CC、ICAMT、COMCOL、ICMS、ICOMイタリアによる提案

ICOM-CC（保存国際委員会）、ICAMT（建築・博物館技術国際委員会）、COMCOL（コレクション活動に関する国際委員会）、ICMS（博物館セキュリティ国際委員会）及びICOMイタリアは、

- ICOM、ICOM各国内及び国際委員会、地域連盟、関連組織、事務局
- 関連する政府間機関
- 国際及び国立博物館の専門的な協会
- 博物館を担当する国立機関
- 国内及び国際的な保存機関
- 博物館長
- 全ての遺産に関わる専門家　が、下記を遂行することを提唱する。

・世界中の収蔵庫にあるコレクションのリスクを軽減するため、あらゆる対策を講じる。これには、資金を割り当てることや、ツールと方法論を十分に活用することが含まれる。それにより、現代と次世代による研究や教育、そして楽しみを与える場所としての博物館の使命を確固たるものにすることができる。

・コミュニティや人々、国に貢献するため、時や場所を超えた多様な自然や文化の重要性を理解し、国内外の開発政策を通じて自然や文化遺産を保存するのに適した方法を取り入れる必要性を認識する。

・様々な記憶や知見を伝えていく組織は、遺産の管理者として重要な価値を持ち、さらなる研究・展示・伝達の充実を図るため、コレクションの特性を記録し保存していく役割があることを再確認する。

・博物館・図書館・公文書館などの記憶を語り継いでいく組織は、知識を守り、醸成し、物質文化へのアクセスを可能にするという根源的な使命を再認識することで、正義、自由、平和の実現に向けた文化と教育の普及に広義にわたり貢献する必要がある。

・コレクションの保存は、世界人権宣言や経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約に定められているように、

人権の向上に貢献することを再考する。

・文化及び自然遺産を保護するため、コレクションの保存に関する専門知識の向上に向けた保存科学や遺産科学の役割を強化し、それらの役割に関連する社会的責任を果たす。

・文化遺産の管理、特に収蔵庫に保管されているコレクションの取り扱いや活用、展示に関する基準を再考する。

なお、ICOMは、国内委員会と国際委員会の協力を得て、世界中の博物館の保管状況の分析を特別委員会に委託している。

※本提案は、ICOMアゼルバイジャン、ICOMベルギー、ICOMデンマーク、ICOMエストニア、ICOMフィンランド、ICOMフランス、ICOMドイツ、ICOMギリシャ、ICOMイタリア、ICOMラトビア、ICOMレバノン、ICOMマダガスカル、ICOMノルウェー、ICOMポーランド、ICOMルーマニア、ICOMセルビア、ICOMスロベニア、ICOMスウェーデン、ICOMヨーロッパ地域連盟、ICOM東南ヨーロッパ地域連盟、ICFA、CIPEG、CAMOC、CECA、ICOFOM、COSTUME、UMACの賛同を得ている。

5. 博物館、コミュニティ、持続可能性
ICOMヨーロッパ地域連盟とICOMラテンアメリカ・カリブ海地域連盟による提案

チリ・サンティアゴ宣言（ユネスコ、1973年）に留意し、コミュニティ、持続可能性、文化的景観に関するICOM決議を再確認する。また、2016年のICOMミラノ大会で採択された「extended museum（拡張された博物館）」に関する決議は、博物館は単に伝統的な建物・コレクションを有し確立された学術の実践を行う場ではなく、社会的、文化的に、また環境や経済発展においても価値を有し、それにより国連の持続可能な開発目標の目的を促進することを念頭に置いている。

そこで、我々はICOMに以下のことを提唱する。

・現在、数多くのコミュニティ主体で運営されている組織が2007年に採択されたICOMの博物館定義を満たしていない。国連の2030年目標と、公平な気候変動対策の達成に向け自然・文化・無形遺産へのアクセスを保護し促進するという目標と、コミュニティの環境に配慮し、社会的・経済的な発展に向けてどう持続可能な方法で利用するかということを認識し支援する。

・地方と地域による違い、特に低・中所得国のコミュニティ主体で運営されている博物館の資源ニーズといった博物館の概念に地政学的側面があることを考慮する。

・人権や平和、持続可能なコミュニティの発展（とりわけ先住民族・少数民族の状況や移民による課題）に寄与するICOM、ユネスコ、国際連合憲章を促進するためには、コミュニティを主体とした博物館の価値を認識する。

・国や地域間レベルで、コミュニティを主体とした博物館との共業を奨励する。

・持続可能なコミュニティと地域を超えた発展や文化的景観の保護・推進に向けて変革的アプローチをとることで、地域の博物館とエコミュージアムの能力向上に貢献する。

・上記の目標達成に向けて、コミュニティレベルや地域間での文化理解を促進する仲介者として、ICOM国内及び国際委員会、地域連盟並びに関連組織の活動を強化し活性化する。

ICOM日本委員会提案決議文の解説

ICOM大会では、毎回大会決議が採択される。これまでICOM日本委員会では決議案を提案したことはなかったが、今回は開催国として運営委員会の学術研究チームの協力を得て2本の提案を行い、ASPAC及びその構成国に賛同(endorse)を依頼した。佐々木組織委員長が大会決議委員(Resolutions Committee Member)に選出されたのも幸いであった。9月3日のオープン・フォーラムでは、ICOM日本委員会が提案した決議案2及び決議案3は特に異論は出ず、9月7日の第34回ICOM総会において決議2が賛成404、反対23、決議3が賛成419、反対15で双方ともに採択された。ここでは決議2及び3について解説する。

決議2　アジア地域のICOMコミュニティへの融合

ICOM京都大会では、プレナリー・セッションの一つとして「世界のアジア美術とミュージアム」を開催したが、ICOM日本委員会としては、アジアで3回目に開催されるICOM大会であることの重要性にかんがみ、ともすれば欧米主体になりがちであるICOMを、アジアの視点に立ったテーマに誘導したかったのである。もとより、同セッションに登壇したChristoph Lind氏が述べたように、今大会において「美術館における異文化：西洋とアジア」というテーマ設定をしたICFAのような国際委員会もあったが、これを一過性のものとして終わらせないことが重要であった。そういう意味では、パネル・ディスカッションとして「マンガ展の可能性と不可能性」を開催したのも、アジア地域ではアジアMANGAサミットを開催するなど活発な意見交換が行われていながら、これまでICOMで議論されてこなかったテーマを世界規模に広げたいという意図があり、方向性を一にしていた。

決議では、ICOMがアジアの各地域の自主性と特殊性、多様性を尊重するとともに、アジアの博物館との相互理解の促進に努めることを提唱している。具体策としては、ややアジア美術に特化した内容となっており、決議では具体的に言及することはできないものの、ここには将来的にアジア美術について専門的に議論する新たな国際委員会を創設したいという趣旨が込められているのである。既に日本美術に関しては、国際ネットワーク形成に向けた活動が日米を中心に進められており、これが実現すれば、まさにアジア地域がICOMコミュニティを牽引していくことも不可能ではないであろう。そのためには、もっとアジアからの発言力を強化しなければならない。既に、同決議は昨年10月に開催したアジア国立博物館協会(ANMA)大会でも参加国に共有し、その重要性を呼びかけている。今後、日本をはじめアジア諸国がどれだけICOMコミュニティにおいてイニシアティブを発揮できるか世界中が注目している。

決議3　「Museums as Cultural Hubs」の理念の徹底

開会式で秋篠宮皇嗣殿下は、「多くの事柄が急速に変化する現代社会にあって、時間を超えて、万有の蓄積装置として、そこに存在していることこそが、今日もっとも博物館に求められていることなのではないか。」とお言葉を述べられた。人類共通の宝である文化資源を守り、次世代に引き継ぐとともに、現代に生きる人々のために活用するためには、「Cultural Hubs」の概念が重要である。それは、他機関との連携というような二次元的なつながりだけではなく、時間軸の概念も含んでおり、ICOM京都大会のテーマでは、サブタイトルとして「The Future of Tradition」も加えた。そして、ICOM日本委員会は、こうした考え方を今大会だけではなく、今後のICOM活動全体で重視していくことを提案したのである。

運営委員会の学術研究チームでの議論では、まさにICOM京都大会のレガシーとして、何を決議すべきか十分な議論を行い、決議2で提案したアジア地域へのフォーカスに加え、同様にプレナリー・セッションを開催した災害対策や、マンガ・アニメを含む多様な文化資源のアーカイブの重要性など多くの案が出されたが、提案は2本が上限であるため、最終的に、それらを包含している大会テーマそのものをレガシーにするべきだという議論に収束した。

「Cultural Hubs」の概念は、国家的、地理的な境界を超越できる博物館の能力を含んでおり、プレナリー・セッションのテーマであった持続可能な未来の共創や博物館定義の再考、さらにはパネル・ディスカッションを行ったデコロナイゼーションや博物館と地域発展の議論をもその視野に置いている。時間を超えて、国を超えて、そして学問分野を超えて新たな時代のニーズに応えるために、「Museums as Cultural Hubs」の概念について、引き続き柔軟かつ融合的な議論を行うことが求められている。そのことは、言うまでもなく日本国内でも同様であり、国際的な議論を踏まえた新たな博物館政策の再構築が求められていることを認識しなければならない。

式典

開会式

9.2〈月〉9:30–10:55

開会式は、メイン会場である国立京都国際会館のメインホールにて、3,000人を超える来場者を迎え、複数の中継会場を使用して行われた。式は、醍醐寺の僧侶による声明により開幕した。その後、秋篠宮皇嗣同妃両殿下御臨席の元、アクソイ会長、青木ICOM日本委員長等、主催者による開会の挨拶の後、殿下のお言葉及び柴山文部科学大臣、西脇京都府知事、門川京都市長をはじめとする来賓の方々に挨拶をいただいた。最後に、佐々木組織委員長による大会の趣旨説明が行われ、能のパフォーマンスで閉幕した。

式次第

- パフォーマンス 醍醐寺による声明・法螺
- 開会宣言・主催者挨拶　ICOM会長　スアイ・アクソイ
- 主催者挨拶　ICOM日本委員会委員長　青木　保
日本学術会議会長　山極　壽一
- 秋篠宮皇嗣殿下のおことば
- 来賓祝辞　文部科学大臣　柴山　昌彦
内閣府副大臣　左藤　章
京都府知事　西脇　隆俊
京都市長　門川　大作
- 内閣総理大臣メッセージ披露　代読　日本博物館協会長　銭谷　眞美
- 趣旨説明　ICOM京都大会2019組織委員長　佐々木　丞平
- パフォーマンス 能「石橋　大獅子」

司会：国谷　裕子







開会宣言・主催者挨拶



ICOM会長
スアイ・アクソイ

ご参加の皆さま、

ICOMを代表し、またその会長として、世界中の国や地域からお越しいただいた皆様のご参加を心から歓迎いたします。

日本初となるICOM大会の開催地、京都へようこそ！

ICOMは、世界約120の国、4万4,000人の会員から構成される世界最大級の国際的な文化団体として、この度、歴史ある美しい街、京都で大会を開くことを誇りに思います。世界各国からお越しいただいた本大会の参加者数はICOM大会史上最大となりました。皆さまの貢献で成し遂げたこの成果に対し、感謝とともに祝意を表します。

前回のミラノ大会から3年が経ち、その間に多くの出来事がありました。6種の生物の絶滅が宣言され、その他多くの種が絶滅の危機に瀕しています。ブラジル国立博物館とノートルダム大聖堂は火災に見舞われました。アマゾンの熱帯雨林も大規模火災に苦しんでいます。政治的な過激派組織と彼らの危険な思想については、世界中の議会で熱論が繰り広げられています。このため、文化遺産への投資が大幅に削減され、失われる危機に直面している状態の国々もあるのが現状です。

今日の世界情勢は、将来の見通しが以前より難しい状態にあります。しかしながら、私たちはこの3年間で市民社会の決意と力を目の当たりにしてきました。例えば、平等を求めた世界的な草の根運動、地球を守ろうと行進する多くの子供たち、文化遺産が消滅したり損傷したりした国々への惜しみない協力などがありました。

大きな変化を迎えているこの時代に、博物館の専門家たちが、先頭に立って行っている活動があります。これまで誰も目を向けなかった分野に踏み込み、長い間無視され放置されていたコミュニティと連携を重ね、変えることはできなくても修復できる暗い過去の出来事に光を当てています。

ICOMは、世界に蔓延する怠慢や過失、社会および経済的危機、武力紛争、天災の脅威から文化遺産を守るため努力し、今後も尽力し続けます。文化遺産を保護することはICOMの重要な役割の一つであり、これまでも優れた成果をあげてきました。

しかし、後世へ伝えるべきものを保護するならば、私たちが暮らすこの世界もまた、守らねばなりません。持続可能性と気候変動がICOMの最重要課題の一つであり、国連がSDGs（持続可能な開発目標）を恒久的なアジェンダに掲げているのはこのためです。この状況を踏まえ、無形文化遺産や持続可能なツーリズムが改めて注目されています。

博物館とは、世界で最も信頼されている施設の一つです。2015年のUNESCO総会で採択された博物館に関する勧告（2015 UNESCO Recommendation on Museums）に照らし合わせても、博物館の社会的役割に注目したICOMの取り組みには今後多くの成果が期待でき、世界各国および地域でICOMの各委員会と地域連盟と共に、国際的なパートナーシップを拡大し続ける意向です。ICOMのアジェンダには政府だけでは解決できない、独立や返還といった極めて重要な課題も含まれています。

人材育成とトレーニングは、ICOMの主要な活動の一つとして取り組まれてきました。今後も活動範囲を拡大し、ICOM会員の専門能力の開発、博物館の社会的および経済的価値の向上、倫理規程の確立に貢献していきます。

最後になりましたが、長きにわたりICOMが注目を求められてきた課題に、博物館の専門家が置かれている状況があります。博物館を協調的で生産的な職場環境にすることは、ICOMが取り組まなければならない課題の一つです。

ICOMと博物館の将来を考え続けていくことは、最も大切なことです。このことは私たちのビジョン、プログラム、プロジェクトの開発や実施につながることであり、ひいてはICOMの存続にも関わります。包括的で民主的な討論や透明性を通じて私たちの考えや取り組みの結集を促す機会でもあり、挑戦でもあるのです。

ご参加の皆さま、ここで3年前と同じ言葉を申し上げたいと思います。私にとってリーダーシップとは地位ではなく、姿勢です。つまり、私たち全員から最大の能力を引き出し、共通のビジョンを持ちながら共に働く環境を作り上げ、発展させていく姿勢を意味すると信じています。私は、会長に就任してから今日までこの原則に従ってきたと自負しています。

これも一重に親愛なるICOM会員の皆さまのおかげです。仕事やプライベートの貴重な時間を割いて、ICOMや社会をより良いものにしようとこの場にお集まりいただいています。

開会に先立ち、ICOM日本委員会、ICOM京都大会2019組織委員会、そして日本の博物館関係者の皆さまが、開催国として多大な努力を払ってくださったことに、感謝の意を表したいと思います。そして日本の政府、京都府知事、京都市長、スポンサーの皆さま、そして大会をご準備下さった有志の皆さまに心より御礼を申し上げます。ICOM本部事務局の皆さまも本当にありがとうございました。

皆さまのご参加を心から歓迎いたします！

式典

主催者挨拶



ICOM日本委員会委員長
青木　保

ご来賓の皆様

スアイ･アクソイ会長をはじめ、世界各地から第25回国際博物館会議京都大会にご参加下さいました会員と関係者の皆様

本日、ここに秋篠宮皇嗣同妃両殿下の御臨席を賜り、第25回国際博物館会議京都大会の開会式を盛大に開催できますことを、心よりお慶び申し上げます。

ICOM日本委員会は1951年に設置され、1952年2月にICOMへの加入が承認されました。国内委員会として正式に参加したのは1953年にイタリアのジェノバ及びミラノで開催された第3回ICOM大会のことでした。今回、こうして日本、京都で第25回目のICOM大会を開催できますことは、誠に感慨深く嬉しいことといわねばなりません。スアイ・アクソイICOM会長はじめ、皆さまに心から感謝いたします。

今日、世界は決して平和で調和のとれた状態にあるとはいえません。暴力も紛争も多くの面でみられます。ひとたび何か起これば、という危機感を誰もがどこかで抱いているといっても決して過言にはならないでしょう。他方、今日の世界は様々な境界を超えたひと･もの･情報の激しい動きにさらされています。

グローバル化が進展する中で、今こそ人々の相互理解、他者の文化を理解し、自分の文化を理解してもらうことが重要で、そのことを世界に広く訴えることが強く求められています。そうした中にあって博物館の役割は、ますます大きくなっています。責任も重大です。「文化をつなぐミュージアム―伝統を未来へ―」という本大会のテーマには大変重いものがあると感じております。そして、ICOMが切り開く文化交流と相互理解の未来には大きな期待がかけられていると思います。

本大会の開催に際し、文化庁、京都府、京都市などからご協力をいただきました。

また多くの企業、団体、個人の方々のご支援を得て、ICOM京都大会を開催し運営することが可能となりました。主催者を代表しまして、心より感謝いたします。また、ICOM日本委員会は、事務局を日本博物館協会に置いておりますが、同協会のご支援･ご協力に感謝いたします。

本大会の開催に際しては、京都国立博物館に開催準備室を置いて、この大会のための諸準備を進めてまいりました。さまざまな準備に携わってこられた職員、スタッフの皆さまに心から感謝いたします。

最後になりましたが、本大会ご参加の皆様方が京都で、快適に過ごされ、京都大会が世界の博物館とICOMの発展する未来へとつながる充実した実り多い大会となることを祈念して、私の御挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。



日本学術会議会長
山極　壽一

秋篠宮皇嗣同妃両殿下、

御来賓並びに御出席の皆様、

本日ここに、秋篠宮皇嗣同妃両殿下の御臨席の下、第25回ICOM京都大会2019の開会式が行われるに当たり、共同主催者として御挨拶する機会を得まして、誠に光栄です。

今回の学術会議の開催に大いに貢献されたICOM京都大会2019組織委員会の佐々木丞平組織委員長、国際博物館会議のスアイ・アクソイ会長、ICOM日本委員会の青木保委員長、そして公益財団法人日本博物館協会の銭谷眞美会長にこの場を借りて御礼申し上げます。

日本学術会議は、人文、社会、自然科学の全ての領域にわたる我が国の科学者コミュニティを代表する機関であり、科学の向上発達を図るとともに、政策決定、産業及び国民生活に科学を反映･浸透させることを目的としています。

1949年の創立以来、日本学術会議は、我が国における国際会議の開催や、各国で開催される国際会議への代表者派遣等を通じ、世界の学術研究団体との連携を深めてきました。

今回の学術会議を共同主催する運びとなり、様々な国と地域から参加者を迎えられたことは、私たちにとって大変嬉しいことであります。

今回の会議では「文化をつなぐミュージアム―伝統を未来へ―」をメインテーマに、研究発表と討論が行われることとなっており、その成果は、博物館分野の発展に大きく資するものと期待されます。

共同主催者として、参加者の皆様が、国や地域の垣根を越えて活発な討論をされることを期待しています。さらには、一般公開講座等を通じて、社会にも、博物館分野の意義と重要性を共有する機会となることも期待しております。

終わりに、本学術会議が大きな成果を収めるとともに、皆様の日本滞在が、記憶に残る楽しいものとなりますことを祈念して、私の歓迎のご挨拶とさせていただきます。

御清聴をありがとうございました。

秋篠宮皇嗣殿下のおことば



秋篠宮皇嗣殿下

このたび、第25回国際博物館会議、ICOM Kyoto 2019が、日本の古都であり、多くの文化財を有する京都の地において110ヶ国以上の国・地域から4,000人を超える参加者を迎えて開催されます。そして、本日の開会式に皆様とともに出席できますことは、博物館と多少なりとも関わりを持ってきた者として、大きな喜びであります。

国際博物館会議は、1946年の創設以来、博物館の進歩発展を目的とする国際非政府組織として、博物館の国際的な規範の確立、文化財の保護、専門人材の育成に取り組んできました。今回、25回目の大会では、「文化をつなぐミュージアム―伝統を未来へ―」のテーマのもと、博物館に関する様々な発表や議論が行われると伺っています。

「博物館」について考えるとき、私は、今までに国内外の素晴らしい博物館を見学するとともに、自分自身が博物館に収蔵されている標本群を用いて仕事をしてきた経験があることから、博物館が成立するに至った背景に思いを馳せたい気持ちを抱くことがあります。中でも、ある場所でナトゥラリアが中心の、いわゆる「ヴンダーカンマー」を見た時には、博物館の原点に接した気持ちになったことを覚えております。

そして、今お話をした博物館における私の経験として、ロンドンの大英自然史博物館やライデンの国立自然史博物館で、当時研究対象としていた東南アジアの淡水魚類を調べた際、自分が必要としている標本が多数保存されていることに驚くとともに、喜びを感じました。さらに、同じくライデンにある国立民族学博物館では、数多（あまた）の日本の古い絵画などとともに、近年に至るまでの時代時代のモノ、普通に考えると一定時期を過ぎると無くなってしまうようなものが標本として保存されていることに感心したことを、30年を経た今でも鮮明に記憶しております。

これらの標本類は、単に過去の遺物として残されているものでは決してありません。いつ利用されるのかという直近の問題ではなく、将来、それらの標本類をもとに研究をするかもしれない人たちのためにも、保存と継承がなされているものです。そのことが、私たち博物館の利用者にとって、最も大切な意義であると考えております。

現在の博物館には、歴史、美術、自然史、生物、科学技術、文学、映像、天文など、多岐にわたる種類のものがあり、規模や形態も多様です。それぞれの博物館における特色を生かした展示は、訪れる人々の知的好奇心に応え、新たな発見と学ぶ楽しさをもたらしてくれます。また博物館は、保存、継承、展示、教育、経営、情報、防災など、広範にわたる活動が行われる総合的な学術機関であります。今後一層、多分野にわたる資料蒐集・蓄積、そしてそれを基にした研究活動が行われ、学術の発展に寄与していくことが期待されます。

このことは、文化・学術のハブとして、最新の技術も導入しつつ、有形無形双方にわたる人類の遺産を引き継ぎ、新たな未来を創造する上で、博物館が大きな役割を果たしていくことに繋がってくるものとも申せましょう。

そして、多くの事柄が急速に変化する現代社会にあって、時間を超えて、万有の蓄積装置として、そこに存在していることこそが、今日の博物館において最も求められていることなのではないかと思います。

おわりに、このたびの会議が皆様にとって実り多きものになるとともに、国際博物館会議および世界各地の博物館が一層発展し、博物館学のさらなる進展が図られることを祈念し、開会式に寄せる言葉といたします。

式典

来賓祝辞



文部科学大臣
柴山　昌彦

ICOM京都大会2019の開会式にあたり、一言御挨拶申し上げます。

まずは、3年に1度開催される国際博物館会議が、日本の歴史文化が息づく京都にて盛大に行われますこと、佐々木組織委員会委員長を始めとする多くのミュージアム関係者の、招致から大会準備までの多大なる御尽力によって本日を迎えることができますことに、心よりお祝い申し上げます。

本大会に世界各国から御出席いただいている4,000人を超える皆様には、日本の有形無形の様々な文化の広がりと深さを是非、実感していただきたいと考えております。

大会では「文化をつなぐミュージアム」をテーマに、博物館の定義や博物館と持続可能性等、様々な議題について議論が行われると伺っております。博物館には、人類共通の宝である文化資源を守り、次世代に引き継ぐとともに、現代に生きる人々のために活用する「文化をつなぐミュージアム」としての役割が期待されています。

日本政府においても、成長戦略に博物館振興を位置付け、博物館を拠点とした文化資源の活用による文化芸術の好循環の創出を図ることとしており、ICOM京都大会の議論を我が国の博物館のさらなる機能強化に活かしていきたいと考えております。

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催まで1年を切り、あと10ヶ月となりました。

現在、日本政府では「日本博」という取組を進めています。

「日本博」は、世界中の関心が日本に集まる2020年を中心としつつ、その前後を「文化」の力で彩っていく、史上最大規模のプロジェクトであり、文化芸術の拠点としての博物館等においても積極的に展開していきます。この大会でも、開会式後に披露される能や閉会式の日本舞踊など、日本博プログラムが随所に展開されます。

本日御出席いただいている多くの皆様におかれましても、博物館の一層の発展のため、真摯な議論を活発に行っていただくことはもとより、この機会に日本文化の魅力を存分に味わっていただきたいと思います。

結びに、アクソイ会長をはじめ、ICOM大会に御尽力いただいた皆様、また御支援、御協力いただきましたすべての皆様に厚く御礼を申し上げますとともに、ICOM京都大会の成功を心より祈念いたしまして、御挨拶といたします。



内閣府副大臣
左藤　章

秋篠宮皇嗣同妃両殿下、

御来賓並びに御出席の皆様、

本日、秋篠宮皇嗣同妃両殿下の御臨席のもと、第25回ICOM京都大会2019が開催されるに当たり、我が国の科学技術政策を担当する副大臣として一言お祝いを申し上げます。

1948年に第1回が開催された、博物館・文化財保護分野で最も歴史のある国際会議である本会議が、ここ京都で開催されることを非常に嬉しく思います。

日本での開催は今会議が初であると聞きました。

本会議の開催に御尽力いただいた国内外の関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。

博物館に関する研究は、資料収集、展示、保管、博物館マネージメントなど多岐にわたっています。また、近年では地域社会における博物館が果たすべき役割や博物館同士の国際的ネットワークの構築についての議論が活発になっており、社会学、国際協力論などさらに幅広い学問分野と連携しながら展開しています。

このため、私といたしましても本会議における活発かつ先進的な発表、討論を期待するとともに、関係の皆様方の一層の御活躍を心から祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

京都府知事
西脇　隆俊



ICOM京都大会2019の開会に当たりまして、一言ご挨拶を申し上げたいと思います。

本日ここに、秋篠宮皇嗣殿下、同妃殿下の御臨席を仰ぎ、ICOM京都大会2019が、多くの皆様の御参加のもと、盛大に開催できますことは、私ども京都府民にとりましても誠に光栄であり、無上の喜びでございます。御来賓の皆様、そして世界各国からお集まりの皆様、ようこそ京都へお越しいただきました。京都府民を代表して、心から歓迎いたします。

京都は、優れた風光、そして千年を超えて日本の首都であった歴史を背景として、日本の伝統や文化を育んできた中心地でございます。ここ京都で、文化の拠点である博物館の関係者が集まる世界大会が開催されますことを、スアイ・アクソイ会長をはじめ、関係の皆様に心から感謝申し上げたいと思います。

京都におきましては、文化は古くから人々の生活に深く根付いてまいりました。今回、京都の伝統産業である西陣織で制作された「ICOM旗」が掲げられています。文化は、ものづくりなどの経済活動の活力となり、また、まちづくりや観光などの魅力の源泉となるなど、地域の活性化や発展につながってきました。

京都府内にある300を超える博物館等が、このような地域の歴史や文化を守り伝える役割を担っております。今大会のテーマ「文化をつなぐミュージアム―伝統を未来へ―」のもとに行われます様々な議論や交流が、博物館が抱えている多くの諸課題の解決に向けたアイデアや知恵につながるものと、大いに期待しております。

さて、京都は日本海に面した風光明媚な北部地域、豊かな森林を有する中部地域、竹林や茶畑等の景観を有する南部地域、そしてなんと言っても奥深い伝統文化を継承してきた京都市域といったように、各地域に個性豊かな文化がございます。大会期間中は、こうした文化に直にふれて、堪能していただくための取組を数多く御用意しておりますので、楽しんでいただけましたら幸いでございます。

結びになりますが、ICOM京都大会2019の開催に御尽力を賜りましたすべての皆様に改めて感謝申し上げますとともに、大会の成功を心から祈念申し上げまして、私の挨拶とさせていただきます。京都にお越しいただき、ありがとうございます。

京都市長
門川　大作



秋篠宮皇嗣同妃両殿下の御臨席を仰ぎ、ICOM京都大会がこのように力強く開催されることを心からお慶び申し上げます。

ようこそ皆様京都にお越しいただきました。心から歓迎申し上げます。

そして、アクソイ会長はじめ、開催に御尽力を賜ったすべての皆様に敬意を表し、改めて御礼申し上げます。

日本で、京都でICOMを開催したい。多くの方々の願いのもと、4年前、パリの総会で京都開催が決定しました。

それ以後、様々な準備を進める中で、私どもは改めて博物館という人類の英知の結晶、また、生物多様性をはじめ持続可能な社会のために果たす博物館の使命、また、世界的なネットワークをもつICOMの役割の偉大さを学ばせていただきました。

世界では今も貧困格差、環境破壊、紛争など様々な解決すべき社会的な課題があります。このような困難な課題に対して、国連では、SDGsが採択され、「すべての人に健康と福祉を」「質の高い教育を」などの17の目標が掲げられ、世界中で行動が始まっています。

また、ここ国立京都国際会館は、1997年に採択された人類初の『京都議定書』誕生の地で、温室効果ガス削減に向けた取組が開始した場所であります。それがこの4年間で、全人類が参画するパリ協定へと発展し、今年の5月、再びこの地でIPCC総会が開催され、パリ協定を支える『IPCC京都ガイドライン』が採択されました。パリ協定やSDGsの「未来の子どもたちに持続可能で豊かな地球環境をお返ししていく」という目標は、「文化を基軸として博物館相互の連携で社会的課題を解決し、よりよい未来を次世代に継承していく」ICOMの理念・行動と合致しています。「文化のハブ」として世界平和にも貢献する博物館の役割は益々重要となってきます。グローバルな博物館のネットワークを一層強化し、ICOMの成果を未来へつなげていけるよう、共々に取り組んでいきたいと思います。

京都においては、機能を強化した文化庁の全面的移転に向けて、着々と準備が進んでいる4年間でもあります。政府の御英断に感謝し、しっかりと京都も全国、世界と繋がって、役割を果たす決意を新たにしております。

京都では、これまでの間、全国に例を見ない大規模な博物館ネットワークのもと、博物館の魅力を発信する様々な事業に取り組んで参りました。そして更に、個々の博物館においても、それぞれの特色を活かした取組を進めていただいた4年間でもありました。

ICOM大会期間中には、そんな京都の博物館や文化財の魅力がたっぷり詰まったソーシャルイベント、エクスカーションなどの多彩な催しを心ゆくまで堪能し、楽しんでいただければ幸いです。

そして、食やお酒も京都の誇る文化の一つです。大会参加の皆様には、御滞在中、京都ならではの食文化を大いに楽しんでいただきたいと思います。

このICOM京都大会が偉大な成果を上げますことを御祈念申し上げ、挨拶とさせていただきます。ようこそ京都にお越しいただきました。ありがとうございます。

式典

内閣総理大臣メッセージ披露



内閣総理大臣
安倍　晋三
（写真：日本博物館協会長　銭谷　眞美　代読）

秋篠宮皇嗣同妃両殿下
御来賓並びに御出席の皆様

「第25回ICOM（国際博物館会議）京都大会2019」が京都において開催されるに当たり、世界各国からの参加者の皆様に対し心から歓迎を申し上げます。

また、この会議が、秋篠宮皇嗣同妃両殿下の御臨席を賜り、日本学術会議、国際博物館会議、ICOM日本委員会、ICOM京都大会2019組織委員会及び公益財団法人日本博物館協会の共同主催の下に開催されることをお慶び申し上げます。

この度の国際会議が、博物館分野の発展に貢献し、多大な成果を収められることを心より祈念いたします。

趣旨説明



ICOM京都大会2019
組織委員長
佐々木　丞平

ICOM京都大会組織委員長の佐々木でございます。

本日ここに、このように盛大にICOM京都大会を開催する運びとなりました経緯並びに趣旨を簡単にご説明申し上げます。

皆様ご存知のとおり、今回の第25回ICOM大会はアジアで3回目の開催となりますが、2010年の上海大会終了後に、日本でICOM大会を開催することの可否についてICOM日本委員会において検討を開始し、2013年3月に招致する方向を決定いたしました。

2013年8月のICOMリオデジャネイロ大会では様々な調査を行い、同年12月に大会招致準備委員会を発足させ、具体的な検討を始めました。そして、翌2014年3月27日にICOM日本委員会臨時総会を開催し、第25回ICOM大会開催に向けて立候補することを正式に決定したのです。その際、開催地を京都とし、大会テーマを「文化をつなぐミュージアム―伝統を未来へ」とすることも決定いたしました。こうして多くの方々にお越しいただき、この決定は間違っていなかったと確信しております。

その後直ちに立候補申請を行い、翌2015年6月に、パリで開催されたICOM諮問会議での投票で、京都大会の開催が決定されたわけであります。

さて、ICOMが創立されたのは第二次世界大戦終結の翌年、1946年のことです。初代ICOM会長となるアメリカのChauncey Hamlin、第二代会長となるフランスのGeorges Sallesらの御尽力によって組織作りがスタートしました。大戦によって分断された世界を、文化の理解を通してもう一度世界が手を繋ごうという強い思いのもとに設立されたのであります。

それから今年で73年、世界は今再び地球規模で大きな危機を迎えつつあります。かつては、人々のあらゆる層に娯楽と教養を、そして文化的意識の向上を、という役割を博物館は担ってきました。しかし、今や博物館はまた新たな役割を担う必要に迫られています。

地球環境の危機が叫ばれている中、持続可能な未来のために博物館は何ができるのか。グローバル化が進めば進むほど希薄になる可能性のある文化の多様性を守るために博物館は何ができるのか。あらゆる人種、性、経済的・社会的な差別のない教育の機会均等を実現するために博物館は何ができるのか。こうした、今世界が直面している様々な問題や課題の解決のためには、人々が今一度手を繋ぎ、英知を結集する以外に方法はないわけであります。

もう一度手を繋ごう、世界が繋がろう。そこでは国や人種の境もない、過去現在未来の時間も飛び越えて、あらゆる可能性を大胆に模索していくことが期待される場、その公共空間、それこそが文化的結節点（Cultural Hubs）としての博物館であるという思いをもって本大会の総合テーマとしたわけであります。このテーマに沿って、あるいはこのテーマを視野に入れて、各国際委員会等でも多くの様々な議論がなされることでしょう。そして大会後に残されるべき貴重な成果やレガシーも生まれることでしょう。

Suay Aksoy ICOM会長の強いリーダーシップの下、ICOM京都大会が成功し、皆様にとっても忘れ難い記憶になることを期待いたしまして、本大会の趣旨説明とさせていただきます。

どうもありがとうございました。

閉会式

9.7〈土〉19:15－20:00

閉会式は、京都国立博物館・明治古都館のホールで行われた。舞踊集団菊の会のパフォーマンス後、公式ポスター作画の絹谷幸二氏とICOM旗制作の龍村織物株式会社への感謝状の贈呈から始まり、その後、アクソイ会長と佐々木組織委員長からの挨拶及び来賓の永岡文部科学副大臣から挨拶があった。最後に、西脇京都府知事、門川京都市長から次回開催地であるICOMチェコのMartina Lehmannová委員長とPavel Jirásek理事にICOM旗の引継ぎがあり、閉会した。

式次第

- 日本舞踊のパフォーマンス　舞踏集団 菊の会
- 会長挨拶　ICOM会長　スアイ・アクソイ
- 感謝状贈呈　絹谷　幸二
株式会社龍村美術織物
- 主催者挨拶　ICOM京都大会2019組織委員長　佐々木　丞平
日本博物館協会長　銭谷　眞美
- 来賓挨拶　文部科学副大臣　永岡　桂子
- 開催地挨拶　京都府知事　西脇　隆俊
京都市長　門川　大作
- 次期開催地挨拶　ICOMチェコ委員長　Martina Lehmannová
- ICOM旗引継ぎ











© PEY INADA

くま けんご

隈 研吾

建築家

建築家、東京大学教授。1954年生。1979年、東京大学大学院建築学専攻修了。1990年、隈研吾建築都市設計事務所設立。慶應義塾大学教授を経て、2009年より現職。1997年「森舞台/登米町伝統芸能伝承館」で日本建築学会賞、2010年「根津美術館」で毎日芸術賞、その他、国内外からの受賞多数。近作に、サントリー美術館、浅草文化観光センター、アオーレ長岡、歌舞伎座、ブザンソン芸術文化センター、FRACマルセイユ、V&A Dundee等があり、国内外で多数のプロジェクトが進行中。新国立競技場の設計にも携わる。著書に『自然な建築』(岩波新書)、『小さな建築』(岩波新書)、『建築家、走る』(新潮社)、『僕の場所』(大和書房)、『広場』(淡交社)、『場所原論』(市ヶ谷出版社)等。

http://kkaa.co.jp/



1



2



3

1. Kodama(Italy)
   Photo by Kengo Kuma & Associates
2. V&A Dundee(Scotland, UK)
   Photo by Hufton+Crow
3. 梼原 木橋ミュージアム
   Photo by Takumi Ota

9.2〈月〉10:55–11:25

講演内容

森の時代

隈氏は、現代の建築は、自然との繋がりが断ち切られたコンクリートの時代から、自然と調和する森の時代へと移行したと主張する。

そのため、隈氏は、環境や地域との「繋がり」を重視してミュージアムを設計していると言う。具体的には、①リビングルームのように、リラックスして人々が交流できるコミュニティの場、②実物を有し、学校教育とは異なる役割を果たす教育の場、③地元の職人や材料等を通した地域経済との結びつきの場、の視点がミュージアムには不可欠だとした。

講演では、それらの事例として、隈氏が設計した世界各地のミュージアムが紹介された。日本・栃木県の広重美術館では、地元の木材や紙、石等を使用することで地元の人々の参加意識の醸成が心掛けられ、中国・杭州の中国美術学院民芸博物館では、地元の瓦職人による瓦が活用された。また、フランス・マルセイユの現代美術センターでは、地元のリサイクルガラスが外壁の材料に取り入れられ、環境負荷の軽減と地元経済の活性化の両立を果たしている。その他、ブラジル・サンパウロのジャパンハウスでは、日本の伝統工芸とブラジルの若者のデザインを組み合わせ設計された。さらに、英国・スコットランドにあるV&A Dundeeは、ダンディの誇る崖を外観のデザインに取り入れ、内部にはコワーキング・スペースが設けられ、地域との繋がりと新たな人の流れを創出している。そして、2020年東京オリンピックの会場である新国立競技場は、小川や遊歩道の整備等、「繋がる」存在であることが心掛けられた。

この基調講演を通じて、ミュージアムは、森のように人々に開かれ、受け入れる存在として、地域の文化や自然と繋がり、社会的役割を果たす場になりうるという視点が参加者に示された。









©Yann Arthus-Bertrand

セバスチャン サルガド

Sebastião Salgado

写真家

写真家。1944年ブラジル・ミナスジェライス州生れ。現在はパリに在住。大学院で経済学を専攻した後、1973年パリにてフリーランスの写真家としてキャリアを開始。1994年レリア・ワニック・サルガド(Lelia Wanick Salgado)と共にアマゾンナス・イメージ(Amazonas Images)を設立し、以後自身の作品制作に取り組んできた。撮影のため訪れた国は100カ国以上。作品は報道や出版物で紹介されるほか、これら作品の巡回展を通じて、世界中の美術館やギャラリーで紹介されている。

また、サルガドはその業績に対して数々の賞を受賞しており、フランス文化省のナショナルグランプリをはじめ、権威ある褒章の受章者でもある。その他、2016年フランス芸術アカデミー会員に選出、レジオン・ドヌール勲章のシュヴァリエを受章。アメリカ芸術科学アカデミーの名誉会員でもある。2019年にはアメリカ文学芸術アカデミーの外国人名誉会員に選出され、ドイツ出版協会平和賞を受賞している。

近年は、ブラジルのアマゾンと、そこに暮らす先住民のコミュニティーをテーマにした撮影活動に取り組み、2021年に新たな著書の刊行と展覧会の開催を予定している。



1



2



3

1. Chemical sprays protect this fire fighter against the heat of the flames. Greater Burhan, after the Gulf War. Kuwait, 1991.
2. Korubo members of the Pinu family. Indigenous territory of the Javari Valley. State of Amazonas, Brazil. 2017.
3. Group of Waura fishing in the Piulaga Lake. Upper Xingu, Mato Grosso Brazil. 2005.

9.3〈火〉9:00–10:00

講演内容

アマゾン熱帯雨林保護
― ブラジリアン イニシアティブ ―

サルガド氏の講演は、アマゾンの現状についての解説に始まり、次いで、熱帯雨林や先住民を写すサルガド氏の作品を音楽と共にスライドショーで紹介、最後に質疑応答という構成であった。

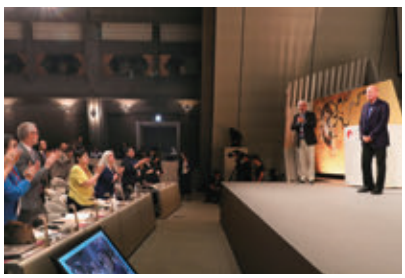
まず初めは、現在進行形で進む大規模な開墾によるアマゾンの森林破壊について、アマゾンの森林の19%がすでに破壊されたという客観的な数値による説明から始まった。サルガド氏は、残りの81%を守るためには、法律の整備だけではなく、人々の関心が非常に重要だと主張し、さらに、保護活動の主体者たりうる先住民の存在の重要性を指摘した。サルガド氏によると、アマゾンには130言語、165部族、合計30万人に上る先住民族が暮らしているが、西洋からもたらされた疫病により500年前の4－500万人から激減したとのことだ。しかも、彼らの健康管理を行う団体への政府からの予算は削減されており、サルガド氏は、森林だけではなく先住民自身も守っていく必要があると考えている。

そこで、サルガド氏は、アマゾンの自然や先住民を撮影することによりアマゾン全域をカバーするアーカイブを構築し、これらを通して、アマゾンに対する人々の関心を高めることを目指しているという。また、写真は、書籍の出版や展示会の開催により公表される予定で、このような活動がアマゾンの熱帯雨林や先住民を保護する必要性の理解につながり、さらなる被害を生むことなく天然及び人的資源の活用を可能にする新たな方法が生み出されるきっかけとなることを目指しているとのことであった。

最後の質疑応答では、博物館の専門家が社会の変革にどのように貢献できるか、参加者と議論があり、サルガド氏は、ミュージアムはアマゾンの現状を伝え、人々に行動を起こしてもらうためにも重要な存在であり、より人々に開かれた存在でなくてはならない、と主張した。







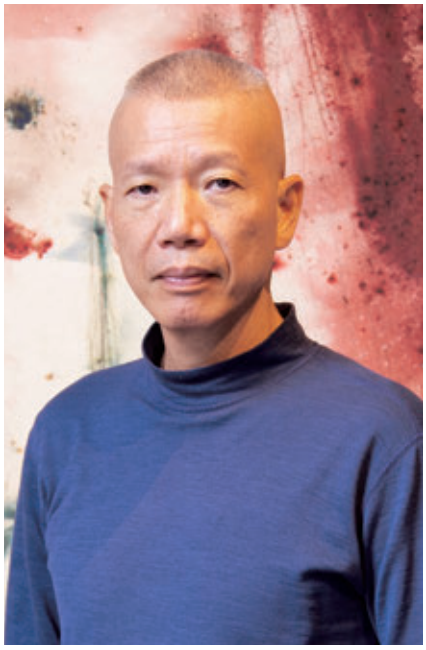


Photo by Yvonne Zhao, courtesy Cai Studio

さい こっきょう／ツァイ グオチャン

蔡 國強

アーティスト

1957年中国福建泉州生まれ。1981年から1985年まで上海演劇大学美術学部で舞台デザインを学ぶ。それを機に絵画、インスタレーション、ビデオ、パフォーマンスなど多様なアートを組み合わせた作品を制作するようになった。生まれ故郷である泉州で火薬を用いた作品制作の実験を始め、その後1986年から1995年までの日本滞在中には、火薬の特性を追求し続け、のちに代表作である火薬を使った野外イベントを展開していくことになる。蔡國強の作品は、東洋哲学と現代の社会問題を根底に据え、文化と歴史に応答しようとするものであり、作品を見る者とそれを取り囲む広い宇宙の間をつなげていく。火薬を使ったアートやインスタレーションは、二次元の世界を超えて、社会と自然に係っていく力を感じさせる。

1999年ヴェネツィア・ビエンナーレ「国際金獅子賞」、2007年「ヒロシマ賞」、2009年「福岡アジア文化賞」受賞。2012年には「第24回高松宮殿下記念世界文化賞」を受賞するほか、国際文化交流への優れた貢献に対して「米国国務院芸術勲章」を授与された5名のひとりに選ばれる。現在は米国ニューヨークで活動。

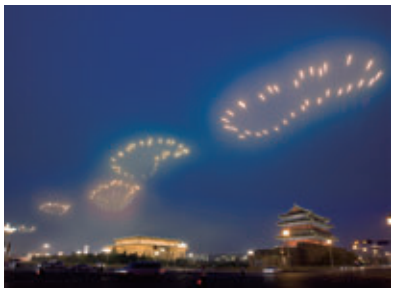
https://caiguoqiang.com/



1



2



3

1. Heritage, 2013
   Photograph: Natasha Harth, QAGOMA
   Courtesy: Queensland Art Gallery | Gallery of Modern Art
2. Color Gunpowder Drawing for City of Flowers in the Sky: Daytime Explosion Event for Florence, 2018
   Photo by Wen-You Cai, courtesy Cai Studio
3. Footprints of History: Fireworks Project for the Opening Ceremony of the 2008 Beijing Olympic Games, 2008
   Photo by Hiro Ihara, courtesy Cai Studio

9.4〈水〉10:30–11:00

講演内容

私の美術館春秋
―ミュージアムあれこれ考

蔡氏の基調講演は、この日のために編集されたビデオで幕を開けた。ビデオでは、蔡氏の展覧会が紹介され、その後、蔡氏の登場となった。蔡氏からは、これまで展覧会等を通して関わってきたミュージアムについての私見が述べられた。

蔡氏がこれまで実施してきたプロジェクトには、兵馬俑と現代アートを組み合わせたメルボルンのビクトリア美術館の「兵馬俑と蔡國強展(Terracotta Warriors & Cai Guo-Qiang)」やニューヨークのグッゲンハイム美術館で企画した展覧会「Non-brand 非品牌」等、大規模なプロジェクトがある。さらに、モスクワのプーシキン美術館、マドリードのプラド美術館、フィレンツェのウフィツィ美術館、ナポリの国立考古学博物館や日本国内では、横浜美術館や世田谷美術館等で行ってきた数々の個展でもミュージアムと関わってきた。

その中で、ラストカーニバルと名付けられた展示では、プラド美術館にあるルーベンスの絵がヒントとなり構成が考えられたという自らの経験に触れ、インスピレーションを与えるミュージアム体験を提供することが、蔡氏の考えるミュージアムの役割の一つだと述べた。さらに、福島県いわき市で行った「なんでも美術館(Everything is Museum)」と名付けた一連のプロジェクトにおいて、地元コミュニティとともにミュージアムの建設が困難な地域で住民と行ったアート・プロジェクトの経験が紹介され、近年注目されているミュージアムの観光地としての経済的価値だけでなく、地域住民にとってのミュージアムの重要性を主張した。

講演において蔡氏は、作品を通して、人々が時代や国を超え、ローカルとグローバル、伝統と未来という二項対立の垣根を乗り越えていく重要性を示しており、ミュージアムの今後の可能性や役割が提示されていた。







博物館による持続可能な未来の共創

9.2〈月〉11:45–13:15

ICOMでは国際連合の持続可能な開発目標（SDGs）に対応すべく、2018年にMorien Rees氏をリーダーとして、ミュージアム・セクターの目標設定を目指すワーキンググループが設置された。本プレナリー・セッションはその活動の一部に位置づけられている。

まず初めに、日本科学未来館館長の毛利衛氏からは、2017年の世界科学館サミットにて、SDGsの達成を目指す東京プロトコルが採択されたこと及び、ミュージアムが人々のつながりを通した人類の持続可能性に貢献できる可能性を秘めていることが示された。続いて、気候変動に関する非政府組織の代表等を務めるSarah Sutton氏は、ミュージアムのSDGs達成における他の組織とのパートナーシップの重要性を指摘。また、彼女は米国政府にパリ協定への参加を促すミュージアムを含む非政府組織同盟であるWe Are Still Inのメンバーでもあり、ミュージアムは世界を変える力を持っていると説いた。次に、世界初の気候変動の専門ミュージアムである香港・競馬会気候変動博物館Cecilia Lam館長は、展示及びコミュニティと協働した事業により、人々の気候変動に対する行動を変えるべく活動していることを紹介。そして、南アフリカのディストリクト・シックス博物館Bonita Alison Bennet館長からは、アパルトヘイト人種隔離政策以後の南アフリカにおける強制収容の歴史展示を事例として、ミュージアムが人権問題について発信することが、人々の不平等の改善、健康、幸福など様々なSDGsの達成を目指すことにつながるという視点が提示された。その後、文化遺産分野の専門家であるYacy-Ara Froner教授は、ミュージアムが気候変動等の社会的問題を教育する場であるためには、ミュージアム自身が自覚的に持続可能性を高める行動を起こす必要があることを強調。最後にまとめとして、Henry McGhie氏よりそれぞれの開発目標はつながっており、ミュージアムはそれぞれの実態に合わせて、主体的にあるいは教育や支援等により目標達成に向けた行動を起こすべきだとの発言があった。











モデレーター

Morien REES　バランジャー博物館 開発顧問、ICOM持続可能性ワーキンググループ（WGS）委員長

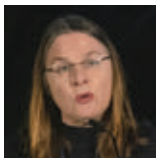
ノルウェー・バランジャー博物館の博物館開発顧問。ウェールズ大学（建築学）およびオスロ大学（美術史）卒業。1994年、建築士から博物館の勤務に転身し、現在はノルウェー北極圏にあるバランジャー博物館に勤務。ICOM持続可能性ワーキンググループ委員長。



スピーカー

Bonita Alison BENNETT　ディストリクト・シックス博物館 館長

2008年にディストリクト・シックス博物館の館長に就任。ケープタウン大学卒業の教員資格保持者である彼女は、アパルトヘイト下のケープ州西部における土地の強制収容・強制退去に関する修士論文を書いた、反アパルトヘイト運動家でもある。現在は、プレトリア大学で博士号課程に在籍。両親は共にディストリクト・シックス出身で、強制退去後、ケープフラット内の有色人種居住区で育った。ディストリクト・シックス博物館では、アパルトヘイト人種隔離政策に基づく強制収容・強制退去の歴史を目の当たりにすることで、人権剥奪に対する理解を深めることができる。



スピーカー

Yacy-Ara FRONER　ミナス・ジェライス連邦大学 美術学部教授、ICOM持続可能性ワーキンググループ（WGS）委員

歴史学学士（オウロ・プレット連邦大学、1988年）、社会史修士（サンパウロ大学、1994年）、経済史博士（サンパウロ大学、2001年）を持つYacy-Ara Fronerは、保全及び復元センター（CECOR）（1992年）やゲティ保全研究所（GCI）（1995年）で文化遺産の復元・保全に従事した経験のある文化遺産分野の専門家。現在はミナス・ジェライス連邦大学・美術学部の教授として、視覚芸術／保全・復元に関する学部課程や芸術分野の修士・博士課程の講義を担当。また、ミナス・ジェライス連邦大学・大学院建築研究科の、構築環境・遺産保全に関する修士・博士課程の調整業務も担当。



スピーカー

Cecilia LAM　競馬会気候変動博物館 館長、香港中文大学 事務局長

香港中文大学・競馬会気候変動博物館創設館長、香港中文大学CPSF（Campus Planning and Sustainability Office）事務局長を兼任。高等教育分野の戦略策定・持続可能性に関する経歴を持つ彼女は、国連SDSN（持続可能な開発ソリューションネットワーク）香港支部の運営責任者や「香港持続可能なキャンパスコンソーシアム」の委員も務める。



スピーカー

Henry MCGHIE　Curating Tomorrow創設者、ICOM持続可能性ワーキンググループ（WGS）委員

鳥類生態学者としての経歴を持つ熱心な自然愛好家。2000年にマンチェスター大学博物館での勤務を開始し、それ以降、学芸員・学芸部長として所蔵品の管理を担ってきた。彼が企画を指揮した環境の持続性保護や気候変動に関するギャラリー・特別展示の中には、受賞歴を誇るものもある。国内外の研究者、博物館、政策関係者の仲介や、ICOMの持続可能性ワーキンググループの委員も務める。自然保全、気候変動対策、持続可能な開発目標（SDGs）により貢献できる博物館のあり方や、人と自然が共栄できる社会の実現に向けた有効な協力体制の整備にとくに関心を寄せている。



スピーカー

毛利 衛　日本科学未来館 館長

日本人として初めてスペースシャトルに搭乗した宇宙飛行士・毛利衛博士は、日本科学未来館の初代館長として、研究者と社会との橋渡し役を果たしてきた。博士独自の科学コミュニケーション活動は、宇宙授業TV生中継や、史上初の南極からの皆既日食中継など、科学の表舞台でのクール・ジャパンを演出してきた。深度6500メートルまで潜航した経験も持つ毛利博士は、常に未知の世界に挑み続ける不屈の精神の持ち主である。2017年には、世界科学館サミットを議長として主催。国連SDGs（持続可能な開発目標）の達成に向けた活動方針・行動指針を「東京プロトコル」としてまとめた。



スピーカー

Sarah SUTTON　Sustainable Museums 代表／ We Are Still In 実行委員会 委員

LEED認定プロフェッショナルの資格を持つSarah Suttonは、文化団体のスタッフや管理職による持続可能なソリューションや気候変動対策の策定を、コンサルタントとしてサポートしている。We Are Still Inの実行委員会委員および文化機関担当主任として、アメリカ国内の文化機関によるパリ協定の支援を促している。環境と気候に関する米国州歴史協会（AASLH）タスクフォース共同議長、全米博物館協会（AAM）環境・気候ネットワーク役員。著書に「The Green Museum（グリーン博物館）」（共著）、「Environmental Sustainability at Historic Sites and Museums（史跡と博物館の環境持続可能性）」があり、2019年ザルツブルグ・グローバルフェローも務める。

ICOM博物館定義の再考

9.3〈火〉10:30–12:00

ICOMでは、2017年に博物館の定義・展望・可能性委員会(MDPP)を特別委員会として立ち上げ、博物館の定義を再検討してきた。委員会では、2018年の意見募集とそれらを元にした定義案の起草を経て、2019年に5つの定義案を執行役員会に提案し、そこで一つに絞られた。その案が新たな博物館定義案として、京都大会中の臨時総会で決議されることとなった。

本セッションでは、定義の詳細ではなく、ミュージアムの未来について、社会的・環境的・認識論的な議論が行われた。まず、MDPP委員長のJette Sandahl氏からは、社会的・環境的問題の解決にミュージアムの貢献は必須であり、定義改定の必要性が主張された。続いて、ICOMアメリカのRichard West Jr.氏が、1990年代以降、「神殿」から「フォーラム」へと役割が変化したミュージアムの歴史的背景から、21世紀におけるミュージアムの社会的役割の変化を紹介し、シンガポール国立大学のNirmal Kishnani氏は、インド・ムンバイの緑化建築、韓国・ソウルの高速道路撤去による川辺の環境の改善等の事例から、格差問題や気候変動等の社会問題への対応の必要性を示した。また、元ケニヤ国立博物館館長のGeorge Abungu氏は、主に植民地主義との関係から、主張が中立とは言えないミュージアムだからこそ、平和に必要不可欠な人々の相互理解に貢献できると主張。さらに、Shose Kessi氏からは、南アフリカで起こった偉人の像が脱植民地化の流れの中で人々に撤去される現象を事例に、パブリック・アートには社会的なメッセージ性があること、撤去された像がミュージアムに収蔵されている事実からは、議論の場としてのミュージアムの役割が示された。そして、メルボルン旧財務省ビル博物館館長のMargaret Anderson氏は、インクルージョン(包摂)の視点から、一方向からの展示解説が困難であるミュージアムにおいては、複数の比較対象を示すことが重要だと指摘し、最後に、Lauran Bonilla-Merchav氏が、現代社会の重要課題の議論の場であるミュージアムは、時代とともにその定義も変えていくべきだと意見を述べた。











モデレーター・スピーカー

Jette SANDAHL　ICOM博物館の定義・展望・可能性委員会(MDPP)委員長

ゲティ博物館経営研究所で博物館経営を学んだJette Sandahlは、ユニークな展示コンセプトで知られるスウェーデン世界文化博物館やデンマーク女性博物館の創設者兼館長、デンマーク国立博物館の展示・教育プログラム部長、ニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワのエクスペリエンス部長、コペンハーゲン博物館館長など、国内外の博物館で数多くの要職を歴任。現在は、欧州博物館フォーラム(European Museum Forum)や、博物館の定義・展望・可能性委員会(MDPP)の委員長を務める。また、心理学の専門家として、人権、文化的共存、社会的公正を促す新たな社会規範や体制の整備に役立つ博物館の運営を目指し続ける彼女は、博物館学分野で幅広い出版活動にも従事する。



スピーカー

George Okello ABUNGU　Okello Abungu世界遺産コンサルタント CEO

ケニア国立博物館元館長の経歴を持つケンブリッジ大学で研修を受けた考古学者。Okello Abungu世界遺産コンサルタントのCEOを務める彼は、芸術に対する犯罪研究協会(ARCA)から芸術保護者としての生涯称号を授与。また、国内および世界各地の世界遺産への傑出した貢献や、アフリカ世界遺産分野での人材育成への貢献を通し世界遺産基金賞をアフリカ出身者として初めて受賞した功績に対し、フランス政府から文学芸術騎士勲章を授与された経歴を持つ。考古学をはじめ、世界遺産管理・博物館学・文化・開発分野の研究・出版実績のほか、ICOM副会長、UNESCO世界遺産委員会のケニア代表委員および副委員長の歴任経験がある。現在は、モーリシャス大学・世界遺産管理修士課程の創設准教授、南アフリカ・ステレンボッシュ大学ステレンボッシュ高等研究所の特別研究員も務める。



スピーカー

Margaret ANDERSON　メルボルン旧財務省ビル博物館 館長

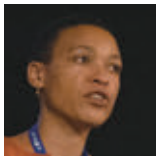
現在メルボルンの旧財務省ビル博物館の館長を務める政府所属の上級歴史学者・博物館従事者。これまで長年にわたり、西オーストラリア・南オーストラリア両州で複数の博物館の要職を歴任し、1980年代には、移民博物館の創設者兼館長を務めた経歴を持つ。博物館と地域社会との連携に関するオーストラリア国内の議論を先導する、本分野の第一人者でもある。女性史や物質史を主な研究テーマとするフェミニスト歴史学者である彼女は、歴史観の格差や「扱いにくい歴史」に関する博物館の展示能力に関する議論にとくに関心がある。博物館の定義・展望・可能性委員会(MDPP)では、文化民主主義や参加型アプローチに関する分科会の委員長を務めている。



スピーカー

Lauran BONILLA-MERCHAV　コスタリカ大学 教授、ICOMコスタリカ委員長

ニューヨーク市立大学大学院で美術史の博士号を取得。現在、ICOMコスタリカ委員長として2期目を務めながら、ICOMラテンアメリカ・カリブ地域(LAC)の財務担当を兼任。また、ICOMの博物館の定義・展望・可能性委員会(MDPP)の委員、地域社会型博物館に関する研究や地域間交流・学習の振興に取り組むEU拠出事業「EU＝ラテンアメリカ・カリブ博物館プロジェクト(EU-LAC Museums project)」の運営委員会のメンバーも務める。さらに、コスタリカ大学で、美術史や博物館学に関する講義も担当している。



スピーカー

Shose KESSI　ケープタウン大学 心理学部准教授

ケープタウン大学で心理学部の准教授と人文科学部の副部長を兼任。また、脱植民地フェミニスト・サイコロジー・センター(Hub for Decolonial Feminist Psychologies)の共同所長も務める。政治心理学、組織・制度変革、人種・階級・性別などのアイデンティティに関する問題、およびこれらが変革への積極的な参加にもたらす影響を主な研究テーマとする彼女は、フォトボイス(Photovoice)と呼ばれる参加型行動研究ツールの開発を通し、社会レベルの行動を起こせる意識改革や市民動員を目指す。



スピーカー

Nirmal KISHNANI　シンガポール国立大学 設計・環境学部

シンガポール国立大学の准教授として、建築学科で持続可能なデザインについて教鞭を取る一方で、持続可能な建築について同大学にてプログラム開発に従事。2002年より、デザイン設計を実践に結び付ける政策やプロジェクトのコンサルティングを通じてアジアに関する議論に参画。2008年からは、建築雑誌『FuturArc』編集長のほか、創設に関わったアジアを拠点とする2つのデザインコンペティションの常任審査員を務める。



スピーカー

W. Richard WEST Jr.　アメリカンウエスト・オートリー博物館 館長兼CEO、ICOMアメリカ理事

ロサンゼルスにあるアメリカンウエスト・オートリー博物館の館長兼CEO、ならびにスミソニアン協会が運営する国立アメリカン・インディアン博物館の創設者兼名誉館長を務める。オクラホマ州のシャイアン族およびアラパホー族の市民として、南シャイアン首長平和協会にも所属。ICOMアメリカおよびICSC(International Coalition of Sites of Conscience：良心のサイトの国際連合)の現理事を務め、過去にはフォード財団、スタンフォード大学、カイザーファミリー財団の理事を歴任。全米博物館協会元理事長(1998～2000年)。ICOM元副会長(2007～2010年)。

被災時の博物館
―文化遺産の保存に向けた備えと効果的な対応

9.4〈火〉9:00–10:15

本セッションでは、ICOM特別委員会の災害リスク管理委員会(DRMC)の委員長であるCorine Wegener氏のモデレートにより、まず、ICOMブラジル委員長のRenata Vieira da Motta氏が登壇し、リオデジャネイロのブラジル国立博物館の火災について報告した。2018年に発生した火災は、通常運営の中で、地下の空調の電気系統故障により発生している人災であり、災害発生時の対策や適切な管理体制の必要性が明確になった。復興は、がれきの撤去と収蔵品の修復を3か年計画で進めているが、45%の収蔵品は消失したため、今後はその調査を進め、復興活動をしていきたいとの決意が伝えられた。

続いて、プエルトルコ・ポンセ美術館館長のAlejandra Peña Gutiérrez氏からは、2017年のハリケーンによる被災後の美術館の対応について報告があった。美術館は、災害対策がよく計画されていたが、実際の大規模な災害後には情報の入手手段等、想定外のことも多かった。そのため、普段の準備の重要性が訴えられた。美術館再開後は、無料のワークショップや仮設の収蔵庫設置による他のミュージアムの待避所としての機能等の充実を図ったことが報告された。

文化財保存修復研究国際センターのAparna Tandon氏は、大規模災害の頻度が増加傾向にあるにもかかわらず、ミュージアムが地域や国の災害対策のシステムに組み込まれていないことを問題視している。そこで、ミュージアムのレジリエンス(回復力)向上のため、ICOMなどのネットワークによるトレーニング、専門家向けのガイドラインの策定、アプリやマッピングツール等を活用した災害対策の共有等の国際センターの取り組みが紹介された。

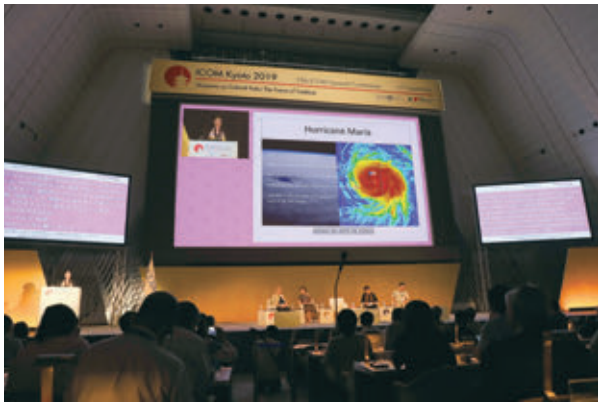
東北大学の小野裕一氏からは、2015年に国連で決議された世界津波デーと、それに伴う世界津波ミュージアム会議の概要と意義について説明があった。併せて、日本全国で広がる、被災した文化財の救出ネットワークが紹介され、最後に、ICOMやUNESCOとの連携による世界防災フォーラムの開催が告知された。

ディスカッションでは、他の組織との連携の重要性や、ミュージアムの地域の防災への貢献等、地域における災害時や防災におけるミュージアムの可能性が明確になった。











モデレーター

Corine WEGENER　スミソニアン文化財レスキューイニシアティブ、ICOM災害リスク管理委員会(DRMC)委員長

アメリカ国内外の被災地・戦闘地などの文化遺産の保護に取り組むスミソニアン文化財レスキューイニシアティブ(SCRI)の統括責任者。SCRIは、シリア、イラク、ハイチ、ネパールなど世界各地でプロジェクトを展開する支援事業で、アメリカの国家災害復興フレームワークの一部である文化遺産危機対応国家タスクフォース・FEMA環境歴史保護局の共同局長も務める。自然災害や武力紛争からの文化資産の保護に関する講義・出版が専門。ネブラスカ大学オマハ校(政治学学士)、カンザス大学(政治学・美術史修士)卒業。



スピーカー

小野 裕一　東北大学 教授

アメリカオハイオ州立ケント大大学院地理学博士課程(気候学、風害)を2002年から2003年にかけて修了。世界気象機関(WMO)に勤務し、防災プログラムの策定に貢献。2003年から2009年には、国連国際防災戦略で、早期警報システムの開発や、ISDR科学技術委員会の運営補佐を担当。アジア太平洋経済社会委員会(ESCAP)防災委員会チーフとして、発展途上国、社会的弱者に配慮した防災協力・防災政策策定の地域レベルの枠組みを整備した。現在は、東北大学 災害科学国際研究所(IRIDeS)の教授兼所長補佐、京都大学防災研究所 大気・水研究グループ客員教授、東北大学IRIDeS災害統計グローバルセンター(GCDS)所長を務める。2019年11月9日から12日にかけて仙台で開催される第2回世界防災フォーラムを主催する世界防災フォーラム事務局の設立者であり代表理事でもある。



スピーカー

Alejandra PEÑA GUTIÉRREZ　プエルトリコポンセ美術館 館長、ICOMアメリカ理事

メキシコ国立自治大学で美術史の修士を取得した建築士資格者。1992年、サンカルロス国立博物館の展示企画部長として博物館分野の経歴をスタート。その後、現代美術館館長、ベジャス・アルデス宮殿博物館の副館長および館長を歴任。2001年、メキシコ国立芸術院(INBA)副所長に就任。INBA所長補佐、外務省教育・文化協力総局の文化振興部長を歴任後、2009～2012年まではINBA芸術遺産担当副部長を務め、2013年以降はポンセ美術館の常任館長を務める。美術館館長協会会員(2014～)。ICOMアメリカ役員(2018～)。



スピーカー

Aparna TANDON　文化財保存修復研究国際センター(ICCROM)

文化遺産の危機対応・防災管理の専門家。文化遺産保全分野での25年の専門職経験に加え、アジア、中東、ヨーロッパ、アフリカ、南米での文化遺産保全研修経験を持つ。現在は、ICCROMのプロジェクトマネージャーとして、文化遺産救急措置・復元(FAR : First Aid and Resilience of Cultural Heritage)分野のグローバル人材能力開発制度の調整を担う。また、視聴覚危機遺産の保護を目的とするSOIMA(Sound and Image Collections Conservation)プログラムの指揮も担っている。過去には、ICCROMの連携型研修事業「統合型危機管理に向けたチームワーク」の企画・実施にも貢献。



スピーカー

Renata VIEIRA DA MOTTA　ICOMブラジル委員長

博物館学研究者(博士号)。とくに、公共政策の文化的側面や、美術館の経営が専門分野。ブラジル国内の様々な文化・芸術機関の研究者職を経験後、セルジオ・モッタ研究所(ISM)所長、サンパウロ省博物館局(SISEM-SP)局長、サンパウロ省文化局博物館遺産保存部(UPPM)部長を歴任。2017年以降は、サンパウロ大学(USP)で博物館・収蔵物分野の顧問を担当。学長室を拠点に、USPに付属する5つの博物館の支援業務に従事。パウリスカ博物館内の歴史的建造物の全面改築に取り組む作業部会「パウリスカ博物館2022」のメンバー。ICOMブラジルの委員長として、2018～2021年までの任期を務める。

世界のアジア美術とミュージアム

9.4〈火〉11:00–12:15

本セッションでは、アジア美術を扱う博物館とその美術品がどのようにその土地や外国からの鑑賞者との結びつきを深めるか、また世界中の博物館が連携することにより、どのようなメリットを享受できるかを検討するとともに、近年世界中の博物館でアジア美術への理解を深めようとする動きについて具体的な事例を踏まえた考察があった。

ICFA委員長でもあるChristoph Lind氏は、京都大会におけるICFAのテーマは「美術館における異文化:西洋とアジア」であり、東西の融合の観点から間違ったカテゴリーを見直すことの必要性を述べた。日本美術の海外展を多く手掛けている河合正朝氏は、日本美術の展示・鑑賞に伝統的手法を取り入れることの意義について述べ、オーストラリアの博物館で学芸員を務めるMin-Jung Kim氏は、「アジア美術作品は、ハイブリッドなコレクションとして存在している」とし、植民地時代のネガティブな考え方を押し付けるのではなく、ミュージアムのコレクションにおけるハイブリッドの文化的なオブジェ(hybrid cultural objects)を見ることが重要だと指摘した。日本美術史が専門のAnne Nishimura Morse氏は、米国内で日本美術専門家の高齢化が進んでいることを指摘した上で、CULCON(日米文化教育交流会議)美術対話委員会やJAWS(日本美術史に関する国際大学院生会議)プログラム等の取組を紹介し、日本美術専門家の国際的ネットワークを構築する必要性を強調した。モデレーターのYukio Lippit氏は、アジア美術コレクションは今や世界中で流動しており、歴史と文化の交わりによって生まれた数々の作品はハイブリッドなコレクションであるとの観点を持って、アジア美術をグローバルに評価することの重要性を述べて総括した。











モデレーター

Yukio LIPPIT　ハーバード大学 教授

ハーバード大学美術史・建築学科の教授、ラドクリフ高等研究所の元所長。日本画が専門分野で、ワシントンD.C.のナショナル・ギャラリー・オブ・アート、フリーア美術館、ニューヨークのジャパン・ソサエティーでの展示企画実績を持つ。



スピーカー

河合 正朝　千葉市美術館 館長

1941年東京都生まれ。1971年に慶応義塾大学大学院博士課程を修了。1969年に慶応義塾大学文学助手、1988年同大学文学部教授を経て、2007年には慶応義塾大学名誉教授となる。2012年からは千葉市美術館館長を務める。



スピーカー

Min-Jung KIM　応用美術科学博物館 学芸員

オーストラリア・シドニーの応用美術科学博物館（MAAS、別称：パワーハウス博物館）のアジア美術担当学芸員。韓国生まれ、オーストラリア育ち。シドニー大学で学芸員・美術館学の修士を取得後、12年前にMAASで働き始めた。韓国の織物、陶器、金属製品のほか、日本のファッション、中国製ベルトバックル、学芸員学など、幅広い分野で出版・講義活動を行っている。「Rapt in colour」（1998年）、「Earth, Spirit and Fire」（2000年）、「Sprit of Jang-in」（2010年）「Japanese folds」（2015年）、「Reflections of Asia」（2018年）などの展示企画実績がある。



スピーカー

Christoph LIND　ライス・エンゲルホルン博物館、ICOM ICFA委員長

美術史・中国学・日本学修士。美術史博士。ベルリン・ドイツ歴史博物館館長。ICOMドイツ委員長（2003年）。ドイツ・マンハイムのライス・エンゲルホルン博物館展示部長。ドイツ・マンハイムのライス・エンゲルホルン博物館美術・文化史部長（2015年～）。展示プロジェクト実績（抜粋）：「ドイツ植民地史展」（中国・青島）、「1701年初代プロイセン国王戴冠式」、「Lu Chuntao。絵画、中国建築100点」、「バロック、ベル・エポック美術、選帝侯の美術」。



スピーカー

Anne Nishimura MORSE　ボストン美術館 日本美術シニア・キュレーター

ボストン美術館のウィリアム・アンド・ヘレン・パウンズ・シニア・キュレーター（日本美術）。日本美術課長として、最近では「In the Wake: Japanese Photographers Respond to 3-11（地震、その後：日本人写真家が撮るポスト3.11）」（2015年）、「Takashi Murakami: Lineage of Eccentrics（村上隆：奇想の系譜）」（2015年）などの企画を担当。日本国内では、「ボストン美術館 日本美術の至宝」（東京国立博物館、2012年）や、「ボストン美術館×東京藝術大学 ダブル・インパクト 明治ニッポンの美」（東京藝術大学、2015年）を企画。日米文化教育交流会議（CULCON）美術対話委員会の共同委員長も務める。

デコロナイゼーションと返還
―より全体論的な視点と関係性アプローチへの移行

9.2〈月〉14:30–16:00/16:30–18:00

文化・教育機関のデコロナイゼーションを責務として捉える傾向が高まる中、博物館所蔵品の返還が新たな注目を集めている。博物館のデコロナイゼーション化は、博物館による所蔵品の管理・解釈・展示方法に、明らかに大きな影響を及ぼすこととなる。また、こうした議論には、「植民地政策やその結果として収集された物品の正当な所有者は誰なのか」、「これらの所蔵品に意味を与える記述は誰が支配するのか」、「博物館としての考え方を定め、意見を決めることができるのは誰か」など、所有権・支配権・権力に関する問題が根本的に関わる。

本セッションでは、博物館によるデコロナイゼーション運動の先導・対応状況の検証のほか、返還に関する議論にデコロナイゼーションがどう影響を及ぼしているかについて、これらの問題に対する様々な新しい視点や考え方の把握、および独創性を活かした新たな問題や紛争の解決に役立つ新たな手法の提案を通して検討を行った。





モデレーター

Afşin ALAYLI
ICOM事務局
博物館・社会コーディネーター

Tonya NELSON
ICOM英国委員長

スピーカー（第一部）

Marilia BONAS
サンパウロ・レジスタンス記念館館長
ICOMブラジル理事

Alec COLES
西オーストラリア博物館CEO
ICOMオーストラリア元委員長

Reena DEWAN
コルカタ・クリエイティビティ・センター副所長
ICOMインド委員長

William U. EILAND
ジョージア美術館館長
ICOM英国理事

Laura PYE
リバプール国立博物館館長
ICOM英国会員

Michèle RIVET
カナダ人権博物館副館長
ICOMカナダ理事

スピーカー（第二部）

Luc EEKHOUT
ヘースウェイク城館長
ICOMオランダ委員長

Christian Nana TCHUISSEU
Blackitude博物館館長
ICOMカメルーン委員長

Bertrand GUILLET
ブルターニュ公爵城ナント歴史博物館館長
ICOMフランス会員

Nehoa Hilma KAPUKA
ナミビア博物館協会プロジェクト開発マネージャー
ICOMナミビア会員

Beate REIFENSCHEID
ルードウィック博物館館長
ICOMドイツ委員長

マンガ展の可能性と不可能性
―英韓日の比較から

9.4〈水〉14:30–16:00

まず、ルーマニエール氏から、同氏がキュレーションした大英博物館のマンガ展「The Citi exhibition: Manga」(2019年5月23日～8月26日)に関して、企画を通し、現実の展示に落とし込むにあたっての苦労や工夫等が説明された。また、この「実験的なチャンス」に対する来場者の反応や、大英博物館内部の反応の変化についても語られた。

次に、ナム氏が、同氏のキュレーションしている、「釜山グローバルウェブトゥーンセンター」における過去3回分の企画展に関して、写真や動画を見せながら、具体的な工夫等を説明した。

続いて、ユー氏は、同氏の勤める京都国際マンガミュージアム／京都精華大学国際マンガ研究センターが、マンガ資料アーカイブの一環として実施している、マンガ原画の複製制作プロジェクト「原画'(ダッシュ)」について説明した。また、アーカイブ事業では常に、資料の「活用」ということが意識されていて、原画ダッシュプロジェクトにおいては、その一つが展覧会であるとした。

その後、吉村氏と伊藤氏が加わり、登壇者全員で、そもそもマンガの原画の価値とは何なのか、といったことが議論された。ルーマニエール氏は、大英博物館でのマンガ展において、マンガ原画は最も重要な要素であるとし、それが、「人間の手による」創造物であるからだと述べた。

一方、そもそも、マンガ作品がデジタルデータとして作られることの多い「ウェブトゥーン」を扱っているナム氏は、マンガ原画が重要だと思われている理由を、それが、読者が最終的に目にする形になる前の、創作プロセスの一部であるからと解釈する。創作プロセス自体は、アナログであろうとデジタルであろうと存在するので、「ウェブトゥーンセンター」における(デジタルデータである)ウェブトゥーン作品の展示においては、創作プロセスが垣間見られるような展示をしていると述べた。





スピーカー

伊藤 遊
京都精華大学国際マンガ研究センター／
京都国際マンガミュージアム

南 鉉勳(ナム・ジョンフン)
釜山ウェブトゥーンフェスティバル
(釜山グローバルウェブトゥーンセンター)

Nicole Coolidge ROUSMANIERE
大英博物館／イースト・アングリア大学、
セインズベリー日本藝術研究所

ユー スギョン
京都精華大学国際マンガ研究センター／
京都国際マンガミュージアム

吉村 和真
京都精華大学

博物館と地域発展

9.4〈水〉16:30–18:00

ICOMは過去10年間にわたり、博物館がより良い社会を創出するために果たせる役割を、高レベルの政府間組織との連携を強化することによって、積極的にアピールしてきた。

たとえば経済協力開発機構(OECD)との協力は、『文化と地域発展：最大限の成果を求めて―地方政府、コミュニティ、ミュージアム向けガイド』の出版につながった。本ガイドには、ICOMが草案を作成したユネスコ「ミュージアムとコレクションの保存活用、その多様性と社会における役割に関する勧告」(2015年採択)に基づき、博物館が地方政府による決定や政策立案の優先事項であり続けるための、地方政府との具体的な連携方法が示されている。

また、本ガイドは2018年8月のICOM持続可能性ワーキンググループ(ICWG)の創設に伴い策定された持続可能な開発に関するICOMの戦略を反映しており、人材育成(キャパシティ・ビルディング)や活動支援のツールとしても使用できる。

ICOMとOECDによる本共同セッションでは、博物館、地方政府、地方政府からなる国際ネットワークの代表者が結集し、博物館・地域社会・地方政府との相互関係を様々な側面から議論し、各地域において持続可能な開発戦略をより効果的に実施するために、より強固な政策・行動計画の策定に向けた今後の戦略について意見を出し合った。





モデレーター

Dorota FOLGA-JANUSZEWSKA
ヤン3世宮殿博物館(ワルシャワ・ヴィラヌフ)副館長
ICOMポーランド元委員長

Joana Sousa MONTEIRO
リスボン博物館館長
ICOM CAMOC委員長

スピーカー

門川 大作
京都市長

Lamia KAMAL-CHAOUI
OECD起業・中小企業・地域と都市センター局長

Peter KELLER
ICOM事務局長

Luis Orlando REPETTO MÁLAGA
教皇庁立カトリック大学 リバ・アグエロ研究所
美術・大衆伝統博物館館長
ICOMペルー副委員長

ワークショップ

出版・執筆に向けて
―著作を学術専門誌に掲載してもらうために

9.2〈月〉11:45–13:15

本ワークショップは、博物館の専門家や研究者がどのようにすれば研究内容が評価され、学術専門誌や専門書に論文が掲載されるかについて学ぶことを目的に、以下の三部構成で行われた。

1. 論文・書籍出版のポイント

ICOM出版ドキュメンテーション課が、ICOMの学術誌『ミュージアム・インターナショナル』等の選考・査読プロセスを通過するためのポイントを伝授。特に、論文・著書の効果的な要旨作成方法や、査読・編集への対応方法に関する助言が提供された。ワークショップには、ICOM関連書籍の出版元であるテイラー・アンド・フランシス(Routledge)の代表者も講師として参加し、書籍の企画・持ち込み手順について説明した。

2. 出版関連法規制への適切な対応

テイラー・アンド・フランシス(Routledge)の代表者が、著作権に関する問題、オープンアクセス方針、出版倫理に関する専門的な情報を紹介。参考文献からの引用時や引用許可申請時の適切な複写利用方法について解説した。

3. 英作文

英語での文章作成に関する全般的な助言に続き、参加者が意見を交換しながらグループ別の英作文演習を実施した。

モデレーター

Aedín Mac DEVITT
ICOM事務局
出版ドキュメンテーション課課長

スピーカー

George COOPER
テイラー・アンド・フランシス

Melanie FOEHN
ICOM事務局
編集コーディネーター

Heidi LOWTHER
テイラー・アンド・フランシス



博物館による持続可能な未来の共創

9.2〈月〉14:30–16:00

本ワークショップは、博物館および博物館による環境・社会福祉分野での取り組みの強化に役立つ具体策を知りたい参加者のために行われた。ワークショップでは、持続可能な開発目標(SDGs)を指針に、博物館を持続可能で責任ある意見や行動へと導くためのアイデアや戦略の作成に取り組んだ。

伝統と持続可能性は互いに依存し合う関係にある。伝統的な知識や行動様式は、現在の環境での持続可能でバランスの取れた生活様式の実現に非常に役立つ情報源となる。世界のあらゆる地域社会における持続可能な生活様式の実現なくして、文化習慣の多様性を維持することはできない。

本ワークショップでは、ローカル／グローバルレベルでの環境的・社会的持続可能性の実現に向け、それぞれの博物館の「特技」をどう活かせるかが話し合われた。

スピーカー

Henry MCGHIE
Curating Tomorrow創設者
ICOM持続可能性ワーキンググループ(WGS)委員

Jenny NEWELL
オーストラリア博物館太平洋・国際コレクション部長
ICOM持続可能性ワーキンググループ(WGS)委員



スマートなデジタルコミュニケーションのために
―コミュニケーションデザインとパートナーシップの構築・運用

9.3〈火〉10:30–12:00

本ワークショップは、人の心を動かすデジタルコミュニケーションキャンペーンの構築と実施、並びにパートナーとの意義ある協力体制の確立に必要な基本要件とツールを提供することを目的に行われた。とりわけ、最も高い効果を出しつつ、いかに業務の効率化を図るかという、スマートなコミュニケーションに焦点を当てた。

本ワークショップは以下の2部構成で実施された。

1. キャンペーンの構築と実施
   ICOMコミュニケーションチームが、ソーシャルメディアガイドラインおよびポリシー、相互プロモーション協定、およびICOMの新しいウェブサイトというICOMの各委員会が利用可能な3つの主要ツールを、コミュニケーションの観点から紹介。
2. 成功事例
   ICOMおよびOECDのコミュニケーションチームが、ICOM-OECD発行『文化と地域発展：最大限の成果を求めて―地方政府、コミュニティ、ミュージアム向けガイド』の発表キャンペーンについてプレゼンテーションを行い、2018年のICOMにとって最も成功したキャンペーンに数えられる主な要因について議論を行った。

スピーカー

Laetitia CONORT
ICOM事務局
デジタルコミュニケーション担当

Alexandra FERNÁNDEZ COEGO
ICOM事務局
コミュニケーションコーディネーター

Francesca POLLICINI
ICOM事務局
イベントマネジャー



ICOM委員会管理者のための会員データベースの活用

9.3〈火〉/9.4〈水〉12:30–13:30

本ワークショップでは、国内委員会および国際委員会事務局の管理業務者向けに、ICOMの会員データベース(IRIS)について、アクセス方法や利用方法が紹介された。また、データベースの機能を学ぶ機会であるとともに、ICOM会員の管理に積極的に参加できるよう他のユーザーと交流する場ともなった。

本ワークショップは、以下の2部構成で実施された。

1. IRISデータベースとそのアクセス方法、利用方法、機能に関するプレゼンテーション
2. 使用事例
   新規会員の登録方法。会員リストのエクスポート方法。キーユーザーの証明方法。

スピーカー

Sonia AGUDO
ICOM事務局
ITシステムマネジャー

Benjamin GRANJON
ICOM事務局
メンバーシップ課課長



博物館定義の再考ラウンドテーブル

9.3〈火〉14:30–16:00/16:30–18:00

本ラウンドテーブルが開催された時点で、参加者はすでに新たな博物館定義案(p.185参照)についてある程度の内容や方向性をウェブサイト等を通じて提示されていた。

その提示された方向性とは、明確な価値や倫理的な目的とともに、社会的、地勢学的、持続可能性に関する対立についての言及も含んでおり、さらに、ミュージアム固有の特徴の重要性や変化しつつあるミュージアムとコミュニティの関係性を表現する新たな言葉を生み出す必要性も含まれていた。

当初は、第1セッションでこれらの方向性についてラウンドテーブル形式で議論する予定だったが、参加者が自らの疑問点、意見、感想等を共有していくうちに、タウンホールミーティングの様相を呈してきた。

第2セッションでは、ICOMの各委員会の代表者が新たな定義案についての支持、不支持について討論が行われた。自由な討議に続いて、参加者からの意見も募った。

両セッションともできるだけ多くの意見を取り上げる場となることを目指して実施された。

モデレーター

Afşin ALTAYLI
ICOM事務局
博物館・社会コーディネーター

George Okello ABUNGU
Okello Abungu世界遺産コンサルタントCEO
ICOM博物館の定義・展望・可能性委員会(MDPP)委員

Margaret ANDERSON
メルボルン旧財務省ビル博物館館長
ICOM博物館の定義・展望・可能性委員会(MDPP)委員

Lauran BONILLA-MERCHAV
コスタリカ大学教授
ICOMコスタリカ委員長及び
ICOM博物館の定義・展望・可能性委員会(MDPP)委員

David FLEMING
リバプール・ホープ大学公共史学科教授
ICOM博物館の定義・展望・可能性委員会(MDPP)委員

Alberto GARLANDINI
ICOM副会長
ICOM博物館の定義・展望・可能性委員会(MDPP)委員

Kenson KWOK
プラナカン博物館・アジア文明博物館創設者兼館長
ICOM博物館の定義・展望・可能性委員会(MDPP)委員

Jette SANDAHL
ICOM博物館の定義・展望・可能性委員会(MDPP)委員長

W. Richard WEST Jr.
アメリカンウェスト・オートリー博物館館長
ICOMアメリカ役員及び
ICOM博物館の定義・展望・可能性委員会(MDPP)委員







ネットワーキング・セッション

ICOM新会員セッション

9.2〈月〉13:30–14:30

本セッションは、国際機関であるICOMの組織方針・使命・活動などについて、ICOM新会員に理解を深めてもらうために開催された。参加者は国際ネットワーク関係者と対話することによって、ICOMのコミュニティやその他の委員会と積極的に交流を深めた。

ICOM事務局の様々なスタッフが各課の活動を紹介し、特に人材育成・コミュニケーション・会員・出版について詳しく解説した。さらに、事務局はICOMの資金調達についても説明し、博物館の専門家が国際会議に出席することを奨励した。





プロの経験から学ぼう！ ICOMメンタリング・セッション

9.3〈火〉/9.4〈水〉12:30–13:30

ICOMは2013年以降、出身国や経歴の異なるベテラン博物館関係者とICOMの若手会員との交流や知識交換を促すことを目的とするいわゆる「メンタリング・セッション」を、ICOM大会と並行し企画・開催してきた。

京都大会期間中も、9月3日および4日にそれぞれ1時間のメンタリング・セッションを開催し、世界各地から参加したメンターが、博物館に関する以下の重要テーマについて、参加者を各日5グループに分け解説を行った。

1. 保存…Achal Pandya氏（インド）、Renata F. Peters博士（英国）
2. 教育…Milene（Mila）Chiovatto氏（ブラジル）、Ani Avagyan博士（アルメニア）
3. マネージメント…Muthoni Josephine Thang'wa氏（ケニア）、Shirin Melikova博士（アゼルバイジャン）
4. コミュニケーション＆マーケティング…Matthias Henkel博士（ドイツ）、Jacques Terrière氏（フランス）
5. キュレーターシップ…Maja Chankulovska-Mihajlovska氏（マケドニア共和国）、Tshepiso Gabonthone氏（ボツワナ）

これら10名のメンター全員が、それぞれの専門職としてのキャリアから得た経験をユニークな視点から紹介し、グループによる活発な議論を促した。さらにICOM事務局が、オンラインプラットフォームを通した交流の継続・情報共有をメンターおよび参加者に呼びかけた。





メモリアル・レクチャー

9.3〈火〉13:30–14:30

本メモリアル・レクチャーは、世界の博物館や博物館専門職の発展に寄与した博物館学の第一人者として知られるスティーブン・E・ワイル博士の業績を記念して行われた。

ICOMは、2006年以降、毎年、現代社会における博物館の役割に関する論文の執筆を博物館・文化分野の著名人に依頼し、博物館および博物館専門職の新たな役割について検討してきた。

本年度レクチャーの企画は、ICOM、ICOM米国、ICOMマネージメント国際委員会(INTERCOM)が担当し、コロンビア真実の解明・共存・再発防止のための委員会で理事を務めるLucía González氏を招聘した。

「博物館の政治的役割：より良い未来の構築にいかに資するか」と題して行われた講演は、社会的、政治的課題への対処に芸術や文化がいかに貢献するか、またコロンビアにおける暴力の歴史、和解、さらにはこれを繰り返さないよう記憶に留めることの重要性や、博物館がいかにその認識を向上させる場になり得るかをテーマに語られた。







AVICOM
オーディオビジュアル及びソーシャルメディア新技術国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

Audio-Visual and Social Media as Tools of Research, Documentation, Information and Communication with the Public
調査研究、ドキュメンテーション、情報、そして公衆通信の手段（としての視聴覚とソーシャルメディア）

報告者名：

石原 香絵（NPO法人映画保存協会）

開催日程：

8.28 @上海歴史博物館：
理事選挙、F@IMP授賞式

9.2 @国立京都国際会館：
研究発表、授賞式

9.3 @稲森記念会館：
研究発表

9.4 @国立京都国際会館：
研究発表、総会

9.5 @アジア太平洋無形文化遺産研究センター、堺市博物館、NHK大阪放送局、大阪歴史博物館：
オフサイトミーティング―エクスカーション

京都大会概要及び所見：

1）内容

AVICOMは視聴覚、最新技術ならびにソーシャルメディアを駆使して収集やサービスの提供に従事する専門家によって構成される。23名が発表を行った3日間の研究発表には、理事や発表者およびその関係者を含め、毎回35名前後が参加した（初日と3日目は時間帯によって50名を超え、座席が不足することもあった）。国や地域の内訳は、ヨーロッパ12名（ハンガリー3名、イタリア2名、デンマーク、チェコ、ドイツ、スコットランド、フランス、ギリシャ、トルコ各1名）、アジア8名（中国4名、台湾3名、日本1名）、北米2名（カナダ、メキシコ）、オセアニア1名（オーストラリア）――ただしヨーロッパの7名とオーストラリアの1名は新旧理事、来日されなかったヤーノシュ・タリ委員長（元ブダペスト民族博物館/ハンガリー）はビデオメッセージによる参加であった。

9月2日は、「AVICOMの過去、現在、未来：コミュニケーションの変化に伴う役割の変化」と題して、前回のミラノ大会の初日同様、理事4名がAVICOM設立の1991年から現在に至る歴史を振り返り、ミュージアム環境のデジタル化に対応するため、委員会の名称を変更してデジタル技術やソーシャルメディアへと重点テーマを移した経緯を説明した。特筆すべきは、議事録等のAVICOM関連資料のデジタル化プロジェクトである。イルディコ・フェイェシュ氏（ハンガリー国立博物館）によると、AVICOMは本格的なアーカイブズを構築している唯一のICOM国際委員会であるという。休憩に続いて、「革新的メディア：ドキュメンテーション、復元、再構築、パブリックコミュニケーション I」をテーマに4名が発表を行った。

ところで、AVICOMの最も重要な催事は映像祭「F@IMP 2.0」である。2019年は、日本からエントリーした「教室ミュージ



1

1. AVICOMを紹介する創設メンバーで副委員長のマイケル H. ファーバー氏（元コマーン野外博物館/ドイツ）
2. お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンターに贈られた賞状とトロフィー（渡辺友美氏撮影）
3. 稲盛記念会館での研究発表の様子

アム 海のめぐみをいただきます！展」のミニプロジェクションマッピングが見事「教育&アウトリーチ部門」の銅賞を受賞し、ICOM-ICEEの窓口担当でもある渡辺友美氏（お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター）が京都大会直前の8月28日に上海市歴史博物館で催された授賞式に参加した。京都でも初日の研究発表の後に授賞式が催され、上海の授賞式に参加できなかった各部門の受賞者に賞状とトロフィーが授与された。

9月3日は、引き続き「革新的メディア：ドキュメンテーション、復元、再構築、パブリックコミュニケーション II」をテーマにした5名が発表後、「データベースの持続可能性」へと移り、さらに4名が登壇した。この枠で発表した鈴木伸和（映画保存協会）は日本から唯一の発表者となった。この日の最後に、新たにAVICOM委員長に就任するアレシュ・カスパ氏（ヤン・アモス・コメニウス博物館/チェコ）より、次回2022年9月のICOMプラハ大会に関する短いプレゼンも行われた。なお、カスパ新委員長は自らの発表に加え、全セッションのビデオ撮影も担当した。

9月4日は、「メディアによるインクルージョン強化のための障壁削減」をテーマに5名が発表を行った。最後に、理事を主な参加者として「AVICOM総会：メディアを介したパブリックコミュニケーションの機会」が開かれ、会計報告と新理事紹介のほか、次回「F@IMP 2.0」の日程等が議論された。

9月5日のオフサイトミーティング（バスツアー）にはボランティアを含む21名が参加し、アジア太平洋無形文化遺産研究センター、堺市博物館、NHK大阪放送局、大阪歴史博物館を見学した。最新の放送技術は難解過ぎたとの感想も聞かれたが、デジタル技術を積極的に展示に取り入れている複数のミュージアムの見学をこの一日に盛り込むことができた。ツアーの手配から当日の同行まで担当してくださった京都国立博物館のヘルフェンベルガー・ファビエン氏には記してここに感謝したい。

2）京都大会の評価と課題

ミラノ大会と比較すると若い世代の実務者が増え、活気溢れる研究発表となった。ただし、様々な事情で5名（中国3名、イラン、スコットランド各1名）もの登壇がキャンセルとなり、同時通訳がなかったためか、日本からの発表者が1名（参加者も5名以下）に留まったのは残念であった。各発表は原則15分と短く、質疑応答の時間も限られ、個々のミュージアムの事例紹介に終始した感は否めなかったが、休憩時間等には参加者同士の交流が見受けられ、熱心に情報共有する姿が印象に残った。ICOM全体の動向を鑑みれば、今後のAVICOMは、地球環境に影響を与えるE―ウェイスト（電子廃棄物）や、デジタル媒体の長期保存コストに関する深刻なトピックにも踏み込むべきであろう。他の国際委員会との合同セッションが実現すれば、多様な視点からの議論が深まるのではないだろうか。

3）今後の展望

視聴覚資料を専門に扱うミュージアムの参加が皆無である一方、「デジタル技術を活用している」という共通項を持つ自然史系や考古学系等、設立の時期も規模も背景も異なるミュージアム関係者が同席しているところにAVICOMらしさが感じられた。日本のミュージアムの強みを活かせる国際委員会の一つであるだけに、ICOMプラハ大会に向けて、国内のミュージアム関係者や研究者の新規参加に大いに期待したい。委員長に就任したカスパ氏が館長を務めるヤン・アモス・コメニウス博物館は、中央ヨーロッパ唯一のミュージアムフィルムの祭典「MUSAIONFILM」を主催している。日本にも独自に映像を制作しているミュージアムは少なくないと思われ、「F@IMP 2.0」にも積極的にエントリーしていただきたい。



2


3

CAMOC
都市博物館のコレクション・活動国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

City Museums as Cultural Hubs — Past, Present and Future
文化をつなぐシティーミュージアム―過去、現在と未来

報告者名：
邱 君妮（ICOM京都大会準備室）

開催日程：

9.2 @稲盛記念会館：
ICOM-ASPACと合同セッション
―研究発表；CAMOC総会

9.3 @国立京都国際会館：
ICOM-DEMHISTと合同セッション
―研究発表

9.4 @国立京都国際会館：
研究発表；ワークショップ

9.5 @京都府京都文化博物館：
オフサイトミーティング
―研究発表、博物館及び周辺地域のガイドツアー

9.8–9 @東京：
ポストカンファレンスツアー

京都大会概要及び所見：

1）内容

今年の会議は、日本を含むアジアからの参加者と欧米などからの参加者が半々で、毎日、およそ100人程度の参加者があった。プログラムでは、44の発表のうち、ヨーロッパからの発表者は16人、北米4人、ラテンアメリカ2人、アフリカ1人、中東2人、アジア・太平洋から19人（うち日本から8人）であった。

CAMOCでは、2005年の創設以来、積極的に都市における博物館の役割や可能性について繰り返し議論を行ってきた。特に2016年ミラノ大会以降、ICOMの博物館定義の再考の動きに合わせて、都市博物館は、限られた資源を活用し、時代の変化によって多様性を持つ都市、文化遺産、または都市にいる人々に対して、いかに持続可能な活動ができるのか、といった議論を展開してきている。

CAMOCは、ヨーロッパ出身の会員が多いため、京都で開催する今大会では、9月2日にICOM-ASPACと「カルチャーツーリズム、都市の持続的可能性、都市の博物館」をテーマとした合同セッションを企画した。ASPAC地域にある特殊な都市開発及び博物館発展の戦略や課題を浮かび上がらせるため、長年、太平洋やASEAN地域において活躍する日本の専門家からの発表のほか、シンガポールと中国の事例発表など、ASPAC地域の都市博物館の可能性に特化した議論を行うことができた。

9月3日には、地域を超えて、「文化財としての都市及び都市博物館」を考え、特に日本では多くの歴史的建築物がミュージアムに転用されていることを踏まえ、DEMHISTと「都市博物館とハウスミュージアム：博物館の定義の見直し」をテーマとする合同セッションを企画した。テーマ性や活動、視点が全く異なる二つの国際委員会のコラボレーションにより、多彩な発表が採択され、



1

1. 国立京都国際会館での会議風景
2. 京都文化博物館でのオフサイトミーティング
3. ポストカンファレンスツアー（東京）

国際的な動向を踏まえつつ、文化財保護や都市の持続可能性における都市博物館の役割を議論した。特に、本セッションでは、二つの委員会のつなぎ役として江戸東京博物館から藤森館長の挨拶や小林副館長による発表が行われた。

京都大会におけるCAMOC会議の重要な成果の一つは、京都大会に向けて日本のメンバー数名で「多文化主義の再検討：都市の博物館の様々な「多様性」との共生」というテーマを提案し、9月4日のセッションとして採用されたことである。当日、国内では未だ数少ない移民の子供たちを対象とした東京都美術館でのプログラムが紹介され、オーストラリアやイギリスのみならず、イタリア、オランダ、シンガポール、イスラエルなどからも興味深い発表があった。このセッションでは、日本の状況を発信でき、また異なった社会的背景を抱える各国のミュージアムどうしが、互いにその取り組みを共有することができた。

9月5日には、京都府京都文化博物館の共催により、「都市博物館と地域コミュニティの持続可能な性」をテーマとするオフサイトミーティングを開催した。当日は、26の国と地域からおよそ70人が参加した。京都文化博物館からは、「博学社」などの地元のまちづくり活動に関する報告がなされた。、その他アメリカや台湾などの事例研究もあり、都市博物館と都市の課題の関係を中心とした議論を行った。特に、多摩六都科学館からの発表は、科学センターを都市博物館として位置づけ、地域振興の役割を果たすことができる活動が共有され、今後の都市博物館の展開の可能性を提示した。
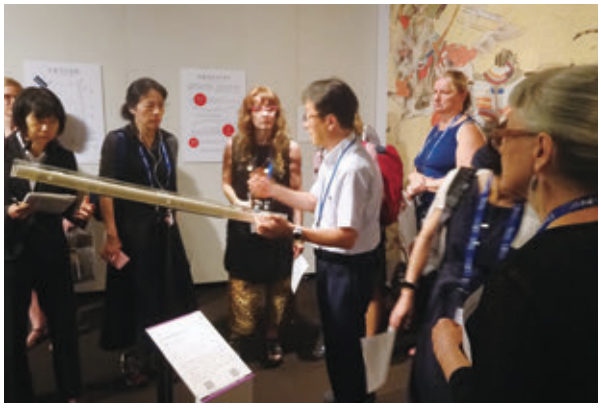
京都でのプログラムが終わった後、約40名の各国の参加者が東京に移動し、東京でのポストカンファレンスに参加した。本ツアーでは、東京を例として都市とその都市の博物館の多様性を探るため、一日目に東西のミュージアムの視察と上野での意見交換会を、二日目に東京都美術館での見学会を行った。東コースは、歴史的視点から首都東京の成り立ちについて考察するため、江戸東京博物館や浅草寺絵馬ギャラリーを見学したあと、東京都美術館で木下直之・東京大学名誉教授から上野公園にある博物館群の歴史的経緯などのレクチャーを受け、その後東京国立博物館などの各博物館を見学した。西コースは、もう一つの東京という視点で多摩六都科学館や小平市ふれあい下水道館を見学し、森美術館の展望台から東京の街を眺めるツアーを行った。夜は東京都美術館で両ツアーの参加者が合流し、60名の大交流会が行われた。翌日は、打ち解けてリラックスした雰囲気のなか東京都美術館の展覧会を見学し、その後現地解散となった。

2）京都大会の評価と課題

オフサイトミーティングやポストカンファレンスツアーを含めた5つの会議では、国や地域を超えた熱心な議論を行う場面が多く見られた。京都大会でのCAMOCの評価は大変高く、委員長や総務担当理事から、「京都大会準備室や日本のCAMOC組織会員及び個人会員の尽力の賜物」との言葉をいただいた。特に、組織会員の江戸東京博物館、東京都美術館及び京都文化博物館の助成で、プログラムに同時通訳をつけたことや関西大学の村田麻里子教授や多摩六都科学館の髙尾戸美氏をはじめ、日本のCAMOC会員の協力により、日本からの参加者との交流を深めることができたのは大きい。また、多数の参加者から、会議運営やロジなどが丁寧に企画され、至る所でボランティアのサポートがあり、スムーズに一週間の会議に参加できた、これまでにはなかったICOM大会を経験できた、などのコメントをいただいた。

3）今後の展望

CAMOCの会議では、改定される予定の「博物館の定義」について注目が集まり、持続可能性や世界的視野、権力や格差の問題、コミュニティやエンパワーメントなど様々な観点から都市博物館について議論がなされた。これらの課題や議論は日本でもよく行われており、今後日本の博物館と一緒にSDGs等の国際的な目標のもと、より社会課題に向き合う博物館の交流活動が期待される。CAMOCは国際委員会の中では歴史が浅いため、積極的にヨーロッパ以外の専門家との交流を重視し、また日本からも理事が選出されおり、日本の専門家にとって参加しやすい委員会である。2020年CAMOC年次大会は、ポーランドで開催する予定である。まず日本のICOM関係者に参加していただき、CAMOCの暖かさを肌で感じ、海外の専門家と議論していただくことを期待する。また、CAMOCでは4か月に一回ISBN番号がある雑誌「CAMOC Review」を発行しており、本雑誌は、世界中の都市博物館の事情及び情報を共有する目的で、CAMOCの会員ネットワークだけではなく、ICOMのネットワーク（ICOM newsletterなど）を通じて世界141の国と地域の3000人を超える博物館の専門家に発信されている。ぜひ投稿していただきたい。


2


3

CECA
教育・文化活動国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

Roles of Museum Education: Supporting Self and Society
個人と社会をささえる博物館教育

報告者名：
太田 歩（国立歴史民俗博物館）
笹木 一義（国立アイヌ民族博物館設立準備室）
松山 沙樹（京都国立近代美術館）

開催日程：

9.1 @京都国立近代美術館：
プレカンファレンス・ワークショップ

9.2 @稲盛記念会館：
研究発表、ポスターセッション

9.3 @国立京都国際会館：
ICOFOMと合同セッション、ベスト・プラクティス・アワード発表、リサーチ・アワード発表、CECA総会

9.4 @国立京都国際会館：研究発表

9.5 @和歌山県立紀伊風土記の丘：
紀伊風土記の丘見学ツアー（オフサイトミーティング）
アバローム紀の国：CECA授賞式、高校生による「世界津波の日」発表
和歌山県立近代美術館・和歌山県立博物館：
和歌山県内の教育実践紹介・展示見学

京都大会概要及び所見：

1）内容

5日間にわたり開催されたCECA年次大会には、毎日100～150名程度の参加者があった。アジアでの大会開催は2010年の中国上海以来で、今回は、アジアの国々から多くの参加者が見受けられた。また発表応募数も200件を超え、京都での開催について例年にない興味関心の高さが感じられた。

9月1日は 、「#it's complicated: how to cope with multiple narratives in museums」と題したプレカンファレンス・ワークショップ（英語）が開催され、博物館や美術館における多様なナラティブの取扱い方について、理論と実践を交えた学びを深める場が提供され、16か国26名が参加した。初めに、モノの『事実』と『解釈』の違いをディスカッションをしたのちに、理論を学び、多様な視点が存在する博物館や遺跡での事例をグループで議論、発表をおこなった。参加者から様々な国の実践も合わせて共有され、深みのある内容となっていた。日本からも愛知トリエンナーレの事例が紹介された。

9月2日から4日にかけておこなわれたセッションでは、博物館教育に関する研究や評価の発表から、新しい教育活動のアイデアを共有する場であるマーケット・オブ・アイデア、そしてポスターセッションと幅広い内容が計100本報告された。

ポスターセッションでは、過去最多の32本の発表があり、与えられた1時間半の時間を越しても会話が続き、あちこちで情報交換の輪が広がっていた。

ICOFOMとの合同セッションでは、CECAが昨年度から会員を巻き込んで議論をしている「Cultural Actionとは何か」の成果を受け、ICOFOMからの博物館学の視点が加えられた形での議


1

1. プレカンファレンス・ワークショップ
2. セッション
3. オフサイトミーティング

論がおこなわれた。

CECAでは、2011年に、より良い博物館教育・文化活動を実践するために、博物館教育・文化活動の企画立案から実施、評価に至るまでの一連のプロセスを取りまとめたツール『ベスト・プラクティス』を提言している。2012年から、このツールを利用して行われた優れた実践に対し、奨励賞を授与する活動をおこなっており、今年の受賞者5名（内3名がアジア人）が発表された。また、2016年には、博物館教育・文化活動における研究活動を支援するため、優れた実践研究論文に対してリサーチ・アワードも創設しており、今回、受賞者1名が発表された。なお、CECAホームページに実践例や論文を公開している。

9月5日は、オフサイトミーティングが開催され、和歌山県の協力により京都からバスをチャーターし、90名が和歌山県和歌山市に向かった。和歌山県立紀伊風土記の丘では、岩橋千塚古墳群、近世の移築民家や考古資料館を見学した。ランチタイムセッションでは、CECAの2つの賞の授賞式、和歌山県立高等学校2校による「世界津波の日」高校生2018サミットの報告を聞いた。午後は、隣接する和歌山県立近代美術館と和歌山県立博物館にて、5つのパラレルセッションが開催された。和歌山県立博物館と和歌山工業高等学校の連携による3Dプリンターを用いた文化財レプリカ制作、和歌山県印南町印南中学校による災害の記録や調査の実施、和歌山県立近代美術館による「なつやすみの美術館」展を中心とした教育普及活動、和歌山市立博物館による老舗菓子店の資料保存の事例紹介、さらに、和歌山県立自然博物館がサメやヒトデなど移動水族館を用意し館のアウトリーチ活動が紹介された。参加者が直接、各機関職員と実践を見ながらやり取りできる機会を提供し、好評を博した。

2）京都大会の評価と課題

世界各国からの参加者と直接議論を交わし各国の博物館の現状・課題に接する、というCECA年次大会への参加の意義がある。しかし今回はそれに加え、同じ博物館業界でも、分野を横断したかたちで集まる機会がかなり限られており、日本国内からの参加者が集ったことにも大きな意義があったように思われる。

また、博物館の定義に対する対応が、各国際委員会で視点がそれぞれ異なり、博物館教育からのCECAが検討したこと、表明した立場、などは、引き続きの定義の議論でも注目されていくであろう。また国内の博物館教育関係者にも関心をもってもらい、自分のこととして議論に加わってもらえるような方法が望まれる。

課題としては、日本で開かれるICOM大会ということで、執筆者が運営等の対応を優先するため、通常の年次大会に参加する場合での、発表、議論、ネットワーキングを行う余裕がなかった。

3）今後の展望

CECA年次大会に参加できなかった方々のためにも、報告書を取りまとめ、広く発信をおこなっていく。

今回の総会で、委員長の選出があり、CECAは新たな体制で進むこととなる。次回の年次大会は、2020年10月12日～18日にかけてベルギー・ルーヴェンにて開催される。また、アジア・太平洋地域では、2012年に日本千葉県、2018年に韓国ソウルで地域大会も開催をし、地域でのネットワーク作りもおこなっている。日本のみなさんもぜひ参加を検討してほしい。

CECAホームページhttp://network.icom.museum/cecaにて最新情報を得ていただきたい。



2


3

CIDOC
ドキュメンテーション国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

Documenting Culture: a Culture of Documentation
文化の記録と伝承：ドキュメンテーションと文化

報告者名：
嘉村 哲郎（東京藝術大学 芸術情報センター）

開催日程：

8.31 @京都大学 東南アジア地域研究研究所：
CIDOC ワーキンググループ研究会

9.1 @京都大学 東南アジア地域研究研究所：
CIDOC ワーキンググループ研究会

9.2 @国立京都国際会館：
CIDOC 総会及び研究発表会

9.3 @稲森記念会館：
CIDOC 研究発表会、ポスターセッション

9.4 @国立京都国際会館：
CIDOC 研究発表会
（COMCOL及びCIMCIMとジョイントセッション）

9.5 @大塚国際美術館：
オフサイトミーティング

京都大会概要及び所見：

1）内容

2019年のCIDOC年次大会は、9月2から4日のいずれにおいても100 ～ 120人程度の参加者が見られた。また、今回は開催地が京都ということもあり、日本からは8件の研究発表と7件のポスター発表があった。CIDOCでは、京都大会開催前となる8月31日と9月1日にデジタルストラテジWG（ワーキンググループ）の研究会を京都大学東南アジア地域研究研究所で実施した。本WGは、昨年の年次大会で正式に設立したWGであり、対面での研究会は今回が初開催となった。二日間に渡って行われた研究会は、ミュージアムが研究や教育活動を行っていく上で、日々進歩するデジタル技術に対してどのような対応または取組みを行っていくべきか、その指針の作成と内容について議論が行われた。

9月2日から始まった年次大会では、「文化の記録と伝承：ドキュメンテーションと文化」をテーマに、7件の独自セッションと2件のジョイントセッションの計9件の研究発表が行われた。独自セッションではSemantic models for Documentationが特に注目を集めており、CIDOCが開発を進めている博物館資料情報をデータで管理するための国際標準規格CIDOC-CRMと関連技術や事例発表、デジタル時代のドキュメンテーション方法や方針、資料情報のデータ管理について議論が行われた。その他に多くの参加者を集めたセッションDocumenting Cultureは、日本国内から数多くの発表者があり、これまで余り知られていなかった日本国内のミュージアムや文化に関するドキュメンテーションの取組みが海外に向けて発信できた良い機会となった。特に、国立国会図書館のジャパンサーチはeuropeanaのスモールスケールの取組みとして注目を集め、これから似たような取組みを行う予



1

1. CIDOCオープニング（京都国際会館）
2. 研究発表（稲森記念会館）
3. オフサイトミーティング（大塚国際美術館）

定がある国の参加者からヒアリングを受けるなど盛況な様子であった。

9月5日のオフサイトミーティングは、徳島県にある大塚国際美術館のシスティーナ・ホールにて「文化財の複製・保存・修復とドキュメンテーション」のシンポジウムが行われた（京都からの参加者84名）。

シンポジウムでは、冒頭に複製された文化財の用途やその利用可能性の導入から始まり、日本の研究機関における文化財修復や複製の実例紹介、そして複製された文化財の取り扱いや考え方について、白熱した議論が展開された。特に興味深かった点は、ドイツの歴史的建築物について取り上げた例である。最近、ドイツにある歴史的建築物が修復や移設の過程で変容を遂げて現在の形として存在することになったが、実は長崎のハウステンボスには同じ建物がある。そして、長崎の建物は移設前の建物を複製して作られていたことから、現在のドイツにある建物と比較すると全く別のものに見えるという。過去に存在した本物が失われ、現在は複製物が過去の本物の形として唯一残った。すなわち、複製物も唯一のモノまたはホンモノとして扱うことが考えられるという。このように、複製物の唯一性やオリジナル性に関する議論が行われたが、より熟考が必要なテーマであるため、今後も継続して考察を進めていく必要があると締めくくられた。

今回、大塚国際美術館を訪問するオフサイトミーティングは、国内外の多くの参加者が初めての来館であり、館の規模や陶板絵画作品の品質に興味を持たれていた。また、オフサイトミーティングは多様な出身国の参加者で構成されていたことから、参加者同士の観覧の中で自国の著名作品が展示されていたならば、その国出身の参加者が、自国でしか知り得ないような内容を交えて作品解説するなど、ICOM参加者だからこその光景が散見された。今回、大塚国際美術館の全面協力で実施したオフサイトミーティングは、建物や陶板絵画のほか、美術館の活動に対して興味を持たれた方が多く、参加者の満足度が非常に高い有意義な会となった。

2）京都大会の評価と課題

京都大会では、これまでにない大規模の発表申込件数があったこと、COMCOLならびにCIMCIMとの合同セッションを実施したことにより、会場の誘導や運営にやや手間取った部分が見られた点があった。ポスターセッションにおいては、通常の研究発表と同じ部屋内で行われていたことから、ポスター設置の準備が行われつつ研究発表が同時に行われていた点は、発表者および参加者からの評判が特に悪く、部屋を追加すべきであったと感じている。また、昼食の配布に関しては、より早い時間からの対応ができなかったのか、或いはどこで受取れるのか解り辛い等の声が聞かれ、誘導やサインの不足など運営に係るマネジメントの指摘・不満が見られた。しかし、京都大会全体のプログラムやソーシャルイベントの内容は総じて良い印象と反応であった。

3）今後の展望

CIDOCでは、CRMをはじめとするドキュメンテーション標準に関する規格の整備を継続すると共に実際の現場に導入するためのサマーワークショップ等の活動を活発化していく。さらに、ミュージアムのデジタル化に対応していくための指針策定や技術対応を今後の取組み課題に掲げ、これらはデジタルストラテジWGや本大会で加わったリンクトアートWG等ですすめられることになった。組織運営の課題では、CIDOC登録者数が増加している事もあり、世界各国からの意見が収集しづらい点が挙げられた。これに対応するため、ヨーロッパや北米、アジア、オセアニアの地域毎に意見を取りまとめて年次大会で議論する案が提示された。加えて、欧州のGDPRの問題によりCIDOCの会員情報が把握できないことが大きな課題として取り上げられ、会員への情報提供や連絡手段の検討が行われた。その結果、ICOM会員に対しては、ICOM会員ページに連絡先情報を掲載するように呼びかけが行われた。ただし、CIDOCに興味を持つICOM非会員に対しては引き続き対応方法を検討していくこととなった。

日本におけるCIDOCの活動に関しては、国際標準規格であるCIDOC CRMの普及が全く進んでいないことから、国内で普及活動を展開していく必要がある。そのためにも、最新バージョンのCIDOC CRMの翻訳や日本の博物館関係者が参照できる技術書の提供や理解を深めるためのワークショップ開催等が求められる。


2


3

CIMCIM
楽器の博物館・コレクション国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

Music Museums and Education
音楽博物館と教育

報告者名：

嶋 和彦（浜松市楽器博物館）

開催日程：

9.2 @稲盛記念会館：
柳川三味線歓迎演奏；研究発表

9.3 @国立京都国際会館：
CIMCIM総会；研究発表

9.4 @株式会社鳥羽屋：
絹紘製造工程見学
@国立京都国際会館：
ICOM-CIDOCと合同セッション
―研究発表；研究発表

9.5 @国立民族学博物館：
オフサイトミーティング
―ICOM-ICMEとの合同セッション
―研究発表、博物館見学

9.6 @浜松市楽器博物館：
自主エクスカーション
―博物館、市内・近郊の楽器製造工場見学

京都大会概要及び所見：

1）内容

今年はCIMCIMメンバーの参加は70人程度、うち発表者は17カ国40人であった。発表者の国別内訳は、イギリス6、ドイツ5、フランス3、スイス1、ノルウェー2、ロシア1、オランダ2、アメリカ6、ナンビア1, ブルキナファソ1、ジンバブエ1、アゼルバイジャン1、イラン1、中国3、台湾2, 日本4である。他にインドネシア、アルゼンチンが参加。

2016年ICOMミラノ大会後のCIMCIM新体制の下、個人会員数は50%アップ、地域もアジアやアフリカに拡大した。欧米主体の楽器学や音楽学に加えて、非西洋楽器の考察、楽器学や音楽学以外からのアプローチも積極的に推奨されてきた。昨年に続きアフリカ、アジア諸国からの参加があり、多様な観点からの発表や他の国際委員会との合同セッションの実現は、その成果である。

今回のテーマMusic Museums and EducationはICOMのテーマMuseums as Cultural Hubsのサブテーマとして位置づけられ、楽器や音楽を、研究者や演奏家等との1対1の関係のみではなく、近年の博物館の社会的役割、とりわけ教育への積極的な関わりや、教育に対して持つ潜在的な力についての様々な事例や研究を取り上げ、音楽や楽器の博物館の今後のあり方を探ろうとするものである。セッションは10のテーマ（CIDOC、ICMEとの合同セッションも含む）で構成され、36の発表がなされた。

2日は、京都にのみ伝承する柳川三味線の演奏で幕開け。日本での開催にふさわしいものとなった。続いてSound Space, Conservation Best Practice, Higher Education and Professional Training, Collection Highlight:East and Westの4テーマで発表されたが、イギリスのヴィクトリア＆アルバート博



1

1. 鳥羽屋での絹紘製作見学
2. 国立民族学博物館でのオフサイトミーティング
3. エクスカーション（浜松市楽器博物館）

物館が数年後にオープンを予定している音響展示や、台湾のCHIMEI博物館が開設したAVによる体感型オーケストラ展示、ジンバブエの教員養成大学でのダンスと音楽を統合した教育実践、ベルリン国立楽器博物館の、日本人物理学者田中正平が1893年にベルリンで製作した純正調オルガンについての報告などが印象的であった。

3日以降は Ancient Traditions, Making and Sustaining Museums and Communities, School Systems and Educational Programs, Education and Exhibitionsをテーマに、少数民族のアイデンティティとしての楽器や音楽、古代音楽と儀式からの歴史の理解、消費社会における楽器の、伝統音楽の現代から未来への伝承等の取り組みが発表され、「楽器・音楽」が、音楽家だけでなく、社会の人々といかに関係するかについての考察が深められた。

4日の午前中は京都に江戸時代から続く絹紘の製造工房である鳥羽屋にて絹紘の製造工程を見学、日本の絹文化の歴史と技術を見ることができた。午後はThe Documentation of Music and Musical InstrumentsをテーマにCIDOCとの合同セッションで、音楽と楽器についての記録と発信の方法について様々な角度から発表された。

5日の国立民族学博物館でのICMEとの合同オフサイトミーティングには、CIMCIMメンバー約40人が参加。Diversity and Universalityのテーマで楽器へのアプローチについて理解を深めた。

6日は希望者による浜松市楽器博物館見学ツアーを実施し27人が参加。博物館見学と、ヤマハ株式会社の企業ミュージアムであるヤマハ・イノヴェーションロードの他、近郊に位置するヤマハ管楽器工場、河合楽器ピアノ工場を見学した。また楽器博物館にて、コレクションである江戸時代の尺八と箏の演奏を披露した。

現代の最先端の楽器作りと製品、江戸時代のスタイルを残す伝世品とその音楽、の対照的な日本文化に触れていただいた。

総じて、従来の西洋音楽と楽器学中心の視点のみならず、非西洋音楽と民族の文化についての視点をCIMCIMメンバーが共有し、また日本の文化も可能な限り味わっていただけた有意義な大会であった。

2）京都大会の評価と課題

CIMCIM理事や参加者からは一様に、多様な観点から数多くの研究発表があり、他国際委員会との合同プログラムを開催でき、これまでの連携や協力もさらに強めることができた。また大会本部による数々の日本文化体験プログラムのみならず、京都に存在する老舗絹紘製作工房の見学や三味線の歓迎演奏などのCIMCIM独自の日本文化プログラムが体験できたことに対して、京都でのICOM世界大会ならではのことで大変素晴らしいものであったとの意見をいただいた。大会の運営もきめ細やかですばらしかった。ランチも美しく美味しかったが、もう少し量が欲しかったとの意見がある。

3）今後の展望

新理事の方針としては、今後とも他の国際委員会との連携や共同プログラムに取り組み、広い分野の博物館との連携を強化して、現代社会の中で音楽と楽器の博物館がなすべきことを探っていきたいとの考えがある。欧米ではすでにその具体的な展開が始まっている。日本の楽器博物館として、最大の課題は、欧米の動向に遅れないようにすることと、日本の楽器博物館がいかに相互連携していくかであるが、なかなか解決策が見えないのが現状であるため、今後ともその糸口を探っていきたい。



2


3

CIMUSET
科学技術の博物館・コレクション国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

Voices of Traditions for a Sustainable Future
持続可能な未来に向けた伝統の声

報告者名：

若林 文高（国立科学博物館）

開催日程：

9.2 @国立京都国際会館：
オープニング、
基調講演「物質文化からものづくり文化へ」、
研究発表（セッションテーマ「博物館の新たな概念と役割」）

9.3 @国立京都国際会館：
研究発表（セッションテーマ「魅惑的な科学博物館をめざして」・「科学技術遺産と持続可能性」・「エコロジーと自然科学の科学コミュニケーション」）

9.4 @稲盛記念会館：
研究発表（セッションテーマ「科学技術遺産と持続可能性」）、
CIMUSET総会、CIMUSETディナー（京都市中心部）

9.5 @名古屋市科学館、トヨタ産業技術記念館：
オフサイトミーティング
―概要説明・質疑応答およびガイドツアー（名古屋市）

京都大会概要及び所見：

1）内容

CIMUSETの今年のテーマは、京都大会のキーワードのひとつである“Sustainable Futures”を受けて“Voices of Traditions for a Sustainable Future”と設定され、4つのセッションテーマ（「博物館の新たな概念と役割」、「魅惑的な科学博物館をめざして」、「科学技術遺産と持続可能性」、「エコロジーと自然科学の科学コミュニケーション」）に分類され、Sustainable Futureに向けた理工系博物館の役割と新たな方向性について3日間にわたって発表・討論が行われた。

発表申込みは基調講演を除いて23カ国から58件の応募があり、発表時間と討論時間を十分に取りたいというCIMUSET理事会の意向により、発表者は各国1件に限り、日本は開催国ということで2件とし、本報告者を含む6名の委員会で審査し、24件の発表が採択された。アジアから7件（うち日本から2件）、ヨーロッパからは11件（内旧東欧圏が5件）、北米2件（内1件は中国との共同発表）、ラテンアメリカ2件、中東2件であった。基調講演は、ドイツからの1件であった。これまでCIMUSETでの発表がほとんどなかったタイ、インド、メキシコやイスラエルからの応募があったのが特徴で、京都への関心が高いことが窺われた。2件の講演キャンセルがあったため実際の一般講演は、22件であった。

発表件数は絞られたが、世界各国から多数の参加があり、日本からの多数の聴講者を含み初日と2日は90人程度で立ち見もあり、最終日でも50名程度の参加者があった。例年のCIMUSET参加者は、前ミラノ大会を含み、多いときで6,70名、最終日には20名以下になることもあり、例年以上に盛況であった。これは、文化庁の補助金と全国科学博物館振興財団の助成金によりすべての研究発表に同時通訳がつけられ、言葉の障壁が除かれたことにもよ



1

1. 会議風景（国立京都国際会館）
2. オフサイトミーティング（トヨタ産業技術記念館）
3. CIMUSETディナー（京都市中心部）

る。用意されたレシーバーが不足することもあった。

3日目の研究発表終了後にCIMUSET総会が開催され、活動報告、昨年度の決算報告、今年度の予定・予算などが報告され、最後に新理事会メンバーの選挙があり、委員長は前ミラノ大会で選出されたモロッコのMr. Dahmali委員長が引き続き選ばれ、新副委員長にドイツのMr. Lüdtke、第2副委員長にMrs.Raoul-Duval（ICOM France委員長）が選ばれるなど新メンバーが選出された。今回は、同国内での移動もあったが、ギリシア、チェコから新たに理事が選ばれたのが特徴である。総会および新理事メンバーによる打合せの後、京都中心部に移動し、CIMUSETディナーが、角倉了以の別邸跡で、その後山縣有朋の別邸になった由緒ある和食レストランで開催された。日本庭園が見渡せる和室で日本料理に舌鼓を打ち、近くにある産業遺産、理工系博物館も紹介し、参加者に好評であった。

4日目のオフサイトミーティングは、大型貸切バス1台で名古屋に行き、午前中に名古屋市科学館、午後にトヨタ産業技術記念館を見学した。当初スタッフを含めて40名ほどの参加を予定していたが、当日参加者も加わり補助椅子も使用して46名で出発した。名古屋で合流した人もいて、参加者は50名を超えた。いずれの館でも特別のプログラムを用意していただき、館の概要説明・質疑応答、館内のガイドツアーを実施した。前日の三重県内の大雨により当初予定していた新名神高速道路が通行止めになり、名古屋着が40分ほど遅れたが、名古屋市科学館で急きょプログラムを編成し直していただき、世界一のプラネタリウムにおけるメンテナンスの裏側の解説や体験コーナーの特別体験などを堪能した。午後のトヨタ産業技術記念館では、副館長お二人による英語のガイドツアーがあり、多数の動態展示を実際に動かしながら詳しい解説があり、参加者の大きな関心を呼んだ。これがきっかけになり、理事会から2020年2月にパリで開催されるCIMUSET－CIMCIMの合同シンポジウムでの講演を依頼された。このオフサイトミーティングは、当初京都市内で実施する計画であったが、2018年のCIMUSET年次大会で、京都市以外での実施を理事会から強く要望され、両館の多大なご協力のもと実施できたもので、結果的に参加者の大きな評価を得て、日本に対する関心を高めるものになった。

2）京都大会の評価と課題

前述のように理事会メンバーの意向により発表件数を23件に限って発表時間と質疑応答の時間を十分にとったため、有意義な討論が行われた。また、前述のように京都大会では例年にない多数の出席者があり、理事会メンバーから高い評価を得た。これは、国内からの聴講者が多かったためで、国内の理工系博物館・科学館のICOMへの関心が高いことが窺われた。京都大会を機に、今後のICOM会員増に向けた継続的活動が必要である。オフサイトミーティングで訪れたトヨタ産業技術記念館での多数の動態展示と技術者OBによる詳しい説明は参加メンバー、特に理事会メンバーから高い関心と評価を得て、今後の経験交流の礎になった。個々に国際委員会はそれぞれで実施している感があり、大会本部との情報共有が不足している面があり、今後の課題であると考える。

3）今後の展望

今回、日本からのCIMUSETへの発表申込みは3件と少なかったが、日本からの聴講者は多数あり、国内からの関心が高いことがわかった。地方公共団体が関係する理工系博物館、科学館ではこうした国際会議での発表・参加は難しい面もあると思うが、今回は、日本博物館協会や全国科学博物館協議会、全国科学館連携協議会などの働きかけや補助などにより、多数の参加があった。京都大会が、ICOMやCIMUSETに関心を持っていただくきっかけになったので、それを是非継続させていきたい。ただし、2020年度のCIMUSETの年次大会はイランのテヘランで開催されることになっており、京都大会でもイランから積極的な参加の呼びかけがあったが、昨今の国際情勢を考えると日本からの参加は難しいのではないかと考えられ、継続性の難しさを感じさせられる。なお、2021年度の開催地は、これまでに応募がなく、現在も募集中である。CIMUSETへの参加館も、欧米の大きな理工系博物館、科学館からの参加が少ないことも懸念事項である。


2


3

CIPEG
エジプト学国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

The Future of Traditions: Paving the Way for Egyptian Collections Tomorrow
伝統の未来：次世代への布石

報告者名：

河合 望（金沢大学）

田澤 恵子（古代オリエント博物館）

開催日程：

9.2 @国立京都国際会館：
研究発表

9.3 @稲盛記念会館：
ICOM-COMCOLと合同セッション（研究発表）

9.4 @国立京都国際会館：
研究発表及びCIPEG総会

9.5 @MIHO MUSEUM及び京都大学：
オフサイトミーティング（エジプトコレクション見学）

9.10 @東京：
ポストカンファレンス（International Symposium: Egyptological Research in Museums and Beyond）

京都大会概要及び所見：

1）内容

今年のCIPEG年次大会では、2日目（9月3日）のCOMCOLとの合同セッションも含めて合計27本の口頭発表がおこなわれた（最初の基調講演やmp4による録画上映も含む）。報告者の内訳は、アラブ首長国連邦から1名、エジプトから9名、フランスから1名、ドイツから4名、イタリアから3名、オランダから1名、南アフリカから3名、イギリスから6名、アメリカから6名、そして日本から8名の計42名である（共同発表者を含む）。開催国とは言え、例年1～2名であった日本人発表者が8名に増えたことは喜ばしいことであり、今後の更なる活動に期待が高まる。また、発表者以外の聴講者も合わせると連日100名を超える参加者があり、100部用意した要旨集は最終日開始時には全て捌けてしまい、最終日のみの参加者には配布できない事態となった。

9月2日と4日は、年次大会テーマThe Future of Traditions: Paving the Way for Egyptian Collections Tomorrowに沿って発表が行われた。2日の前半は、古代エジプト資料の展示方法をめぐる発表があった。3D技術を駆使してより理解度を深める展示に関する報告や、ミュージアムに人を集めるのではなく、ミュージアムが街中に出かけていき、あまりミュージアムに馴染みがない人々にミュージアム資料を鑑賞してもらう「Pop Up Museum」に関する興味深い報告があった。後半は、各ミュージアムの古代エジプトコレクション成立の歴史を追いながら、今後の活動の方向性を示す発表が続いた。

4日は、2日の後半部分の続きで各ミュージアムの古代エジプトコレクションの成立と今後の方向性などが報告された後、エジプト学の一端を担うスーダンの資料に関して、資料の再評価報告や



1

1. 国立京都国際会館での会議風景
2. MIHO MUSEUMでのオフサイトミーティング
3. ポストカンファレンス（東京）

近年開始されたプロジェクトについての報告がなされた。引き続いて、エジプトコレクションを所有するミュージアム同士の協働プロジェクトや、エジプト学専門家を置いていないミュージアムへのエジプト学者による学術協力の事例など、古代エジプト資料をめぐる種々のコラボレーションについて報告がおこなわれた。同国内のミュージアム同士の協力体制はもとより、国をまたいでの協力体制も確立されており、IT技術を駆使した最新の展示方法などと併せ、今後幅広い分野で古代エジプト資料が活用されていくことがうかがえる内容であった。

一方、9月3日のCOMCOLとの合同セッション（Museums As Hubs For Collecting: The Future Of Collecting Traditions）では、資料収集に関わる諸問題や収集された資料と地域社会との関わりについて報告・討議をおこなった。最初に、違法収集や出土地不明資料の問題、文化財の返還と共有というトピックの下、古代エジプト資料を自国（エジプト）の歴史コンテキストの中で検討する試みや、古代エジプト資料略奪対策をめぐるイギリスの事例がCIPEGから報告された。続いて、収集された資料をどのように地域社会と関わらせていくかに焦点を当てた発表がなされた。CIPEGからは、南アフリカとエジプト国内の地方ミュージアムに関して報告があった。最後に、グローバル化が進む現代における収集活動やコレクション活用に関する報告があり、CIPEGからは、古代エジプト資料も有するアメリカの大学美術館の取り組みに焦点を当てながら、大学とミュージアムの関係性の現状をめぐる報告と、古代エジプトの専門家の学芸員がいない日本の国立博物館が所有するエジプトコレクションの整理と活用に向けて古代エジプト専門家との協働が進められている現状と今後の展望が報告された。

9月5日のオフサイトミーティングでは、COMCOLと共に滋賀県甲賀市のMIHO MUSEUM見学を実施した後、CIPEGだけで京都大学総合博物館のエジプトコレクションの見学をおこなった。数は少ないながらも日本にもエジプトコレクションは複数存在しており、それらを海外のメンバーに紹介できたのは、日本のエジプトコレクションの今後の調査・活用に向けて重要な一歩であったと考える。

9月10日には場所を東京に移し、ポストカンファレンス（International Symposium: Egyptological Research in Museums and Beyond）を開催した。全体を文化財保護とミュージアム、フィールド調査とミュージアム、ミュージアム資料と研究、エジプトコレクションの未来の4つのセッションに分け、日本と海外双方の事例を報告し合った。日本でこれだけのエジプト学者を集めた国際シンポジウムは初めてと言っても過言ではなく、日本と海外の双方の関係者間で古代エジプト資料の幅広い活用・研究情報を交換することができたことは、日本が有する古代エジプト資料の今後の活用に更なる発展をもたらすことが明らかである。

2）京都大会の評価と課題

オフサイトミーティングを含めた京都大会及びポストカンファレンスへのCIPEGメンバーの評価は大変高く、理事はもとより、参加したメンバー全員と言っても過言でないほど大勢の方々からお褒めの言葉をいただいた。「京都大会の質の高さは、プラハ大会準備室に大きなプレッシャーとなっているはずだ。」とのお言葉もあった。細かく行き届いたプログラムと運営に、ボランティアのサポートも微に入り際を穿っており、臨機応変に対応してもらえたこともクオリティの高さにつながったと思われる。

3）今後の展望

今回の大会より本報告者の一人田澤が理事となった。欧米、アフリカ、アジアのメンバーが揃ったことで、これまでよりも更に国際的な活動を期待できる。それぞれミュージアム事情の異なる各地域のメンバーが情報交換と情報共有をおこなうことで、古代エジプト資料をめぐる諸問題の解決や活用に向けた新たな展開も見いだせよう。また、京都大会、ポストカンファレンスを通じて、各会員同士のネットワークもかなりの割合で構築された。各メンバー間個別の連携も望まれる他、ミュージアムに配置されたエジプト学者の数が圧倒的に少ない日本において、今後海外からの学術協力も可能になると考えており、そのような点からもCIPEGの活動は更に充実すると思われる。そして、その結果が2017年発刊のCIPEG Journal: Ancient Egyptian & Sudanese Collections and Museumsにて、毎年幅広く公開されることを期待したい。


2


3

COMCOL
コレクション活動に関する国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

Museums as Hubs of Contemporary Collecting: The Future of Collecting and its Traditions

コンテンポラリーコレクティングをつなぐミュージアム ―コレクティングの伝統を未来へ―

報告者名：

堀内 しきぶ（奈良国立博物館）

開催日程：

8.29–31 @奈良：
プレカンファレンス

9.2 @国立京都国際会館：
研究発表

9.3 @稲盛記念会館：
CIPEGと合同セッション―研究発表

9.4 @国立京都国際会館：
CIDOCと合同セッション―研究発表、COMOL総会

9.5 @MIHO MUSEUM、京都国立近代美術館：
オフサイトミーティング
―博物館及び周辺地域のガイドツアー

京都大会概要及び所見：

1）内容

今回の会合は、8月29～31日に奈良で行われたプレカンファレンスの参加者が約20名、9月5日に滋賀と京都で行われたオフサイトミーティングは参加者が約27名であった。9月2日には元COMCOL委員長であるLeontine Meijer-van Mensch氏（Ethnographic collections of Staatlichen Kunstsammlungen Dresden代表）からの基調講演があり、9月2～4日のペーパーセッションでは34の発表があった（ジョイントセッションを行ったCIPEG、CIDOCからの発表を含む）。うち、COMCOLの日本からの発表者は筆者を含め2名であった。その他の国・地域では主に北欧諸国や南アフリカ共和国、また以前にICOM大会が開催されたブラジルなどからの発表があった。聴講者を含む参加人数は、9月2日のCOMCOL単独セッションでは30～40名ほど、そのうち日本人の参加者は5～10名ほどであった。

プレカンファレンスでは、1日目に、奈良国立博物館において松本伸之館長とCOMCOL副委員長のDanielle Kuijten氏（所属：Co-Curator Imagine IC）による基調講演が行われ、夜には奈良国立博物館レストランにおいてウェルカムパーティーが行われた。2日目は根津美術館・白原由起子特別学芸員、奈良国立博物館・野尻忠企画室長の案内で、興福寺国宝館、東大寺大仏殿、東大寺ミュージアム、三月堂を見学した。3日目には白原氏、奈良国立博物館・内藤栄学芸部長の案内で、午前は奈良県郡山市に所在する慈光院を訪問し、住職の法話と喫茶体験、庭園や本堂の拝観を行い、午後は法隆寺を見学した。なおこのプレカンファレンスは、1日目の会場、3日目のチャーターバスの提供、プログラム立案が奈良国立博物館の協力により行われた。



1

1. 8月31日　プレカンファレンス（奈良・慈光院）
2. 9月2日　基調講演
3. 9月5日　オフサイト（滋賀・石山寺）

ペーパーセッションでは、①グローバル化した世界におけるコンテンポラリーコレクティング、②違法な取引と起源に問題のあるものについての収集の方策、③コレクションの返還と共有、④時間的、空間的に遠く離れたコレクションへのコミュニティの関わり、⑤伝統、コレクション、マネジメントシステムとデジタルツール、の5つのテーマについて発表が募集され、「カナダ歴史博物館におけるコンテンポラリーコレクティング：理論と実践の分断をつなぐ」、「コレクションポリシーを作る上での包括的方策」、「世界の文化、民族学―博物館とそのコミュニティの関わり―」、「コレクションをオープンデータとして公開する―その挑戦と可能性」などの発表が行われた。

国際委員会に与えられた時間に比して発表者が多く、発表時間は1人につき10分程度に限られ、そのためディスカッションの時間をとることができなかったケースも多かったが、コーヒーブレイクの時間などを利用して活発に議論を交わす様子が見られた。

オフサイトミーティングでは、午前はCIPEGとともに滋賀県のMIHO MUSEUMを訪問し、午後はCOMCOL単独で石山寺、京都国立近代美術館を訪問した。MIHO MUSEUMでは熊倉功夫館長より館の概要をお話しいただき、閉館期間中にもかかわらず、特別に展示室の見学をさせていただいた。京都国立近代美術館では、牧口千夏主任研究員より展覧会の概要をご紹介いただき、展覧会「ドレス・コード？――着る人たちのゲーム」を観覧した。

2）京都大会の評価と課題

委員長代理であるDanielle Kuijten氏より、前回の年次大会の際に伺っていたいくつかの訪問先希望と「日本の人と交流したい」という意向をもとに、日本側でプレカンファレンスとオフサイトミーテイングの企画立案を行った。

COMCOL単独で開催された9月2日のペーパーセッションでは、日本側受け入れ担当者を除き、聴講した日本人参加者が数名しかなかったのは残念ではあったが、少ないながらも新たに日本からの参加者があったのは幸いであった。聴講した日本人の方に話を聞いてみると、同時通訳がついているかどうかで聴講する委員会を選択したとのことで、日本で開催される国際会議における同時通訳の重要性を感じた。

日本からの一般の参加者は少なかったものの、COMCOLメンバーには、協力を行った奈良国立博物館の職員や、京都大会のボランティアと交流を深めていただくことができた。

委員長であったAsa氏のご都合で、ICOM京都大会の5ヶ月ほど前にDanielle Kuijten氏が急遽委員長代理を務めることになり、このころから京都大会の準備が急ピッチで進むこととなった。Kuijten氏からは受入側の協力なしでは今回のプログラムを成功させることはできなかった、とコメントをいただいた。

3）今後の展望

9月4日に開催されたCOMOL総会では、下記のメンバーが理事として選出された。委員長：Danielle Kuijten氏（オランダ、Co-curator Imagine IC）、総務担当理事：Alexandra Bounia氏（カタール、Degree Director for the MA Course in Museum and Gallery Practice in UCL）、財務担当理事：Leen Beyers氏、その他の理事：Riitta Kela（フィンランド）、Gloriana Amador（コスタリカ）、Ying-Ying Lai（台湾）、連携理事（Affiliated Board Member）：Alina Gromova（デンマーク）。

COMCOLでは引き続きSharing Collections、Contemporary collecting、Resources、Collections mobility、Newsletterの5つのプロジェクトグループによる活動が行われている（http://network.icom.museum/comcol/who-we-are/project-groups/L/10/ 2019年11月閲覧）。

COMCOLの活動は上記Newletterグループが発行するニュースレター、Facebook（https://www.facebook.com/comcol.icom/ 2019年11月閲覧）で確認できる。次回の年次大会は、ロシア連邦・タタールスタン共和国カザンにおいて2020年9月に開催される。

現在、日本からアクティブに参加している会員は少ないが、関心がある方は委員長までお気軽にお問い合わせいただければ幸いである。


2


3

COSTUME
衣装の博物館・コレクション国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

Costume as a Cultural Hub: The Future of Tradition
文化装置としてのコスチューム：伝統を未来へ繋ぐ

報告者名：

本橋 弥生（国立新美術館）

開催日程：

9.1 @京都国立近代美術館：
オープニング・レセプション、
「ドレス・コード」展内覧会

9.2 @国立京都国際会館：
研究発表

9.3 @京都国立近代美術館：
非会員も聴講可能なノンメンバーズ・デイ。日本における服飾所蔵美術館、博物館の紹介発表および研究発表

9.4 @稲盛記念会館：
ICOMAMとの合同セッション―研究発表

9.5 @京都服飾文化研究財団（KCI）、千總：
オフサイトミーティング

9.6 @紺九（藍染工房）、浅井能楽資料館：
琵琶湖エクスカーション（COSTUME独自企画）

9.9–10 @東京：
ポストカンファレンスツアー

京都大会概要及び所見：

1）内容

今年のCOSTUMEには、参加者は欧米からの参加者を中心に約60人の参加者があった。プログラムでは、36の発表者のうち、ヨーロッパからの発表者は19人、北米3人、ラテンアメリカ1人、アフリカ1人、中東3人、アジア・太平洋から9人（うち日本から4人）、であった。ただし、イランとカメルーンの参加者についてはビザがおりず、委員長が発表原稿を代読する形となった。

COSTUMEでは、希望者が全員発表できるようにこれまでどうにかプログラムを調整してきたが、今回はICOM全体の大会ということもあり研究発表の時間をどうやりくりしても発表できない人が出てきてしまった。それだけ京都の人気が高かったということであろう。

今回の研究発表は大きく「コレクションおよび展示方法について」「日本のファッション美術館の活動について」「西洋の東洋へのまなざし」「伝統衣装、現代の衣装、舞台衣装」「ファッションと軍隊（ICOMAMとの共催）」というテーマに分類された。

ICOMは従来、欧米圏からの参加者は多いが、アジアなかでも日本からの参加者は皆無に近い状態であったため、9月3日のペーパーセッションは開催場所をICOM京都大会参加費を払っていない人でも聴講可能な京都国立近代美術館とし、非会員の日本人研究者や服飾文化に興味のある一般に門戸を開いた。同セッションには100人の参加者があり（会場の広さから100人が上限であった）、非会員からは大変興味深い研究発表を聞くことができたと大好評であった。日本におけるICOM-COSTUMEの認知度を上げる大変良い機会となった。そして何より、そのセッションのテーマを「西洋の東洋へのまなざし」としたことは大変良かった。各国



1

1. 国立京都国際会館での会議風景
2. 千總でのオフサイトミーティングと紺九へのエクスカーション
3. ポスト・カンファレンスツアー（東京）

の視点からによる「ジャポニスム」についての研究発表が多くなされ、これまでの通説とは異なる新しい研究発表を聞くことができたことは大変有意義であった。

9月5日のオフサイトミーティングでは、午前中に京都服飾文化研究財団（KCI）の収蔵庫を視察し、世界有数の素晴らしい西洋の服飾コレクションの一部を垣間見ることができた。反対に、午後には京都の伝統的な友禅の老舗、千總を訪れ、友禅の400年におよぶ歴史に関するレクチャーや職人によるデモンストレーション、名品の展示というプログラムにし、日本の伝統的な着物について知り、堪能する内容とした。

9月6日にはCOSTUME独自のエクスカーションを企画し、午前中には滋賀県にある紺九藍染工房を視察し日本の伝統的な藍染の技法について職人自ら説明してもらった。午後は琵琶湖の側にある浅井能楽資料館を訪れ、能装束の歴史に関するレクチャーを受けたあと、作品の一点一点を間近で見ることができた。京都近郊、滋賀の伝統的な装い文化の歴史について、深く知ることのできる大変貴重なエクスカーションとなり、別料金を徴収したものの、参加者からも大好評であった。

京都でのプログラムが終わった後、約20名の各国の参加者が東京に移動し、東京での2日間にわたるポストカンファレンスツアーも開催した。本ツアーでは、東京における日本の近現代ファッションを知ることをテーマとし、文化学園大学大学院の協力を得て開催した。1日目は、文化学園大学にて午前中は「Art of Wearing」というテーマで会員・非会員による研究発表を行った。午後には文化学園服飾博物館にて開催されていた「世界の絣」展を見学し、世界のトップファッションスクールの一つにノミネートされた文化学園の図書室、リソースセンターなどを視察。さらにはイギリス人の着物研究者による浴衣の着付け教室を行い、座学、見学、体験という多用なアプローチによるプログラムとした。2日目は午前中に渋谷区立松濤美術館にて沖縄の染色や着物をテーマにした「美ら島からの染めと織―色と文様のマジック」展について担当学芸員よりレクチャーを受けたあと、自由観覧をし、午後には文化学園大学大学院の留学生の案内により、「東京シック」（銀座方面）と「東京ポップ」（原宿方面）の2つのテーマに分けたウォーキング・ツアーを開催。夕方には三菱一号館美術館にて合流し、「マリアノ・フォルチュニ―織りなすデザイン展」の担当学芸員よりレクチャーを受けたあと、自由観覧。最後にはフェアウェルディナーを開催した。全員で移動した日曜日から月曜日の朝にかけては大型の台風が直撃し、そういった意味でも大変密度の濃い充実したポストカンファレンスツアーとなった。

京都大会、ポストカンファレンスツアー共に、日本ならでは、そして京都と東京ならではのプログラムを企画・運営することができた。世界中からやってきた研究者それぞれにとって、日本の衣文化について深く知り、体験する貴重な会合となったのはもちろんだが、それだけでなく、各自の研究について別の視点から見直す機会になったのではないかと思われる。

2）京都大会の評価と課題

オフサイトミーティングやポストカンファレンスツアーを含め、国や地域を超えて情報交換を行い、新たなネットワークを築くことができた。特に今回は「ノンメンバーズ・デー」を設けられたことは特筆すべき点である。また、多数の参加者から、日本ならではの興味深い経験ができるような内容のオフサイトミーティングやエクスカーションが企画され、かつ、会議運営やロジなどが円滑に進み、至る所でボランティアのサポートがあり、スムーズに一週間の会議に参加できた、これまでにはなかったICOM大会を経験できた、など肯定的なコメントをいただいた。

3）今後の展望

本京都大会で委員長を含む理事が新しく入れ替わった。2020年COSTUME年次大会は、新委員長のホームグラウンドであるパリ、ヴェルサイユにて開催されることとなった。ヨーロッパ出身の会員が大多数を占めることから、3年に1回はヨーロッパでの開催というルーティンであるが、今後も引き続き、これまで参加のなかった国や地域の会員を増やし、ネットワークを構築していくことを目標としている。特に発展途上国からの参加希望者については、COSTUMEがプールしているお金を資金に補助金を支給している。この活動をさらに広げ、世界各地にいる服飾文化研究者との交流をCOSTUMEでは目指している。私も経済的には大きな負担ではあるが、国内の服飾文化研究者を勧誘しながら、今後もできるだけ、数少ない日本人会員の一人として参加していきたいと思う。



2



3

DEMHIST
歴史的建築物の博物館国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

House Museums as Cultural Hubs — The future of tradition in a global context
文化をつなぐハウスミュージアム―グローバルな文脈に則した伝統の未来

報告者名：
中谷 至宏（二条城）

開催日程：

8.31 @京都工芸繊維大学：
理事会議

9.1 @大山崎町・京都市：
プレカンファレンスツアー

9.2 @稲盛記念会館：
セッション、ライトニングトーク―研究発表

9.3 @国立京都国際会館：
CAMOCと合同セッション
―研究発表、DEMHIST総会

9.4 @国立京都国際会館：
ICOMオランダ、ICOM日本、
EXARCと合同セッション―研究発表

9.5 @二条城：
ICAMTと合同オフサイトミーティング、
DEMHISTオフサイトミーティング―報告・発表および
収蔵施設、歴史的邸宅のガイドツアー

京都大会概要及び所見：

1）内容

今回の大会においてDEMHISTは、CAMOC、ICOMオランダ、ICAMTとの合同セッションに取り組んだため、DEMHISTとしての研究発表は16件（うち2件はキャンセル）、ジョイントセッションにおける報告・発表3件に留まった。発表・報告者は、アジア8人（うち日本6人）、ラテンアメリカ2名、中東1名、アフリカ1名、北米2名、ヨーロッパ3名であった。

DEMHISTは「文化をつなぐハウスミュージアム―グローバルな文脈に則した伝統の未来」を総合テーマとして、ハウスミュージアムを未来に継承するために、「伝統」が持つ国際主義と国内主義、グローバルとローカルの対立項を如何に調停するかの課題を議論すべく発表を募った。9月2日の単独のセッションでは、「過去の継承と未来の創造」をテーマとして、この課題へのハウスミュージアム固有の取り組みとして、「地域社会に対する役割」をサブテーマとした。採択された発表には、ハウスミュージアムにとって、「マイクロ・ナラティブ」の重要性を提示するものが多くあり、個別の邸宅とその地域社会に固有な小さな物語、小さな歴史を如何に紡ぎ出し、地域と共有することが「伝統」の共有を促進し、未来への継承に繋がるかが強調された。事例は中国、カナダ、グァテマラ、イスラエルと多様であったが、人、モノの広範な交流としてのグローバル化ではなく、問題意識の広範な共有としてのグローバル化の重要性が確認できた。

9月3日には、「都市博物館とハウスミュージアム：博物館の定義の見直し」をテーマとして、CAMOCとの合同セッションを開催した。CAMOCの尽力により江戸東京博物館の協力を得て日本語との同時通訳が実現し、日本人大会参加者の聴講を促すこと



1

1. プレカンファレンスツアー@聴竹居
2. 稲盛記念会館での会議風景
3. オフサイトミーティング@二条城

ができた。ハウスミュージアムの在り方に関して都市との関係というテーマを設定できたことにより、都市開発によって変貌する生活と風景に対して、ハウスミュージアムの存在意義と未来に向けての可能性を議論する場が生まれた。ここでも社会との連携可能性において、地域の歴史的「マイクロ・ナラティブ」、都市変貌の中で生まれる新たな「ナラティブ」の重要性が指摘された。ICOMオランダの呼びかけで実現した、DEMHIST、EXARC（国際考古学野外博物館・実験考古学組織）、ICOM日本による合同セッションは9月4日に開催され、「協働が生み出す大きな力」をテーマに、17世紀以来の日蘭の交流を基盤として、文化交流の跡付けと未来への架橋におけるミュージアムの持つ意義が提示された。殊にDEMHISTにとっては、長崎の「出島」の復元プロジェクトの紹介は、建造物の復元に留まらず、室内空間の再構成に取り組む日本における一つのハウスミュージアムの創生として、重要な事案紹介であった。

DEMHISTでは、プレカンファレンスツアーとして、9月1日に、近代的伝統建築である「聴竹居」と江戸期の町屋「杉本家住宅」を訪問し、20名の参加者を得て、伝統的住居建築の近世と近代の両様を体感した。「聴竹居」では近隣住民が関わる「聴竹居倶楽部」のスタッフ、「杉本家住宅」では、居住者の杉本氏から丁寧な解説を受け、参加者からはハウスミュージアムの保存と継承において、対象に対する「愛情」の重要性を痛感したという声を聴くことができた。9月5日のオフサイトミーティングは、午前中をICAMTとの合同セッションとして、二条城において歴史的空間の保存と継承のための日本の取り組みとして、絵画のオリジナルとレプリカによる補完とそのための収蔵施設に関する事例報告と、プレカンファレンスツアーと連動して、「杉本家住宅」の歴史的防災システムの紹介が行われた。合計70名の参加者を得て、御殿建築と「障壁画展示収蔵館」のガイドツアーを行い、展示と収蔵を一体化したユニークなシステムに両委員会の参加者から高い関心が寄せられた。午後は「駒井邸」「喜多邸」という和洋の近代邸宅を見学し、建築に加え、管理NPOのスタッフから個人住居の保存継承に関する日本の取り組みが紹介され、課題の共有が図られた。最後に「無鄰菴」を訪れ、管理者植彌加藤造園の協力により、庭園と建築のガイドツアーに加え、スタッフのDEMHIST会員から文化財の社会化にむけた実践の紹介がなされ、締めくくりとして歴史的建造物内での交流会を実施した。

2）京都大会の評価と課題

今回の大会でDEMHISTは当初他の4つの委員会との合同セッションを計画し、うち一つはスケジュール上実施を断念したが、3つの委員会との合同会議を実施し、多様な観点からハウスミュージアムの伝統と未来を議論する場を得たことは意義深いものがあったが、委員会総会と発表の時間が重複することも生じ、限られた大会期間の中で合同会議の持ち方に課題を残すこととなった。

京都大会全体の運営に関しては、会場の国際会議場の建築の素晴らしさをはじめとして満足度が高く、またプレカンファレンスツアーやオフサイト・ミーティングの企画と内容への評価は高く、訪問先の個々の邸宅管理者の献身的な協力やボランティアの活躍に、多くの会員から感謝の言葉を頂いた。

3）今後の展望

日本では、作品や資料のコレクションの収蔵をミュージアムの条件とみなす傾向が強く、建築や歴史的空間自体がミュージアムと位置付けられることが少ないため、DEMHISTへの組織会員は皆無であった。今回の大会を機に、邸宅管理者と会員との交流を通して海外でのハウスミュージアムという在り方の認識を広めることができた意義は大きい。今後もさらに日本の歴史的建造物管理者にハウスミュージアムとしての認識が広まり、ICOMへの登録につながることを期待したい。DEMHISTは今年度ようやく未だ不十分ではあるがホームページを更新し、またフェイスブック、ツイッターでの広報も強化した。2020年10月にオランダで「持続可能性」をテーマとした年次大会を開催する予定であり、是非次なる拡大の契機としたい。

https://www.facebook.com/Icom.Demhist/
https://twitter.com/icomdemhist


2


3

GLASS
ガラスの博物館・コレクション国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

Glass Museums as Cultural Hubs and Updating on Glass
文化をつなぐガラスの美術館・博物館およびガラス造形の現在

報告者名：

土田 ルリ子（サントリー美術館）

開催日程：

9.2 @稲盛記念会館：
GLASSセッション・研究発表

9.3 @MIHO MUSEUM見学ツアー

9.4 @国立京都国際会館：
ICDAD, ICFAと合同セッション・研究発表

9.5–6 富山・金沢見学ツアー
（オフサイトミーティング&エクスカーション）
1日目：富山ガラス工房、富山ガラス造形研究所、富山市ガラス美術館見学
GLASS総会
2日目：金沢卯辰山工芸工房、石川県立美術館見学

9.8 @東京・サントリー美術館：
ポストカンファレンスツアー

京都大会概要及び所見：

1）内容

今年の大会は、ミラノ大会より6名多い、参加者40名、内訳は以下の通りである。

国名	人数	国名	人数	国名	人数
イタリア	6	チェコ	2	デンマーク	2
ドイツ	5	スロバキア	2	アメリカ	2
ポルトガル	4	ルーマニア	2	台湾	1
スペイン	2	オランダ	2	日本	10

初日のGLASS単独のセッションでは、ヨーロッパからの発表者9名、台湾1名、日本2名、計12名が発表した。GLASSは毎年の年次大会で、個々人の研究成果に加え、各国でのガラス美術館の発展などを発表しあってきたが、今回は京都大会全体のテーマに合わせ、過去から未来へと続く各国でのガラス美術館の役割についても意見が交わされた。日本人の参加人数に比べて発表者の割合が少ないのは、開催地の言語を使っていいという原則があるにもかかわらず、すべてのセッションにおいて同時通訳器が用意されなかったことが大きな要因であろう。

海外からの参加者のほぼ9割が初来日とのことで、プログラム作成の際、発表はもちろんだが、より多くの秀逸なガラスコレクションを見学する機会を増やすことに務めた。9月3日には、京都周辺で素晴らしいガラスコレクションを持つMIHO MUSEUMに専用バスで出かけた。ガラスを含む古代美術の優品と、芸術性豊かな建築と景観に、一同目を奪われた。

9月4日には、The Future of Tradition in the Arts, East and West（温故知新―東西の美術と工芸）と題して、ICDAD、ICFAとの合



1

1. 国際会館での合同セッション
2. 富山ガラス工房でのデモ
3. 富山市ガラス美術館見学

同セッションが行われた。発表者は総勢16組、うちICDADが6組、ICFAが3組、GLASSが4組、不明が3組であった。東西の美意識が融合された作品の紹介や、互いの交流を指し示す装飾工芸品、また海外で活躍する日本人作家の日本的であり、ヨーロッパ的な創作などが発表された。どの国際委員会に属していても、非常に興味深い内容ばかりで質疑応答も多く、予定時間を一時間以上延長して終了した。

残念ながら京都周辺にはガラスのコレクションが少ないため本来1日ずつのオフサイトミーティングとエクスカーションとを併せ、9月5、6日とで一泊の富山・金沢見学ツアーを開催した（専用バス使用）。一日目は30年来「ガラスの街・とやま」を掲げ、ガラスの教育機関、創作を体験できる工房、そして鑑賞の場である美術館の3本柱を持つ富山市を訪ねた。まず富山ガラス造形研究所に向かい、ガラスの実践的な創作教育の場をご案内いただいた後、工房に移動し、指導者によるガラス創作のデモンストレーションを拝見した。物作りの現場のエキサイティングな瞬間を片時も見逃さないようにと、見学者も固唾を呑んで見守っていた。その後2015年に開館した日本で唯一のガラス専門美術館である富山市ガラス美術館を訪れ、デイル・チフーリ作「Glass Art Garden」に始まり、「マルタ・クロノフスカ」展、「ルネ・ラリック」展、コレクション展と、世界各国の近現代ガラスを堪能した。一旦会議室をお借りしてGLASS総会を開催し、年報と理事選を行った後、富山市のご協力で盛大なるレセプションパーティが開催された。

二日目は、日本の伝統工芸で名高い金沢を訪れた。まず漆工・陶磁器・染織・ガラスの専門教育機関である金沢卯辰山工芸工房にて、技術指導者のご案内で創作の場を見学し、物静かに制作に従事する研修生の姿を見ながら、工芸の街金沢についてや、指導カリキュラムなどについて説明を受けた。やはり物作りの場では活発な質疑応答が飛び交い、ガラスばかりでなく、日本の伝統工芸全般にも関心を深めることが出来た。ツアーの最後は石川県立美術館を訪れ、加賀藩と工芸の密接な関係をご説明いただいた後、日本工芸の優品を見学した。

GLASS全体としてのプログラムは6日までだったが、希望者にはポストカンファレンスとして、9月8日、東京のサントリー美術館の収蔵庫にて、ガラスコレクションの逸品を拝見していただく機会を設けた。大会開催間際での募集であったため15名と少数ではあったが、サントリー美術館を紹介する機会として、さらなる国際的なネットワーク作りの構築のチャンスとしても有効であった。

2）京都大会の評価と課題

京都大会の内容については、多くのメンバーから非常によく構成され、充実したものだったとの感想を頂戴した。大会自体はもちろんだが、日本人の優しさ、京都そのものの魅力にも胸打たれたようであった。また、今回GLASSへ直接サントリーホールディングスから50万円の寄付をいただいたが、これなくして充実した年次大会の成功はなかったと、多くのメンバーから感謝の意が述べられた。

ただ会場の案内がやや複雑であったこと、最後のICOM総会が非常に延長されたことについては、閉口したとの意見もあった。個人的には、派遣されたボランティアと事前打ち合わせが出来なかったので、遠方から来ていただいた方などもいらしたが、上手く機能していただけなかったのではと危惧している。

3）今後の展望

前回のミラノ大会から3年間、年次大会にも参加する中で、ガラス研究者でさえ、日本のガラスやガラス関連機関についてご存知いただけていないことを痛感してきた。今回の京都大会は、そうした状況にあって、一挙にガラスに関する国際的なネットワークの構築を推し進める絶好のチャンスであった。これに成功できたこと、それこそが今回の大会の一番の成果であった。

日本と異なり、ヨーロッパからの参加者のおよそ7割は近現代ガラスの専門家たちであったため、特に富山でのネットワークの発展は目まぐるしいものがあった。すでに今後の展覧会での協力体制や、企画展の巡回の話などが始まっており、日本のガラス研究の活性化に繋がると期待したい。

ただ今回、日本のガラス研究者や教育者等が加盟する唯一の学会である日本ガラス工芸協会からの参加者は、4名に留まった。本学会は50年来、活発な活動実績があり、私自身も京都大会への参加を重ね重ね促したが、言語の壁を理由に、二の足を踏まれる方が多かった。今後、ガラス工芸協会との連携も併せて、より幅広いガラス研究者のコネクションを広げていきたい。


2


3

ICAMT
建築・博物館技術国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

Museums as Cultural Hubs — Museum architecture, techniques, storage facilities, renovation and exhibition space
文化をつなぐミュージアム―建築技術・収蔵・リノベーション・展示空間

報告者名：
大原 一興（横浜国立大学・日本建築学会文化施設小委員会ミュージアムWG）

開催日程：

9.2 @国立京都国際会館：
ICAMT基調講演と研究発表

9.3 @国立京都国際会館：
ICOM-CC, ICMSと合同セッション―研究発表

9.4 @稲盛記念会館：
基調講演と研究発表、ワークショップ

9.5 @二条城二の丸御殿および京都市京セラ美術館：
オフサイトミーティング―研究発表、展示・収蔵空間見学およびハードハットツアー

9.6 @神戸（竹中大工道具館及び兵庫県立美術館）：
エクスカーション

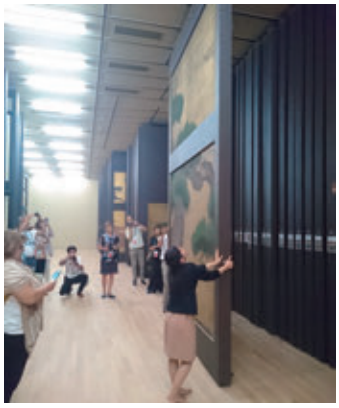
京都大会概要及び所見：

1）内容

今年の会議の参加者は、合同セッションなどもあり日によってまちまちであったが、会場では60～100人程度の全世界からの参加者があった。実は、ちょうど時期を同じくして日本建築学会大会が金沢で開催されており、中には日程を限って移動し両方に参加した者もあったが、全体としては日本人参加者はあまり多くなかった。研究発表数は、合同セッションの他の委員会からの発表を含むと26題、うちICAMTからは20題が発表された。発表者は欧州10名、北米1名、ラテンアメリカ3名、アジアから6名（うち日本から3名）であった。

9月2日は全体会で、はじめにICAMTのこれまで6年間（2期）の活動の振り返りをおこない、とくに博物館技術についてのワークショップをこの2年は毎年行ってきた点など、最近の活動内容についての参加会員の理解と協力を呼びかけた。セッションの最初には基調講演で、日本の博物館建築の概観を、日本という気候風土の特色、デザインの動向、博物館のプログラムの世代的発展との対応など多面的に紹介された。つづいて、研究発表が続き、最近の動向に関する様々な課題が提示された。例えば、市の都市計画との関係における文化プロジェクト、照明技術の現代的展開、休息などの座り空間、最新技術による展示手法、村全体の保全との関係性、ビジターとのコミュニケーション技術など、である。なお、9月1日および2日に二度の理事会を開き、理事の改選と今後の活動計画について長時間議論した。

9月3日は、収蔵空間に関しての最新動向を考えるICOM-CC、ICMSとの合同セッションで、「文化財の保存の未来に向けて」と題して行われた。ICAMT委員長がモデレータとなり、保存のた



1

1. 二条城障壁画収蔵庫
2. 京都市京セラ美術館リノベーション現場見学
3. エクスカーション兵庫県立美術館

めの収蔵庫の技術や考え方、近年の実例などが各国から紹介された。ICAMTからはオランダから最新実例における空調や環境管理の具体的な建築技術が紹介された。各国によって気候条件の違いや文化財の種類の違い、また一カ所の大規模保存環境と分散型の保存など、いくつかのバリエーションが確認され、国と地域を超えて共通点と特異点について知識と議論が深まった。

9月4日は、会場を稲森記念会館に移動し、やや小規模の会場の条件を活かしワークショップなどをおこなった。2016年以来のミラノにおける討論とその後のワークショップ開催についての振り返りが報告され、その後、ダイバーシティを尊重する博物館のあり方についてのワークショップをおこない、議論を活性化した。さらに、研究発表を続け、アジア、チェコ、ブラジル、オランダ、ドイツ、韓国、台湾のそれぞれの保存と展示空間に関しての報告がなされた。

9月5日はオフサイトミーティングの日で、午前中はDEMHISTとの合同セッションとして、二条城二の丸御殿において、3名の日本からの発表（うち1名はICAMTから建築家による報告）がおこなわれた後、二の丸御殿の現実建築空間における障壁画の暴露環境下のレプリカ展示を観覧し、収蔵展示施設で保護下の実物を観覧、さらに収蔵庫空間を見学するという、独自の文化財保護と建築化された展示環境との関係性に関する課題を考察した。その午後には、ICAMT単独の研究会として京都市京セラ美術館の現在のリノベーションの計画の考え方と実際の工事中の空間を見学した。歴史的建造物の保護と観覧動線の新たな設置など、リノベーションの新しい手法を見ることができた。参加者は、その後夕方の岡崎地域のイベントにひきつづき参加した。

9月6日はICAMT独自でエクスカーションを企画し、バスをチャーターし、神戸の竹中大工道具館と兵庫県立美術館を訪ねた。いずれも、専門的な視点からの解説が十分行われ、日本の伝統的な建築技術と近年の建築デザイン動向に関して理解が深まった。京都に戻った後の、恒例のICAMT dinnerも好評であった。

2）京都大会の評価と課題

大会会場では混雑と入場制限などで戸惑いもあったが、セッションの運営に関しては概ね満足の得られる結果であった。何よりも博物館建築の発展と評価に関しては、実態を視察することは欠かせないため、京都ではオフサイトミーティングで文化財保護環境と展示環境の関係を実体験し、リノベーションの現場をつぶさに見て、さらに建築の専門にとって興味深い展示内容の博物館を神戸にエクスカーションとして見に行ったこと、また建築デザインの日本を象徴する安藤忠雄作品を事務所スタッフの案内で見学したことは、高く評価された。独自企画での視察の対象選びについては、参加者から幾度となく感謝されたことは企画者として何よりの喜びである。一方、課題としては、今回はとくに現地見学先での通訳費用が多額の出費となった。バス代に加えて大きな負担であった。またセッションについては、多数のペーパーの応募に応えきれず、限られた時間内に発表題数を制限せざるを得ず、結局3分の1程度に絞った点は心残りであり、聞きたい発表内容も多かったがやむを得ず絞り込んだ。今後は、発表、交流の場を別途設けていくことが求められ、年次大会以外にもワークショップなどの機会を積極的に増やしていくことが必要と思われる。

3）今後の展望

ICAMTの活動としては、参加者の発表の場の確保、交流の機会の拡大、新たな技術の獲得などから、年次大会以外にワークショップを開催することを定着させ、次年度もブラジル、イタリアで開催の計画をたてている。また次年度の年次大会は、台湾、フランスを候補とし検討を進めている。アジアでの開催時には日本にも再び協力が強く要請されることとなる。日本の博物館・美術館の多くは改築の時期に来ている。海外の新築・改築の好事例が次々と実現していることから、リノベーションのプロセスや建築技術者やシノグラファー等との協働をより良い形で進めていくことは、博物館関係者全体の課題と言えよう。もちろんICAMTは建築専門家だけのコミュニティではない。学芸員はじめICOM会員で施設、建築、街並み保存、展示技術など空間や環境に何らかの関心を持つ人たちの幅広い参加を募りたい。


2


3

ICDAD
装飾美術とデザインの博物館・コレクション国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

The Future of Traditions in the Arts, East and West
東西の美術工芸における温故知新

報告者名：

リンネ マリサ（京都国立博物館）

開催日程：

9.2 @国立京都国際会館：
ICOM-ICDADセッション―研究発表；ICDAD総会

9.3 @稲盛記念会館：
ICOM-ICDADセッション―研究発表

9.4 @国立京都国際会館：
ICOM-ICDAD・ICFA・GLASS合同セッション
―研究発表

9.5 @オフサイトミーティング（視察）：
川島織物文化館、匠弘堂（宮大工）、
みやこめっせ「くらしの文化×知恵産業展」（伝統工芸実演）、
南禅寺順正（昼食）、清水三年坂美術館、京都陶磁器会館、
河井寛次郎の家、五龍閣竹久夢二カフェ（情報交換会）

京都大会概要及び所見：

1）内容

ICDADとは、工芸（装飾美術・応用美術）とデザインの博物館・コレクションのための国際委員会で、メンバーは、主に総合美術館、工芸やデザイン美術館、城などの歴史建造物で保管される工芸とデザインコレクションの担当学芸員や研究者で構成されている。ICDADの起源は、1946年に設立されたICOMの第5委員会であるICOM International Committee for Museums of Art and Applied Art（美術館と応用芸術国際委員会）にまで遡り、その後ICAA（International Committee for Museums and Collections of Applied Art, 応用芸術の美術館とコレクション国際委員会）と名前が変更された。ICAAからICDADへの名前の変更は、2000年にICOM執行役員会で承認された。

委員会は、歴史的なインテリア、工芸・装飾美術・応用美術コレクション、近現代デザイン、保存と解釈、技術や技法、また工芸とデザインに関連する研究や出版の新しい方向性に関心を持っている。各国で行われる年次会議では、テーマに沿った発表などを通じて、学術交流や情報交換を行う。

日本で初めて行われたICOM2019京都大会では、ICDAD会員のため、2日間（9月2日、3日）の個別のセッション、1日間（9月4日）のICFAとGLASSとの共同セッション、そして1日間（9月5日）のオフサイトミーテイングが開催された。

テーマは、ICOM京都2019の公式テーマの一部「The Future of Tradition」に倣って、「The Future of Traditions in the Arts, East and West（東西の美術工芸における温故知新）」とされ、特に東洋・アジア美術工芸における伝統と創造性についての発表が多かった。特に4日の合同セッションの幅が広く、美術工芸の学芸員及



1

1. 国立京都国際会館での会議風景
2. 京都北山にある匠弘堂での実演
3. 清水五龍閣での情報交換会

び美術史などの研究者により「美術館におけるアジアからの収蔵品」に総合的に焦点を当てることができた。

45人の発表者は、ヨーロッパおよびコーカサス20人、南米1人、オセアニア1人、東アジア16人、北米7人が発表した（うち5人が代理者による発表、うち日本人12人）。なお、予定されていた3人（南アジア・東南アジア・ヨーロッパ）の発表は都合上、キャンセルされた。

セッションでの発表は、工芸に見る異文化の影響、ジャポニズムやシノワズリ、アジアに影響された、あるいはアジアで制作された陶磁・漆工・染織・調度、西洋の博物館におけるアジア美術工芸の展示方法等、さまざまなトピックが取り上げられた。特に注目されるのは大阪市立東洋陶磁美術館の出川哲朗館長による世界初発表であった。徳川家伝来の宋代の窯変天目茶碗の発見についての発表は、全国放送の番組のためNHKが取材にきていた。

9月5日のオフサイトミーティング日には、43名のICDAD会員やボランティアが大型バスで京都の工芸美術館や伝統工芸などの職人の工房などを訪問した。午前は川島織物文化館と工場で明治期に世界万博のため、海外に渡った染織品や綴れ織りの名品とその制作工程について館長と学芸員に説明していただき、同じく京都の北山にある宮大工の匠弘堂の工房では、木材の取り方、社寺建築の基本、鉋の使い方の実演を含めて案内をいただいた。次はみやこめっせで「くらしの文化×知恵産業展」において、40人の伝統工芸職人の実演を見学した。江戸後期に建てられた南禅寺順正で湯豆腐の昼食をとってから、清水三年坂美術館で明治工芸品を館長と学芸員に見せていただき、京都陶磁器会館で現代京焼を見学し、河井寛次郎の家で民芸運動について学芸員に説明していただいた。最後は、1923年築の洋館である清水五龍閣の竹久夢二カフェにて、スポンサーの陶磁器会館の役員を交え、情報交換会を行った。

2）京都大会の評価と課題

ICOM京都大会のICDAD会議では、3日連続でセッション会場がほぼ満室となり、多くの参加者が「今までで一番良かった」と評価してくださった。特にオフサイトミーティングが好評で、普段は通いにくい、入りにくい所が多く、スペシャル感があったようだ。セッションのテーマをアジア美術工芸に絞ったことにより、日本開催に適した関連性のあるテーマが、初参加者を含めて、欧米および日本・中国などからのアジア美術専門家によって発表された。課題として、ICDADの応募者だけでも70人ほどと、普段よりも多かったため、発表時間を15分間から10分間に絞ることになった。しかし、地理的多様性を重視したラインアップにし、事前連絡や途中のベルなどでのタイムキーピングによりおよそ時間通りに進めることができた。大きな課題としては、委員会からオフサイトミーティングの予算が提供されていなかったため、窓口担当者が自らファンドレイジングせざるを得ない厳しい状況であったことだ。結果として、ICOM京都大会準備室を通じて京都商工会議所に大型バス料金を提供していただき、また窓口担当者が自ら助成金を申請し、京都陶磁器会館に情報交換会のレセプション代を提供していただいた。また、発表者に情報提供の連絡が済んだ時点で、大会アプリのための情報の要求があったため、その後の作業にかなりの時間を費やすこととなった。

3）今後の展望

ICDAD総会では、2020年の年次大会がポルトガルのリスボン市で開催されることが発表された。また、2019年の11月にEメールによる委員長・理事選挙に関する説明があった。今後の課題としては、アジア人の参加者の増加方法がある。ICOM Japanとして戦略的に、また、今回参加した方などが今後も参加したくなるように、個人的にICDADの情報提供をするなど、広報活動に努める必要性を感じる。



2



3

ICEE
展示・交流国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

Building Resilience and Reinforcing Relevance in Exhibition Exchange
巡回企画展の開発・運営における、対応力の構築及びつながりの強化

報告者名：
渡辺 友美（お茶の水女子大学）

開催日程：

9.2 @国立京都国際会館：
研究発表、One-to-oneミーティング（テーマ別少人数討議）

9.3 @稲盛記念会館：
ICEE総会、Marketplace of Exhibitions and Ideas

9.4 @国立京都国際会館：
研究発表、One-on-oneミーティング

9.5 @京都市内、京都国立博物館：
オフサイトミーティング―京都市内ガイドツアー、
研究発表、博物館展示見学、レセプション

京都大会概要及び所見：

1）内容

ICEEは欧米の参加者が多く、日本を含むアジアからの参加者は全体の1～2割程であった。連日およそ70人程度の参加者があった。プログラムでは15の研究発表のうち、ヨーロッパからの発表者は6人、北米2人、ラテンアメリカ1人、アフリカ0人、中東3人、アジア・太平洋から3人（うち日本から2人）、であった。さらに1件7分程度の短いセッションが連続するMarketplace of Exhibitions and ideasのセッションもあり、そこでは各国参加者から合計23件の発表があった。

ICEEは1980年に創設された国際委員会である。京都大会中にICEEから配布された委員会紹介パンフレットの中で、ICEEのミッションは「展示の巡回と交換に関わる全てに関するアイデアや経験を共有できる、国際的な場を提供すること」とされている。さらに、ビジョンとして「国際的な展示交換のより強固なプラットフォームとなるように、ICEEメンバーや国際的博物館コミュニティーと協働すること」を掲げていた。近年は順調に会員数を増やしており、年次大会の開催以外にも、委員会独自の参加助成制度を設けたり、ICEE登録者に対するウェブ配信形式の講義を実施するなど、意欲的な活動が目立っている。

2019年のICEE年次大会（全4日間）は、全体テーマを「巡回企画展の開発・運営における、対応力の構築及びつながりの強化」とし、全体テーマから派生した3つの小テーマと、2つのアクティビティで構成された。

9月2日はセッション1「展示交流においてどのようにresilience（対応力・回復力・弾力性）を構築するか」として、発表4件と基調講演1件があった。一見捉えにくいテーマのためどのような発表がある



1

1. Marketplace of Exhibitions and Ideas（稲盛記念会館）
2. オフサイトミーティング市内散策（京都市内）
3. オフサイトミーティングセッション（京都国立博物館）

のか興味深かったが、実際の話題は巡回企画展に限らず展示全般を広く対象としたもので、その内容も多様な巡回先に対応し得る展示物企画の話題から博物館におけるチーム構築の話題まで、幅広いものであった。セッション終了後には、One-on-oneミーティング（テーマ別少人数討議）の時間が設けられた。これは、今年度から新たに設置された事前申込制のアクティビティである。報告者は会議の運営に関わっていたため当日の内容は把握していないが、事前の募集告知では、「国際巡回展企画の利点とチャレンジ」「巡回展の運営と国際物流」「国際的パートナーシップ」等提示複数テーマより興味があるものを選び、3名程度の少人数でディスカッションするとあった。実際には、10名以上、2グループの話し合いであったので、参加者の興味が偏ったのかもしれない。

9月3日前半は総会が設けられ、ICEEの活動や財政状況、会員数、事前のウェブ投票を経て決まった新理事について報告があった。後半は新しい巡回展やアイデアの共有を目的としたICEE恒例のMarketplace of Exhibitions and Ideas（展示の見本市）セッションが設けられ、23件の発表があった。今年度はイギリスからの発表が多かったため、地域的に偏りすぎという意見が聞かれた。

9月4日はセッション2「展示交流におけるつながりの強化」として、発表4件、基調講演1件があった。基調講演は三菱一号館美術館の高橋館長によるもので、日本の美術館の現状と展望するものであった。ICEEは多くが欧米からの参加で、日本やアジアにおける巡回展の状況や可能性について関心が高く、その要望を受けての講演だったと思われる。研究発表では各国における事例報告が中心だったが、その中でもユニバーサルデザインについての発表は、聴衆にとって応用できる視点が多く、好評であった。セッション終了後には、初日と同じくOne-on-oneミーティングが設けられた。

9月5日午前は、15名前後ずつの2グループに分かれ、プロのガイドと共に京都市内（錦市場、擬音、清水寺等）を散策した。午後からは京都国立博物館で「国際協力と文化外交」を掲げたセッションが設けられた。ブラジル国立博物館の館長Kellner博士により、2018年火災と事後対応について基調講演があり、災害後の自国や諸外国からの支援がいかに迅速で強力なものであったかを伺い知ることができた。セッション終了後には、博物館内のカフェにて、ICEE独自のレセプションが設けられ、70名程が参加した。ここでも参加者同士の自由な交流が行われた。

2）京都大会の評価と課題

ロジスティクスやボランティアについては概ね問題なく終えることができた。メイン会場となった国際会館の景観やランチの質が好評だった。しかし想定外の参加者数だったことを受け、会場内は常に大混雑していて、移動やイベントにおいては課題があった。オフィシャル大会アプリ内のスケジュールの情報が古く、紙媒体のプログラムを持ち歩いていない参加者が混乱する場面が何度かあった。

オフサイトミーティングは、ICEE側で直前まで詳細が決まらず調整が大変だったが、受け入れて頂いた京都国立博物館のご協力でつつがなく終えることができ、好評だった。多数の参加者から、会議運営が予定通りに進行し、内容面に於いても充実した大会だった、等のコメントをいただいた。

3）今後の展望

ICEEは年次大会参加者に対する事後アンケートを毎年実施し、翌年の大会構成に役立てている。参加者の要望を積極的に取り入れる柔軟性の一方で、年によって多少の議題の偏りがある印象もある。具体的には、昨年度は巡回展に特化した話題が多かったのに対し、今年度は展示開発全般に広く関わる話題が中心だったように感じられた。一方で、人的ネットワークを形成することが重要視されている委員会でもあるので、その点では非常に成功している。

今年度の京都大会を含め、ICEEは日本やアジア諸国からの参加が総じて少ない。確かに、巡回展や国際交流といった肩書きでの参加を考えると、博物館自体が国際巡回展を主導することが少ない日本の博物館関係者の参加を見込むのは難しいかも知れない。しかしながら、ジャンルを絞らず展示開発に関する議論を深める場としては、ICOMの国際委員会の中ではICEEは最適であろう。諸外国の展示業者も多く参加する委員会なので、ぜひ展示開発の専門家である展示業者も含め、展示を作る専門家の積極的な参加を期待したい。ICEEに登録するとウェブ配信形式の講義（不定期開講）も聴講できるので、まずはそこから体験頂くと共に、各国の専門家との交流の機会がふんだんに設けられた年次大会へもぜひご参加頂き、展示開発や巡回に関する知見を深めて頂きたい。


2


3

ICFA
美術の博物館・コレクション国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

Western Art in Asian Museums, Asian Art in Western Museums
美術館における異文化：西洋とアジア

報告者名：

青木 加苗（和歌山県立近代美術館）

開催日程：

9.2 @稲盛記念会館：
ICFA 個別セッション―研究発表

9.3 @国立京都国際会館：
ICFA 個別セッション―研究発表、ICFA 総会

9.4 @国立京都国際会館：
ICDAD/ICFA/GLASS 合同セッション―研究発表

9.5 @大阪市立美術館、国立国際美術館：
オフサイトミーティング―各館の特別展・コレクション展見学およびディスカッション

京都大会概要及び所見：

1）内容

京都大会は、ICFAのセッションに筆者以外の日本人が参加した、おそらく初の会議となった。9月2日、3日のICFA個別セッションには、それぞれ予定していた人数よりも多い60人以上の参加があり、2日目は席が足らなくなった。1日券での参加者も複数人いたようで「様子を見にきた」という雰囲気も感じられた。参加者の国籍を正確には調べられなかったが、日本以外のアジア圏からの参加は、およそ発表者のみだった。

ICFAは3年前のミラノ大会以来、Christoph Lind委員長のもとで謂わば「脱ヨーロッパ中心主義」を目指しており、今回の京都大会は好機であった。ICFAの大会テーマは、Western Art in Asian Museums, Asian Art in Western Museumsで、日本語では「美術館における異文化：西洋とアジア」と意訳したが、字義通り訳せば「アジアの美術館における西洋美術、西洋の美術館におけるアジア美術」となる。個別セッションでは各日ともにこのテーマをセッション名に掲げた。集まった応募要旨から、議論の方向性が近いものを組み合わせてスケジュールを組んだ結果、初日の9月2日の研究発表は、アジア美術あるいは西洋美術を取り上げている展覧会の事例紹介、翌3日は美術作品自体が西洋とアジアでどう交流しているかについての詳細な研究発表というように、大きく2つの軸が生まれた。

近年の年次大会でたびたび挙がる議論に、美術展のブロックバスター傾向がある。今回も初日の事例紹介において、特にアジアの美術館で西洋美術を紹介したものについて、それが本当に異文化の垣根を取り払うことに寄与しているのかという議論があった。すでに評価が高い美術作品を財産として保有する欧米の美術館



1

1. 9月2日会議風景
2. ICFA総会でのKuhnmunch氏挨拶
3. 国立国際美術館での意見交換

が、アジアで「荒稼ぎ」する構図が顕著となっているからだ。この問題についてはさまざまな立場の、しかし直接に関わる参加者がいるこの委員会では議論は平行線を辿るだけであり、例えばICOM倫理規程を元にしたより高い視点・利害を超えた立場からの議論が必要だろう。

2日目のセッションでは、アジアという語の意味するところや、歴史を振り返っての西洋とアジアの相互交流の検証などが行われた。あくまでも作品・資料に依った議論は、ICFAならではの方向性を再確認することにつながり、委員長、発表者、参加者ともに満足度が高いセッションであったと思われる。

9月4日のICDAD/ICFA/GLASS合同セッションは、できるだけ多くの参加者に発表の機会を与えたいという意図から、各発表時間に強弱をつけるなど工夫をしたが、予定通りの進行とはならず、終了時刻を大幅にオーバーした。また発表募集に際しては、個別セッションか合同セッションかが明確でない受付方法をしてしまった上、窓口を1本化できなかったこともあり、発表者の割り振りでは3委員会での調整が困難な面もあった。個別・合同の2種のセッションを行う場合の課題を反省点として得た。しかしながら内容の面では、日頃関わりが少ない分野との意見交換ができたことは大きな成果であった。なお、このセッションでは筆者もICFAのメンバーとして、「Japonisme as Cross-cultural Impact: German Woodblock Prints and Japanese 'Creative Prints' Movement」と題して発表した。

9月5日には、大阪市立美術館、国立国際美術館の協力を得て、2館を訪問するオフサイトミーティングを実施した。大阪市立美術館では弓野隆之 学芸課長からコレクションの概要についてレクチャーを受け、その後コレクション展および特別展「メアリー・エインズワース浮世絵コレクション」の見学を行った。国立国際美術館では、橋本梓 主任研究員のガイドにより「ジャコメッティとII」展を見学した後、講堂を借りて質疑応答の時間を設けた。限られた時間ではあったが、「Collection and Exhibition: East and West(コレクションと展示：東洋と西洋)」と題したオフサイトミーティングのテーマに関連して意見交換を行うことができた。この場を借りてご協力いただいた両館のみなさまに心からお礼を申し上げたい。なお5日の参加者は、スタッフを含めて15か国から32人、うち日本人は9人であった。

2) 京都大会の評価と課題

概して、これまでの大会の中でも雰囲気が最高の大会であったという意見を、会期中には耳にした。ただ、サテライト会場が割り当てられなければならなかったことは、大会の一体感にはマイナスであっただろう。また事前に求められる意向調査は、回答しようのない設問が多く負担となっていた。アプリについても、公開から各委員会のセッション内容を確認して修正する時間が与えられなかったため、混乱が生じた。同時通訳についても当初、各委員会の負担でできるだけつけるようにとの指示があったが、ICFA内では反発が大きかった。参加者の大会登録費は各委員会に割り当てられないのに開催国の言語への通訳費負担を委員会に求めるのはおかしいという意見が根強かった。

3) 今後の展望

今回、9月3日のICFA総会で理事の選挙が行われ、数人の理事が入れ替わった。長年総務担当理事を努めてきたフランスのJacques Kuhnmunch氏が退いたことが最大の変化である。新たに立候補した理事を含めて複数人が今回の大会に出席できず、理事選挙ができなかったことは問題となり、当日参加していたメンバーらによって9月中にメールでの選挙を行った。なお、今回筆者は、理事として選出されたことを報告する。

2020年の年次大会は10月にアメリカのバージニア美術館で開催予定である。同館の、あらゆる地域の美術をひとつの「美術」という屋根のもとに扱う姿勢が現在のICFAの目標に合致するとし、委員長の強い推薦により決定した。2020年1月には理事会を行い、今後も年次大会と理事会を重ねながら、西洋美術中心の委員会を脱して、各地域をつなぐ存在を目指す方針である。そのためには日本をはじめ、アジアからの熱意あるメンバーが不可欠である。ICOMの中では美術館からは会員数が少ないが、今回認知度が高まったことを機会に、積極的な参加を呼びかけていきたいと考えている。


2


3

ICLCM
文学と作曲家の博物館国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

Literary and Composers' Museums as Cultural Hubs
文化をつなぐ文学と作曲家の博物館

報告者名：
中川 成美（立命館大学）
三谷 理華（静岡県立美術館）

開催日程：

9.2 @稲盛記念会館：
研究発表

9.3 @国立京都国際会館：
研究発表

9.4 @国立京都国際会館：
ICLCM 総会

9.5 @宇治市源氏物語ミュージアム、
平等院ミュージアム鳳翔館：
オフサイトミーティング
―博物館及び周辺地域のガイドツアー

京都大会概要及び所見：

1）内容

今年の年次大会は、9月2日と3日にそれぞれ異なるテーマの下研究発表を行い、4日に総会、5日にオフサイトミーティングという流れで執り行われた。2日の発表者はモデレーターを含め9名、その他参加者24名。3日はモデレーターを含む発表者は11名、その他参加者25名。2日間の発表者の内訳は、ロシアから7名、ノルウェーから3名、サンマリノ共和国から2名、ドイツ、クロアチア、イラン、アゼルバイジャン、台湾、ラトヴィア、日本、アルメニアから各1名であった。また2日間の参加者の内訳は、のべ人数で日本から9名、ロシアから7名、台湾から6名、アルメニアから3名、ハンガリー、オランダ、ラトヴィア、香港から各2名、エストニア、ポーランド、スウェーデン、スロヴェニア、南アフリカから各1名であった。

ICLM（文学の博物館国際委員会）として発足の後、近年領域を音楽にも広げたICLCMでは、幅広い領域にまたがる各博物館の活動に関する相互理解が不可欠となる。9月2日の研究発表は「Sustainable cultural activity of literary and composers' museums（文学と作曲家の博物館の持続的文化活動）」のテーマにおいてなされ、発表者が所属する各館の継続的取り組みが主に紹介された。国際交流活動や愛好会を通じた普及活動、オーラルヒストリー収集保存活動など、話題は多岐にわたり、参加者の関心を引いていた。翌3日の研究発表は、「New interpretations of literary and composers' museums（文学と作曲家の博物館の新たな解釈）」のテーマの下に開催された。社会の変化とともに、博物館に求められる活動内容も変化していく。この日は、発表各館におけるこれまでとは異なる新たな取り組みが紹介された。記録保管の場から



1

1. 国立京都国際会館での会議風景
2. オフサイトミーティング（宇治市源氏物語ミュージアムにて）
3. オフサイトミーティング（平等院にて）

体験共有を促す施設へと変貌していくための取り組み、最新の3D技術を導入し感覚を通じた理解を促す取り組み、無形文化財をはじめとした伝統継承に積極的に関与する取り組みなどが紹介され、参加者の関心を引くとともに活発な議論ももたらされた。

9月4日の総会で新たな会長と理事を選出した後、5日には宇治市でオフサイトミーティングを行った。宇治市は、日本古典文学の金字塔である『源氏物語』の最末尾にあたる「宇治十帖」の舞台となった地であることから、源氏物語の世界に触れることが可能な場所が主な視察地として選ばれた。参加者は36名で、内訳はロシアから14名、日本から4名、ラトヴィアから3名、ノルウェーから3名、ドイツ、ハンガリーからそれぞれ2名、スウェーデン、アルメニア、ポーランド、クロアチア、南アフリカからそれぞれ1名の参加であった。参加者はJR京都駅で集合した後、電車で宇治市へ移動し、まずは宇治市源氏物語ミュージアムを視察した。冒頭、同館講座室においてゲストにお迎えした日本文学研究者の木村朗子氏（津田塾大学教授）による、『源氏物語』概要に関するレクチャーを聴講。その後各自館内を観覧したが、原寸大の牛車や当時の宮廷衣装の復元など、参加者は熱心に見入っていた。昼食では宇治市内の老舗料亭にて「弁当」を賞味し、その後宇治市営茶室「対鳳庵」にてお茶席体験をするなど、日本文化の一端に触れた。最後に平等院を訪れ、平安貴族の優美な建築や庭園を偲んだ後、付設の鳳翔館において平等院が伝えてきた平安時代の質の高い文化財を鑑賞した。以上の行程の後、JR宇治駅にて解散した。今回はロシアや旧東欧圏からの参加者が多く、来日自体も初めての方もおり、彼らの文化圏とは大きく異なる日本文化の有形・無形の所産には、新鮮な驚きを覚えるとともに大きな興味を示していた。

2）京都大会の評価と課題

オフサイトミーティングを含めた3つの会議は、国や地域を超えた文学と作曲家の博物館相互の交流と理解に大きな貢献があった。ICLCMは比較的小さな所帯の国際委員会であるため、参加者同士が近しく話し合い、互いの状況に耳を傾け合うことができた。しかし近年は旧西欧からの参加が減っており、アジア諸国からの参加も必ずしも多いとは言えない。こうした参加地域の偏りを如何に是正していくかが、今後の大きな課題であることも浮き彫りとなった。また世代と言う点でも、より若い世代の会員を募り、参加を促していくことも、ICLCMの今後の発展のために必要であることが認識された。

3）今後の展望

ICLCMは近年カバーする領域を音楽にまで広げたため、会員の関心事をまとめることは必ずしも容易ではなくなったが、反面一つの領域に留まらないテーマで活動していくことも可能となった。それは例えば、演劇や舞踊の要素も含んで伝承される民話などの無形文化財の継承への寄与などの可能性も開かれたと言えるだろう。しかしながら日本側との係わりという点では、日本の文学や作曲家の博物館に所属する会員が殆どおらず、現状のままであればICLCMと日本の諸機関との繋がりが消滅しかねない。日本におけるICLCMの活動の周知や参加の一層の働きかけなどが強く望まれるだろう。


2


3

ICMAH
考古学・歴史の博物館・コレクションの国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

Reconsidering museums versus contemporary archaeology
現代考古学における博物館の問題を考える

報告者名：

岡村 勝行（地方独立行政法人 大阪市博物館機構）

開催日程：

9.2 @国立京都国際会館：
基調講演・研究発表

9.3 @国立京都国際会館：
研究発表

9.4 @稲盛記念会館：
研究発表・ICMAH総会

9.5 @大阪歴史博物館・大阪城天守閣：
オフサイトミーティング―博物館及び周辺地域のガイドツアー、学芸員との意見交換

9.7 @京都国立博物館：
閉会式・ICMAH理事との打合せ

京都大会概要及び所見：

1）内容

ICMAHでは、テーマを年ごとに「歴史」と「考古」で交替し、本年は「考古」であった。委員長・総務担当理事からは日本、アジアから参加者が多く見込めるテーマの作成要請があり、国際的な共通課題である、開発に伴う事前考古学を核とする「現代考古学」に焦点を当て、それと博物館の関係を問う構成を提案し、了承された。参加者は初日約50名で、二日目以降は30～40名であった。発表数は例年の年次大会と同様、当初20本と想定されたが、40本以上が寄せられ、最終的に36本を選考した。34本（2本キャンセル）の発表は13か国に及び、日本8、中国7、台湾3、フランス3、米国3、エジプト2、セネガル2で、南アフリカ、スイス、アゼルバイジャン、タイ、ノルウェイ、オランダがそれぞれ1であった。

基調講演ではフランスと日本のそれぞれの事前考古学の発達、博物館との関係、課題が扱われた。フランスでは、近年、事前考古学の膨大な成果とともに市民社会への説明責任・提示が増大しており、その中心にある国立事前考古学研究所（INRAP）の諸活動が報告された。日本からは、市町村まで整備された調査体制や、国際的にユニークな埋蔵文化財センターのほか、遺跡調査の民営化、博物館の指定管理者制度、文化財保護法の改正、観光資源としての博物館、文化財への期待など近年の動向が紹介された。質疑からは遺跡調査を含む民営化の進展が国際的な関心事であることが再確認された。

続く30本余りの発表は、多岐にわたり、「現代考古学」の諸側面に及ぶ。自館の報告が大半であるが、その内容は多い順に、①遺跡・考古学の提示、地域社会の参画などのパブリック考古学、②遺跡の調査・保存・修復、③資料返還、④VR、3D復元などデジ



1

1. 会議風景（国立京都国際会館）
2. オフサイトミーティング（大阪歴史博物館）
3. オフサイトミーティング（大阪城天守閣）

タル技術の活用、などである。①は、日本・中国・台湾の発表の多くで、全体の約1/3を占めた。日本からは兵庫県立考古博物館の多彩かつ活発な活動や、ユニークな茨木市キリシタン遺物史料館が注目を集めた。中国からは、遺跡博物館が「遺跡のシュルター」から「多様な語りの場」(来館者指向)への近年の変遷や、秦始皇兵馬俑博物館の豊富な普及活動が注目された。②ではセネガルの先史時代の巨石記念物(世界遺産)の深刻な劣化、③では欧州博物館所蔵アフリカ資料の返還の高まり(アフリカ文明博物館)や中国山東省博物館の盗難にあった菩薩像の返還プロセスの発表があった。④はいずれもエジプトの博物館からで、このうち2013年8月に破壊、展示品盗難に遭い、近年再オープンしたマラウィ博物館からは地域参画の多様な取り組みが紹介され、また、VRを用いた展示例が求められた。このほか、ICOMの加盟機関でもあるオランダの実験考古学施設EXARCや、タイの発掘資料の登録、3Dスキャニングなど美術史メソッドによる記録化を活用した教育実践の開拓、日本の博物館の考古学史的分析から、東日本大震災後の文化・世代間のハブとしての博物館の再考など、多彩かつ刺激的な発表があった。ただ、全体を通じて、質疑の時間は少なく、議論の深化が不十分となった点は悔やまれる。進行役の時間管理・専門能力にも関わるが、過去3年の年次大会も同様の傾向にあり、改善が望まれる。

4日の夕刻には総会が開催され、理事選挙の結果、トルコの総務担当理事が新委員長となったほか、アゼルバイジャン、エジプト、セネガルから委員が選出され、若い委員会に一新された。

5日のオフサイトミーティングには、15か国から34名が参加した。午前中は大阪歴史博物館の見学後、館長・学芸員との意見交換、午後からは大阪城天守閣を見学した。途中、ゲリラ豪雨で全員びしょ濡れとなり、続行が危ぶまれる場面もあったが、その後、天守閣から鮮やかな虹が臨め、結果的には強烈な記憶の残るツアーとなったに違いない。

2) 京都大会の評価と課題

ICMAH会員個々に伺ったわけではないが、ゆったりした会場、京都らしい式典、質の高い基調講演、プレナリーや総会での白熱した議論、充実したソーシャル・イベント、展示ブース、アトラクション、献身的なボランティア、美味しい料理のパーティーと弁当など、いずれも申し分のない「おもてなし」で、大会全体の満足度は非常に高かったと思われる。セッションについては、当初、毎回の部屋変更に不満が示されたが、実際には大きな問題なく、変化が生まれ、良い面もあったか。オフサイトミーティングは、二館から暖かい歓待を受け、意見交換を含め、高い評価を頂いた。また、文化庁補助金によって、交通費(バス借り上げ)が賄えたことも感謝された。

3) 今後の展望

ICMAHの扱う「考古・歴史」は、日本の博物館が扱う最も多い分野である。今回、そのメンバーが、日本の博物館に触れ、その関係者と交流した意味は大きい。今後、今回のセッションの発表もPDF冊子としてまとめられ、ICMAHは一定の活動をおこなっているものの、残念ながら、まだ活発なレベルとは言えない。セッションも各国・地域の情報交換レベルに留まっている。その理由は、事務局の専門性・力量に加え、仏語を母語とし、十分な英語能力をもつメンバーが少なかったことによるのかも知れない。しかし、若い新理事はいずれも高い語学能力、積極性を備えており、今後、委員会の活性化だけでなく、日本の博物館関係者との交流の深化も期待できる。今回の京都大会の遺産を継承するには、引き続き、日本から年次大会へ参加することが鍵であるに違いない。


2


3

国際委員会セッション

ICME
民族学の博物館・コレクション国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

Diversity and Universality
多様性と普遍性

報告者名：

飯田 卓（国立民族学博物館）

開催日程：

9.2 @国立京都国際会館：
単独セッション―研究発表と総会

9.3 @稲盛記念会館：
単独セッション―研究発表

9.4 @国立京都国際会館：
単独セッション―研究発表

9.5 @国立民族学博物館：
オフサイトミーティング
―博物館見学とCIMCIMとの合同シンポジウム

京都大会概要及び所見：

1）内容

今年の会議では、日本含むアジアからの参加者と欧米などからの参加者がほぼ半分ずつを占めた。9月2日から4日にかけておこなわれたセッション（合計3回、いずれも時間帯は午後）では、参加者がほぼ50名ずつだったが、他の国際委員会や国内委員会とのあいだを行き来していた者も少なくなく、実質的な参加人数は延べ人数に近く100名を超えると推測される。プログラムによると、30名の発表者の内訳はアジアから11名（うち日本は4名）、ヨーロッパから10名、北米から5名、アフリカから3名、オーストラリアから1名だった。日本からの発表者4名は、いずれも、来年に開館予定のアイヌ民族博物館に関する発表（1件）の共同発表者だった。日本からの参加者による発表が少ないのは残念だったが、後述する9月5日のオフサイトミーティングでは日本からの参加者による基調講演が2件おこなわれ、日本の民族学博物館の実情は十全に伝わったと思われる。また、発表者以外の参加者にも、日本から来た者が少なくなかった。

9月2日におこなわれた総会では、委員長と理事の改選がおこなわれた。

ICMEのセッションでは、毎年、植民地状況下で収集された博物館資料の返還が大きな話題になっている。しかし、そうした報道むけの大きな話題にとどまらず、デジタル・リパトリエーションと呼ばれる資料の画像共有や、無形文化遺産ないし知識・記憶の継承における博物館の役割など、人びとの参与を高めることで博物館の活動を幅広くしていくためのさまざまな実験的試みが議論されてきた。このことは、今年のICOM臨時総会で議論されていたミュージアムの定義や、テーマとなっていた「文化をつなぐ



1

1. 国立京都国際会館での会議風景
2. アイヌ出身の発表者をまじえて
3. 大阪府吹田市でのオフサイトミーティング

ミュージアム」、ICME独自のテーマであった「多様性と普遍性」にも深く関わっている。特定の歴史的来歴をもつ博物館資料をできるだけ文脈に即して異なる立場の人びととも共有することが、多様な文化をつなぎつつも普遍性をそなえたハブとしての博物館に至るための道筋だからである。なお、3日間に催された7つのセッションのタイトルは、それぞれ、「市民参画と社会的結束を進めるためのミュージアムの脱植民地化」、「先住民遺産の保護とモノとのコミュニケーション」、「デザインと学習のための対話」、「記憶、情動、属性」、「文化的・社会的アイデンティティの探求」、「多様性と普遍性を超えるための思考、設計、作業」、「博物館資料の返却と返還、調停と癒し」であった。

9月5日には、大阪府吹田市の国立民族学博物館(民博)でオフサイトミーティングをおこなった。今年のオフサイトミーティングは、ICMEのほかにCIMCIM(楽器の博物館・コレクション国際委員会)および民博関係者による合同ミーティングのかたちをとった。午前中、民博の活動に関わって特別展示場や収蔵庫、開発中の電子ガイドのデモンストレーションなどをグループに分かれて見学した後、午後はホテル阪急千里エキスポパークに移動して、シンポジウムと懇親会をおこなった。シンポジウムの基調講演としては、吉田憲司 国立民族学博物館長による「文明の転換点における民族誌博物館」と、嶋和彦 浜松楽器博物館前館長による「楽器は音楽よりも雄弁に話す」がおこなわれた。総合討論では、基調講演者とICMEとCIMCIM両国際委員会の前委員長、ならびにセッションで基調講演をおこなったクリスティナ・クレプス デンヴァー大学教授が登壇し、植民地時代の遺産とみなされることがある民族誌博物館の役割を現代的に刷新するためのさまざまな方策が討議された。また、楽器との関わりでは、オーセンティシティの維持活動などについて意見交換がなされた。

2) 京都大会の評価と課題

京都での各セッションに関しては京都大会事務局が派遣した2名のボランティアスタッフが、また民博でのオフサイトミーティングに関しては民博に所属する窓口担当者の飯田卓が運営を補助し、大きな支障もなくたいへん高く評価していただいた。委員会との連携においては、京都大会までの委員会理事でありICME2019大会実行委員会リーダーでもあった黒岩啓子氏がはたした役割も大きい。また、来年に開館するアイヌ民族博物館が委員会の問題意識に沿ったかたちで開館準備を進めていることも、日本開催に結びつけて高く評価された。全体的にICOM京都大会への評価は高かったが、京都事務局からの返事の遅れや、参加受付およびレセプションにおける長蛇の列、さらには料理の不足に由来するサービスの一時中止などに関しては不満の声も聞いた。参加者数の多さを考えればいたしかたないことだが、同様の大規模な国際会議を開催するうえでは配慮していくべきだろう。

3) 今後の展望

1) に述べた「植民地時代の遺産とみなされることがある民族誌博物館の現代的役割」に関しては、これまでICMEの年次大会で議論されてきたとおり、広範な市民(移民を含む)がさまざまなかたちで参画できるよう博物館をデザインしていくことが必要である。このことは、ダンカン・キャメロンの「フォーラムとしての博物館」の考えかたを日本に紹介した吉田憲司氏がオフサイトミーティングで基調講演をおこなったことで、あらためて確認された。たんに参画の可能性を開くだけでなく、積極的な参画を持続できる実質的なフォーラムを実現するには、たんに目標を定めるだけでなく、さまざまな実務的課題を解決していく必要がある。その試行錯誤の経験を共有する場として、ICMEは今後も重要な議論の場となり、ICOM全体の議論にも貢献していくと期待できる。


2



3

ICMEMO
公共に対する犯罪犠牲者追悼のための記念博物館国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

Historical Heritage and Its Relevance Today
歴史遺産とその今日的意義

報告者名：

東 自由里（京都外国語大学）

開催日程：

8.28 @トゥールスレン虐殺博物館：
プレカンファレンス、周辺関連施設視察とレセプション

8.29 @トゥールスレン虐殺博物館：
プレカンファレンス、ラウンドテーブル討議

8.30 @トゥールスレン虐殺博物館：
プレカンファレンス、ラウンドテーブル討議

9.2 @国立京都国際会館：
FIHRMとの合同セッション、研究発表、ICMEMO総会

9.3 @稲盛記念会館：
研究発表、ワークショップ

9.4 @国立京都国際会館：
研究発表、ワークショップ

9.5 @広島平和記念資料館メモリアルホール：
オフサイトミーティング―、周辺関連施設視察

9.8 @沖縄 平和祈念公園関連施設：
ポストカンファレンスツアー

9.9 @沖縄 国営沖縄記念公園、海洋講演、首里城公園：
ポストカンファレンスツアー

9.10 @沖縄 対馬丸記念館、沖縄県立博物館：
ポストカンファレンスツアー

京都大会概要及び所見：

1）内容

京都大会開催の直前（8/28―30）、カンボジアのトゥールスレン虐殺博物館に於いて、「ジェノサイド・記憶・平和」と題したプレカンファレンスが開催された。これは、カンボジア文化芸術省、UNESCOカンボジア支部、ICMEMOとの共催であり、会員40名ほど（現地関係者を除く）が参加した。

同館のアーカイヴズはユネスコ記憶遺産として登録されており、現在デジタル化が進められている。今回のプレカンファレンスでは、虐殺に関連する資料のデーターベースの構築と写真映像のデジタル化について、ルワンダ、エストニア、ポーランド、カンボジアの博物館関係者たちが研究発表を行った。ラウンドテーブル・ミーティングでは、アーカイヴズの保存作業中に遭遇する技術的、倫理的な問題について活発な討議が展開された。

ICMEMOはこれまでも多様な視点から議論が展開できるよう設立当初から積極的に他の国際委員会と合同で年次大会を開催してきている。京都大会でもICOMの加盟機関であるFIHRM（国際人権博物館連盟）との合同セッションを初日（9/2）に設けた。テーマは「博物館は深遠なものをどのように伝えるか：大日本帝国の旧植民地からの声」、発表者は日本、台湾、中国から公募で選ばれた新会員6名。セッション参加者は80名ほどであった。とりわけ海外の参加者からは、日本と近隣諸国との歴史系の博物館紹介に触れる良い機会となったという声が多く寄せられた。

9月3日は、会場を稲盛記念会館に移した。仏教の世界観からみた「追悼」について専門家による講義もあり、「無の空間」を追悼の場でもあるメモリアル博物館で生かす意義について意見交換が行われた。事例報告の一つとしてICOMチェコ共和国の委員



1

1. ひろしま美術館での鏡割り
2. 世界遺産、原爆ドーム記念撮影
3. 広島でのシンポジウム会場

長とリディツェ国立記念館の館長を兼任する会員から、破壊された村を再建せずに保存している「無の空間」について紹介があった。

9月4日はアムステルダムのアンネ・フランクハウスから展示専門家による報告があった。博物館が展開する教育プログラム、とりわけ異なる文化と歴史の中で、アンネ・フランクの記憶をどのように活用されているか、同時通訳付きでスロバニア、台湾、コロンビア、日本の事例が紹介された。

9月5日はリニューアルしたばかりの広島平和記念資料館本館と国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を各館長の案内で視察した。その後はICMEMOのオフサイトミーティングを広島市、公益財団法人広島平和文化センターとの共催で広島平和資記念料館内メモリアルホールで開催した。国際シンポジウム「グラウンドゼロからの記憶、遺構、そして語り」には、ICOM一般会員、一般市民を含む約250名が参加し、スアイ・アクソイICOM会長、松井一實広島市長が開会の挨拶、「社会の記憶と個人の悼み―利害の狭間にあるメモリアルミュージアム」と題された基調講演を9・11メモリアル博物館の展示総責任者である会員が行った。原爆投下と同時多発テロ事件は全く違う歴史的事件であるが、追悼や展示方法の接点を探りながらメモリアルミュージアムが果たす役割について示唆に富んだ発表であった。その後は「ひろしま美術館」へ会場をうつし、同美術館の館長でもある広島銀行の池田晃治会長と地元関係者のご厚意により、多大なご支援を受けることができたおかげで、レセプションでは日本側とオフサイトミーティング参加者との交流で大いに盛り上がった。当日、NHK広島支局による取材で、参加者の感想、基調講演者の映像なども夕方のニュースで放映され注目を集めた。

京都大会を終えたあとも、沖縄でのICOMポストカンファレンスが内閣府沖縄政策の企画で開催され、25名が参加した。その内12名がICMEMO会員であったのであるが、それは、視察先がICMEMOの活動と関係が深い、平和祈念公園関連施設施設が多く含まれていたからであろう。本ツアーではAVICOM, CAMOC、CIMCIM、ICMAT、ICOFOMなどの会員も参加しており、他の国際委員会に所属するICOM会員と活発な意見交換ができ国際的な人的ネットワークを構築するための貴重な機会となった。

2）京都大会の評価と課題

京都大会の前後を含むとプノンペン、京都、広島、沖縄と4つの場所で2週間にわたり国際会議が続いたが、委員長のことばを借りると「これまでの国際会議の中で最も強く、そして長く印象に残る」大会となった。特に広島で開催したオフサイトミーティングは、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、中国新聞でも記事となった。NHKに至っては、「ニュースウォッチ9」において基調講演者へのインタビューが全国放映された。これは、日本の博物館関係者だけではなく、一般市民にとっても博物館の社会的役割を再認識する好機となったといえよう。ひろしま美術館、広島市職員、広島平和記念資料館の学芸員、職員の方々が企画からロジ業務を細かく詰めて大奮闘して下さった。さらには広島市の助成金で同時通訳をつけることができた。海外からの参加者たちも日本側の尽力を高く評価していた。ICMEMO一同を代表してここに謝意を表したい。

3）今後の展望

ICMEMOは常に他のICOM国際委員会と国際団体と連携しながら活動を展開することを重要視している。EUROM（バルセロナ）、IHRA（ベルリン）、NIOD戦争・ホロコースト・ジェノサイド研究所（アムステルダム）とのネットワークは確立されており、博物館関係者だけではなく政策立案者、研究者との人的ネットワーク作りの強化はこれからも継続されていくであろう。

今年の理事選出選挙ではアジア諸国、アフリカ諸国、ラテンアメリカ諸国からの立候補者がでてきた。欧州の会員が多数を占めるICMEMOとしても大きな前進といえよう。他方で、日本の博物館関係者の中にICMEMO理事に立候補する者が少ないため今後に期待したい。2020年のICMEMO年次大会は10月26日―30日にアルメニア人虐殺博物館がホストとなり、ICOM－ICTOP（人材育成国際委員会）と共催で開催されることが決まっている。


2


3

ICMS
博物館セキュリティ国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

Museums as Cultural Hubs — The Future of Tradition
文化をつなぐミュージアム―伝統を未来へ

報告者名：
前田 裕美（浦賀ドック野外船舶技術博物館設立推進会議）

開催日程：

9.2 @国立京都国際会館：
ICMS セッション発表、ビジネス・ミーティング

9.3 @国立京都国際会館：
ICMAT/ICMS/ICOM-CC 合同セッション、
ICMS セッション

9.4 @国立京都国際会館、清水寺：
レクチャー、現地見学（雨天変更）

9.5 @兵庫県立美術館他：
オフサイトミーティング
―各国事例報告、特別講演、博物館・美術館等の視察

京都大会概要及び所見：

1）内容

本会議は、第25回国際博物館会議京都大会（ICOM KYOTO 2019）の公式プログラム内で、ICOMが組織する他の委員会等と同時に開催されており、前半2日間はセッション発表、後半2日間は現地見学及びオフサイト・ミーティングで構成されている。セッション参加者数は会場の収容人員により差異はあるが欧州・北米・アジア・アフリカ等から30–50名を数えることができた。本会議前日には理事会の後、会議支援者等を招いての夕食会がICMSの主催で行われた。そして、3日目以降はICOM KYOTO 2019共通プログラムであるエクスカーション・関連イベント、またレセプション等に各自で参加した。

会議初日、2019–2022 ICMS理事選出の手順について選挙管理委員から説明があり、出席のICMS voting member（欧州13名、北米3名、アジア14名）による投票と欠席者の事前投票の集計が行われた。続く理事会では2018年度会計及び活動報告と次年度予算及び活動計画が財務担当理事より報告提案され会員により承認された。次に、選挙による新理事が決定され得票数が発表された。定員6に対し立候補者8名を有し、委員長1と理事3は欧米、理事2はアジア（含・日本）から選出され地理的バランスの取れた結果となった。尚、過去に実務経験があるという理由から、次点の英国1が財務担当理事として理事に追加選任された。ICMSセッション発表が英国1・中国1・日本1の計3名により引き続き行われた。

二日目は、ICMSセッションとICMAT/ICOM-CC/ICMS合同セッションが一部並行して行われた。前者では中国1・台湾2・日本1の計4名が発表を行った。後者の4国際委員会合同セッションでは、「収蔵（庫）」をテーマとして建築、保存、セキュリティ、登



1

1. 4国際委員会合同セッション（国立京都国際会館）
2. オフサイト・ミーティング（兵庫県立美術館）
3. 新ICMS理事（左端：杉浦氏、右から3番目：ハンセン委員長）

録の側面から研究報告及び討論を行った。ICMSからは英国V＆A美術館セキュリティ最高責任者のVernon氏が登壇した。

三日目午後は、特別講師として京都市消防局予防部予防課の勝田正一氏、立命館大学歴史都市防災研究所の大窪健之所長、立命館大学の益田兼房教授等を招聘し文化財防災特に防火の清水寺とその周辺地区の取組みをレクチャーして頂いた。その後、消火設備システムを現地見学する予定であったが、雷雨のため見学は中止となり、急遽、見学場所が京都文化博物館でのICOM京都大会開催記念東京富士美術館所蔵展「百花繚乱ニッポン×ビジュツ展」に変更となった。尚、本見学会は事前登録制で参加者は約60名であった。

四日目、ICMSオフサイト・ミーティングが神戸で開催された。主な視察先である①竹中大工道具館②兵庫県立美術館③人と防災未来センターでは、①の西村章館長、②では井戸兵庫県知事・蓑豊館長、③の河田惠昭センター長からの温かい歓迎を受けた。特に兵庫県立美術館では大講堂にて兵庫県知事と館長の歓迎の挨拶、保存修復担当学芸員の岩松智義氏とアムステルダム国立美術館安全セキュリティ部長のレイモンド・デ・ヨング氏による防犯防災を含むセキュリティの取組事例を報告する機会が設けられた、加えて③では河田センター長による災害の経験と教訓をテーマとした講演がICMSのために特別に行われた。尚、本ミーティングは兵庫県のスポンサー支援、ICOM会員の東京富士美術館、ICOM/ICMS賛助会員の日光警備並びにJTS、ICMS支援団体の新北斗警備、その他多数のボランティアスタッフの人的協力により成功裡に終わることができた。バス2台貸切りで、参加者は約80名であった。

2）京都大会の評価と課題

今回日本からのICMSセッション登壇者数はオフサイトミーティングでの事例報告等も含めると、発表数3（発表者4名）、招聘者3名、講演者1名と過去最多であった。発表の内容に関しては、博物館安全・セキュリティ分野でのマネイジメント・コミュニケーション・防災防犯対策等のソフト面での議論が主であった。従来、最新の設備・機器製品を紹介する実演・発表が見られるが、本大会では民間企業による発表に制限があったためかハード面での議論が最小限に留まったことを今後の課題としたい。

また、ICMS理事として東京富士美術館総務部長の杉浦智氏が日本人初の立候補で当選を果たしたことは特出すべき成果である。これにより、博物館セキュリティ及びその関連分野での国際交流並びに情報共有が促進され、日本国内のICMS会員増加の一翼を担うことが期待される。技術面では、74言語対応AI搭載翻訳機ポケトークをICMSボランテイア・支援スタッフが携帯しコミュニケーションを迅速かつ正確に取ることができたことは海外参加者から高い評価を受けた。メディア取材に関しては、寺院建物・文化財・美術品等の防災保護分野を含めた京都・神戸での関心の高さからICMSがNHK京都放送局の取材を受けたこと、またNHKテレビ・ネットのニュース映像に載ったこと、更にはICMSセッション会場にICOM京都大会開催の立役者でもある浮島文部科学副大臣が足を運ばれたことは、ICMSにとって大変名誉なことであったと同時に、日本国における博物館危機管理及び安全防災対策への関心の高さが顕著に示されたことによるものとも考えられる。ハンセンICMS委員長から会議終了後、ICMS日本側関係者へ大会成功に対する感謝状が送信された。

3）今後の展望

杉浦智氏を中心としたICMS日本会員による積極的なICOM/ICMS日本会員勧誘と国際交流の場を活用しセキュリティ最新情報の共有を世界的規模で展開することが期待される。また、ICMS日本会員による国内での活動計画立案とその実施に向けて具体的かつ詳細にその内容を議論し纏める場を持つことが急務である。また、ICMS理事からICOM Prague2022後にICMS年次大会の東京開催を望む声があり、その実現のために尽力しつつ、ICMS JAPANの存在感を海外に示すことが大いに期待される。ICMS年次大会等開催予定：2020年8月26―28日ポーランド・カトヴィツェ、2021年未定、2022年チェコ共和国・プラハ、2020年ワークショップ（モンゴル）


2


3

ICOFOM
博物館学国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

The Future of Tradition in Museology
博物館学における伝統を未来へ

報告者名：

井上 瞳（愛知学院大学）

開催日程：

9.2 @国立京都国際会館：
全体セッション、ワークショップ

9.3 @国立京都国際会館：
CECAと合同セッション、全体セッション、
ワークショップ

9.4 @国立京都国際会館：
ICOM-CCと合同セッション

9.5 @同志社大学：
オフサイトミーティング；全体セッション、年次総会

京都大会概要及び所見：

1）内容

今回のICOM京都大会では議論の中心が「新しい博物館の定義」であったため、ICOFOM内でも全体のプログラムを通して、フランソワ・メレス委員長（ソルボンヌ大学教授）を中心に連日この定義に関する活発な議論が行われた。

ICOFOMへは毎日およそ70名前後、合同セッションは約170名の参加者があり、日本からは計4名の発表者と10名ほどの参加があった。参加者のほとんどはヨーロッパからで、国別ではフランスが多数を占め、イタリア、オーストリア、ベルギーなど、北南米からはアメリカ、ブラジル、アルゼンチンなど、アジアからはインド、中国、台湾、シンガポールといった国々から数名ずつの参加が見られた。

9月2日　全体セッション、ワークショップ

全体セッション「博物館学における伝統を未来へ」(1) ―基調講演

開会セッションの冒頭には、水嶋英治氏（長崎歴史文化博物館館長）の基調講演「東洋が西洋と出会うとき―博物館、博物館学、東洋の哲学」が行われ、日本での開催を印象付けた。続いて、ICOFOM委員長フランソワ・メレス氏の基調講演「無形遺産としての博物館学：過去、現在、そして未来」が行われ、博物館学がどのような人的繋がりによって受け継がれてきたかを示した。

ワークショップ「博物館学における伝統から未来へ」

ワークショップA「博物館学とテクノロジー」、B「博物館学における社会的政治的役割」、C「博物館学、理論、そして実践」の各テーマごとに3部屋に分かれ、各グループ5人の発表者によるテーマに沿った発表の後、参加者全体での議論が行われた。



1

1. 委員長による基調講演
2. ワークショップでの討議
3. オフサイトミーティング（同志社大学）

ワークショップでは若い研究者や博士課程に在籍する学生などが活発に発言する機会があり、熱心に議論が行われていたのが印象的であった。

9月3日　CECAと合同セッション、全体セッション、ワークショップ

CECAと合同セッション「文化的行動とは何か？」―研究発表

CECA委員長ミラ・キオバット氏と、ICOFOM委員長フランソワ・メレス氏をモデレーターに、「文化的行動」をテーマとした研究発表が行われた。

全体セッション「博物館学における伝統を未来へ」(2) ―研究発表

1日目に引き続き、2名の発表者による同テーマでの研究発表が行われた。

ワークショップ「博物館学における伝統から未来へ」

ワークショップA「デジタルから伝統へ」、B「政治、環境、遺産」、C「認識論」の各テーマごとに3部屋に分かれ、各グループ4、5人の発表者によるテーマに沿った発表の後、参加者全体での議論が行われた。日本からの発表者も含まれ、若手を中心とした議論が行われた。

9月4日　ICOM-CCと合同セッション

ICOM-CCと合同セッション「保存の本質とは何か？」―研究発表

ICOM-CC理事のレナータ・ピーターズ氏と、ICOFOM委員長フランソワ・メレス氏をモデレータに、発表がなされた。議論は、博物館における保存と修復の倫理に関わる非常にセンシティブであり重要な部分にまで及び、各国、各博物館を代表する発表者や参加者が、自らの経験による知見を述べ合った。

9月5日　【オフサイトミーティング】全体セッション、年次総会

全体セッション「新しい博物館の定義に向けて」―研究発表

最終日は、ICOMの全体会議でも連日活発に議論された「新しい博物館の定義」を取り上げて討議した。午後の冒頭に矢島國雄氏（明治大学名誉教授）による「日本の博物館学：歴史と著名な博物館学者」と題した基調講演を行った。日本の博物館学をリードされてきた矢島氏による講演に、多くの参加者が興味を持たれた。午後の後半は当初、ワークショップの予定であったが、「新しい博物館の定義」の討論に充てられた。

年次総会、委員長及び理事の選出

次期委員長にブルーノ・ソアレス氏（リオデジャネイロ州立大学）が選出された。また、ICOFOMにはICOFOM-ASPAC（アジア地域）とICOFOM-LAM（ラテンアメリカ地域）の2つの下部組織があり独自に活動を行っており、本報告者である井上はICOFOM-ASPACの理事に選出された。

2）京都大会の評価と課題

京都大会への評価は非常に高かったと感じる。「新しい博物館の定義」は民主的に議論され延期されたことに理解が示される一方、提案の時期が直近すぎたとの意見であった。万事ほぼ滞りなく進められた運営の完成度に対しては大変称賛いただいた。委員長からは、従来に比べ事前の問い合わせが多く細かすぎると感じていたが、それゆえの成功であったとの評価であった。最終日の年次総会では、特にICOM京都大会運営委員及び本報告者に対するねぎらいと感謝の言葉が述べられた。

3）今後の展望

ICOFOMでは、全体を通してICOM京都大会のテーマ「伝統を未来へ」に沿った幅広い議題が取り上げられ、活発な議論がなされた。「新しい博物館の定義」については、この提案に反対するICOFOM委員長はじめフランスからの参加者が多数を占め、MDPP（博物館の定義・展望・可能性委員会）案に対する独自案の検討が行われた。ワークショップでは、博物館はニュートラルであるべきか、といった話題がテーマとして取り上げられ、若手を中心に議論されていたことはICOFOMの可能性を示唆しており、門戸は広く開かれている。ICOFOMはヨーロッパ、特にフランスを中心とした組織であるという事実は否めず、日本からの参加者も少ないため、今後は日本国内でも京都大会で議論された「新しい博物館の定義」に関する議論を含め、幅広く博物館の在り方について検討する場を作っていく必要があると感じた。



2



3

ICOM-CC
保存国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

9月2日　How far can we come with traditions? Shaping the Future
伝統と共にどこまで?　未来への形成

9月3日　Storage of Collections — Prepare for the Future
コレクションの保管—未来に向けた準備

9月4日　What is the essence of Conservation?
資料保存の本質とは?

報告者名：
榊 玲子（たばこと塩の博物館）

開催日程：

9.2 @稲盛記念会館：
INTERCOM、ICOM SEEと合同セッション

9.3 @国立京都国際会館：
ICAMT、ICMSと合同セッション

9.4 @国立京都国際会館：
ICOFOMと合同セッション

9.5 @国立奈良文化財研究所：
オフサイトミーティング
—研究所活動・文化財レスキュー活動についての
レクチャーおよび施設内のガイドツアー

9.8–11 @東北三県（福島・宮城・岩手）：
ポストカンファレンスツアー

京都大会概要及び所見：

1）内容

今回、ICOM-CCは単独でのセッションは開催せず、開催した3回のセッションはすべて合同セッションであったことから、各セッションにICOM-CCから何人の参加があったのかは正確には把握できていない。しかし、9月2日のINTERCOM、ICOM-SEEとの合同セッションには60人程度、他の二つの合同セッションには100人を大きく超える参加者があり、それぞれのセッションでは欧米を中心としつつも、アフリカ、中南米、中東、アジア・オセアニア各地域からの発表者による研究発表に熱心に耳を傾けていた。3回の合同セッションのパートナーとそのテーマはそれぞれ異なっていたが、新しい博物館の定義を定めようという動きの中での、文化財保存に対して博物館が果たすべき役割や課題（9月2日）、文化財の未来への継承に不可欠である「コレクションの保管」に対して、スペース管理やセキュリティ、あるいは低予算施設が抱える問題点や取り組みなど（9月3日）、そして「文化財を将来に継承すべく施される保存・修復と真正であること」という課題に対して、修復の方法論や修復の実施に至るまでのプロセス、あるいは具体的な方法や材料など（9月4日）について、様々な角度から、多岐にわたる事例発表・研究発表がなされ、また各発表後にはフロアを交えての質疑応答・活発な議論が交わされ、文化財保存の将来に向けての取り組みに大きな示唆を与えるセッションとなっ



1

1. 国立京都国際会館での会議風景
2. 奈良文化財研究所でのオフサイトミーティング
3. ポストカンファレンスツアー（岩手県陸前高田市）

た。

ICOM-CCにとって、今回の京都大会はICOM全体の大会であるとともに、2011年3月の東日本大震災で被災した文化財の保存・修復活動の現状視察を実施する絶好の機会を提供する大会という大きな意味を持っていた。そこで、9月5日のオフサイトミーティングは、東日本大震災の発災直後から被災文化財のレスキュー活動に従事してきた独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所にて実施することとなった。オフサイトミーティング当日は、同研究所が実施してきた文化財レスキューの活動内容についてのレクチャーを受けた後、津波被害にあった文書資料の応急処置として凍結乾燥するために用いられた大型真空凍結乾燥器をはじめとする所内の視察が行われた。視察では、木資料・紙資料をはじめとする文化財の保存・修復作業を実見した参加者から多くの質問が出され、保存修復を専門とするICOM-CCメンバーと奈良文化財研究所の所員との間での活発な情報・意見交換がなされ、継続的な交流の足がかりを築くことができた。

京都大会終了後の9月8日から11日までは、ICOM-CC主催での東北地方でのポストカンファレンスツアーを実施、USA、ブラジル、ノルウェー、デンマーク、スウェーデン、UK、オランダ、ドイツ、オマーンそして日本からの総勢19名の参加があった。福島県文化財センター白河館"まほろん"(福島県、9月8日)、東北歴史博物館およびリアス・アーク美術館(共に宮城県、9日)、陸前高田市立博物館仮施設(岩手県、10日)、岩手県立博物館(岩手県、11日)という、東日本大震災と津波により甚大な被害を受けた施設、被災文化財のレスキューと保存・修復活動に精力的に携わっている施設、福島原子力発電所の事故により立ち入り禁止区域内に残された文化財のレスキューに携わっている施設の視察は、参加者一人一人にとって意義深いものとなった。また、発災から8年が経過した現在でも続けられている被災文化財の保存・修復、安定化処理の作業現場では、ツアー参加者から数多くの質問がなされるだけではなく、問題点や課題の提示、あるいはアドバイス、さらには保存の専門家が集まるICOM-CCとの連携の提案など、活発な情報交換がなされ、訪問を受け入れてくれた施設にとっても有意義かつ貴重な機会となった。(オフサイトおよびポストカンファレンスツアーについては、文化庁による平成31年度文化芸術振興費補助金(地域と共働した博物館創造活動支援事業)を受けて実施した。)

2) 京都大会の評価と課題

ICOM-CCは、ICOM大会の翌年に大規模な年次大会を開催しており、次回2020年大会が中国・北京で開催されることから、2年続けてのアジアでの大会参加はアジア圏以外の地域のメンバーには難しいであろうことは大会前から予測されていた。しかし、いずれも合同セッションではあったが、3回のセッションでは前回のミラノ大会とは違って多くのメンバーが発表者も含め参加し、活発に意見交換がなされる場面が多く見られた。また、オフサイトミーティングについては、移動手段の関係から参加者を45名と限定せざるを得なかったが、募集を始めて1ヶ月も経たないうちにほぼ定員に達し、キャンセル待ちが出るほどであったということで、委員長や総務担当理事からは、今回の京都大会はこれまでの大会の中で一番人気の高い、関心を集めた大会であったという言葉をいただいた。また、東北でのポストカンファレンスツアーは、何よりも有意義な経験であったというコメントをいただいている。

3) 今後の展望

ICOM-CCにとって、オフサイトミーティングとポストカンファレンスツアーで、東日本大震災による被災文化財の保存・修復および安定化処理の現場を視察したことは非常に貴重な経験となった。発災から8年が経過した現在でも、まだ半数以上の被災文化財が未処理のまま残されている現状を知ったメンバーからは、ICOM-CCのネットワークを通じての全面的な協力の申し出とともに、継続した協力体制の構築の提案などもなされている。また、現在日本側が抱えている多くの課題についても2020年のICOM-CC北京大会などで積極的に発信すべきだとも強く勧められている。ICOM-CCと日本の博物館が文化財の保存・修復という問題に協同で取り組み、その成果を広く発信することは、世界各地の様々な被災文化財の保存・修復活動とっても貴重な情報提供となる。今回築くことができた絆を将来に向けて強化していくための方策を、ICOM-CCと日本側双方が協力して検討していくことが強く期待される。



2



3

ICOMAM
武器・軍事史博物館国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

Authenticity in Cultural Differences: Concept or Object?
真正性と文化的差異―「概念」対「実物」

報告者名：
遠藤 楽子（東京国立博物館）

開催日程：

9.2 @国立京都国際会館：
ICOMAM総会、研究発表

9.3 @国立京都国際会館：
研究発表

9.4 @稲盛記念会館：
ICOM COSTUMEと合同セッション；研究発表

9.5 @大阪市平野区大念仏寺・京都国立博物館：
オフサイトミーティング；刀鍛冶実演見学（大念仏寺）、
特別観覧および意見交換（京都国立博物館）

京都大会概要及び所見：

1）内容

今回の参加者は、9月2日が23名、3日は28名、4日は約70名、5日は30名であった。このうち5日の参加者はアジア・中東4名（イラン、オマーン、アゼルバイジャン、日本）、北米8名（米国、カナダ）、ヨーロッパ16名（イギリス、ベルギー、ポーランド、スウェーデン、エストニア、ロシア、フィンランド、ブルガリア、スロベニア、オランダ）であった。2日はスウェーデン、スペイン、ロシア、韓国から計5人による研究発表があった。3日はオランダ、日本、米国、カナダ、エストニア、イランから計7人による研究発表があった。4日の合同セッションでは11人の発表者があったが、このうちICOMAMからは4名（アゼルバイジャン、スウェーデン、ベルギー、オランダ）が研究発表を行なった。

研究発表を受けた議論の例として、ロシアの中央軍事博物館での教育普及活動として紹介された「フラッシュモブ」（公衆の中で突然始まる演奏や踊りなどのパフォーマンス）は、「本当に偶発的に行われたか（つまり、当局は承知しているか）」、というユーモアを含んだ質問が英国の学芸員から投げかけられ、これにロシアの学芸員が応じる場面に、小規模な委員会ではあるものの、多様な軍事的立場を持つ国のメンバーが学術的交流を通じて和やかな関係性を築いている様子が窺え、印象的であった。また、韓国の戦争記念館からは子供ミュージアムの紹介があったが、対象年齢、子供向けに展示内容をどのようにアレンジしているか、などの実際的な質問があった。これに加えて、同館はまだ完結していない朝鮮戦争に関連する記念物でもあることから、大会テーマの「博物館の定義」にかかわり、戦争関連施設をそれぞれの国ではどう扱っているかなどの情報・意見交換もなされていた。人数は小規模ながら活発な意見交換の場であった。


1

1. 国立京都国際会館での会議風景
2. オフサイトミーティング（大阪・大念仏寺）
3. オフサイトミーティング（京都国立博物館）

5日のオフサイトミーティングは京都国立博物館・末兼俊彦主任研究員の協力による。午前中はICRなど他の委員会との合同セッションとして大阪市平野区を訪れ、同区大念仏寺にて刀剣鍛錬の実演を視察した。実演は奈良県桜井市の月山日本刀鍛錬道場の刀匠が行なった。刀剣制作に関わる宗教的な側面の理解のため、同寺の僧侶および地元の刀研師である真津仁彰氏による火入れ儀式から一連の作業を見学、参加者も実際に鍛錬を体験した。併せて同寺構内の宝物殿にて月山派の制作になる現代の刀剣類を視察した。こうした機会の提供に対し、ICOMAMと参加者それぞれの博物館から出版物を持ち寄り、平野区のコミュニティーミュージアム（代表：全興寺　川口良仁住職）に寄贈した。午後は京都国立博物館にて末兼主任研究員が日本における美術品としての刀剣について発表をしたのち、同館技術参考館にて教育普及活動用の刀剣や鎧を使った取り扱いの実習を行なった。参加者も鎧のレプリカを実際に身に着けるなどの体験をし、理解を深めた。最後に、末兼主任研究員の取り扱いを見ながら、同館所蔵および寄託の国宝・重要文化財指定の刀剣・刀装具を熟覧した。参加者からは、それぞれの館で所蔵している日本由来の武器武具類に関する質問などもあり、日本古来の刀剣・鎧、その製作と日本での受容を中心に理解を深め、また、会員の多数がヨーロッパ圏の博物館に所属しているICOMAMにとっては日本の専門家との交流の足掛かりとなるミーティングであった。夕刻、市内ビアガーデンに移り、懇親会を行なった。次回年次大会は2020年、トレド（スペイン）にて行なわれる。

2）京都大会の評価と課題

本委員会には京都大会時点で日本人会員の在籍がなかったため、筆者は準備期間の途中からオフサイトミーティングを中心に運営にかかわる形となった。理事会メンバーが全員ヨーロッパの会員であり、連絡調整等に時間がかかることもあったが、最終的には理事会、参加者の双方より、京都大会・委員会双方についておおむね高い評価を得られたと思う。特に5日のオフサイトミーティングは、特に日本の武器武具に対する十分な経験がないまま東アジアの収蔵品を担当しているという学芸員から満足の声が上がっていた。参加者も、学芸員だけでなく運営サイドや館長クラスなど、幅広い職種にわたったため互いに交流を深める大きな機会となった。課題としては、参加登録者などの情報共有が大会事務局と委員会との間で十分にできなかった様子がうかがえたほか、オフサイトミーティングにかかる経費の精算について、海外送金や請求書払い等の仕組みが関係者間で十分な共通理解がされないまま大会を迎えたことが挙げられる。その結果大会前に周知できる事項が少なくなってしまい、せっかくの日本大会の機会に日本の非会員の参加や、新会員の登録を呼び掛けることが十分にできなかったのは反省点である。

3）今後の展望

ICOMAM会員の属する国・地域は、現在ヨーロッパが大多数ではあるもののイギリス、ロシア、米国、オランダ、ベルギー、東欧や北欧諸国、アラブ系等、軍事的歴史的関係を超えて幅広く、小規模ながら博物館幹部クラスなど学芸員以外の会員もおり、専門性も古代、中世、近代、保存修復、などさまざまである。設立50年記念論文集を編纂するなど、学術活動を通した結びつきも強く、会員間の個人的な関係は特に親しく和やかな様子があった。年次大会には近年は韓国、中国から、さらに京都大会では日本からも発表者があり、理事会では今後日本にネットワークを広げることに大変意欲的である。委員会の英語名は「博物館」だけでなく「コレクションを持つ機関」も含むので、日本からも博物館だけでなく記念館、武器や軍事史を専門とする研究機関、専門館ではないが所蔵品に何らかの軍事史関連品を含む機関など、幅広い方面からの加入が実現すれば、多様性のある充実した交流が可能であると感じた。


2


3

ICOMON
貨幣博物館国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

Numismatic Museums as Cultural Hubs: Future Perspectives
文化をつなぐ貨幣博物館―将来への展望

報告者名：

川仁 央（コインみゅーじあむ準備室）

開催日程：

9.3 @国立京都国際会館：
委員長・開催国挨拶；研究発表；拓本ワークショップ

9.4 @稲盛記念会館：
研究発表；ICOMON総会

9.5 @造幣局／造幣博物館、尼崎信用金庫コイン・ミュージアム／世界の貯金箱博物館、黒川古文化研究所：
オフサイトミーティング

京都大会概要及び所見：

1）内容

ICOMON会員ではない大会参加者も含めセッションには約40名、オフサイト・ミーティングには37名の参加者があったが、オフサイト・ミーティング参加者名簿から確認できたICOMON会員は27名であった。その所属は、スミソニアン博物館（アメリカ）、ボンヤード財団文化機構（イラン）、マンディリ銀行博物館（インドネシア）、インドネシア中央銀行博物館、スイス国立博物館、スウェーデン王立貨幣博物館、ノルデア銀行博物館（ノルウェー）、パキスタン中央銀行博物館、リトアニア中央銀行貨幣博物館、マレーシア中央銀行博物館、メキシコ中央銀行、上海財経大学商学博物館、ナイジェリア中央銀行、フィリピン中央銀行、韓国中央銀行博物館、モザンビーク中央銀行である。

日本のICOMON会員3名は、京都会合の企画・調整と資金調達のため、日本博物館協会の指導を受けて「ICOM貨幣博物館国際委員会日本部会」を任意に設立し、同部会の目標を以下のように設定した。

1）「ICOM京都大会」、「ICOMON京都会合」を成功させるために最善をつくすこと。
2）世界各地からの貨幣・銀行博物館関係者に充実した研究交流の機会を提供すること。
3）世界の貨幣・銀行博物館コミュニティの強化に貢献すること。
4）日本の貨幣・銀行博物館とその活動の現状、収集界を含めた貨幣界の現況を、刊行物、パンフレットなどによって伝えること。
5）ICOMONにおける日本メンバーのプレゼンスを向上させること。



1

1. 拓本ワークショップ
2. 造幣局での集合写真
3. 黒川古文化研究所の特別展示

同部会の活動の成果の1つが、会合参加者に配布した「ICOMON京都会合パック」である。造幣局、造幣博物館、国立印刷局、お札と切手の博物館、日本銀行貨幣博物館、七十七銀行金融資料館、常陽銀行常陽史料館、千葉銀行ちばぎん金融資料室、山梨中央銀行金融資料館、八十二銀行八十二文化財団スペース82、三菱UFJ銀行貨幣資料館、百五銀行歴史資料館、山口銀行やまぎん史料館、日本貨幣商協同組合、泰星コイン株式会社、書信館出版株式会社、株式会社ワールドコインズ・ジャパン、日本貨幣協会、外国コイン研究会など、関係機関、金融機関、博物館・展示施設、貨幣業界、収集研究家団体などに事業案内、博物館・展示施設ガイド、刊行物、機関誌、専門誌の提供、寄贈をお願いし、さらにこれらを一括して収める古和同開珎銀銭をデザインしたトートバッグを寄贈いただいた。

発表セッションは、Roles of numismatic museums within the community（地域社会における貨幣博物館の役割）、Diversity and identity（多様性とアイデンティティ）、Financial education（金融教育）、Sustainability of numismatic ollections（貨幣コレクションの維持）の4つのサブテーマで行われ、11件の発表があった。日本からは2件の発表を行った。

セッション枠内で、北宋銭の研究で高名な吉田昭二氏を講師に招き、拓本ワークショップ（Takuhon: Ink-rubbing Numismatic Archiving Workshop）を開催した。拓本は、東アジアの銭貨の記録・研究に独特の技法であり、200年以上前に江戸時代の収集家が作成した拓本帖の閲覧なども行った。

オフサイトミーティングでは、Experience the Diversity of Numismatic Museums in the Kansai Region of Japan（関西地域の貨幣関係博物館の多様性を探る）をテーマに、大阪の造幣局／造幣博物館、尼崎の尼崎信用金庫コイン・ミュージアム／世界の貯金箱博物館、西宮の黒川古文化研究所を訪れた。造幣局では、博物館見学の他に、工場見学と銭貨鋳造ワークショップも行った。地域密着型の活動を行っている尼崎信用金庫の施設では、貨幣文化に関連する施設の多様性を実地に見学した。黒川古文化研究所では、当日は休館日のところICOMON一行のために特別に開館し、日本の古札（藩札類）・初期近代紙幣、天正菱大判など古金銀貨幣の解説展示をしていただいた。バス移動中、難波宮跡、大阪城天守閣、この3月に復元成った尼崎城天守閣、六甲の山並みなども車窓から案内した。

2）京都大会の評価と課題

京都会合のためにICOM貨幣博物館国際委員会日本部会が企画した事柄の費用は、すべてカレンシー・リサーチ、コインみゅーじあむ設立準備室、泰星コイン株式会社、書信館出版株式会社からの協賛金によって賄った。主な支出項目は、ワークショップ参加者全員に配布した「拓本キット」（古銭を含む）、オフサイト・ミーティング移動のための小型バス2台の貸し切り、尼崎のホテルでのランチ（スタンダード、ハラール、ベジタリアン）などである。国立京都国際会館への物品送付、ワークショップ講師の受け入れという日本部会の要望に大会運営事務局から十分な協力は得られず、講師の受け入れも協賛金充当により大会参加登録の一日券を購入することで対応したが、日本部会が実現した事柄の多くについて参加者から「amazing」の声が聞かれ、会合は大成功であった。ICOMON総会では日本から理事も選出され、日本部会の5つの目的は達成されたと考える。

3）今後の展望

発表セッションの質疑応答では、キャッシュレス社会の進展著しいスウェーデンで子供たちへの現物無き「お金教育」が可能かなどの議論も行われた。こうした現代的な貨幣博物館の課題は、今後もICOMONが重要な論議の場となっていくだろう。ICOM総会での「博物館の定義」改訂案の採否については、立案においてICOMONへの意見聴取が行われていなかったため、委員会として反対した。なお、各国の中央銀行の代表者が多く参加する中、日本で開催されたICOMON会合においても、日本を代表する貨幣博物館である日本銀行の博物館のプレゼンスは一切なく、常設展示図録の寄贈依頼も断られたことは、日本の行政における制度的な課題として記しておきたい。ICOMON年次大会は2021年にポーランドのワルシャワでの開催が決まっているが、2020年の開催地が決まっておらず、現在ICOMON理事会において緊急課題としてメールでのやり取りやビデオ会議が頻繁に行われている。理事になった筆者も、これまでに培ってきた人脈と経験を生かして積極的にこの選考プロセスに参加している。


2


3

ICR
地方博物館国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

Regional museums encouraging sustainable use of cultural and natural heritage
文化・自然遺産の持続可能な利用を促進する地域博物館

報告者名：

五月女 賢司（吹田市立博物館）

開催日程：

8.31 @吹田市立博物館、茨木市立キリシタン遺物史料館、高雲寺：ICR 理事会（旧理事）、ICR プレカンファレンス・プログラム

9.1 @国立京都国際会館：
ICR 理事会（旧理事）

9.2 @国立京都国際会館：
ICR 研究発表、ICR ボード選挙について打合せ

9.3 @国立京都国際会館：
ICR 総会・理事選挙、ICR 研究発表

9.4 @稲盛記念会館：
ICR 研究発表、ICR 理事会（新理事）、みゅぜコット

9.5 @平野・町ぐるみ博物館：
ICR オフサイトミーティング―見学会、オフサイト・セッション「国際フォーラム：エコミュージアムと地域博物館」、平野夏祭りフェスティバル

9.8–10 @北海道伊達市、洞爺湖町、白老町、平取町：
ポストカンファレンスツアー

京都大会概要及び所見：

1）内容

今年のICR年次大会の研究発表（9月2～4日）及びオフサイトミーティング（9月5日）の参加者は各日100人以上であり、これまでの3年に一度の大会と比較しても、非常に多かった。その多くが初めての参加者で、京都での開催だったことなどによってICOM京都大会全体の参加者が過去最多を記録したことと比例するように、ICR年次大会も盛り上がった。発表者は、口頭発表が43件79人、ポスター発表が22件33人、合計65件112人（共同発表者を含む）であった。そのほか、基調講演を依頼した方が2人であった。発表者の出身地域は、東アジア、東南アジア、南アジア、西アジア、ヨーロッパ、北米、中南米だった。想定を大幅に超える発表申込のため、多くをポスター発表に切り替えたほか、一部発表を断らざるを得ない事態となった。

今回は初めての日本開催であり、参加者の多くが日本に期待しているように感じた。ICRは、9月5日に大阪の平野・町ぐるみ博物館（都市型エコミュージアム）への訪問を計画していたため、テーマを「文化・自然遺産の持続可能な利用を促進する地域博物館」とした。これまで、ICRの発表は比較的歴史民俗系が多かったが、今回は人文系だけでなく、自然史系博物館関係者による発表も実現した。

京都大会が始まる前日の8月31日には、プレカンファレンス・プログラムを実施し、日程が詰まっていたため断念せざるを得ないと考えていた、私が所属する吹田市立博物館への訪問をここで実現させることができた。特に、2013年のリオデジャネイロ大会で発表し好評を得た、簡易風呂の展示を見ていただくなど、当館にとっても一定の国際発信を実現できたといえる。当日は、隣接



1

1. 国立京都国際会館での発表風景
2. 新しく選出された理事
3. 平野のオフサイトミーティング

自治体の茨木市立キリシタン遺物史料館と隠れキリシタンの遺物が残っている高雲寺も訪問し、好評であった。

9月2日から4日までの研究発表は多くの発表者と参加者に恵まれ、テーマに沿った発表や質疑応答・議論が展開された。また9月4日は会場が稲盛記念会館のため、研究発表の後は、そのまま北山エリアでのソーシャルイベントに参加してもらうことができた。私も企画に携わった「みゅぜコット2019 in 京都」は、9月5日のオフサイトミーティングも合同で実施した「小規模ミュージアムネットワーク」と、大阪府高槻市の今城塚古墳でイベントを開催している「はにコット」の作家グループ、京都府内の博物館ネットワークである「京都府ミュージアムフォーラム」の3つの団体、そしてICOM京都大会組織委員会が協力して開催した。様々な博物館や作家の紹介、グッズ販売、ワークショップ開催、ポスター展示などをし大変賑わった。多くの参加者にとって外国人専門家と交流する絶好の機会となった。

9月5日は、大阪の平野・町ぐるみ博物館での見学会とオフサイト・セッション「国際フォーラム：エコミュージアムと地域博物館」を実施した。ICOM地方博物館国際委員会(ICR)、小規模ミュージアムネットワーク(SMNJ)、日本エコミュージアム研究会(JECOMS)、ICOM日本委員会の4者での合同セッションとしての実施であった。この日のために、100人を優に超える平野の住民の方々にご協力いただき、午前の見学会での様々なイベントやデモンストレーションの実施、昼食・夕食の無償提供、夜の平野夏祭りフェスティバルでのだんじりや吹奏楽団の出演を実現していただいた。この日がICR年次大会のクライマックスと言っても過言ではなく、150人近くの参加者からは大変な好評を得た。多くの参加者が平野のパワーに圧倒された日となった。

9月8～10日の北海道伊達市、洞爺湖町、白老町、平取町へのポストカンファレンス・プログラムはICR、ICMAH、ICMEの委員長からの協力を得て、伊達洞爺湖ミュージアム地域振興プラットフォームとICOM京都大会2019組織委員会が主催、ICOM京都大会2019ポストカンファレンスin北海道・伊達洞爺湖実行委員会が実施した。北海道では、国土交通省北海道開発局が推進する地域パートナーシップ活動「縄文文化を活用した観光地域づくり」のメンバーが中心となって、市町立の小規模館、自治体の観光振興課・観光協会、地域の大学や旅行会社などを巻き込み、博物館や西胆振の貝塚を活用した観光振興策を考える「伊達洞爺湖ミュージアム地域振興プラットフォーム」を発足させた。このプラットフォームが、北黄金貝塚(伊達市)や入江高砂貝塚(洞爺湖町)、2019年4月に開館したばかりの「だて歴史文化ミュージアム」などの観光振興策を考える中で、ポストカンファレンスの実施に至ったものである。2日目に開催したシンポジウムも、地域振興を考える上で、大変示唆に富んだ内容となった。

2) 京都大会の評価と課題

9月5日開催の平野・町ぐるみ博物館でのオフサイトミーティングをはじめ、今回のICR年次大会は、成功裏に終わったといって良い。平野の100人を超える住民の全面的な協力なくして、オフサイトミーティングの成功はなかったといえる。また、研究発表やプレカンファレンス、ポストカンファレンスも好評であった。各受け入れ先機関・団体のほか、吹田で培った人脈を駆使して集まっていただいた10人の通訳ボランティアも大いに活躍した。9月4日の同時通訳による不快な対応や、ボランティアへの指示命令系統の不明瞭など、特に運営委託業者に関連したいくつかの課題は残ったが、多くのICR参加者の好反応から、外国からの参加者は大きな満足感とともに帰国したと思われる。

3) 今後の展望

今回は、博物館の新定義案についての議論が、良い意味で他のセッションでの議論の活性化につながったと思われる。ICRは今後、エコミュージアムやコミュニティ・ミュージアムのグループとの統合の可能性もあり、コミュニティとのつながりについての研究や実践を進める上でも益々理想的な委員会となるだろう。ICR年次大会では各国の事例を聞くことができるほか、開催国の現地視察もある。日本の地域博物館にとっても参考となる取り組みが多いため、私自身、今後のICR年次大会にも積極的に参加し、議論を深める必要性を感じているが、日本の多くの地域博物館の職員にも参加いただきたい。


2


3

ICTOP
人材育成国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

ICTOP as a Hub of Museum Professional Training: Reflecting on the past 50 years, envisioning the next 50 year
博物館人材育成の要：50年を振り返り、50年先を見据えて

報告者名：
井上 由佳（明治大学）
江水 是仁（東海大学）

開催日程：

9.2 @国立京都国際会館：研究発表；ワークショップ

9.3 @国立京都国際会館：ICOM-UMACと合同セッション
およびICTOP単独の研究発表；ワークショップ

9.4 @稲盛記念会館：研究発表；ICTOP総会

9.5 @京都造形芸術大学、rondokreanto、京都国際マンガミュージアム、平野まちぐるみミュージアム：
オフサイトミーティング（ICRと合同開催）

京都大会概要及び所見：

1）内容

9月2日の午後は理事会が開催されたが、特段に話し合う項目もなく、理事同士で情報交換する時間となった。その後、14時半より最初にBabic委員長からの挨拶があった。その後、ICOM京都大会の窓口を務める江水と井上のそれぞれから、会場に向けて京都大会のICTOPセッションに向けたメッセージを伝えた。

続いて、ポルトガル、ノルウェー、カナダ、そしてオランダの会員からの事例発表があった。

休憩をはさみ、イタリア、ロシア、ブラジルからの発表があった。

最後の時間帯にはフィンランドの会員によるワークショップが開催された。そのテーマは、未来のミュージアムの専門家に求められるコンピテンシーは何であるのかを明確にするために、フィンランド博物館協会によって実施されたウェブ調査の結果を紹介しつつ、それを体験できるグループワークが行われた。5つのコレクションの種類、立地などの条件の異なる仮想ミュージアムのスタッフに求められるコンピテンシーを考えるという内容であった。

9月3日も、UMACとの合同セッションで並行して、前日に続き会員による発表がされた。エジプト、ジョージア、カナダ、イラン、ギリシャ、カナダ、日本、クロアチアからの発表があった。

続いて開催されたワークショップでは、フランスの会員がとりまとめ、ヨーロッパで採用されているミュージアムで働く人材に求められるフレームワークの紹介と、それがどのように適応できるのかについて考える内容であった。

その後、米国、スイス、アルメニア、カナダ、日本からの発表があった。日本の学芸員養成課程を履修する学生の動機について



1

1. ICTOP発表の様子
2. オフサイトミーティング
3. 新理事メンバー

データをもとに発表した。高校生以上で学芸員が認識されるという結果は、発表者は遅いと認識していたが、米国の会員からは妥当な結果ではないか、米国ではもっと遅いかもしれないという反応があった。国際比較の視点も興味深い。(井上)

9月4日は、稲盛記念会館を会場として研究発表が行われた。この日は日本、アジア太平洋と人材育成というセッションとして、英語から日本語への同時通訳が入った。そのため、会場には参加者約20名のうち、日本からの参加者が多くみられた。発表は、日本、台湾、中国、シンガポール、韓国から11題あった。江水も井上、浜田と共同発表として、日本の大学の学芸員養成教育の特徴について発表を行った。京都大会からかもしれないが、アジア太平洋で一つのセッションができたことは、アジア太平洋諸国における博物館の人材育成の取り組み事例を世界各国に伝えることができたと思われる。とても意義深い出来事であったと思われる。

発表ののち、ICTOP発表の総括とICOTOP総会が開催された。総会では委員長選挙も行われた。候補者の所信表明ののちに投票の結果、Darko Babic氏が委員長再任、江水を含む8名の理事が当選となった。

9月5日は、京都造形芸術大学、rondokreanto、京都国際マンガミュージアムの協力を得て、ICTOP独自のオフサイトミーティングを行った。参加者は日本、韓国、台湾、シンガポールのほか、バルバドスやアメリカ合衆国、カナダ、ヨーロッパ諸国から、23名であった。京都造形芸術大学では、芸術系大学における学芸員養成の在り方、また京都造形芸術大学独自の学芸員養成教育の取組を紹介いただいた。また同大学内にある茶室にて茶席を設けていただいた。

昼食会場は、京都造形芸術大学から徒歩で10分程度にある、初代国立民族学博物館館長の梅棹忠夫氏の自宅を改装したrondokreantoとした。国立民族学博物館開館に向けて、夜な夜な多くの方と語り合ったこの場所で、ICOM関係者が集い、博物館について語り合う場としてはこれ以上ない場であると考え、昼食会場とした。京都・美山産のジビエに舌鼓を打ち、また梅棹忠夫氏や民俗学博物館関係の話題で参加者は盛り上がった。

京都国際マンガミュージアムでは、日本文化を象徴するマンガの収集や研究、その成果を博物館に還元するための活動や外国の方に対する対応など、担当者よりお話をいただいた。オフサイトミーティングは同ミュージアムで解散となったが、参加者の多くは残ってマンガミュージアムを長い時間をかけて視察したようであるった。(江水)

2) 京都大会の評価と課題

9月3日のICOM-UMACとの合同セッションと同時間帯にICTOPの発表があった。本来であればICTOP会員はUMACに参加すべきかと思われるが、それができなかった。合同セッションとICTOPの発表の時間帯をずらすなどで、対応できたのではないか。

オフサイトミーティングの予算がほとんどないことから、公共交通機関を使っての移動となり、その調整に大きな労力が割かれた。オフサイトミーティングの予算確保が課題かと思われる。(江水)

昼食の渡し方はもっと良いやり方があったのではないだろうか。また初日のオープニングパーティーでは、一時間以上、パフォーマンスを見ない会員は食べ物を前に行列したまま食べることができずひたすら待たされた。なぜ全体で一斉に食べなければならないのか。参加しない人を別会場に誘導するなど、工夫すべきであろう。発表以外の場面で残念な時間を過ごすこととなった。(井上)

3) 今後の展望

日本の人材育成の実態と課題などが世界の研究者に伝わっているとは言い難いことが分かった。そこで、全国大学博物館学講座協議会、全日本博物館学会、日本ミュージアム・マネージメント学会の研究発表や論文など、日本の研究活動の成果をICTOPやICOMに向けて積極的に情報発信し、日本の人材育成の現状と課題、そして世界に向けて働きかける活動が必要かと思われる。(江水)

人材育成がテーマのICTOPの場合、トピックを持たせて発表を募り、トピックごとの発表をしていく方が議論が深まるかもしれない。また全体的に、議論する時間が不足しているので、会員同士で気軽に話し合えるような場所と時間設定をしてもいいのではないだろうか。これは国際委員会ではなく、全体レベルで検討していただきたい。(井上)


2


3

INTERCOM
博物館マネージメント国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

How Far Can We Come With Tradition? Shaping the Future
伝統と共にどこまで前進できるか？　未来を築くために

報告者名：
眞木 まどか（日本科学未来館*）

開催日程：

9.1 @国立京都国際会館：
理事選出選挙

9.2 @稲盛記念会館：
ICOM-CC, ICOM SEEと合同セッション―研究発表

9.3 @国立京都国際会館：
ICOM SEEと合同セッション―研究発表

9.4 @稲盛記念会館：
ICOM SEEと合同セッション―研究発表

9.5 @京都国際マンガミュージアム：
オフサイトミーティング
―館内見学を含むワークショップ

京都大会概要及び所見：

1）内容

会議の参加者は欧米からが大半で、毎日、およそ30～50名程度の参加者があった。韓国や日本等のアジアからの参加者は毎回10名程度であった。プログラムでは、24組の発表者のうち、ヨーロッパからは14組、北米2組、ラテンアメリカ1組、アフリカ1組、中東1組、アジア・太平洋から5組（うち日本から1組）であった。

INTERCOMは、9月1日夕方に理事選出選挙が行われ、委員長であったデンマークのOle Winther氏に代わり、クロアチアのGoranka Horjan氏が委員長に選出された。

9月2日～4日は、ICOM-CC（保存国際委員会）とICOM SEE（東南ヨーロッパ地域連盟）との共同セッションが行われた。9月2日のテーマは、「未来の形成、少ない労力で大きな成果を」である。対話やパフォーマンスを通して文化理解を促進するプログラムの紹介等、ミュージアムマネージメントの現場の事例が発表され、活発な質疑応答がなされた。そのほかにも、文化的な伝統を守るためにNGOとパートナーシップを構築した事例等の発表もあった。高齢社会、多様性や平等、インクルーシブといった現代の社会問題に言及する発表も多々あった。

9月3日は、ICOM SEEとの共同セッションで、前半のセッションは「持続可能な博物館マネージメント」がテーマであった。「スローミュージアム」という新しいマネージメントの考え方が発表されたり、現代において「植民地時代」をどのように伝えるか試行する活動等が発表された。特に、自らの博物館のアイデンティティをもう一度見つめ直すことで、博物館がやるべきことが立ち上がるといった発表に多くの質問があがった。後半のセッションでは、「人権と環境のマネージメント」をテーマに行われた。日本


1

*2019年9月1日現在

1. 稲盛記念会館での会議風景
2. 質疑応答
3. オフサイトミーティングのようす

からは環境汚染によって引き起こされた人権問題についての発表があった。

9月4日も、ICOM SEEとの共同セッションであった。前半のセッションでは「団結する博物館」をテーマに発表が行われた。美術館のコレクションをデジタルアーカイブし、全データを著作権なしに公開した事例が発表された。本件については、聴衆からたくさんの質問があり関心の高さが伺えた。また、博物館がファンドレイジングのために、外部のパートナーと持続可能な関係を築くことに関する調査の発表があり、聴衆から調査に対する多くの助言があった。後半のセッションでは「博物館の影響」がテーマであった。ミュージアムのインパクトを測るスケールについての発表や、博物館を通して自国の歴史をプロモーションする活動、ロボットを来館者サービスに使う事例等が報告された。博物館が持つコンテンツを社会へより広く発信する取り組みや、コンテンツをデジタル化することによってインパクトを高める事例を聞くことができた。

9月5日には、京都国際マンガミュージアム（以下、マンガミュージアム）でオフサイトミーティングが行われた。中国、マレーシア、オーストラリア、南アフリカ、フランスなど約15カ国から約50名の参加があった。はじめに、事務局長である山元英昌氏から、マンガミュージアムの設立の歴史や、京都精華大学と京都市との協業についてマネージメントの視点から話をいただいた。続いて、伊藤遊研究員からは、「マンガ」のミュージアムが日本全国で設立されるに至った経緯や、現在行っている活動等、学芸の視点からレクチャーをいただいた。そのあと、4～5名のグループに分かれ、マンガミュージアムが文化のハブとなり取り組めることは何かを中心議題に据えて、ワークショップが実施された。各グループが館内を自由に観覧しながら、交流を深めていたのが印象的であった。最後には、各チームからマンガミュージアムへの提言が発表された。例えば、ミュージアムの立地の良さと、国際的な「マンガ」への注目度を鑑みると、マンガミュージアム自体が京都という町の「玄関口」のような役割を担えるのではないか、と言った意見があがり、マンガミュージアムのスタッフも、積極的に取り入れていきたいと応じた。通訳を介しながら、様々なバックグラウンドを持つINTERCOM委員がマンガミュージアムのスタッフとともに活発に意見を交わす機会となった。

2）京都大会の評価と課題

全日程を通して滞りなくセッションを終えることができた。ボランティアはセッション開始前から発表者に対して会場の技術的支援を積極的に行ってくれていた。一方、全日を通して①発表②質疑応答という順番に終始し、全体に横軸をさしていたセッションのテーマについて議論し、深める時間はなく、物足りなさも感じた。

また、最終的に発表者が24組集まり、意見交換が行われたが、INTERCOMの京都大会への準備は全体的にスローペースで進み、日本開催のチャンスを最大限発揮することがかなわなかった。INTERCOMのHPが更新できないアクシデントや、元理事や現理事に理事選挙情報が十分に届いていない事態や、京都大会組織委員会と事務局の間でミスコミュニケーションもあった。INTERCOM事務局が英語でのコミュニケーションに慣れていない様子だったことや、窓口担当の着任時期が遅く、対面でのコミュニケーションがないまま大会への準備が本格化したことなどが起因と考えられる。

一方、オフサイトミーティングは各所から大変好評であった。他の委員会からの参加者もあった。ワークショップ中には理事から海外でのマンガの展覧会開催に関してオファーがあるなど、双方にとって良いネットワーキングの時間になったと思われる。マンガミュージアムは全館をあげて最大の支援をくださり、スタッフからはオフサイトミーティングに参加して刺激を受けたと感想をもらった。

3）今後の展望

INTERCOMのセッションでは、今日の博物館の経営・マネージメントの考え方や在り方、博物館と他のセクターの協業、将来の博物館経営を見通した新しい活動の事例など、ミュージアムマネージメントの多岐にわたるテーマが論じられた。ミュージアムマネージメントの実践に正解不正解はなく、自国の文化や制度、風土や慣習、時代に影響を受けながら常に試行錯誤されるものである。そのため、多様な参加者が、多様な経験を持ち寄り意見を交わすことが何よりも重要だろう。今後も日本からの参加者を含め、ミュージアムマネージメントについて議論が継続されることを期待する。2020年の年次大会は、アゼルバイジャン国立絨毯博物館で開催されることが決まった。日本のICOM関係者にも積極的に参加していただき、議論を深めていただくことを期待する。


2


3

MPR
マーケティング・交流国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

Transforming Museum Communication in a Changing World
変化する社会における変革するミュージアム

報告者名：
関谷 泰弘（ICOM京都大会準備室）
林 浩二（千葉県立中央博物館）

開催日程：

9.2 @国立京都国際会館：
MPRセッション；基調講演、口頭発表

9.3 @稲盛記念会館：
MPRセッション；基調講演、口頭発表

9.4 @国立京都国際会館：
MPRセッション；基調講演、口頭発表

9.5 @京都鉄道博物館：
オフサイトミーティング；京都市内ガイドツアーと博物館での議論

京都大会概要及び所見：

1）内容

3日間のセッションでは、変化する社会における変革するミュージアムを全体テーマとして、基調講演含め、合計22件（ヨーロッパ11件、アジア5件（うち日本2件）、北米3件、中南米2件、アフリカ1件）の発表があり、各日60名ほどの参加者があった。また、オフサイトセッションは46名の参加者があった。

9月2日のテーマは、「Responding Global Issues（グローバルな問題への対応）」で5件の口頭発表があった（同通あり）。最初の発表はMPRアドバイザーでICOM執行役員のCarol Scott氏（英国）による「Something to declare: marketing trust when museums are not neutral」で、neutralたりえない博物館がどのように信頼を勝ち得、安全で開かれた対話の場となりうるのかについて提案するものであった。「開かれた対話の場としての博物館」というICOM-MDPP（博物館の定義・展望・可能性委員会）による博物館の定義の見直し案に呼応する発表内容で、極めて説得的であった。また、日本科学未来館の眞木まどか氏からは、未来館における福島原発事故に関するコミュニケーション展示の事例報告があり、注目を集めた。

3日は稲盛記念会館に場所を移して「Redifining the role of Marketing and Public Relations（博物館におけるマーケティング・広報の役割の再定義）」をテーマとし、メトロポリタン美術館のKenneth Weine氏から新たな来館者に向けた取り組みの基調講演があり、それに続く形でミュージアムのコミュニケーションの在り方について、社会におけるミュージアムの役割という視点から、多様な来館者、人権や雇用など幅広い視点からの発表があった。これらは、2日目のプレナリーセッションの持続可能性、SDGsの議論をコ



1

1. 国立京都国際会館でのセッション（9月2日）
2. 花洛庵での展示解説
オフサイトミーティング（9月5日）
3. 京都鉄道博物館前での集合写真
オフサイトミーティング（9月5日）

ミュニケーションの視点からとらえなおしたものとして、ミュージアムの実践的な取組がわかる有益な議論となった。

4日は再び国立京都国際会館で「Local Communities and Musuems（地域コミュニティと博物館）」をテーマとし、地域コミュニティにとって、ミュージアムがどのように関わっていけるのか議論がなされた。基調講演は、北海道大学の佐々木亨教授から、主にミュージアム評価について、地域住民と協働できる評価づくりについて発表があり、それに続いて、パリやウェールズ、ブラジルなど、地域のミュージアムがどのように地域住民と関わりを持つことができるのか、事例を中心に7件の口頭発表があった。このような内容は、4日のパネル「ミュージアムと地域発展」とも重なりあうテーマであり、幅広い視点からの議論ができた。

5日のオフサイトミーティングでは、京都市内を公共の交通機関で巡った。花洛庵（野口家住宅）でJAPAN COLOR: Where Culture meets Nature ～日本文化を育んだ自然」展を見学し、錦市場、東寺を自由見学後、京都鉄道博物館にてセッションをおこなった。博物館では、館長挨拶後、次回、2020年9月に開催するMPR年次大会（ドイツのKasselとBerlinで開催予定）のテーマについてディスカッションし、その後、自由見学となった。

2）京都大会の評価と課題

全体を通して、本大会のテーマとも合致したテーマ設定で、幅広い研究発表と議論が行えており、参加者からもおおむね好評でよく運営できていた。ただし、今大会におけるMPRへの発表申込が過去最多となり、選考とプログラム編成の調整には苦労したと思われる。また、委員長が大会に参加できなかったため、理事は運営面でも苦労したのではないか。

オフサイトミーティングは京都市内を徒歩と公共交通で移動することにしたため、募集・事前の調整に苦労したが、当日はボランティアの的確なサポートのおかげで事故もなく、約50人の参加者からは好評のうちに終えることができた。

3）今後の展望

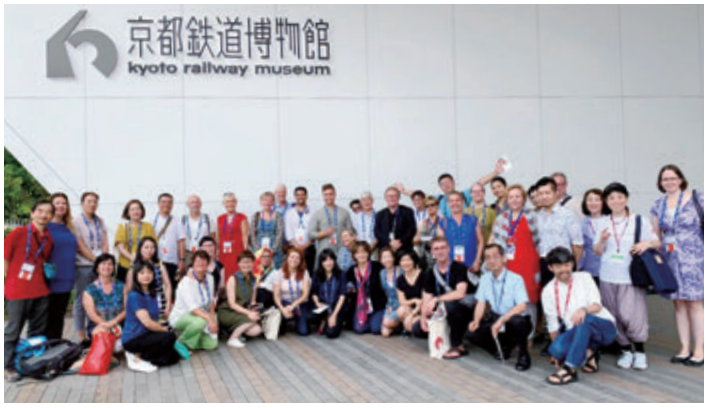
MPRは近年では、マーケティングや広報活動にとどまらない幅広い議論がなされている。日本の会員は少ないが、予備知識のないまま、参加した日本の参加者からは、予想以上に発表・討論が興味深かったという趣旨の感想をもらった。

館種を問わず、博物館が社会にどう働きかけ、コミュニケーションするのか討論する場は日本ではなかなか存在しない。この点を強調することが、博物館の教育・マネジメント・社会学等に関心がある関係者のMPRへの参加を促す上で有効ではないか。

今後は、MPRの役割をアピールして会員を増やし、年次大会に日本からの参加者を増やすことを目指していきたい。



2



3

NATHIST
自然史の博物館・コレクション国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

Natural History Museums: A Nexus between Nature and Culture
自然史博物館：自然と文化の結び・仮訳

報告者名：
亀井 修，矢部 淳（国立科学博物館）
佐久間 大輔（大阪市立自然史博物館）

開催日程：

9.1 @グランドプリンスホテル京都：
理事会，WGミーティング

9.2 @国立京都国際会館：
基調講演，NATHISTセッション1

9.3 @稲盛記念会館：
NATHISTセッション2–3　NATHIST総会

9.4 @国立京都国際会館：
NATHISTセッション4–6

9.5 @大阪市立自然史博物館：
オフサイトミーティング（NATHISTセッション7–8，Posterセッション，About the museum definition）

9.6 @琵琶湖周辺・京都市内：
エクスカーション（Nature and Culture Tour around Lake Biwa），町家で自然史展示の視察・討論

京都大会概要及び所見：

1）内容

京都で2019年9月1-7日に行われたICOM京都大会は，過去最高の4,500人以上の参加者を数えた。この大会では博物館関連の問題に関するさまざまな議論や交流がおこなわれ，セッションやエクスカーションあるいはワークショップなどを通じて，世界中の博物館の専門家や愛好家である多くの参加者が相互に交流して，博物館についての知見や経験の共有や理解を拡大した。NATHISTでは，約30か国からの約200人の参加者をホストした。NATHISTの参加者もこの大規模大会ならではの集積度を活かして，他の委員会のセッションやアクティビティ等を自由に行き来して見聞を広げていた。今回のNATHISTの会議テーマNatural History Museums: A Nexus Between Nature and Culture（自然史博物館：自然と文化の結び）は，全体テーマMuseums as Cultural Hubs: The Future of Traditionを受けたものである。

NATHISTの8つのセッションでは博物館のインタラクティブなストーリーテリング，コミュニティへの関与，市民科学との取り組みに関する講演，個々の博物館が自然と文化のギャップを埋めるために行っているような内容に加えて，国連の持続可能な開発目標（SDGs）や人新世（アントロポシーン）のような大局的な問題に取り組む大きな全体図を描くような独自の雰囲気があった。それぞれのセッションやアクティビティでは一過性の情報交換にとどまらず，国内外の友人や同僚と会い，知り合いを再確立し，自然史博物館の国際的なベストプラクティスについて互いに学び合う機会がもたれた。セッションとしての最終日の9月5日は大阪市立自然史博物館でオフサイトミーティングとして開催された。同館館長の川端清司氏をはじめとする博物館のスタッフの貢献により，実



1

1. 会議の様子（京都）
2. オフサイトミーティング（大阪）
3. エクスカーション（琵琶湖）

り深い知見や経験を共有できた。同日のセッション8として，新しいワーキンググループ・リーダーであるニコラス・クラマー博士(Dr. Nicolas Kramar)・スイス・ヴァレー自然博物館(Valais Museum of Nature)館長の進行により，アントロポシーン・セッションが開催された。これは刺激的なセッションであり，人新世の調査，展示，解釈，収集の実用性に焦点が当てられた。予定していた8つのセッションに加え，追加のセッションとして新しいICOMの博物館の定義についての議論が行われた。選定委員会の提案のままでは不完全であるとの意見が多く見受けられ，最終日のICOM臨時総会での議決に反映された。

NATHISTのエクスカーションは，数多くの湧水と水に関わる伝統とともにある針江生水の郷，琵琶湖・竹生島近くの水域，滋賀県立琵琶湖博物館など，琵琶湖を一周する刺激的な旅行であった。地質や野生動物，生活，景観などのこれらはすべて琵琶湖の水と密接な関係がある。この日をとても思い出深いものにしてくれた滋賀県立琵琶湖博物館のスタッフと地域の方々及び関係者にNATHIST国際委員会としての心からの謝意を表する。エクスカーション日の最後には，京都市内の19世紀建造の京町家，野口家住宅花洛庵で開催された展示「自然が文化に出会う場所」を見学した。これは，人間が自然に依存していることに対する認識を高めるために，日本各地の自然史博物館が自然史系資料の重要性と価値を広く社会にアピールすることを目的として，自然史系博物館8館(北海道博物館・栃木県立博物館・国立科学博物館・三重県総合博物館・大阪市立自然史博物館・櫃原市昆虫館・北九州市立自然史・歴史博物館 事務局：兵庫県立人と自然の博物館)で実行委員会を組織して文部科学省の公募事業「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」の支援を受けて行ったものである。日本の伝統文化と歴史的遺産だけでなく，日本の有形および無形の自然の恩恵の素晴らしさをも反映して評価する機会を提供した。

今回は理事選挙の時期でもあった。委員長Dr. Eric Dorfman(アメリカ)，副委員長Dr. Isabel Landim(ブラジル)，総務担当理事Lynda Knowles(アメリカ)，理 事Dr. Osamu Kamei(日本)，Dr. Anna Omedes(スペイン)，Dr. Claire Meteke(ザンビア)が退任した。2013年以来の彼らの努力と献身にNATHISTとしての謝意を表した。今回の選挙の結果，新規と再任で構成される新しい理事会が構成された。新しい理事会のメンバーは，President(委員長) Dorit Wolenitz(Israel)，Vice President(副委員長) Christel Schollaardt (Netherlands)，Secretary(総務担当理事) Phaedra Fang(Taiwan)，Treasurer(財務担当理事) Jesse Rodriquez(USA)，Board Member(理事) Shih-yu Hung(Taiwan)，Atsushi Yabe(Japan)，Dacha Atienza(Spain)，Breda Činč Juhant(Slovenia)である。日本からも引き続き選出された。

2）京都大会の評価と課題

NATHISTとして，ICOM京都準備室，同時通訳等の支援を行った全国科学博物館振興財団や，大阪市立自然史博物館，滋賀県及び滋賀県立琵琶湖博物館，兵庫県立人と自然の博物館，国立科学博物館の各館，東京を拠点としたリエゾンの亀井修，矢部淳，大阪を拠点とした佐久間大輔，関係各位に対して，「すばらしい仕事，細部への配慮，温かい歓迎」への謝意が示され，京都大会が全ての面からスムーズに成功したことが確認された。次回2020年のNATHISTの年次大会は，英国エジンバラで開催される。

※NATHIST2019の基調講演，口頭及びポスター各セッションの発表者のプロシジャーは，大阪市立自然史博物館リポジトリサービスのアイテムリストProceedings of ICOM NATHIST Kyoto-Osaka 2019で読むことができる。https://omnh.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=257&lang=english

大阪市立自然史博物館でのオフサイトミーティングや滋賀県立琵琶湖博物館がホストを務めたエクスカーションには多くに参加者が出席し，地域性の特性に関係させながら議論や経験を共有した。新しい博物館定義についても，国内外の多様な視点から議論を行いNATHISTとしての方針を共有した。日本からの参加者が京都大会で手にした国際的関係を継続・発展することにつなげる方策も必要と考える。

3）今後の展望

NATHISTは自然環境問題や動植物保護などの国際的なNGOなどとも関係性を持っている。これらの組織は，利害の対立する国際条約の制定などにも関わっている場合が多い。次期のNATHIST理事にも日本からのメンバーを選出されたように，京都大会を一つの区切りめとしながら，これからも積極的に国際的課題にコミットし，世界の潮流を作る側にとどまり続ける必要がある。


2


3

UMAC
大学博物館とコレクションの国際委員会

京都大会での委員会テーマ：

University Museums and Collections as Cultural Hubs: The Future of Tradition
文化をつなぐ大学博物館とコレクション―伝統を未来へ

報告者名：

福野 明子（国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館）

開催日程：

8.31 @京都外国語大学：
UMAC理事会

9.1 @京都国立博物館：
3つのワークショップ

9.2 @国立京都国際会館：
オープニングセッション～研究発表セッション2

9.3 @国立京都国際会館：
研究発表セッション3（ICTOPとの合同セッション）
～セッション4；総会

9.4 @稲盛記念会館：
研究発表セッション5～セッション13

9.5 @京都外国語大学：
オフサイトミーティング、研究発表セッション14～セッション15および京都市内の大学博物館へのバスツアー

9.9–10 @東京、慶應大学アート・センター：
ポストカンファレンスセミナー「文化コモンズとしての大学ミュージアム：ミュージアムにおける領域横断型研究・教育」University Museums as Cultural Commons: Interdisciplinary Research and Education in Museums

京都大会概要及び所見：

1）内容

UMAC京都大会のテーマ「文化をつなぐ大学博物館とコレクション―伝統を未来へ」は、UMAC Kyoto 2019 Steering Committeeが提案した。大学博物館は、その規模や専門が多種多様であるため、京都大会では各国の大学博物館が課題を共有し議論できる場を提供することを目指した。その結果、UMAC大会史上、最も参加者が多い大会となり、41の国と地域から約200人の登録・参加があった（UMAC独自調査）。

Call for Proposalsには32の国と地域から123件の応募があり、3つのパラレルセッションで対応することとなった。最も応募が多かった国はアメリカで12件、続いて日本からの10件、イタリア、台湾からの9件と続く。プログラムは15のセッションで構成され、実に多彩な内容となった。またUMAC初の取り組みとして、UMACの紀要であるUMAC-Jに、すべての発表要旨を掲載し、大会開始以前にオンラインで公開した。（http://umac.icom.museum/umac-journal/）

9月1日のPre-Conference Workshopでは、「ミュージアム・ブートキャンプ：いかに親機関の元で生き残り、成功するか」（終日プログラム）、「大学ミュージアムの存在意義」（午前プログラム）と「スティーリング・カルチャー：大学博物館における適切な配慮を必要とする資料をめぐる課題」（午後プログラム）が京都国立博物館で開催され、大学博物館関係者のみならず、多くのミュージアム関係者が関心を寄せるテーマだったが、日本からの参加者が非常に少なかったのが残念である。

9月2日は、オープニングセッションに引き続き、「〈大学内にある博物館〉か〈大学博物館〉か」という命題で発表と討論が行われ



1

1. UMAC参加者グループ写真
2. 京都国際会館でのポスターセッション
3. 京都外国語大学でのオフサイトセッション風景

た。

9月3日は、「ブラジル、リオデジャネイロ連邦大学国立博物館の火災後の救出活動：報告と教訓」と題した基調講演で始まった。次のセッションでは、ICOMの助成を受けてICTOPとともに進めてきたP-Musのプロジェクトが紹介された（「高等教育における博物館業務の専門化：グローバルなアプローチ」、ICTOPとの共同セッション）。なお、同会場で44件のポスターも掲示された。当日プログラム最後のUMAC総会では、2019年度UMAC AWARDの発表と新しいボードの選出があった。

9月4日は、サテライト会場（稲盛記念会館）で3つのパラレルセッションが開催された。セッションテーマは、多様な大学博物館関係者からの発表をできる限り網羅すべく、多岐に渡るものとなった：「デジタル化する時代における大学博物館の試み」「国際的な協働」「国内および国際的な調査と視点」「教育の中心となるコレクション」「評価、査定、認定」「大学博物館とコレクションにおける政治的、文化的、社会的課題」「コレクションへの新たなアプローチ」「新たなアイディアと新たな博物館：未来を再考する」「大学博物館の実験的役割」。

9月5日はオフサイト会場となった京都外国語大学にて、日本の大学博物館に特化したセッションを組み、オープン・セッションとして100人を超える参加者を集めた。基調講演は京都工芸繊維大学美術工芸資料館館長並木誠士教授による「〈京都・大学ミュージアム連携〉と「〈京都・大学ミュージアム連携＋〉－大学ミュージアムの可能性」。引き続き2つのセッション、「大学は博物館の試み：パブリック・アクセス」と「大学博物館の試み：資源の活用と協働」が行われ、日本から7つの大学博物館による取り組みが紹介された。プログラムの後半は、リニューアルした京都外国語大学国際文化資料館の見学、事前申込者50人限定の京都大学総合博物館と京都工芸繊維大学美術工芸資料館の見学およびバックヤードツアー。海外からの参加者にとって、日本の大学博物館からの発表は興味深く、自国の課題と重なる部分も多かったと思われる。収蔵庫見学においては日本特有の博物館資料の収蔵方法の見学が可能となったことも有意義であった。

京都大会終了後は、東京で慶応大学が中心となってPost-Conference Seminarが開催され、研究発表セッションやパネルディスカッションに加え、都内の大学博物館見学ツアーの企画もあり、数十名が参加した。

2）京都大会の評価と課題

UMAC大会史上、最も多くの参加者を集め、多くの会員から高い評価を得た。これを可能にしたのは、京都大会準備室の努力、組織力、運営力があってのことである。特別支援の体制を含め、運営委員たちの細やかな対応も素晴らしかった。また、UMAC担当自前ボランティアが並外れた力を発揮したことによって、全てを円滑に進めることができた。一方で課題は、GDPR強化のため、UMACに登録した参加者名簿・連絡先をICOM本部が開示できなかったことである。基本的な情報を伝えるためにUMAC独自のメーリングリストを使用するしか手段がなかったため、メーリングリストに未登録の参加者、京都大会を機にUMACへの参加を考えた方々には情報を届けることができなかったことが一番の問題点であった。

3）今後の展望

UMACとしては、より多くの日本の大学博物館関係者がUMACやICOM大会に参加することに期待したい。国内には国立系の「大学博物館等協議会」、関西においては「京都大学ミュージアム連携」や「かんさい・大学ミュージアムネットワーク」が存在するが、横のつながりが希薄である。これらのネットワークをつなぎ、国際的な場でのプレゼンスも必要である。UMAC AWARD（毎年、外部の評価委員会が、大学博物館とコレクションの世界的に優れた活動や改革を称え、授与している賞http://umac.icom.museum/umac-award/）への応募、UMACのグローバルなデータベースへの参加を促したい。日本国内の大学博物館が連携を強め、さらに世界中の大学博物館とつながることができれば望外の喜びである。



2



3

ICOM ASPAC
アジア太平洋地域連盟

京都大会での委員会テーマ：

Cultural Tourism, City Sustainability and Museums of Cities
カルチャーツーリズム、都市の持続的可能性、都市の博物館

報告者名：

栗原 祐司（京都国立博物館）

開催日程：

9.2 @稲盛記念会館：
CAMOCと合同セッション


合同セッションで発表する石澤教授


ASPAC総会


ASPAC理事等

セッション概要及び所見：

1）内容

今年の会議は、まず9月1日の夜に理事会があり、翌2日、開会式及び基調講演の終了後に稲盛記念会館で「カルチャーツーリズム、都市の持続的可能性、都市の博物館」をテーマにCAMOCとの合同セッションを行った。その後ASPAC単独で総会を開催し、次期理事の選挙を行った。

ASPACでは、例年年次会合を開催しているが、大会開催時には総会のみということも多かったが、今大会ではCAMOCとの合同セッションとして、双方から発表者を出し合って議論を行うことができ、ASPAC総会でも発表を行い、合計4人が発表した。

ASPACからの発表者は事前に各国内委員会から推薦を募り、理事による協議で発表者を決定したが、冒頭、大会組織委員でもある上智大学アジア人材養成研究センター所長の石澤良昭教授が「アセアン10か国における文化遺産の継承と博物館の新しい役割のための拠点事業」について発表を行った。そのほか、中国及びイランからも発表があり、総会ではICOM日本委員会が提出した2つの大会決議案に関しても意見交換を行った。なお、理事選挙の結果、Kidong Bae委員長（韓国）が再任され、日本からは新たに林良博・国立科学博物館長が理事に選出された。

2）京都大会の評価と課題

ASPACは、栗原が2期6年にわたって副委員長を務めてきたが、今大会は大会全体の運営委員長であったため、サテライト会場まで足を運ぶことが難しく、ほとんど参加できなかった。CAMOCとの合同セッションでは日本から石澤教授及びCAMOC側からユネスコの高橋暁氏の発表があり、存在感を示すことができたが、総会には日本からの参加者がほとんどなく、大会開催国としては残念であった。来年は中国で開催予定だが、今後、日本からのより多くの参加が求められる。

3）今後の展望

ASPACは事務体制が十分ではないが、従来からの課題として太平洋諸国やオーストラリア、ニュージーランドからの参加も呼びかけ、連携協力してICOMにおけるアジア太平洋の発言力を強化していくことが求められる。

ICOM日本
国立民族学博物館

京都大会での委員会テーマ：

Museums and Community Development
博物館とコミュニティ開発

報告者名：

園田 直子（国立民族学博物館）

開催日程：

9.3 @国立京都国際会館



国立京都国際会館での会議風景



パネルディスカッション



セッション発表者

セッション概要及び所見：

1）内容

世界各国とくに途上国において、地域社会と結びついた博物館活動を実践している博物館専門家の発表で構成されたセッション。国立民族学博物館長吉田憲司の基調講演の後、同館が25年あまり進めているJICA委託事業・博物館学コースの修了生等から、ミャンマー、アルメニア、エクアドル、ザンビアの具体的事例が報告された。パネルディスカッションでは、地域コミュニティの活性化に向けた博物館の役割について議論がされた。セッション全体をつうじて、世界各国の参加者との交流が深まるとともに、日本で実践している国際人材育成の成果を世界の博物館関係者と共有することができた。本セッションは、情報保障のため、日英同時通訳、日本手話通訳、アメリカ手話通訳および英語文字通訳で実施し、一般参加者136名を含む計158名の参加があり、盛会のうちに終了した。

2）京都大会の評価と課題

ICOM大会は、複数の委員会の会議が同時に開催される。京都大会では、午前は基調講演やプレナリー・セッション、午後は各国際委員会等のセッションというプログラム構成で、参加者それぞれが所属委員会あるいは興味のある委員会に参加しやすく、各自、積極的に国際交流、情報交換をおこなうことができた。機器展示やブース展示も、新しい知見や情報が得られる場として好評であった。ただし、会場が二箇所に分かれていたため、移動時間がうまくとれない場合もあったようである。

3）今後の展望

26年目を迎えた国立民族学博物館（民博）のJICA委託事業・博物館学コースより生まれた博物館・博物館学のネットワークは、日本を起点としつつ、国や地域を越えて世界に広がっている。このネットワークをもとに、民博はICOM日本とも連携し、国内外の博物館との交流をさらに深めていきたい。なお、本セッションの発表内容は、2019度中に刊行物として出版する。

ICOMスイス

京都大会での委員会テーマ：

Olympic Museum Network：OMN

オリンピック博物館ネットワーク

報告者名：

新名 佐知子（秩父宮記念スポーツ博物館）

開催日程：

9.3 @国立京都国際会館



プレゼンテーション



オリンピック･コレクションの構成要素



パネルディスカッション

セッション概要及び所見：

1）内容

「オリンピック博物館ネットワーク（Olympic Museum Network：OMN）」は、オリンピックに関する博物館の国際ネットワークであり、スイス・ローザンヌに拠点を置く「オリンピック文化遺産財団（Olympic Foundation for Culture and Heritage：OFCH）」が事務局を担っている。当該委員会では、OFCHの司会進行により、OMNがスポーツ博物館に関するネットワークとして今後ICOMへどのように関われるのか可能性を探った。

①プレゼンテーション、②パネルディスカッション、③ワークショップの構成で進められた。①は、日本オリンピックミュージアム、ノルウェー・オリンピック・ミュージアム、筑波大学が各自発表した。日本オリンピックミュージアム（2019年9月14日開館）は、設立趣旨の「オリンピック・ムーブメントの普及」について説明した。ノルウェー・オリンピックミュージアムは、オリンピック・ミュージアムとしてのミッションや社会に対する貢献を報告した。筑波大学は、IOCオリンピック教育の認可校として、大学院での人材育成、NHK大河ドラマ「いだてん」への協力、学校教育現場等でのオリンピック・パラリンピック教育プログラムを報告した。②では、「スポーツの価値」や「オリンピック博物館の社会的影響力」について議論を深めた。③では、OFCHから、オリンピック・コレクションの構成要素、教育普及活動、OMN年次大会の取り組みが報告された。

2）京都大会の評価と課題

「オリンピック」を扱う専門性だけではなく、「オリンピック」を切り口に、歴史、地政学、社会問題、スポーツテクノロジー、メディアテクノロジー、アート、デザイン、建築・都市計画、ファッション、持続可能な社会、健康、ビジネスなど、多様な分野にアプローチできることが確認された。しかしながら、参加者は、セッション関係者が10名程、オーディエンスは5、6名と少なく、ICOMの他の委員会メンバーと多角的に議論するに至らなかったのが惜しかった。

3）今後の展望

スポーツ博物館に関するICOMの委員会は未だ設立されていない。すでに国際ネットワークとして活動しているOMNの実績を踏まえつつ、スポーツ博物館の包括的な委員会の必要性を継続して議論することが望まれる。

ICOMオランダ
ICOM日本
ICOM-DEMHIST
歴史的建築物の博物館国際委員会
EXARC
国際考古学野外博物館・実験考古学組織
シーボルトハウス（オランダ）

京都大会での委員会テーマ：

Large Impact By Joining Forces
協働が生み出す大きな影響

報告者名：

山口 美由紀（長崎市出島復元整備室）

開催日程：

9.4 @国立京都国際会館



セッション会場



出島についての発表



セッションの様子

セッション概要及び所見：

1）内容

この合同セッションでは、『協働が生み出す大きな影響』をテーマとし、協働、連携、共有、持続可能、などがキーワードとして設定され、4名の発表と、発表ごとの質疑応答、会場全体で考えるワークショップが行われた。参加者数は約180名で、オランダ人が約5割、日本人が約4割を占める。

関心は、日本とオランダの特別な関係について集まり、日本またはオランダで行われている、両国ををテーマとしたマーケットやフェスティバルの開催、学術的、文化的な相互交流、共有遺産についての質疑が行われた。ワークショップでは、連動による博物館組織の強化（集客、コレクションの充実、発信力強化）のために必要な、繋がるためのストーリー、の創出がテーマとされ、聴講者も含めてグループによる意見交換を行った。

2）京都大会の評価と課題

出島については『出島　時を超えて』をタイトルとし、出島の歴史、復元整備事業、現在の活用状況等について、報告を行った。ICOMオランダからは、3年前に打診を受け、発表の機会を得たことは、多くのオランダをはじめとする博物館関係者に出島の意義を示すこととなり、史跡、施設の認知度の向上に寄与することが出来た。また、この合同セッションでは、ICOMオランダの支援で日本語、英語の同時通訳を行ったため、日本人の聴講者も多く、人気の高いセッションであったことがうかがえた。この点については、セッション主催者、大会事務局、関係者、ボランティアのサポートによるところが大きく、大変感謝している。

3）今後の展望

本セッションの開催により、日蘭の歴史的交流に、協働、連携の礎を確認し、今後求められる博物館組織の連携について、意識が向けられた。あるいは、他者との比較から、独自性や魅力、ストロングポイントを把握することが出来ると言えよう。今後もICOMオランダ、EXARCなどとの共同事業、相互連携により、国を超えて、壮大なストーリーを紡ぎ出す取組みに尽力したい。

FIHRM
国際人権博物館連盟

京都大会での委員会テーマ：

Active communities and global networks
活発なコミュニティと世界的なネットワーク

報告者名：
駒井 忠之（水平社博物館）　協力：寺田 雅子（創価学会国際広報局）

開催日程：

9.2 @国立京都国際会館：
ICMEMOと合同セッション

9.3–4 @国立京都国際会館：
FIHRM研究発表

9.5 @創価学会京都国際文化会館：
オフサイトミーティング


ICMEMOとの合同セッション


FIHRMセッション


国際文化会館でのオフサイトミーティング

セッション概要及び所見：

1）内容

今年の会議は、まず2日にICMEMOと合同セッションがあり、「How Museums say the unfathomable：Voices from former colonial territories of Japan」をテーマに研究発表が行われ、日本からも二人が発表した。

3日は「Active Communities」をテーマに研究発表が行われ、コーヒーブレイクでは、展示ホールの台湾ブースで、FIHRM Asia-Pacific（FIHRMアジア太平洋支部）の発足についてお披露目が行われた。

4日は「Global Networks」をテーマに研究発表が行われた。5日は創価学会京都国際文化会館でオフサイトミーティングが行われ、「Museums, human rights and climate activism」をテーマにワークショップが行われ、終了後、SGI制作人権教育展示「Transforming Lives: the Power of Human Rights Education」鑑賞ののち、オプショナルツアーとして嵐山竹林散策を行った。

2）京都大会の評価と課題

FIHRMは、従来母体であったINTERCOMと合同セッションを行うことが多かったが、今回ICMEMOと行うことにより、国家体制に根差した人権問題に関して議論を深めることができた。オフサイトミーティングでは、環境の変化、とりわけ気候危機に対し、博物館、美術館は何をすべきか、何ができるかを討議し、所蔵品、来館者、社会との関係などは違えど、参加者はそれぞれの立場からの意見を出し合い、「Listen, Lead, Educate（傾聴、先導、教育）」という博物館の共通項を確認することができた。

会議には、毎日およそ40～50人程度の参加者があったが、特にアジア太平洋支部を発足させた台湾の積極性が強く感じられた。今後、日本からのより多くの参加が求められる。

3）今後の展望

オフサイトミーティングで議論した国際的課題への対応に関しては、FIHRM設立10周年となる明年の会議（2020年10月14～16日、リバプール）で継続していくことになる。FIHRM Asia-Pacificの今後の展開は未定だが、より参加しやすいアジア諸国での会議に、日本からも積極的に参画していくことが期待される。

新たな国際委員会

ICOM京都大会では、新設された2つの国際委員会による初会合が開かれ、手続き規則の採択や委員長や理事の選出を含む基盤整備が行われた。

2019年7月の第139回ICOM執行役員会の会合による新設が承認されたこれら2つの国際委員会の任務は、博物館がそれぞれの使命の達成で直面する現在および将来の課題に対応することであり、この大義には世界各地から多くの賛同の声が寄せられている。

1つ目の「博物館災害対策国際委員会(DRMC)」は、ICOM会員による文化的災害リスクの管理や、緊急事態に対する準備体制や災害対応体制に関する専門分野を超えた連携を可能にするための委員会である。2019年9月3日に開かれた初会合では、委員会規約が採択され、Diana Pardue氏(米国)が委員長に、Brian Daniels氏(米国)、栗原祐司氏(日本)ならびにIhor Poshyvailo氏(ウクライナ)がそれぞれ理事に選出された。今後DRMCは、災害計画の強化や、博物館災害リスク削減体制の各国およびグローバルレベルでの統合に取り組んでいく。

2つ目の「倫理問題国際委員会(ICEthics)」は、博物館に関する倫理面の諸問題を検討・共有・議論するための、世界的な常設フォーラムとして創設された。2019年9月3日の初会合には、同委員会に関心のあるICOM会員が出席し、委員会規約の採択や委員長・理事の選出が行われた。選出された理事は以下の通り：Kathrin Pabst(委員長、ノルウェー)、Lidija Nikočević(クロアチア)、Andrea Kieskamp(オランダ)、Katrin Hieke(ドイツ)、Lina L. Tahan(英国／レバノン)、Armando Perla(スウェーデン／カナダ)、Søren la Cour Jensen(デンマーク)、Valeria Pica(イタリア)、Lis-Mari Hjortfors(スウェーデン／ノルウェー)。本委員会は今後、博物館や博物館分野の専門職による、社会の一員としてのより確かな情報に基づく選択をサポートしていく。

これら2つの初会合および第25回ICOM大会により協力の精神が植え付けられたことで、ICOM会員からはこれら2つの委員会への参加を希望する声が多く寄せられた。



ソーシャル・プログラム

開会パーティー

9.2〈月〉18:30－20:30

9月2日に京都府市の協力により国立京都国際会館で開催された開会パーティーは、2000人以上の参加者のもと、18:30よりメインホールでの芸舞妓のパフォーマンスから始まった。市長の挨拶の後、京都に5つあるすべての花街の芸舞妓が、伝統的な踊りを披露した。その後、庭園に場所を移して、アクソイ会長をはじめとする主催者や京都府知事、京都市長等がそろって鏡開きを行い、参加者の歓談となった。終了前には、大会の成功を祈り、この日のために用意された花火が上がり会場を盛り上げた。

能・狂言

9.3〈火〉/9.4〈水〉19:00－21:00

日本博の助成を得て、9月3日は金剛能楽堂にて狂言「棒縛」・能「羽衣　盤渉」、9月4日は京都観世会館にて狂言「附子」・能「船弁慶　前後之替」が、一般参加者及び市民を対象として無料で開催された。当日は海外の方が理解できるよう英語による解説に加え、一部では字幕アプリによるパフォーマンス解説も行われた。参加申し込みは大会ウェブサイトからオンラインで受け付けられ、2日間ともチケットが売り切れる盛況となった。













ソーシャル・イベント　二条城

9.3〈火〉19:00－21:00

9月3日のソーシャルイベントは、京都市の協力を得て元離宮二条城で開催された。参加者数が想定を超え、開場前は長蛇の列となり、会場内では混雑する場面も多かったが、参加者には二の丸御殿が開放され、台所で行われていた同時開催のICOM京都大会記念の現代アート展「時を超える：美の基準Throughout Time: The Sense of Beauty」も観覧した。また、軽食として配布された弁当や利き酒などを通して、日本の食文化を体験した。







ソーシャル・イベント　北山エリア

9.4〈水〉18:00－21:00

9月4日のソーシャルイベントは、京都府協力のもと、国立京都国際会館から地下鉄で2駅の北山エリアで行われた。京都府立植物園にて温室ツアー、展示、京都府立京都学・歴彩館ではバックヤードツアーが開催され、約1,000人の来場者を集めた。夕方に大雨が降った影響で開催が危ぶまれたが、開始時間前には雨もやみ、予定通り開催された。植物園、陶板名画の庭と稲盛記念会館では軽食も提供され、参加者は周遊しながら北山エリア散策を楽しんだ。同時に、ペチャクチャナイト京都と共催でICOM×ペチャクチャナイト京都「コミュニティとミュージアム」が同エリアで開催され、ICOMの若手会員を中心に発表があり、多くの参加者を集めた。







ICOM×ペチャクチャナイト京都「コミュニティとミュージアム」

9.4〈水〉18:15－20:40

ICOM×ペチャクチャナイト京都によるプレゼンテーション「コミュニティとミュージアム」は、20秒間のスライド20枚からなるペチャクチャ定番のフォーミュラに沿って行われた。

若手の博物館関係者による参加を促すというICOMの目標に基づき、スピーカーには全員35歳以下の若手を登用。地域社会と博物館が、持続可能な発展やより良い未来の構築にどう貢献できるか、自らの体験を交えて語った。以下は、「コミュニティとミュージアム」の提言である。

「博物館は、利用者や地域社会のニーズをより意識した、よりインタラクティブな組織へと生まれ変わっている。博物館は、コミュニティが共創・共有・交流できる、独創性と知識の融合を促す文化的なハブとしての役割を果たすようになってきている。博物館は、あらゆる状況での対話や相互理解を自らに対する信頼を活かし促すことで、地域社会内および地域社会間の平和・団結・復興を促せる機関である。博物館には、地域社会に活力を与え、地域社会による現代の様々な課題への取り組みをサポートすることで、社会改革を先導できる潜在能力がある。」







ソーシャル・イベント　岡崎エリア

9.5〈木〉19:00－21:00

9月5日は様々な文化施設が集まる岡崎エリアでソーシャルイベントが京都市協力のもと開催され、1,700人を超える来場者があった。京都国立近代美術館で軽食がふるまわれ、展覧会の夜間開館が行われた。平安神宮では夜間に庭園が解放され、雅楽の演奏を楽しむことができた。みやこめっせの地下では、利き酒セットが配布され、参加者から好評を博した。また、京都市動物園ではナイトツアーが実施され、参加者は普段とは違う動物園を楽しんだ。各会場が広いエリア内に点在していたが、ボランティアの誘導により滞りなく実施された。







閉会パーティー

9.7〈土〉19:00－21:00

大会最終日の9月7日に京都国立博物館の庭園を会場に閉会パーティーが開催され1,372人の来場があった。庭園に特設されたモニターでは、屋内で行われる閉会式の様子が中継され、参加者は軽食とドリンクと共に観覧・歓談の時間を過ごした。また、陶芸家・武田高明氏による灯籠のインタレーションが会場を彩る中、平成知新館前では、ギター・デュオ・ジュスカ・グランペールにチェロを加えたトリオの演奏が行われた。その他、参加者は、京都国立博物館で開催されていたICOM京都大会開催記念特別企画「京博寄託の名宝」展も自由に観覧し、京都での最終日を楽しんでいた。







ミュージアム・フェア

9月2日から4日の3日間、メイン会場の国際会館内イベントホール、ニューホール、アネックスホールの3つの会場に分かれてミュージアム・フェアが開催された。スポンサー企業が多く出展したイベントホールでは、スポンサー企業によるセッションも開催された。また、アネックスホールでは参加者が息抜きをできるスペースとして、交流ラウンジを設けてワークショップも開催され、カメラマン撮影による写真をその場で持ち帰ることができるフォトブースも設置された。

展示会

147の企業・団体によるブース出展があり、出展者も1,303人に達した。弁当の配布場所を展示会場としていたこともあり、多くの来場者を迎え、出展した企業からも多くの海外からの参加者と交流することができたと概ね好評だった。イベントホールではプラチナスポンサーを中心とするスポンサー企業が主に出展した。ニューホールでは、海外の企業やミュージアムが中心に出展し、アネックスホールは主に日本のミュージアムや文化団体が出展した。弁当の配布や休憩場所を多く設けたことにより、多くの大会参加者が滞留する場所となり、賑わいを見せた。







スポンサーセッション

9月2日から4日にかけて、主にスポンサー企業がイベントホールに設けられたステージでセッションを行った。2日のミュージアム・フェア開会式では、京都大学居合道部の演武に続き、会長、組織委員長の挨拶も行われた。

読売新聞のセッションでは、読売新聞の老川祥一読売新聞グループ本社最高顧問と宮田文化庁長官、佐々木京都国立博物館長の鼎談が行われた。また、THKによる免震装置のセッションや凸版印刷による文化財のデジタル化のセッションなどプラチナスポンサー等によるセッションが多く行われた。







交流ラウンジ

大会参加者のリフレッシュとネットワーキングのため、アネックスホールに交流ラウンジを設けた。日本のミュージアムの現状について、丸一興業株式会社bolda事業本部に提供いただいたパネル等を用いて、日本のミュージアムの歴史や博物館総合調査の結果をグラフ化したパネル展示が行われた。また、ラウンジ内にワークショップスペースが設けられ、座禅、竹細工のワークショップとスポンサー企業による風呂敷の包み方、コロタイプによるポストカード作成ワークショップも開催された。設備としては、畳の休憩スペースを設けるとともに、スマートフォン等の充電装置が設置された。昼休みなど休憩時間中は、多くの方が訪れていた。







エクスカーション

京都府市を中心に関西エリアまで、史跡や文化、景観、伝統工芸、自然、それにちなんだ数々のミュージアムなどを訪れる51コースを企画。うち49コースが9月6日に催行され、総勢1300人以上が参加した。定員に達するコースが続出したことからも関心の高さが伺われ、10コースを追加で募集した。また、障がいのある方でも参加できるコースを一部用意するなどアクセシビリティにも配慮。参加者からは各訪問先でおもてなしを受け、新たな日本の魅力を感じることができたと好評であった。









ポストカンファレンスツアー

東京

9月8日から9日に開催されたポストカンファレンスツアーの東京コースは、「都市と博物館の関係を再考する」をテーマに、CAMOCの日本メンバーを中心に企画され、全体で40人の参加者があった。1日目はコースを東西に分け、東コースは江戸東京博物館や浅草寺、上野文化の杜等を回り、西コースは多摩六都科学館から玉川上水、小平市ふれあい下水道館などをめぐった。夜は両コースが合流して、東京都美術館にて、意見交換会が開催された。2日目は東京都美術館を中心とした上野地区の見学が行われた。



東北

ICOM-CCにより企画された東北ポストカンファレンスツアーでは、19名の申込者が9月8日から11日にかけて東北3県をめぐり、2011年の東日本大震災で被災した博物館や美術館の取り組みを視察した。受入れ館の福島県文化財センター白河館、東北歴史博物館、リアス・アーク美術館、陸前高田市立博物館仮施設、岩手県立博物館で、それぞれの職員から丁寧な説明を受け、参加者は熱心に耳を傾けていた。実際に保存・修復に携わる者も多く、自身の専門知識を受入れ館の方々と共有する場面も見受けられ、有意義なツアーとなった。



北海道

ポストカンファレンスツアー北海道コースは9月8日から10日の日程で開催された。世界の博物館からおよそ50人の専門家が伊達市、洞爺湖町のほか、世界遺産登録を目指す北海道・北東北の縄文遺跡群を巡り、最後に建設中の国立アイヌ民族博物館を見学した。また、地方博物館が地元の人々に対していかに機能するかについて焦点を当てたシンポジウムも開催され、その後のレセプションでも北海道の博物館専門家や関係者との緊密な交流が行われた。



沖縄

内閣府の主催で9月8日から10日にかけて開催された沖縄ポストカンファレンスツアーは、「固有の自然環境及び文化の継承」並びに「歴史の伝承」というテーマのもと行われた。25名の参加者は3日かけて沖縄県平和祈念資料館やひめゆりの塔など戦争の記憶継承に関わる施設や、海洋博公園や首里城公園など沖縄固有の自然環境と文化を併せ持った場所を訪れた。また、沖縄県立博物館での学芸員との対話や、対馬丸記念館での語り部による講話、レセプションなどを通して行われた地元関係者との交流は、地域の歴史や文化、自然などについて議論を深める場となった。



マンガでみるICOM京都大会

文化庁広報誌「ぶんかる」掲載

日本語版





https://www.bunka.go.jp/prmagazine/rensai/naname/naname_054.html

英語版





https://www.bunka.go.jp/prmagazine/english/publications/naname/naname_003.html



運　営

大会への歩み

2012

8.1 ICOM 大会招致検討委員会発足

2013

8.12–15 ICOM リオデジャネイロ大会（8月10–17日）で、
ICOM 日本委員会としてブース出展



12.1 ICOM 大会招致準備委員会発足

12.1–31 招致準備調査のため ICOM や過去開催国へ

2014

3.27 ICOM 京都大会開催に向けて
立候補を正式決定

10.1 大会テーマを
“Museums as Cultural Hubs: The Future of Tradition” に

11.26 ICOM 日本委員長の開催意思表明書を
ICOM 本部に提出

2015

1.29 ICOM 京都大会の誘致活動ロゴマーク決定



1.30 開催申請書を ICOM 本部に提出

4.21 ICOM 本部による現地視察



5.17 国際博物館の日記念シンポジウム
「世界博物館大会の京都開催にむけて」（京都）

6.3 京都が第 25 回 ICOM 大会開催地に決定

2016

4.1 各国際委員会日本側連絡窓口担当者を委嘱



5.22 国際博物館の日記念シンポジウム
「博物館と文化的景観」（東京）

6.9 ICOM 京都大会 2019 組織委員会発足

7.4–6 ICOM ミラノ大会（7月3–9日）で
ICOM 日本委員会としてブース出展



7.9 ミラノ大会閉会式にて ICOM 旗引き継ぎ

2017

1.31　ICOM 京都大会京都推進委員会発足

4.1　ICOM 京都大会準備室設立



4.3　大会公式 Facebook 開始

4.18　ICOM 京都大会運営委員会発足



5.21　国際博物館の日記念シンポジウム
「歴史と向き合う博物館―博物館が語るものは」
（京都）

5.18–22　ICOM 本部による現地視察および打合せ /
株式会社コングレが PCO（会議運営専門会社）に決定



6.7–9　ICOM 総会・諮問会議においてプレゼン
（パリ）

8.26–31　第 1 回国際委員会連絡窓口担当者会議
（東京・京都）



9.1–29　第 1 回国際委員会意向調査

9.14　大会公式ウェブサイト開設

9.18　ワークショップ・講演会
「2015 ユネスコ勧告を読み解く
―今後の我が国の博物館像を考えるために―」（京都）



9.22　ワークショップ
「ロンドンオリンピック文化プログラムと博物館」（京都）

9.23　講演会「イギリスにおける最新文化政策動向」（京都）

10.18　ICOM 本部と打合せ（パリ）

11.17　ICOM ミュージアムカフェ（東京）



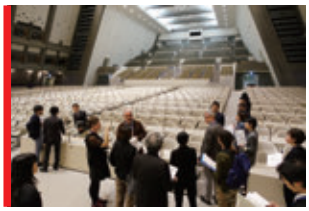
12.8　ICOM 執行役員会で準備状況報告（パリ）

大会への歩み

2018

2.16 協賛者・寄附者の募集開始

4.12–13 ICOM 本部現地視察および打合せ



5.19 国際博物館の日記念シンポジウム
「新次元の博物館のつながり」（大阪）



6.5 ICOM 総会・諮問会議においてプレゼン（パリ）

6.22 ミュージアム・フェア出展者募集開始



7.5–27 第 2 回国際委員会意向調査

8.30
9.4 第 2 回国際委員会連絡窓口担当者会議
（東京・京都）

9.1 大会公式インスタグラム開始



9.30 ICOM 舞鶴ミーティング 2018

10.1 国際委員会委員長等打合せおよび現地視察



10.2 ICOM 本部と打合せ（京都）

10.16 学生ボランティアの募集開始



11.8–30 第 3 回国際委員会意向調査

11.28 ICOM フォーラム
「世界の博物館事情とその取組み」
（東京）



12.1–2 ICOM-ASPAC 日本会議 2018
（福岡）

12.10 ICOM 執行役員会において
準備状況報告（Skype）

12.16 ワークショップ
第 1 回「ミュージアムの課題と
可能性を考える」（京都）



2019

1.7 大会登録開始

1.16 市民ボランティアの募集開始



2.2 ワークショップ
第2回「ミュージアムの課題と可能性を考える」（京都）

3.18 ICOM 本部と打合せ（京都）



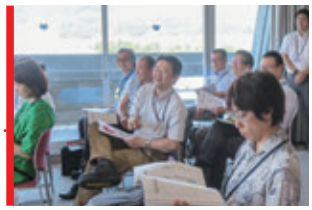
4.5–21 第4回国際委員会意向調査

5.26 国際博物館の日・ICOM 京都大会 2019 開催
記念シンポジウム 「文化をつなぐミュージアム
—伝統と未来へ—」（京都）



6.11–12 ICOM 本部と打合せ（パリ）

7.22 ICOM 執行役員会にて準備状況報告（Skype）



8.4
8.7 国際委員会連絡窓口担当者大会直前ブリーフィング

9.1–7 **ICOM 京都大会開催**



12.10 ICOM 執行役員会にて開催報告（Skype）

2020

1.13 ICOM 京都大会報告会ワークショップ
「ICOM 京都大会からみたあたらしいミュージアムのかたちとは？」（京都）

2.11 ICOM 京都大会 記念シンポジウム 「日本のミュージアムの未来」（京都）

2.23 ICOM 京都大会 記念シンポジウム 「日本のミュージアムの未来」（東京）
中止（録画をオンライン公開）

主催者

主催

国際博物館会議

ICOM 日本委員会

ICOM 京都大会2019組織委員会

日本博物館協会

共同主催

日本学術会議

運営事務局

ICOM 京都大会2019 運営事務局
(株式会社コングレ内)

パートナー

京都府

京都市

文化庁

独立行政法人 国立文化財機構

独立行政法人 国立美術館

The Getty Foundation

ICOM 京都大会2019京都推進委員会

運営組織

主催

ICOM international council of museums
国際博物館会議

ICOM international council of museums Japan
ICOM日本委員会

ICOM KYOTO 2019
ICOM京都大会2019組織委員会

財団法人 日本博物館協会 JAPANESE ASSOCIATION OF MUSEUMS
日本博物館協会

共同主催

日本学術会議

パートナー

京都府
京都府

京都市
京都市

文化庁
文化庁

独立行政法人 国立文化財機構
独立行政法人 国立文化財機構

独立行政法人 国立美術館
独立行政法人 国立美術館

The Getty Foundation
The Getty Foundation

ICOM京都大会2019
京都推進委員会

運営事務局 **株式会社コングレ** ・会議運営全般

K.I.T. Group GmbH
- ・参加登録システム管理
- ・海外参加者対応
- ・当日受付対応

近畿日本ツーリスト
- ・宿泊
- ・エクスカーション
- ・スタッフ等チケット手配

開催都市及び開催会場

開催都市

京都

京都市は、長年、日本の首都・文化の中心都市として、1200年を超える歴史を有している。寺社仏閣、木造家屋、庭園等の多様な歴史的景観は、ユネスコ世界文化遺産に17件も登録されており、毎年、市内だけで5,000万人を超える国内外の訪問者を受け入れている。市内に所在する200を超えるミュージアムは、「京都市内博物館施設連絡協議会」を形成し、連携を図っている。工芸等により長年培われてきた技術は、現在、多数の大学やグローバル企業等が集積する学術・ものづくり都市として結実しており、SDGs（国連・持続可能な開発目標）ランキングでも国内首位を誇るなど、ICOM京都大会のテーマ「文化をつなぐミュージアム ―伝統を未来へ―」を体現する都市である。





開催会場

国立京都国際会館（ICC Kyoto）

ICOM京都大会のメイン会場として利用された国立京都国際会館は、京都市北部に位置する国内初の国立の国際会議場である。日本庭園や70あまりの会議室、大ホール等、多数の設備を有する。京都駅からのアクセスの良さと自然と調和した環境により、1997年に京都議定書を調印した第3回気候変動枠組条約締約国会議（COP3）等、数多くの重要な会議の舞台となる。ICOM京都大会では、サテライト会場と合わせて、4,590人の参加者を迎えた。



京都府立京都学・歴彩館／稲盛記念会館

ICOM京都大会では、同時並行して開催される会議に対応すべく、京都府及び京都府立医科大学、京都府立大学、京都工芸繊維大学の協力のもと、京都府立京都学・歴彩館および稲盛記念会館がサテライト会場として使用された。府立京都学・歴彩館ではプレゼンテーションやソーシャル・イベントが、稲盛記念会館では各委員会のセッション等が開催された。メイン会場との間の移動は、シャトルバスの運行及び市内バス・地下鉄フリーパスの配布により対応した。



ボランティア

ボランティアは全体で延べ849人、合計338人の方にご協力いただいたが、大会前の2度の研修の成果もあったのか、そのホスピタリティはアンケートでも好評であった。

大会でのボランティア導入の目的の一つに、ボランティアとして参加された方に、ミュージアムの最先端の議論を肌で感じてもらい、将来のミュージアムを支える人材に育ってほしい、という意図がある。そのため、ボランティアの募集は、大会の2年前の2017年から、地元京都の学芸員過程を持つ大学の教員を中心としたワーキンググループを結成して開始した。その後、2018年の春から先行して学芸員課程在籍の学生を対象に仮登録の募集を行い、正式な募集は2018年夏以降に行った。

学生を対象とするボランティアは、会場の案内をする語学ボランティア、セッションの手伝いをするセッションボランティア、エクスカーションの付き添いをするツアーボランティアの3種類を設定した。また、合わせてソーシャルイベントの道案内などを担うおもてなしボランティアを京都市民から募集した。その後、会場のWIFI環境を整備するWIFIボランティアと大会期間中のSNSでの発信を担う広報インターンも追加で募集し、全部で5種類のボランティアで構成されることになった。なお、ボランティアの特典は、大会Tシャツとコングレスバッグ、一日当たり3,000円のギフトカードおよび当日の公式プログラムブックとした。





参加助成

ICOM京都大会開催に際し、若手ICOM会員および各委員会理事向けに助成が用意され、新興国を中心とした73の国と地域から合計140名が助成を受け大会に参加した。応募はICOM本部がオンラインにて受け付け、選考についてはICOM特別委員会の戦略的配分評価委員会（SAREC）が実施。航空券や宿泊等の手配は、主催者指定の近畿日本ツーリストが担当した。詳細は、以下の通り。

○ICOMゲティ国際プログラム2019

助成者：ゲティ財団

受給者：25名（ICOM委員会理事8名、若手委員会理事5名、若手会員12名）

受給内容：大会参加費免除、往復航空券、宿泊（8泊分）、日当、空港バスおよびビザ申請費用の支給

有効応募件数：101件（2018年10月31日締切）

○a）ICOM京都大会2019組織委員会助成

b）ICOM本部助成

c）グレース・モーリー基金助成

助成者：a）ICOM京都大会2019組織委員会

b）ICOM本部

c）グレース・モーリー基金

受給者：

a）80名（ICOM委員会理事50名、国際委員会推薦若手会員30名）

b）34名（ICOM委員会理事15名、ICOM特別委員会／ワーキンググループ／推薦・選挙委員会委員19名）

c）1名（ICOM委員会理事）

受給内容：大会参加費免除、往復航空券、宿泊（8泊分）

有効応募件数：181件（うち60件国際委員会推薦枠、2018年12月13日締切）

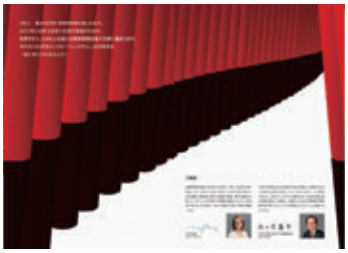


パブリックリレーション・コミュニケーション

2017年4月のICOM京都大会準備室開設以来、世界中のICOM会員ならびに博物館関係者にICOM京都大会を周知するとともに、準備状況及や最新のプログラムの紹介を通じて京都大会への参加をスムーズに計画できるよう様々な情報発信を展開した。2年半の間に、リーフレット4種類（それぞれ英・仏・西・日の4か国語）、ニュースレターとEメールニュースレターが3種類ずつ（いずれも英、日の2か国語）、ポスター1種類（絹谷幸二画伯による描きおろし）と2つのビデオを制作、オンラインでのダウンロードやソーシャルメディアを通じた発信にも利用された。

リーフレットは毎年6月にフランス・パリで開催されるICOM総会や、世界中で開催される様々な博物館関係の会議に京都大会の運営委員等が参加し配布することにより、京都大会を周知することができた。また、多様なプロモーションツールにより、京都大会のテーマである「文化をつなぐミュージアム―伝統を未来へ―」に沿ったイメージを醸造し、世界中の博物館関係者とのコミュニケーションの深化を図った。とりわけ動画によるプロモーションは、京都や大会プログラムの魅力を発信するうえで効果的であり、京都の魅力や大会の開催意義、プログラムへの理解が深まった。こうした多様なコミュニケーションは、京都大会が過去最多のICOM大会参加者数を記録した一因となったと言える。

公式プログラムブック印刷数 …… 6,000部 4言語（英、仏、西、日）
リーフレットの配布数…… 70,000部 4言語（英、仏、西、日）
ポスターの配布数…… 3,320部 2言語（英、日）







各種リーフレット





ニュースレター（オンラインと紙版）



ポスター




ビデオ

カンファレンス・イベントを通じたPRの機会

大会の周知活動は、日本国内と国外の両方で積極的に行なわれた。日本国内では、ICOM京都大会 2019組織委員会及び運営委員会が博物館関係者や一般市民向けにシンポジウムやワークショップ・記者会見を実施。例えば、毎年の国際博物館の日（5月18日）に合わせてシンポジウムを開催し、国内及び海外から第一線で活躍する博物館関係者を招き講演や議論をすることにより、博物館に関する最新トピックを共有し、京都大会への参加意義を深めた。

東京と京都では「ICOMミュージアムカフェ」や「博物館の未来を考えるワークショップ」を開催し、若手の博物館関係者にICOMを知ってもらい京都大会のプログラムやコンテンツ内容を一緒に議論する機会となった。また、地元京都府市の関係者によって構成されるICOM京都推進委員会により、京都大会開催の意義を専門家のみならず市民の間でも高めることを目的に様々な博物館でのイベントが企画された。

国外ではICOM京都大会運営委員長をはじめ関係者が世界中を訪問、また各国際委員会とのコミュニケーションを仲介する窓口担当者が各委員会の年次会議等に出席し協議を重ねた。また、AAM（米国博物館協会）やMA（英国博物館協会）などICOM以外の博物館関係会議にも積極的に参加し、ICOM京都大会への参加の重要性を周知・推進した。

大会までに実施した
シンポジウム・ワークショップ等……14
博物館会議でのPR……100以上（30か国）



国際博物館の日 シンポジウム 2018 in 大阪



国際博物館の日 シンポジウム 2019 in 京都


ICOMカフェ 2017 in 東京



ICOM-CAMOC 2017 in メキシコシティー



AAM 2019 in ニューオリンズ

パブリックリレーション・コミュニケーション

メディア掲載

会期前後の3週間でICOMと京都大会に関する1180件の記事がオンラインメディアと紙媒体に掲載され、300件が博物館定義に関するもの、約900件が京都大会に関連する内容であった。特に9月6日（大会6日目）には1日で120件の記事が掲載され、潜在読者は120万人に上ると想定される。国外では、Time Magazine（米国）, Il Corriere della Sera（イタリア）, Le Monde（フランス）, ilenio（メキシコ）など各国で影響力のあるメディアで報道され、国内では主要な新聞、雑誌、TV、ラジオ等各方面から広く注目を集める結果となった。

海外　オンライン（2019/8/1～9/11）…… 361

国内　オンライン（2019/8/1～9/11）…… 819
テレビ（2019/8/30～9/8）…… 4
ラジオ…… 7
雑誌記事（2019/8/1～11/1）…… 28
新聞記事（2019/8/1～11/1）…… 400

国内外のメディアに働きかけ、メディアキットやプレスリリースの送付、登壇者やICOM会長とのインタビューをアレンジした。また、8月30日のプレス向け説明会では、大会の見どころや開催までの経緯などを改めて説明する機会を設け、9月7日の大会最終日には記者会見を実施し大会の成果について報告を行うなど、メディアとのコミュニケーションを重視しながら進めた結果、広範囲に及ぶメディアカバレッジを得ることができた。


プレス向け説明会

京都市内の駅・タクシー・商店街にICOM京都大会が登場



協力：京都市、京都駅ビル開発株式会社



協力：京都市、京都駅ビル開発株式会社



協力：京都市、
京都駅ビル開発株式会社


協力：ICOM京都大会2019京都推進委員会


七条商店街



協力：彌榮自動車株式会社

ウェブサイトとアプリ

ウェブサイトは、大会に関する情報を随時更新し、参加予定者や参加を検討している人にとって必要な情報が得られることを念頭に4つの言語（英・仏・西・日）で運用された。最新のプログラムやスピーカー情報はもちろん、日本へ初めて来る海外からの参加者向けのお役立ち情報やアクセシビリティ、よくある質問についても積極的に発信した。



ピープルソフトウェア株式会社により提供された大会公式アプリは、参加者同士のコミュニケーションや最新情報を得るツールとして利用された。会期中は同時に多くのセッションが開催されたことから、スケジュールをカスタマイズする機能や検索機能などが盛り込まれ、3928ダウンロード、参加者登録者は2101人と、大会参加者の多くが利用した。



ソーシャルメディア

ハッシュタグ #ICOMKyoto2019

会期中（8/31から9/7）には、ツイッターで88の国と地域から17か国語で5,103ツイート、1780万ユーザーにリーチした。英語でのツイートが主であったが、英語を母国語としない国からの投稿も多くあり、88か国の構成は、ヨーロッパ：32、アメリカ：19、アフリカと中東20、アジアとオセアニア：17となった。インスタグラムでは、同ハッシュタグを使って2019年末までに1700件近い写真やビデオが共有された。

ライブ中継

FacebookとTwitterを使い、プレナリーセッションや基調講演など主要セッションがライブ配信された。Facebookでは、7つのセッション（9時間20分）の放送を通じて推定48,200人が視聴、Twitterでは236ツイートを通じて503,000インプレッションを獲得。とりわけ博物館定義に関するセッションは最も視聴された。

キャンペーン

ICOM本部とICOM京都大会2019組織委員会を通じて行われたソーシャルメディアキャンペーン

Facebook …… 560ポスト
Instagram …… 225ポスト
Twitter …… 300ツイート
Youtube …… 16ビデオ、14,784ビュー

京都大会の公式アカウント

- Instagram

2018年9月に開設。約1年で1,700フォロワーを獲得。180ポスト、7ビデオ、16ストーリーを投稿。大会開催1年前から始めたカウントダウンキャンペーンでは、大会に参加予定の博物館関係者から写真を募り、約50を超える国から1000人以上が参加し大会を盛り上げた。

- Facebook

ミラノ大会から引き継いだアカウントは、2018年2月から1年半の運用を通じて、ページのいいね！が43.6%増加した。

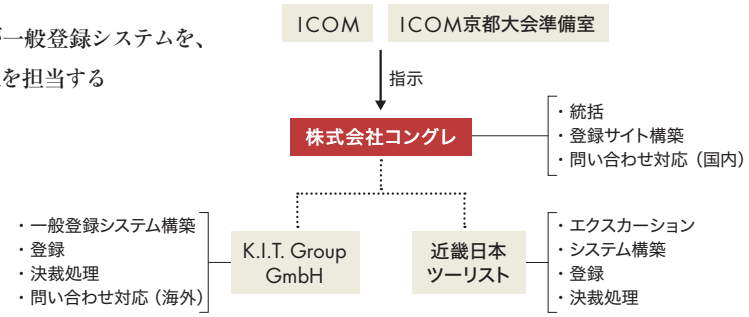
2018年 2月時点 …… 5,665いいね！
2019年10月時点 …… 8,140いいね！

登録

運営体制

PCOであるコングレを中心にドイツの企業KITが一般登録システムを、近畿日本ツーリストがエクスカーションや宿泊の登録を担当する組織体制で登録システムを運用していた。

2019年1月より登録を開始し、下記の料金に従い、登録者を受け付けた。事前登録については、8月23日に定員に達したため、8月31日の締切日を繰り上げて受付を終了した。

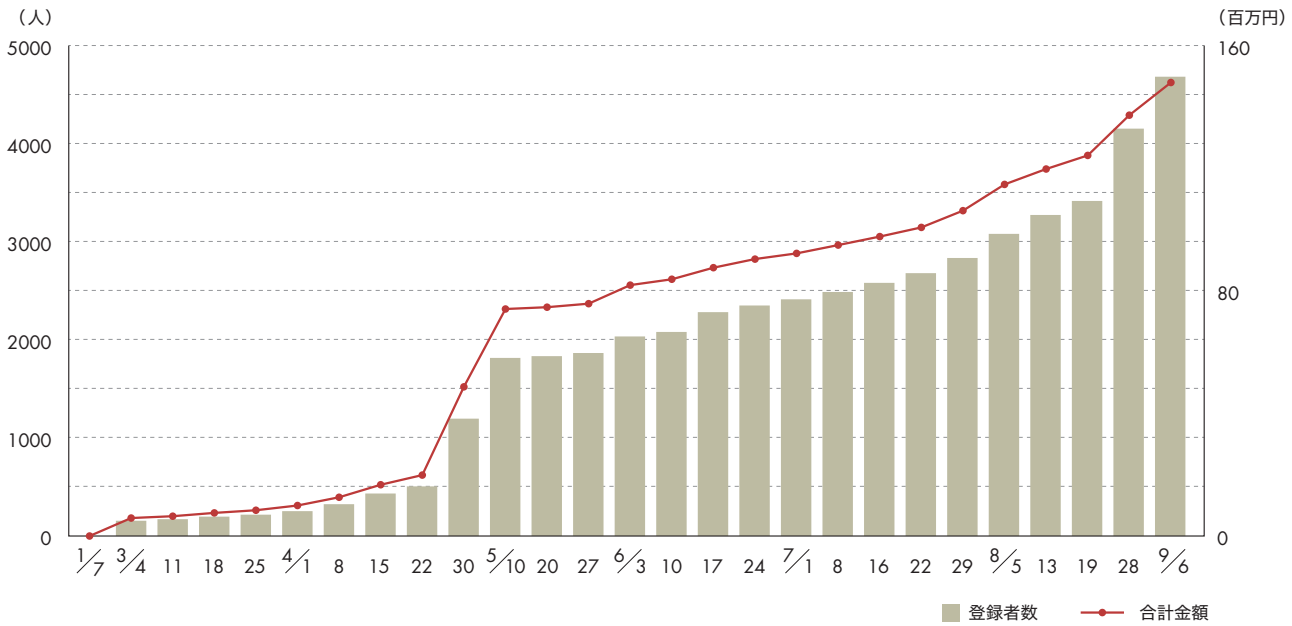


参加費

（8%消費税込）

	早割料金（2019年5月10日まで）	事前料金（2019年5月11日～8月23日）	当日料金（9月2日、9月3日、9月4日）
ICOMメンバー（国1、2）※日本は国1	43,000円	56,000円	68,000円
ICOMメンバー（国3、4）	31,000円	43,000円	56,000円
一般（非会員）	56,000円	68,000円	81,000円
同伴者	31,000円	37,000円	43,000円
学生	31,000円	37,000円	43,000円
1日券 9/2、3、4のみ（最大2日まで）	10,000円	10,000円	12,000円

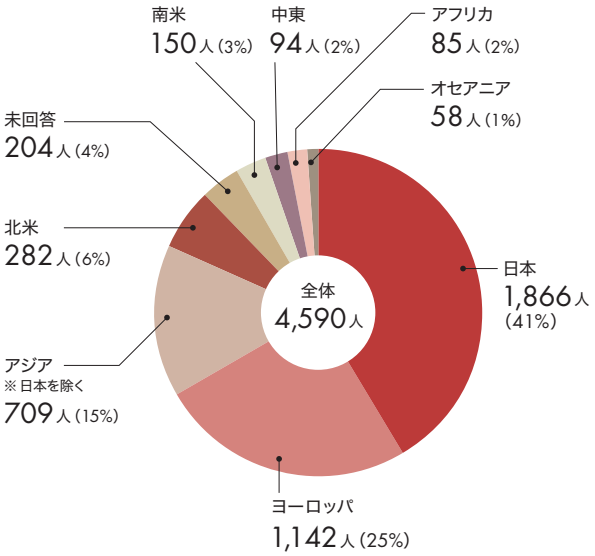
販売実績



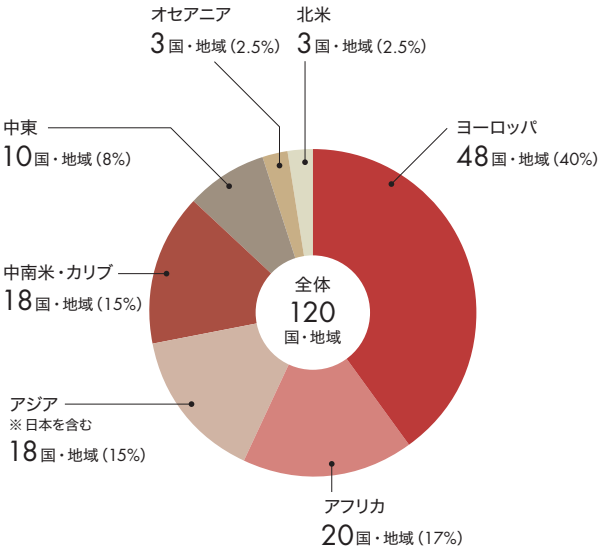
カテゴリー別参加者数

全 日	ICOMメンバー（会員）	1,891人
	一般（非会員）	713人
	同伴者	179人
	学生	168人
1日券		1,639人
合 計		4,590人

地域別参加者数



国・地域数



国・地域別参加者数トップ10

		全 日	1日券	同伴者	合 計
1	日本	621人	1,236人	9人	1,866人
2	中国	215人	63人	9人	287人
3	米国	195人	23人	14人	232人
4	台湾	104人	66人	3人	173人
5	英国	108人	13人	5人	126人
6	ロシア	93人	9人	8人	110人
7	オランダ	79人	5人	10人	94人
	ドイツ	81人	7人	6人	94人
8	韓国	49人	35人	2人	86人
9	イタリア	60人	4人	12人	76人
10	フランス	67人	2人	6人	75人

アクセシビリティ・参加者サービス

同時通訳

ICOM規約に基づく会議、開会式、基調講演、プレナリーセッション、閉会式では、ICOMの公用語である英語、フランス語、スペイン語に加え、日本語での同時通訳を実施。ICの会議でも、それぞれ少なくとも1日は日本語の同時通訳が提供された。中国語の同時通訳も、ICOM中国手配分も含め、一部セッションでは提供された。組織委員会が手配した通訳者は24名に上り、この他、各IC手配の通訳者も稼働した。



字幕・翻訳サービス

ICOM京都大会2019ではSound UDコンソーシアムの協賛により、すべての公開セッションでヤマハ株式会社の「おもてなしガイド」を導入した。「おもてなしガイド」とは、講演者の発表を自動的に文字化し、利用者の設定した言語に翻訳するシステムである。様々な母国語の参加者への対応や、聴覚障害の方への言語サポートとして利用された。



託児サービス

9月2日(月)～4日(水)、7日(土)の4日間にメイン会場の国立京都国際会館内に託児所を設置した。託児の受入れは事前登録制で、日本国内の参加者をはじめ、海外からの参加者からも登録があり、4日間で延べ37名に利用された。

シャトルバス

9月2日(月)～4日(水)にかけて彌榮タクシーの協力により、メイン会場とサテライト会場間、シャトルバスを提供した。セッションが行われるコアタイムは15分間隔、そのほかの時間帯は30分間隔で1日約10本のバスを運行した。



交通パス

読売新聞東京本社の協賛により、参加者が会期中移動に使用できる京都コンベンション・パスを提供した。通用区間は京都市交通局の地下鉄および市バスの全線で利用可能である。発行枚数は3,000枚で、「国宝　檜図屏風」をパスのメインビジュアルとした。



昼食

ランチブレイクではレギュラー、ベジタリアン、ハラルの3種類のお弁当を提供した。会期中通して、それぞれレギュラー 9,500食、ベジタリアン1,700食、ハラル600食の合計11,800食のお弁当を手配した。



コーヒーブレイク

コーヒーブレイクでは、茶道 裏千家による呈茶のほか、コーヒー、紅茶、冷水、宇治香園の協力による水出し緑茶、水出しほうじ茶を提供した。また、江崎グリコや、京都百味会の聖護院八ッ橋、豆政、満月、亀屋良永の協賛により日本や京都を代表するお菓子を提供した。





観光ツアー

9月3、4日の早朝には、通常非公開の大慈院での朝坐禅体験と精進料理を楽しむツアーが実施され、会議前に特別な時間が過ごせるとあって好評であった。大会会期後には、国内観光ツアーが4コース企画されたが、催行人数に達しなかったため不催行となった。



関連イベント

京都府市内を始めとする150カ所以上で、ミュージアムの夜間開館、伝統芸能や現代アートの展示、仁和寺音舞台など様々な文化イベント、通常非公開の庭園や社寺の秘宝特別公開が実施された。



参加者特典

大会ネームバッジの提示により、ミュージアムの無料入館や割引、神社仏閣の無料拝観、カフェ・レストラン・買い物などでの割引が受けられる特典が関西エリア100カ所以上で実施された。

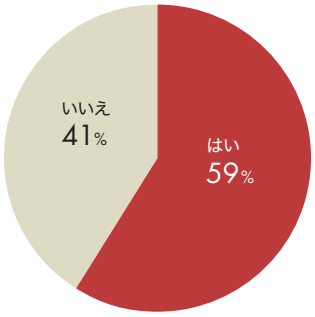


参加者アンケート

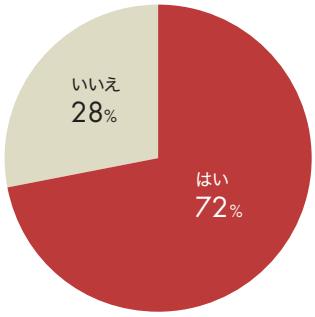
参加者アンケート

大会後、参加者に対してオンラインでのアンケート調査を実施。17日間で1606件の回答が集まった。総合評価として、プログラムでは、エクスカーション、基調講演、プレナリーセッション、ミュージアム・フェア、運営面ではスタッフ／ボランティア、会場、Wi-Fiの満足度が高かった。モバイルアプリ、会場での受付、飲食など運営面については改善の余地があるものの、アンケート回答者の総合満足度は高く、70%がICOM大会を友人や同僚に進めたいという結果となった。今回日本での初開催ということもあり、回答者は日本在住が多く(41%)、前回のミラノ大会に比べるとICOM大会初参加・ICOM非会員の割合が高かった。

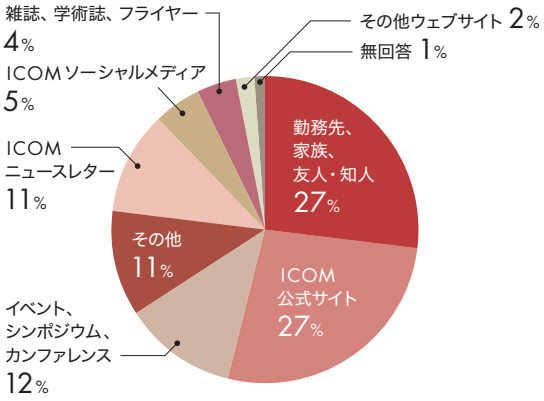
Q1 現在ICOM会員ですか？



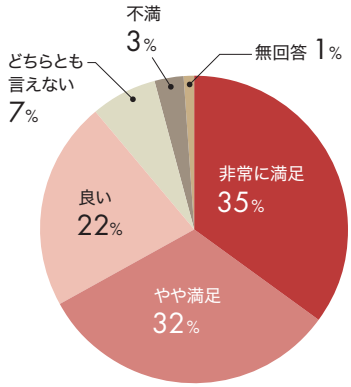
Q2 ICOM大会に参加したのは今回が初めてですか？



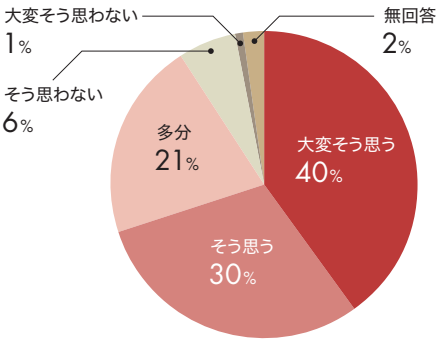
Q3 ICOM京都大会を知ったきっかけを教えてください。



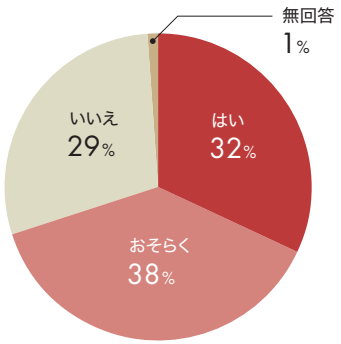
Q4 ICOM京都大会2019全体について満足度を教えてください。



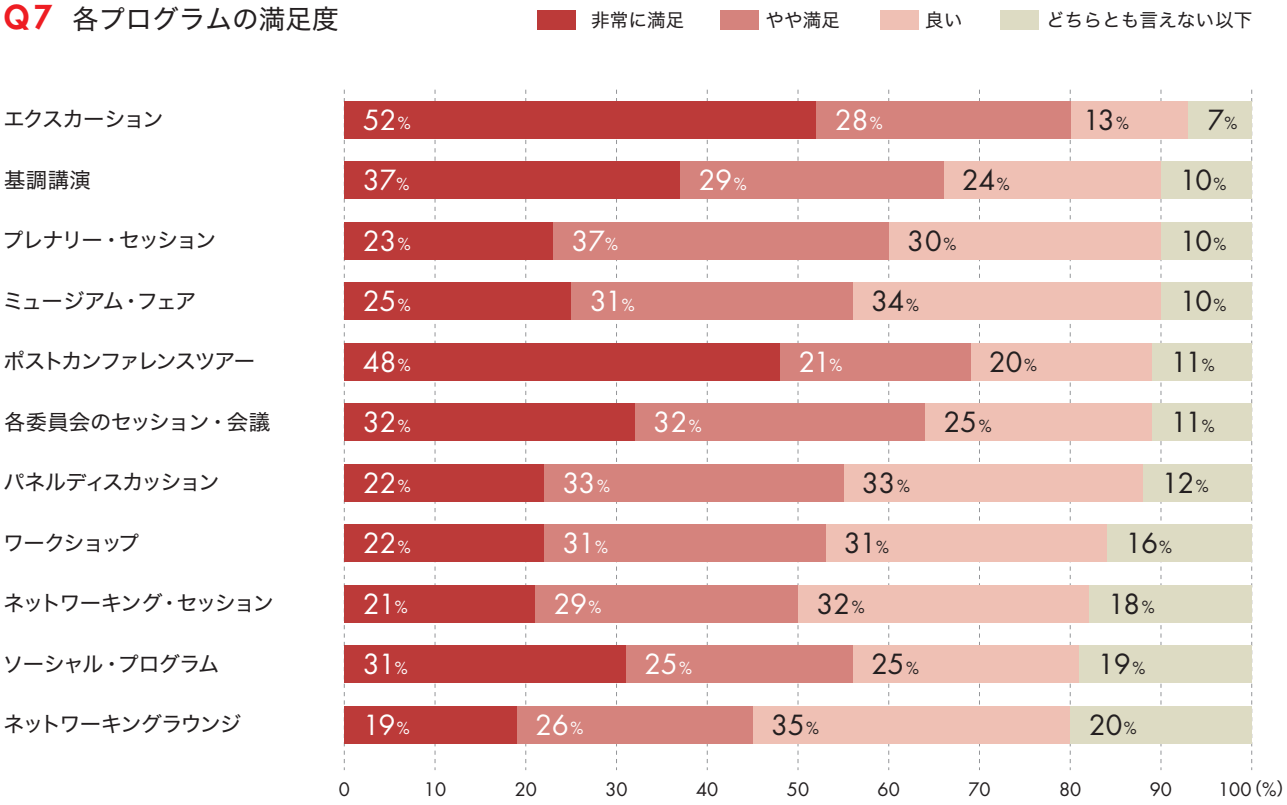
Q5 友達もしくは同僚にICOM大会への参加を勧めたいと思いますか？



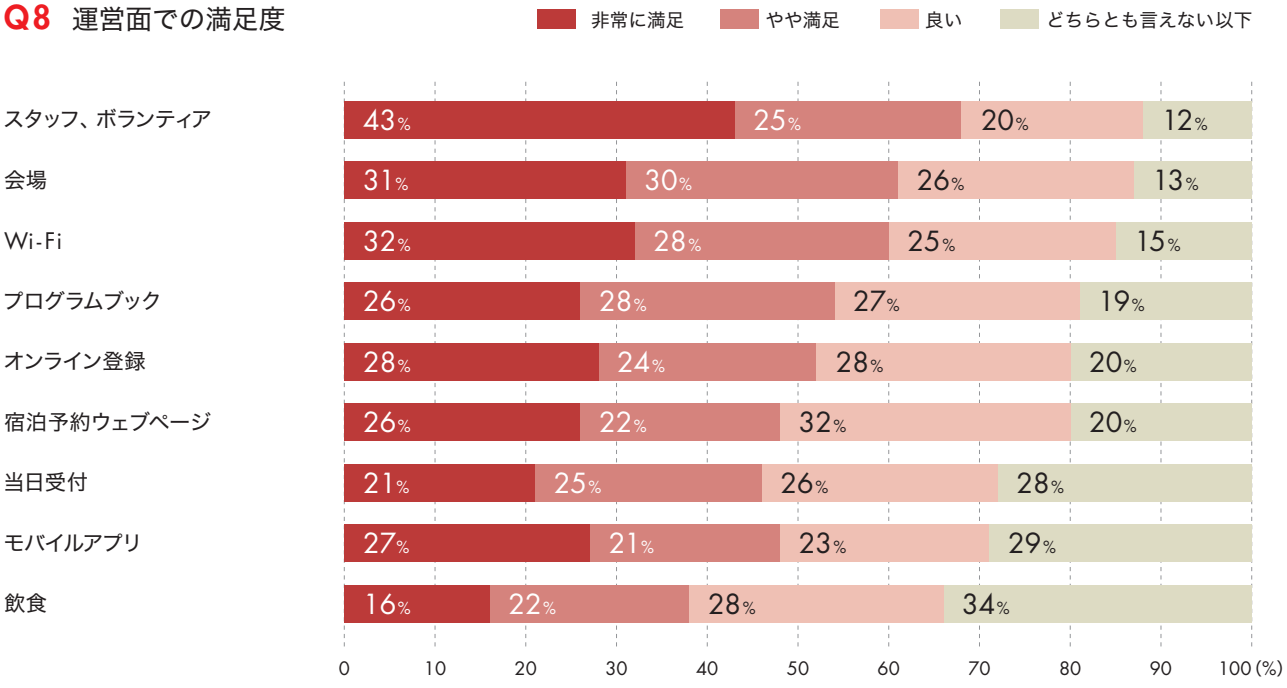
Q6 2022年、プラハで開催される第26回ICOM大会に参加しますか？



Q7 各プログラムの満足度



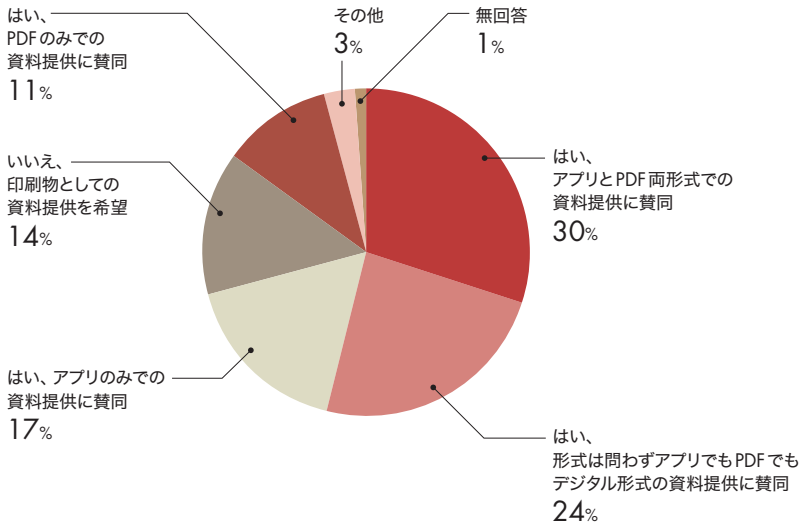
Q8 運営面での満足度



参加者アンケート

Q9 ICOMの一つの目標として、環境に配慮した施策を通じて
持続可能性を実現することが挙げられます。

その上で、今後のICOM大会ではプログラムブック等の資料を、
アプリやオンライン上でのPDFなど、
デジタル形式のみで提供することにご賛同頂けますか？



参加者の声（抜粋）

今回の「定義」をめぐっての対話の過程は、
非常に民主主義的であり、
大変興味深く、感動いたしました。
今後も来年の6月の採決が
どういったものになるのか
注視して行きたいと思いました

国内のミュージアム系の学会や研究会だけ
では無く、こういった機会に多くの関係者、
諸外国の研究者等と意見交換ができることは
素晴らしい事だと思います。
今回は、若いスタッフも多く参加している
状況が見受けられました。
今後のミュージアムの発展にも
寄与している会議だと改めて実感しました

さまざまな問題が存在することを
知れましたし、他国の事情ではなく、
日本人として、日本はじゃあどうだろうか、
私はどうだろうか、
と考えるきっかけとなりました

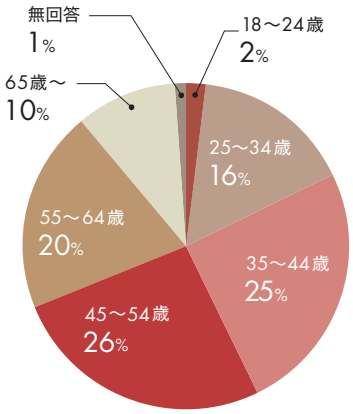
国を超えた
知り合いができ、
大きな収穫となりました

「ICOMは家族」という言葉に
とても感動しました。
国家間の紛争等の垣根を超えたところで、
各国の博物館の代表者が世界的視野で
博物館や文化財保護等の課題に
当たっているICOMは素晴らしい組織
だと実感しました

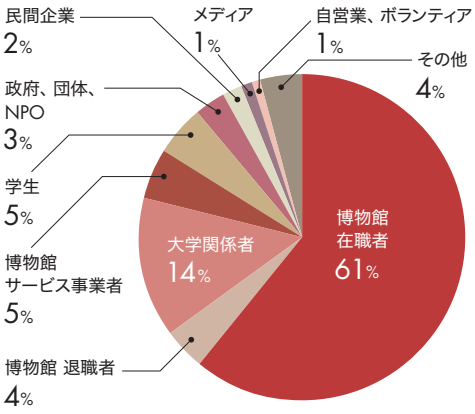
世界の博物館の動向を知る上でも、
参加して良かった。
日本での問題関心との違い、
社会と博物館の関係の違いなど、
学ぶところがあった。
今後とも、活動に関心を持ち続けたい

回答者の属性

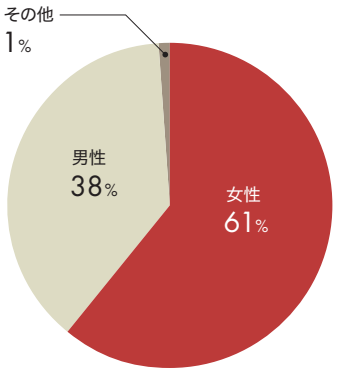
年齢



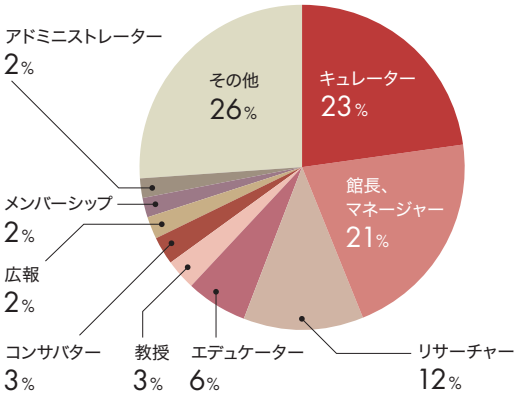
職業



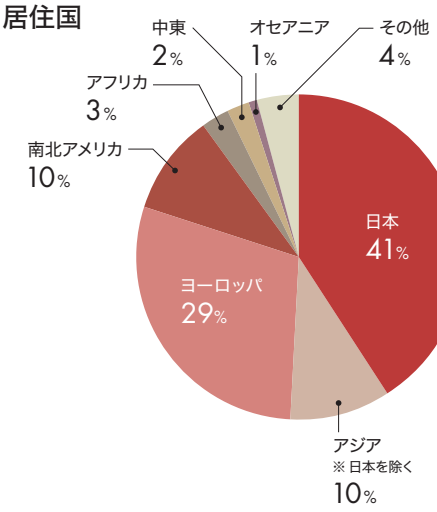
性別



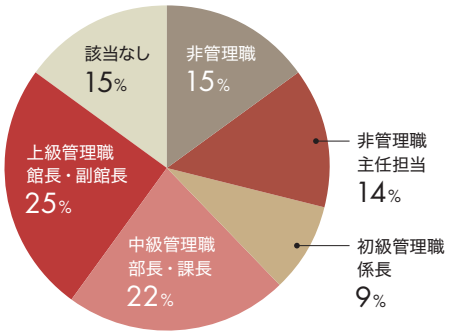
職務



居住国



役職



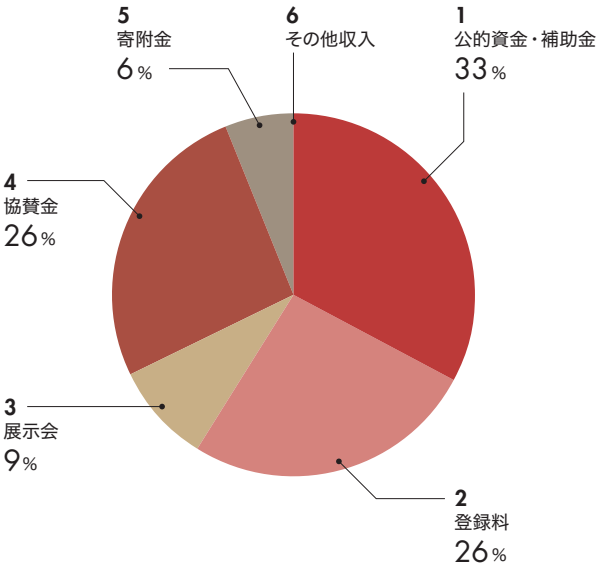


財務報告

財務報告

収入

最も大きい収入は公的資金・補助金で、文化庁、国立文化財機構、国立美術館及び京都府市からの支援が1億97百万円と全体の33%を占めた。次いで、企業からの協賛金とICOM京都大会への参加登録料収入がそれぞれ1億53百万円と26%ずつとなった。その他、展示会収入は55百万円(9%)、個人や団体からの寄附金は36百万円(6%)となった。



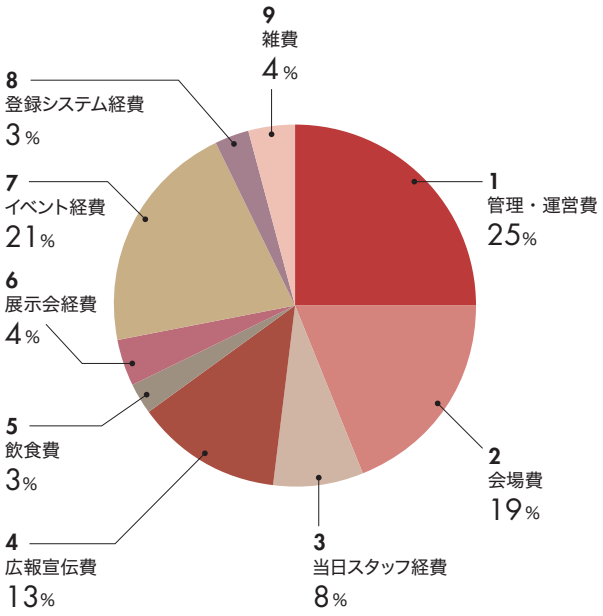
(円)

1 公的資金・補助金	
文化庁	34,527,552
日本学術会議	6,231,600
国立文化財機構	37,065,000
国立美術館	9,319,951
京都府	33,000,000
京都市	33,000,000
ゲティ財団	9,118,500
グレース・モーリー財団	191,075
ICOMグラント	9,609,176
ICOM負担金	4,324,337
日本博	17,627,000
京都コンベンションビューロー	3,000,000
小計	197,014,191
2 登録料	
早期割引	83,759,000
事前割引	40,815,000
オンサイト料金	692,000
一日券	22,848,000
コングレスバッグ・手数料その他	5,171,930
小計	153,285,930
3 展示会	
タイプ1(3m×3m)	48,384,000
タイプ2(3m×2m)	6,750,000
タイプ3(1.8m×2m)	216,000
小計	55,350,000
4 協賛金	
プラチナ(1000万円)	50,000,000
ゴールド(500万円)	15,000,000
シルバー(200万円)	42,000,000
ブロンズ(100万円)	19,000,000
パール(10万円)	3,300,000
物品・サービス	7,600,000
民間助成金	10,500,000
ICOM旗製作費	8,000,000
小計	155,400,000
5 寄附金	
企業・団体寄附金	32,150,000
個人寄附金	3,997,197
小計	36,147,197
6 その他収入	
預金利息	925
その他雑収入	32,401
小計	33,326

収入計	**597,230,644**

支出

支出のうち、管理・運営費が1億49百万円(25%)と最大の支出となった。ここには、トラベルグラント47百万円が含まれる。次いで、イベント経費が1億24百万円(21%)、会場費1億11百万円(19%)が続いた。イベント経費には、パーティ経費やソーシャル・イベント、エクスカーションの経費が含まれる。その他の経費は、広報宣伝費78百万円(13%)、スタッフ経費に51百万円(8%)等となっている。



(円)

1 管理・運営費	
本部旅費滞在費	16,762,165
組織委員会経費	56,447,902
トラベルグラント	46,526,127
登壇者経費	2,318,399
PCO経費	25,590,832
アーカイブ経費	1,642,697
小計	149,288,122
2 会場費	
会場費	91,805,723
会場設備・機材費	16,130,075
Wi-Fi経費	2,397,660
サイネージ／デコレーション	364,498
小計	110,697,956
3 当日スタッフ経費	
会場スタッフ	21,797,640
通訳者	19,201,568
ボランティア経費	5,357,434
警備	4,343,879
小計	50,700,521
4 広報宣伝費	
広報物製作費	12,628,023
ウェブサイト	13,733,060
アプリ	540,000
プログラムブック	11,051,064
会議配布物	33,829,206
報告書	6,255,651
小計	78,037,004
5 飲食費	17,146,626
6 展示会経費	22,119,398
7 イベント経費	
開会式／パーティ	37,103,036
閉会式／パーティ	33,799,127
ソーシャル・イベント	26,855,667
関連イベント	17,627,000
エクスカーション	8,673,046
小計	124,057,876
8 登録システム経費	
登録システム	16,081,306
エクスカーション登録システム	4,587,039
小計	20,668,345
9 雑費	
保険料	1,212,103
送金手数料その他	175,591
ICOMライセンス料	23,127,102
小計	24,514,796
支出計	**597,230,644**



大会後のイベント

大会後のイベント

ICOM京都大会2019報告会 兼ワークショップ

ICOM京都大会からみた あたらしいミュージアムのかたちとは？

日 時　1月13日(月・祝) 10:30−16:30
会 場　京都文化博物館
主 催　京都歴史文化施設クラスター実行委員会
　　ICOM京都大会2019組織委員会
　　ICOM日本委員会

京都文化博物館等の協力を得て、ICOM京都大会の報告会を兼ねたワークショップを開催し、93人の参加者を得た。午前中はICOM京都大会に参加した博物館関係者による大会のセッション報告を行い、午後は大会報告を踏まえて、日本におけるミュージアムの在り方についてグループでのワークショップを行った。





ICOM(国際博物館会議)京都大会2019 記念シンポジウム

日本のミュージアムの未来

日 時　京都：2月11日(火・祝) 14:00−17:00
　　東京：2月23日(日) 14:00−17:00
会 場　京都：京都国立博物館
　　東京：東京国立博物館
主 催　文化庁、ICOM京都大会2019組織委員会
　　ICOM日本委員会、公益財団法人日本博物館協会
　　京都国立博物館、東京国立博物館
助 成　平成31年度文化庁　博物館ネットワークによる
　　未来へのレガシー継承・発信事業

ICOM京都大会の成果を日本国内に発信する機会として、京都と東京の2会場でシンポジウムを行った。京都会場では、183人の参加者を集め、吉田憲司国立民族学博物館長による基調講演のあと、ICOM京都大会の国際委員会窓口担当者を中心とした議論が行われた。東京会場では、コロナウイルス感染拡大防止のため急遽中止としたが、シンポジウムの内容は録画し、後日オンラインで公開した。







参考資料

各種委員会名簿

ICOM京都大会2019組織委員会

＊期間表記のない場合は、2016年6月9日から2020年3月31日まで在任

委員長

佐々木 丞平　京都国立博物館長

副委員長

青木 保　ICOM日本委員会委員長
銭谷 眞美　東京国立博物館長
蓑　豊　兵庫県立美術館長

会計監事

久留島 浩　国立歴史民俗博物館長
柳原 正樹　京都国立近代美術館長

委員

青柳 正規　前文化庁長官
有馬 頼底　京都仏教会理事長
有松 育子　文部科学省生涯学習政策局長（在任当時：～2017年7月）
安藤 忠雄　安藤忠雄建築研究所
安藤 裕康　国際交流基金理事長
石澤 良昭　上智大学アジア人材養成研究センター所長（2017年7月～）
岩科 司　日本植物園協会長
内田 俊一　国立京都国際会館長（2018年7月～）
大原 謙一郎　大原美術館名誉館長（2017年4月～）
大山 真未　日本ユネスコ国内委員会事務総長、文部科学省国際統括官（2018年10月～）
門川 大作　京都市長
川端 和明　文部科学省国際統括官（在任当時：～2018年9月）
木下 博夫　国立京都国際会館長（在任当時：～2018年6月）
小松 弥生　埼玉県教育委員会教育長
近藤 誠一　京都市芸術文化協会理事長（2017年7月～）
酒井 忠康　世田谷美術館長
佐藤 禎一　東京国立博物館名誉館長
志野 光子　外務省国際文化交流審議官（2019年7月～）
島谷 弘幸　九州国立博物館長（2018年7月～）
下川 眞樹太　外務省国際文化交流審議官（在任当時：～2017年7月）
千　玄室　裏千家第15代前家元、ユネスコ親善大使（2017年7月～）
高階 秀爾　西洋美術振興財団理事長
立石 義雄　京都商工会議所会頭
建畠 晢　埼玉県立近代美術館長
田中 恆清　京都府神社庁長
常盤 豊　文部科学省生涯学習政策局長（在任当時：2017年7月～2018年10月）
徳川 義崇　徳川美術館長
長尾 真　京都市音楽芸術文化振興財団理事長
南條 史生　森美術館館長
西脇 隆俊　京都府知事（2017年4月～）
林　良博　国立科学博物館長
福田 豊　日本動物園水族館協会会長
馬渕 明子　国立西洋美術館長（在任当時：～2019年3月）
宮川 学　外務省国際文化交流審議官（在任当時：2017年7月～2019年7月）
宮田 亮平　文化庁長官
村田 純一　公益財団法人京都文化交流コンベンションビューロー理事長
山極 壽一　京都大学総長
山﨑 秀保　独立行政法人国立文化財機構審議役（2018年10月～）
山田 啓二　京都府知事（在任当時：～2017年4月）
吉田 憲司　国立民族学博物館長（2017年7月～）
鷲田 清一　京都市立芸術大学名誉教授

ICOM京都大会2019運営委員会

＊期間表記のない場合は、2017年4月18日から2020年3月31日まで在任

委員長

栗原　祐司　京都国立博物館

委員　　…ICOM京都大会における役割

青木 加苗　和歌山県立近代美術館
ICFA連絡窓口担当者

青木 豊　國學院大學
学術・研究チーム（2018年2月～）

足羽 與志子　一橋大学大学院
運営委員

飯田 卓　国立民族学博物館
ICME連絡窓口担当者

石原 香絵　NPO法人映画保存協会
AVICOM連絡窓口担当者

井関 洋人　京都府京都文化博物館
運営委員（～2018月3月）

伊藤 達矢　東京藝術大学
運営委員（2018年3月～）

稲庭 彩和子　東京都美術館
運営委員（2018年3月～）

稲葉 カヨ　京都大学
ボランティアチーム（2017年7月～）

井上 瞳　愛知学院大学
ICOFOM連絡窓口担当者

井上 由佳　明治大学
ICTOP連絡窓口担当者

井上 洋一　東京国立博物館
学術・研究チーム（2018年2月～）

岩﨑 奈緒子　京都大学総合博物館
ボランティアチーム（2017年7月～）

江水 是仁　東海大学
ICTOP連絡窓口担当者

遠藤 楽子　東京国立博物館
ICOMAM連絡窓口担当者（2019年6月～）

太田 歩　国立歴史民俗博物館
CECA連絡窓口担当者

大原 一興　横浜国立大学
ICAMT連絡窓口担当者

岡村 勝行　地方独立行政法人大阪市博物館機構
ICMAH連絡窓口担当者

小佐野 重利　東京大学
学術・研究チーム（2017年11月～）

片岡 真実　森美術館
学術・研究チーム（2018年2月～）

嘉村 哲郎　東京藝術大学芸術情報センター
CIDOC連絡窓口担当者（2018年4月～）

亀井 修　国立科学博物館
NATHIST連絡窓口担当者

河合 望　金沢大学
CIPEG連絡窓口担当者

河島 伸子　同志社大学
学術・研究チーム（2018年2月～）

川仁 央　コインみゅーじあむ準備室
ICOMON連絡窓口担当者

北里 洋　東京海洋大学
学術・研究チーム（2018年2月～）

倉澤 敏郎　パナソニック汐留ミュージアム
運営委員

栗田 秀法　名古屋大学大学院
学術・研究チーム（2018年2月～）

小石 謙一郎　京都市美術館
運営委員（～2019年3月）

後藤 和子　摂南大学
学術・研究チーム（2018年2月～）

五月女 賢司　吹田市立博物館
ICR連絡窓口担当者

榊　玲子　たばこと塩の博物館
ICOM-CC連絡窓口担当者

佐久間 大輔　大阪市立自然史博物館
NATHIST連絡窓口担当者

佐々木 秀彦　東京都歴史文化財団
学術・研究チーム（2018年2月～）

嶋　和彦　浜松市楽器博物館
CIMCIM連絡窓口担当者

白原 由起子　根津美術館
運営委員

吹田 浩　関西大学
CIPEG連絡窓口担当者

鈴鹿 可奈子　聖護院八ッ橋総本店
運営委員

関　光代　国立京都国際会館
運営委員

関谷 泰弘　ICOM京都大会準備室
MPR連絡窓口担当者

髙尾 戸美　多摩六都科学館
運営委員（2017年10月～）

竹内 丘　竹内美術店
運営委員（2018年2月～）

田澤 恵子　古代オリエント博物館
CIPEG連絡窓口担当者（2017年12月～）

邱　君妮　ICOM京都大会準備室
CAMOC連絡窓口担当者

土田 ルリ子　サントリー美術館
GLASS連絡窓口担当者

津村 宏臣　同志社大学
ボランティアチーム

各種委員会名簿

＊各委員の所属先は2019年9月1日現在のもの

中川 成美 立命館大学
ICLCM連絡窓口担当者

中谷 至宏 元離宮二条城事務所／京都市美術館
DEMHIST連絡窓口担当者

並木 誠士 京都工芸繊維大学美術工芸資料館
ボランティアチーム

西 記代子 ICOM京都大会準備室
CIDOC連絡窓口担当者

芳賀 満 東北大学
学術・研究チーム

濱田 浄人 国立科学博物館
運営委員（2018年4月～）

林 潤一郎 国立科学博物館
運営委員（2017年10月～2018年3月）

東 自由里 京都外国語大学
ICMEMO連絡窓口担当者

広井 真弓 京都府京都文化博物館
運営委員（2018年4月～）

福野 明子 国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館
UMAC連絡窓口担当者

船木 茂人 国立科学博物館
運営委員（～2017年9月）

星野 有希枝 文化庁地域文化創生本部
運営委員（2018年2月～）

堀内 しきぶ 奈良国立博物館
COMCOL連絡窓口担当者

前田 裕美 浦賀ドック野外船舶技術博物館設立推進会議
ICMS連絡窓口担当者

眞木 まどか 日本科学未来館
INTERCOM連絡窓口担当者（2018年11月～）

松田 陽 東京大学大学院
学術・研究チーム（2018年2月～）

松山 沙樹 京都国立近代美術館
運営委員

三島 貴雄 京都国立博物館
運営委員

三谷 理華 静岡県立美術館
ICLCM連絡窓口担当者（2019年6月～）

南 博史 京都外国語大学国際文化資料館
ボランティアチーム

望月 規史 九州国立博物館
ICOMAM連絡窓口担当者

本橋 弥生 国立新美術館
COSTUME連絡窓口担当者

矢島 國雄 明治大学
学術・研究チーム（2018年2月～）

矢野 桂司 立命館大学
学術・研究チーム（2017年7月～）

山西 良平 西宮市貝類館
学術・研究チーム（2018年2月～）

山本 浩智 京都市教育委員会
運営委員

リンネ マリサ 京都国立博物館
ICDAD連絡窓口担当者

若林 文高 国立科学博物館
CIMUSET連絡窓口担当者

渡辺 友美 お茶の水女子大学
ICEE連絡窓口担当者

ICOM京都大会2019事務局

ICOM京都大会準備室

丸井 とし也 専門調査官（2018年10月～）
関谷 泰弘 企画調整官（2018年3月～）
渡邉 淳子 主任研究員（～2019年3月）
前田 有佳子 事務主任（～2018年5月）
落合 広倫 研究員（2019年4月～10月）
川田 萌子 研究員（2019年4月～）
邱 君妮 研究員
西 記代子 研究員（2017年8月～）
松山 沙樹 研究員（2018年4月～2019年9月）
法貴 日登美 事務補佐員（2018年8月～）

益田 兼房 客員研究員（2017年8月～2020年3月）
森重 和子 客員研究員（2017年9月～2018年3月）
リンネ マリサ 客員研究員
青山 峻丈 ICOM京都大会運営委員長付（2018年4月～2019年9月）
桐山 京子 インターン（2019年6月～9月）
松原 準 インターン（2018年8月～9月）
リヒター シャルロッテ インターン（2018年10月～2019年9月）

ICOM日本委員会事務局

半田 昌之 事務局長
仲谷 昌久 事務局次長

宮戸 秀昭 特任専門官

協賛・協力一覧

プラチナ協賛

公益財団法人 石橋財団
THK株式会社
読売新聞社
大塚国際美術館・大塚オーミ陶業株式会社
凸版印刷株式会社

ゴールド協賛

株式会社大伸社
Tianyu Culture Group Co., Ltd.
大和ハウス工業(Daiwa Sakura Aid)

シルバー協賛

大日本印刷株式会社
コニカミノルタジャパン株式会社
村田機械株式会社
日本経済新聞社
hakuhodo-VRAR Microsoft
株式会社 黄山美術社
エボルブテクノロジー byナスクインターナショナル
日本通運株式会社
NISSHA株式会社／日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社
野村證券株式会社
サラヤ株式会社
株式会社SCREENホールディングス
株式会社 俄
森ビル株式会社
公益財団法人 笹川保健財団
SHARP 8Kインタラクティブミュージアム
株式会社 島津製作所
株式会社丹青社・株式会社丹青研究所
JR西日本
大成建設株式会社
東洋インキ株式会社
ヤマトグローバルロジスティクスジャパン株式会社

ブロンズ協賛

キヤノンマーケティングジャパン株式会社
月桂冠株式会社
株式会社長谷ビル
株式会社堀場製作所
NECネッツエスアイ株式会社
株式会社大林組
ローム株式会社
株式会社トータルメディア開発研究所
株式会社USEN
株式会社YAMAGIWA
大和証券株式会社 京都支店
Goppion Technology Japan
株式会社ハシラス
京セラ株式会社
株式会社乃村工藝社
オムロン株式会社
東京海上日動火災保険株式会社
トヨタ自動車株式会社
株式会社ワコールホールディングス

協賛・協力一覧

物品／サービス協賛

株式会社便利堂
月桂冠株式会社
グランドプリンスホテル京都
株式会社亀屋良永
株式会社京都鳩居堂
株式会社豆政
株式会社満月
ピープルソフトウェア株式会社
積水ハウス株式会社
株式会社聖護院八ッ橋総本店
サントリーホールディングス株式会社
寺田倉庫株式会社
株式会社ユニクロ
江崎グリコ株式会社
Goppion Technology Japan
京都ホテルオークラ
日本通運株式会社
佐川印刷株式会社
絹谷幸二 天空美術館
損害保険ジャパン日本興亜株式会社
株式会社TBM
株式会社 宇治香園
ヤマトグローバルロジスティクスジャパン株式会社

輸送協賛

彌榮自動車株式会社

ネットワーク協賛

NTTコミュニケーションズ株式会社
シスコシステムズ合同会社
西日本電信電話株式会社

パール協賛

株式会社キャリエール・インターナショナル
第一合成株式会社
株式会社大丸松坂屋百貨店
大和証券株式会社 京都支店
福田金属箔粉工業株式会社
株式会社 福寿園
株式会社フクナガ
株式会社Izutsu Mother
一般社団法人日本ホテル協会京都支部
株式会社 片岡製作所
京華産業株式会社
近建ビル管理株式会社
株式会社 鼓月
株式会社 京都駅観光デパート
京都薬品工業株式会社
京都駅ビル開発株式会社
Michelangelo Foundation for Creativity & Craftsmanship
株式会社Mizkan Partners MIZKAN MUSEUM
佐川印刷株式会社
サムコ 株式会社
SGホールディングス株式会社
株式会社しょうざん
株式会社たけびし
株式会社トーセ
株式会社 祇園辻利
株式会社 若林佛具製作所
ワタキューセイモア株式会社
西日本旅客鉄道株式会社
株式会社聖護院八ッ橋総本店
北野天満宮

助成

公益社団法人一ツ橋綜合財団
公益財団法人カメイ社会教育振興財団
公益財団法人鹿島美術財団
公益財団法人大林財団
公益財団法人東芝国際交流財団
日本博
公益財団法人 京都文化交流コンベンションビューロー
公益財団法人三菱財団
一般社団法人東京倶楽部

特別協力

キヤノン株式会社
NHK
京都商工会議所
京都駅ビル開発株式会社
丸一興業株式会社 bolda事業本部
独立行政法人国立科学博物館
SoundUD推進コンソーシアム
株式会社エフエム京都
KBS京都
公益財団法人国立京都国際会館
公益財団法人京都伝統伎芸振興財団
株式会社村田製作所
株式会社ニトロプラス
株式会社 龍村美術織物

協力

サイバー関西プロジェクト
公益財団法人 日本ナショナルトラスト
一般財団法人 京都仏教会
京都工芸繊維大学
京都府神社庁
京都市内博物館施設連絡協議会
京都府立大学
京都府立医科大学
京都府ミュージアムフォーラム
京都外国語大学
株式会社 京都新聞社
ライオンズクラブ国際協会335-C地区
西陣織工業組合
京都南ロータリークラブ
明日の京都文化遺産プラットフォーム

後援

公益社団法人企業メセナ協議会
公益社団法人 関西経済連合会

寄附

日本たばこ産業株式会社
住友グループ
株式会社京都銀行
ダイキン工業株式会社
株式会社五藤光学研究所
公益財団法人稲盛財団
特定非営利活動法人博物館活動支援センター
京阪ホールディングス株式会社
近鉄グループホールディングス株式会社
京都中央信用金庫
一般社団法人京都府歯科医師会
京都信用金庫
メトロポリタン東洋美術研究センター
美樹工業株式会社
三井不動産株式会社
ニチレキ株式会社
株式会社日建設計
日本管財株式会社
日新電機株式会社
日新鉱産株式会社
株式会社奥村組
公益財団法人 泉屋博古館
三州ペイント株式会社
TABIZURU FOUNDATION
戸田建設株式会社
一般財団法人今日庵
原　悟
林　浩二
上月　佳子
千　玄室
芝山　久三
杉井　延子
鈴木　一彦
辻村　英雄
王　少飛

他5名

出展者一覧

イベントホール

E01	サラヤ株式会社
E02	野村證券株式会社
E03	株式会社俄
E04	日本通運株式会社
E05	JR西日本
E06	hakuhodo-VRAR Microsoft
E07	株式会社NHKプロモーション
E08	日本放送協会
E09	株式会社大伸社
E10	SoundUD推進コンソーシアム
E11	株式会社丹青社・株式会社丹青研究所
E12	東洋インキ株式会社
E13	SHARP 8K インタラクティブミュージアム
E14	NHKエデュケーショナル
E15	THK株式会社
E16	凸版印刷株式会社
E17	読売新聞社
E18	ヤマトグローバルロジスティクスジャパン株式会社
E19	株式会社堀場製作所/株式会社堀場テクノサービス
E20	大塚国際美術館・大塚オーミ陶業株式会社
E21	公益財団法人 石橋財団
E22	Tianyu Culture Group Co., Ltd.
E23	エボルブテクノロジー by ナスクインターナショナル
E24	コニカミノルタジャパン株式会社
E25	株式会社キテラス
E26	ピープルソフトウェア株式会社
E27	大和ハウス工業（Daiwa Sakura Aid）
E28	株式会社YAMAGIWA
E29	NISSHA株式会社/日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社
E30	NECネッツエスアイ株式会社
E31	公益財団法人 笹川保健財団
E32	株式会社 便利堂
E33	株式会社USEN
E34	大日本印刷株式会社
E35	第26回ICOM大会
E36	ICOM and Routledge
E37	株式会社 島津製作所
E38	Goppion Technology Japan
E39	タキヤ株式会社
E40	株式会社バーテック
E41	光明理化学工業株式会社
E42	技研トラステム株式会社
E43	Scala Arts & Heritage Publishers
E44	TRC-ADEAC株式会社：デジタルアーカイブシステムADEAC
E45	若井産業株式会社
E46	NOK株式会社
E47	株式会社クロスエフェクト
E48	セキセイ株式会社
E49	チケッツ インターナショナル
E50	クラボウ

ニューホール

N01	Olympic Museums Network
N02	2025年大阪・関西万博
N03	一般社団法人流体ハーモニー研究所
N04	富士ゼロックス京都株式会社
N05	想芸館 浮遊Factory
N06	高柳板金株式会社
N07	香老舗 松栄堂
N08	株式会社ハシラス
N09-1	株式会社TTトレーディング
N09-2	三菱ガス化学株式会社グループ
N09-3	北京美大文博科技有限公司
N10	株式会社 九州ダイト
N11	株式会社Stroly
N12	株式会社 西尾製作所
N13	醍醐寺
N14	KYOTO'S 3D STUDIO株式会社
N15	オリオン機械株式会社
N16	株式会社クマヒラ
N17	株式会社SCREENホールディングス
N18	日本経済新聞社
N19	帝国データバンク史料館
N20	第一合成株式会社
N21	The International Journal of Intangible Heritage / National Folk Museum of Korea
N22	大韓民国 国立中央博物館/ICOM韓国委員会
N23	能美防災株式会社/株式会社コーアツ
N24	CLICK NETHERFIELD
N25	株式会社 東京光音
N26	ミネベアミツミ株式会社
N27	Tru Vue
N28	コンサベーション・バイ・デザイン
N29	国立成功大学博物館
N30	MoNTUE北師美術館
N31	関東文化財振興会株式会社
N32	荒川技研工業株式会社
N33	株式会社オカムラ
N34	アイメジャー株式会社
N35	株式会社とっぺん
N36	National Palace Museum
N37	Museums of Taiwan
N38	メイヴァールト
N39	4DAGE Technology Co., Ltd.
N40	Image Access GmbH
N41	Zone Display Cases
N42	JVS GROUP s.r.o.
N43	天津森羅科技股份有限公司
N44	Nanjing VITA Cultural Heritage Protection Technology Co., Ltd.
N45	株式会社エルコム
N46	株式会社QDレーザ

出展者一覧

アネックスホール

A01	東京富士美術館
A02	NPO全日本アートフラワーデザイナー協会
A03	地方独立行政法人大阪市博物館機構
A04	日本政府観光局（JNTO）
A05	独立行政法人国立美術館
A06	「板東俘虜収容所関係資料」をユネスコ世界の記憶に！ 徳島県、鳴門市
A07	兵庫県の美術館・博物館
A08	堺市博物館
A09	独立行政法人国立文化財機構
A10	大津波被災文化財保存修復技術連携プロジェクト
A11	関西広域連合
A12	東大阪市
A13	国立アイヌ民族博物館設立準備室
A14	国立民族学博物館
A15	京都文化力プロジェクト・京都商工会議所
A16	京都市京セラ美術館
A17	公益財団法人京都古文化保存協会
A18	art space co-jin
A19	京都市保健福祉局障害保健福祉推進室
A20	一般社団法人 国宝修理装潢師連盟
A21	三菱一号館美術館／三菱地所株式会社
A22	和歌山県立博物館
A23	京都・大学ミュージアム連携
A24	竹中大工道具館
A25	鯖江市まなべの館
A26	NPO法人 文化遺産の世界
A27	AKZU LIGHTSYSTEM CO., LTD.
A28	株式会社大入
A30	船の科学館「海の学びミュージアムサポート」
A31	公益財団法人 東京動物園協会
A32	田中伸明写真事務所
A33	JICA大エジプト博物館合同保存修復プロジェクト
A34	日本博
A35	Seoul Museum of History
A36	日亜化学工業株式会社
A37	Relicase Display Engineering Limited
A38	株式会社ビクセン
A39	smARTravel
A40	株式会社ハイロックス
A41	Museumspartner
A45	ダジック・アース（京都大学）
A46	かんさい・大学ミュージアムネットワーク
A47	和泉市久保惣記念美術館
A48	国際日本文化研究センター
A49	ライフミュージアムネットワーク
A50	一般財団法人 古田織部美術館

オフサイトミーティング

委員会名	日程	開催地	会場	会議名
国際委員会セッション				
AVICOM オーディオビジュアル及びソーシャルメディア新技術国際委員会	9月5日（木）	**大阪府**	仁徳天皇陵古墳、堺市博物館、NHK大阪放送局、大阪歴史博物館	・大阪のNHK放送局と博物館へのエクスカーション
CAMOC 都市博物館のコレクション・活動国際委員会	9月5日（木）	**京都府**	京都府京都文化博物館	・都市博物館のトレンドと定義：都市の過去と現在とのつながり、都市問題への対応 ・都市の博物館と持続可能な都市・地域社会の発展
CECA 教育・文化活動国際委員会	9月5日（木）	**和歌山県**	和歌山県立紀伊風土記の丘／和歌山県立博物館／和歌山県立近代美術館	・ICOM-CECAオフサイトミーティング in 和歌山
CIDOC ドキュメンテーション国際委員会	9月5日（木）	**徳島県**	大塚国際美術館	・文化財の複製・保存・修復とドキュメンテーション
CIMCIM 楽器の博物館・コレクション国際委員会	9月5日（木）	**大阪府**	国立民族学博物館	・多様性と普遍性（ICMEとの合同セッション）
	9月6日（金）	**静岡県**	浜松市楽器博物館と楽器製造会社	・浜松へのエクスカージョン（CIMCIMメンバー限定、交通費等自己負担）
CIMUSET 科学技術の博物館・コレクション国際委員会	9月5日（木）	**愛知県**	名古屋市科学館、トヨタ産業技術記念館	・技術・科学遺産の持続可能性
CIPEG エジプト学国際委員会	9月5日（木）	**滋賀県** **京都府**	MIHO MUSEUM、京都大学	・甲賀市MIHO MUSEUMおよび京都大学博物館エジプト・コレクションの観覧
COMCOL コレクション活動に関する国際委員会	9月5日（木）	**滋賀県** **京都府**	MIHO MUSEUM、京都国立近代美術館	・MIHO MUSEUMと京都国立近代美術館における作品収集の伝統
COSTUME 衣装の博物館・コレクション国際委員会	9月5日（木）	**京都府**	京都服飾文化研究財団（KCI）	・職人工房と京都服飾文化研究財団（KCI）訪問
	9月6日（金）	**滋賀県**	本藍染紺九、浅井能楽資料館	・滋賀県・琵琶湖ツアー
DEMHIST 歴史的建築物の博物館国際委員会	9月5日（木）	**京都府**	二条城 元三井下鴨別邸、駒井家住宅、喜多源逸邸、無鄰菴	・建築と技術：DEMHISTとICAMT二条城への合同ツアー ・京都・日本庭園、邸宅ツアー
GLASS ガラスの博物館・コレクション国際委員会	1日目／9月5日（木）	**富山県**	・富山市立富山ガラス造形研究所、富山ガラス工房、富山市ガラス美術館	・北陸地方のガラスの博物館（富山、金沢2日間のエクスカーション）
	2日目／9月6日（金）	**石川県**	金沢卯辰山工芸工房、石川県立美術館	
ICAMT 建築・博物館技術国際委員会	9月5日（木）	**京都府**	二条城、京都市京セラ美術館	・午前　二条城：展示スペースと文化財の保護（DEMHISTと合同） ・午後　京セラ美術館：未来に向けた美術館建築の刷新
ICDAD 装飾美術・デザインの博物館・コレクション国際委員会	9月5日（木）	**京都府**	美術館、文化遺産等	・京都の芸術的伝統
ICEE 展示・交流国際委員会	9月5日（木）	**京都府**	午前：京都市ツアー 午後：京都国立博物館	・展示の交流を通じた国際協力

オフサイトミーティング

委員会名	日程	開催地	会場	会議名
ICFA 美術の博物館・コレクション国際委員会	9月5日（木）	**大阪府**	大阪市立美術館、国立国際美術館	・コレクションと展示：東洋と西洋
ICLCM 文学と作曲家の博物館国際委員会	9月5日（木）	**京都府**	宇治市源氏物語ミュージアム	・京都古典文学の世界を訪ねる
ICMAH 考古学・歴史の博物館・コレクション国際委員会	9月5日（木）	**大阪府**	大阪歴史博物館	・大阪と世界の歴史・考古学博物館専門家との議論を通した、国際的な意見交換の促進
ICME 民族学の博物館・コレクション国際委員会	9月5日（木）	**大阪府**	国立民族学博物館	・多様性と普遍性（CIMCIMとの合同ミーティング）
ICMEMO 公共に対する犯罪犠牲者追悼のための記念博物館国際委員会	9月5日（木）	**広島県**	広島平和記念資料館	・遺品と跡地が語るグラウンド・ゼロ
ICMS 博物館セキュリティ国際委員会	9月4日（水）	**京都府**	国立京都国際会館／清水寺	・現地調査・訪問 文化財向け防災設備と緩衝地帯：清水寺と産寧坂周辺の保全区域の訪問
	9月5日（木）	**兵庫県**	兵庫県立美術館、竹中大工道具館、人と防災未来センター	・ICMS神戸オフサイトミーティング
ICOFOM 博物館学国際委員会	9月5日（木）	**京都府**	同志社大学　良心館	・伝統的な博物館学の未来
ICOM-CC 保存国際委員会	9月5日（木）	**奈良県**	奈良文化財研究所、 奈良国立博物館、法隆寺	・2011年津波後の保全事業および奈良の史跡・名所の保全をテーマとするツアー
ICOMAM 武器・軍事史博物館国際委員会	9月5日（木）	**大阪府** **京都府**	大念仏寺、京都国立博物館	・日本文化および博物化における刀剣、武具、甲冑
ICOMON 貨幣博物館国際委員会	9月5日（木）	**大阪府** **兵庫県**	造幣局博物館（大阪）、 尼信会館（尼崎）、 黒川古文化研究所（西宮）	・関西地域の貨幣博物館の多様性を体感するツアー
ICR 地方博物館国際委員会	9月5日（木）	**大阪府**	大念佛寺ほか （平野・町ぐるみ博物館）	・フォーラム：エコミュージアムと地域博物館
ICTOP 人材育成国際委員会	9月5日（木）	**京都府**	京都造形芸術大学、 京都国際マンガミュージアム	・京都のミュージアムとミュージアムにおける研修
	9月5日（木）	**大阪府**	大念佛寺ほか （平野・町ぐるみ博物館）	・フォーラム：エコミュージアムと地域博物館（ICOM ICRとの合同ミーティング）
INTERCOM マネージメント国際委員会	9月5日（木）	**京都府**	京都国際マンガミュージアム	・伝統を未来へ：文化をつなぐミュージアム
MPR マーケティング・交流国際委員会	9月5日（木）	**京都府**	野口家住宅、錦市場、東寺、京都鉄道博物館	・京都の多様性探訪と京都鉄道博物館におけるセッション
NATHIST 自然史の博物館・コレクション国際委員会	9月5日（木）	**大阪府**	大阪市立自然史博物館	・新たな連携
	9月6日（金）	**滋賀県**	滋賀県立琵琶湖博物館とその周辺	・琵琶湖周辺自然・文化ツアー
UMAC 大学博物館・コレクション国際委員会	9月5日（木）	**京都府**	京都外国語大学　国際文化資料館	・日本における大学博物館と収蔵品の未来
その他委員会セッション				
FIHRM 国際人権博物館連盟	9月5日（木）	**京都府**	創価学会 京都国際文化会館	・ワークショップ：ミュージアム、人権と気候変動

エクスカーション・ツアー

エクスカーション

コース名		訪問先
京都市内		
C-1	洛北の世界遺産寺院と至宝	金閣寺、龍安寺、相国寺承天閣美術館
C-2	京都御所、仙洞御所・大宮御所を巡る	京都御所、仙洞御所、大宮御所
C-3	市内のお茶コース①「器と茶道」	樂美術館、裏千家茶道会館
C-4	自然との調和 宮内庁離宮とヴォーリズ建築	修学院離宮、駒井家住宅
C-5	哲学の道沿い世界遺産寺院と美術館を往く	銀閣寺、橋本関雪記念館、哲学の道
C-6	下鴨界隈ぶらり散策	旧三井家下鴨別邸、下鴨神社
C-7	京の食文化を学ぶ	らくたび京町家、錦市場
C-8	文化財修復工房の見学	京都国立博物館文化財保存修理所 各工房
C-9	洛西の緑に佇む 宮内庁離宮と名社を巡る	桂離宮、松尾大社
C-10	伏見 酒造の町並みとお稲荷さん	月桂冠大倉記念館・工場、伏見稲荷大社
C-11	京のものづくり（織物・お香編）	龍村美術織物（工場見学）、松栄堂・薫習館
C-12	日本の伝統文化体験	京都ハンディクラフトセンター
C-13	京都の近代化を支えた技術力を発見	島津製作所創業記念資料館、川島織物文化館
C-14	市内のお茶コース②「お茶文化を体験する」	福寿園京都本店（福寿園京都ギャラリー）
C-15	東寺ハイライト	東寺宝物館・五重塔初層内部密教空間
C-16	artKYOTO 2019	二条城 二の丸御殿台所、御清所、東南隅櫓
C-17	日本の伝統建築と修理現場を訪ねる	京都御所、京都迎賓館 、本隆寺（修復現場）、東寺
C-18	小川治兵衛の名庭を訪ねて	並河靖之七宝記念館、南禅寺 順正、無鄰菴
C-19	大原の里山で寺院を訪ねる	大原三千院円融蔵、寂光院宝物殿
C-20	禅宗寺院と修理技術の継承	京都市文化財建造物保存技術研修センター、東福寺（修復現場見学）
C-21	洛南の大寺院と清水焼団地を歩く	醍醐寺霊宝館、清水焼の郷会館
C-22	ファミリーで楽しむミュージアム	京都水族館、京都鉄道博物館
C-23	京の住まいとその活用に触れる	京都市景観まちづくりセンター、長江家住宅、ITONOWA
C-24	嵐山・嵯峨野の寺院とミュージアム	嵯峨嵐山文華館、京都嵐山オルゴール博物館、天龍寺、竹林の道、大覚寺
C-25	京都大学花山天文台の特別公開	京都大学花山天文台
S-1	下鴨界隈ぶらり散策　（C-6のショート）	旧三井家下鴨別邸、下鴨神社
S-2	伏見 酒造の町並みとお稲荷さん　（C-10のショート）	月桂冠大倉記念館・工場、伏見稲荷大社
京都府内		
P-1	日本三景天橋立をめぐる古刹と海の暮らし	伊根の舟屋、向井酒造、成相寺・天橋立、智恩寺文殊堂、府立丹後郷土資料館
P-2	ちりめん街道と山陰海岸ジオパーク巡り	ちりめん街道伝建地区・旧尾藤家住宅、丹後ちりめん歴史館、山陽海岸ジオパーク（立岩・大成古墳群）、丹後古代の里資料館
P-3	地域の歴史と平和への祈りを次代へ	田辺城跡、舞鶴赤レンガ博物館、舞鶴引揚記念館、舞鶴湾クルーズ
P-4	自然が育む山里の繁栄	福知山城、鬼の交流博物館、元伊勢三社、黒谷和紙会館、グンゼ記念館、佐藤太清美美術館、丹波生活衣館

エクスカーション・ツアー

	コース名	訪問先
P-5	トロッコ列車と川下りで行く亀岡の城下町	嵯峨野トロッコ列車、保津川下り、亀岡城下町、亀岡祭の山鉾、みずのき美術館
P-6	日本の原風景と匠の技が生きる職人の郷	美山かやぶき民俗資料館、南丹市立博物館、清源寺、京都伝統工芸大学校
P-7	竹の里と茶席を巡るおもてなしの文化	真葛焼（お茶体験、工房見学）、聴竹居、待庵、大山崎町歴史資料館、長岡天満宮
P-8	世界遺産平等院と国宝石清水八幡宮を巡る	平等院、松花堂庭園・美術館、石清水八幡宮、宇治市源氏物語ミュージアム、匠の館
P-9	古代・恭仁宮と日本茶の風景	上狛茶問屋街、府立山城郷土資料館、恭仁宮跡、和束・石寺の茶畑、萬福寺
関西周辺		
H-1	安藤忠雄の建築と、兵庫県立美術館の「具体」を訪ねて	淡路夢舞台、兵庫県立美術館
H-2	世界遺産姫路城と兵庫県立歴史博物館を訪ねて	兵庫県立歴史博物館、姫路城
H-3	篠山城下町と丹波焼の里、二つの日本遺産を訪ねて	篠山城下町、兵庫陶芸美術館、窯元めぐり、伝統工芸陶の郷
H-4	山陰海岸ジオパークの神秘と特別天然記念物コウノトリの郷を訪ねて	城崎国際アートセンター、城崎温泉街、兵庫県立コウノトリの郷公園
H-5	子午線のまち・時のまち「明石」を訪ねて	明石市天文科学館、文化博物館、魚の棚、明石城
H-6	兵庫県立美術館の「具体」と建設を巡る	六甲枝垂れ、兵庫県立美術館
H-7	ジオパークと特別天然記念物コウノトリの郷を訪ねて	玄武洞、玄武洞ミュージアム、城崎温泉街、兵庫県立コウノトリの郷公園
O-1	大阪　高層階ミュージアムを巡る旅　絹谷幸二天空美術館、あべのハルカス美術館	絹谷浩二天空美術館、あべのハルカス美術館、ハルカス300、梅田スカイビル空中庭園展望台
F-1	和紙、漆器、打刃物　伝統工芸品の産地で職人の手仕事に触れる	越前和紙の里、うるしの里会館、タケフナイフビレッジ
K-1	こてこて大阪　定番コース	大阪城、とんぼりクルーズ、難波周辺、通天閣
K-2	世界遺産高野山と精進料理	高野山霊宝館、大門、壇上伽藍、金剛峯寺
K-3	古都奈良　仏教の歴史と文化	東大寺、東大寺ミュージアム、奈良国立博物館、奈良公園
K-4	比叡山延暦寺・びわ湖の景勝地浮御堂	比叡山延暦寺東塔エリア、精進料理、浮御堂
K-5	（不催行）水に浮かぶ佐川美術館と近江八幡巡り	佐川美術館、八幡堀と近江八幡の街並み、日牟禮八幡宮
K-6	（不催行）飛鳥時代の古墳と古墳壁画をたずねて	キトラ古墳・キトラ古墳壁画体験館 四神の館、石舞台古墳、高松塚古墳・高松塚古墳壁画館

観光ツアー

	コース名	訪問先
T-1	（不催行）新旧文化・芸術に触れる旅2日間	兼六園、金沢城、ひがし茶屋街、金沢21世紀美術館
T-2	（不催行）広島と山口の名所をまわる2日間	広島平和記念資料館、原爆ドーム、安芸の宮島、錦帯橋
T-3	（不催行）港町と古都鎌倉に触れる 神奈川2日間	鎌倉大仏、鶴岡八幡宮、横浜
T-4	（不催行）お伊勢参りと忍者の里伊賀上野2日間	伊勢神宮、伊賀上野城
M-1 M-2	朝坐禅体験と精進料理の朝食付バスツアー	坐禅体験、朝食（精進料理）

制作物一覧

プログラムブック（英語版、スペイン語版、フランス語版、日本語版）



ネームバッジ



ピンバッジ



バナー



コングレスバッグ





制作物一覧

協賛金趣意書（英語版、日本語版、中国語版、韓国語版）



パンフレット



バックドロップ



ICOM旗





制作の様子

ポスター



文化をつなぐミュージアム ―伝統を未来へ―
Museums as Cultural Hubs: the Future of Tradition

第25回ICOM（国際博物館会議）京都大会
2019年9月1日〈日〉―7日〈土〉 2018年11月 参加登録申込開始
http://icom-kyoto-2019.org/jp

ICOM international council of museums

国際博物館会議 京都大会
ICOM KYOTO 2019

原画『光降る街・京都』
作者：絹谷 幸二 氏



主要国内メディア掲載

新聞記事

掲載日	掲載元	見出し
2019年9月2日	読売新聞夕刊	「未来創造　博物館の役割」開会式で秋篠宮さま
2019年9月2日	日本経済新聞夕刊	国際博物館会議京都大会が開会
2019年9月2日	朝日新聞夕刊	世界の博物館　未来を考える
2019年9月2日	毎日新聞夕刊	ICOM京都で開幕
2019年9月2日	産経新聞夕刊	日本初の国際博物館会議
2019年9月2日	京都新聞夕刊	博物館の将来像を探る
2019年9月2日	NIKKEI ASIAN REVIEW	Museums for the momdern age
2019年9月3日	読売新聞	歴史薫る厳かな幕開け　開会式　討議と交流　発展祈る
2019年9月3日	毎日新聞夕刊	博物館の意義を再考する
2019年9月3日	産経新聞	博物館　定義など再考　京都で日本初のICOM開会
2019年9月3日	朝日新聞	「博物館の役割　交流・教育・経済」　ICOMで建築家・隈さん基調講演
2019年9月3日	京都新聞	文化つなぐ博物館に　建築家の隈氏　基調講演
2019年9月4日	読売新聞	学生ボランティア300人　SNS発信も
2019年9月4日	朝日新聞	博物館定義巡り討議
2019年9月5日	読売新聞	博物館の連携　確認　被災記憶継承や漫画保存
2019年9月5日	朝日新聞	博物館と災害　事例報告　防災の専門機関発足
2019年9月6日	読売新聞	新たな博物館像　議論縦横
2019年9月6日	朝日新聞	戦争・テロ・・・博物館はどう伝える　広島で国際会議
2019年9月6日	徳島新聞	文化財「複製にも命」大塚美術館で国際専門委
2019年9月7日	朝日新聞	ICOM参加者　名所次々に見学
2019年9月8日	読売新聞	博物館の将来　活性化への好循環つくりたい
2019年9月8日	読売新聞	博物館「文化の結節点」決議採択し閉幕
2019年9月8日	毎日新聞	博物館定義の見直し　採決延期
2019年9月8日	京都新聞	博物“変革”遅れる日本
2019年9月10日	京都新聞	社説　博物館の将来　社会との関わりもっと
2019年9月10日	THE JAPAN TIMES	In Kyoto, global meet mulls museums' role, safety
2019年9月10日	THE JAPAN TIMES	Promote museums as hubs of culture, ICOM urges
2019年9月11日	毎日新聞夕刊	「神の眼」が問う地球の未来
2019年9月11日	琉球新聞	戦争の記憶継承へ平和の礎など視察
2019年9月12日	読売新聞	ICOM京都大会　新たな博物館像巡り議論
2019年9月13日	朝日新聞	協調と対話　これからも
2019年9月13日	毎日新聞	地域で果たす役割を考える　伊達・博物館シンポ
2019年9月14日	毎日新聞	博物館　災害から守れ　ICOM京都大会　内外の事例に学ぶ

掲載日	掲載元	見出し
2019年9月18日	朝日新聞夕刊	未来の博物館　社会変革の模範に　日本初のICOM大会　京都で
2019年9月19日	毎日新聞夕刊	Topics国際博物館会議（ICOM）　あるべき姿　役割模索　京都で大会 120ヵ国・地域から参加
2019年9月19日	朝日新聞夕刊	マンガの原画　散逸防げ　「芸術」として評価　劣化対策やデジタル保存も
2019年9月24日	読売新聞	国際博物館会議ICOM　交流の重要性　実感
2019年9月26日	京都新聞	ICOM京都発〜文化でつながる人、地域、未来
2019年10月8日	日本経済新聞夕刊	博物館は文化をつなぐ　京都で世界大会、120ヵ国・地域が集う
2019年10月26日	朝日新聞夕刊	記者のツボ　アマゾンの音楽と写真　森の声なき声を伝える

テレビ放映

放映日	掲載元	見出し
2019年9月2日	NHK京都	国際博物館会議　ICOM　開会式
2019年9月2日	NHK京都	〈ミュージアム新時代〉驚きの博物館の“最新技術”
2019年9月2日	京都テレビ	ICOM京都大会　開会式
2019年9月2日	NHK大阪	ICOMの開会式　日本で初の開催
2019年9月2日	毎日放送	秋篠宮さま　ICOM開会挨拶
2019年9月2日	テレビ大阪	世界から博物館関係者が京都へ
2019年9月2日	テレビ大阪	きょうの気になる！　ICOMってなに？
2019年9月3日	NHK京都	ICOM京都大会3日目　報道写真家　サルガドさんが講演
2019年9月4日	NHK京都	〈ミュージアム新時代〉漫画の原画を守れ
2019年9月4日	京都テレビ	ICOM京都大会　世界遺産二条城特別公開
2019年9月4日	京都テレビ	ICOM京都大会　ミュージアムの魅力再発見する催し
2019年9月6日	NHK京都	ICOM　関西各地の文化や歴史学ぶツアー
2019年9月7日	NHK大阪	ICOM　国際博物館会議　博物館の新定義　採決持ち越し
2019年9月8日	京都テレビ	アジア文化の発信強化へ　ICOM京都大会閉幕

ICOM規約

（2017年6月9日改定）

目次

序言
第1条　名称、法的地位、所在地、付託期間および会計年度
第2条　基本理念および目的
第3条　用語の定義
第4条　会員資格
第5条　年会費
第6条　会員の特典
第7条　総会および執行役員会選挙における投票権
第8条　ICOMの組織
第9条　管理機構
第10条　総会
第11条　執行役員会
第12条　会計監査
第13条　諮問会議
第14条　国内委員会
第15条　国内連絡員
第16条　国際委員会
第17条　地域連盟
第18条　加盟機関
第19条　大会
第20条　事務局
第21条　収入および支出
第22条　言語
第23条　発効および改正
第24条　解散

序言

国際博物館会議（International Council of Museums以下ICOMという）の規約は、この組織の最も基本的な文書である。この規約は、ICOM内部規定およびICOM博物館倫理規程によって定義され、また補完される。

第1条　名称、法的地位、所在地、付託期間および会計年度

第1項　名称

この組織の名称は国際博物館会議（ICOM）という。この名称と略称の使用は制限を受け、同組織およびその会員による使用、並びにそれらを益するための使用に限定される。

第2項　法的地位

ICOMは1946年に設立された、フランスの1901年7月1日法（非営利社団契約に関する法律）の適用を受ける非営利組織であり、国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）と公式の関係を維持し、国際連合経済社会理事会の諮問資格を有する非政府組織である。

第3項　所在地

登録されたICOM事務局の所在地は、Maison de l'UNESCO, 1 rue Miollis, 75732 Paris Cedex 15, Franceである。登録された事務所をパリ市内で移転する場合は、執行役員会の承認が必要となる。登録された事務所をフランス国内の別の地域または他国へ移転する場合は、総会の承認が必要となる。

第4項　付託期間

ICOMの付託期間は無期限である。

第5項　会計年度

会計年度は、毎年1月1日に始まり12月31日に終了する。

第2条　基本理念および目的

第1項　基本理念

ICOMは、世界の現在および未来の、そして有形および無形の自然および文化遺産の調査研究、保存、維持、社会への伝達に従事する博物館および博物館専門職員の国際的組織である。

第2項　目的

ICOMは、博物館活動のための専門的・倫理的基準を設定し、それらに関する問題について勧告し、能力構築を促進し、知識を増進し、世界規模のネットワークと共同事業により公衆の文化に対する意識を高める。

第3条　用語の定義

この規約において以下の用語が最初の文字を大文字にして使用される時は常に、この条項に定義された意味を持つ。それらの用語が単数形と複数形のどちらで使用されているかは問わない。

第1項　博物館

博物館とは、社会とその発展に貢献するため、有形、無形の人類の遺産とその環境を、教育、研究、楽しみを目的として収集、保存、調査研究、普及、展示する、公衆に開かれた非営利の常設機関である※。

第2項　ICOMに認められた機関

執行役員会は、諮問会議の助言を求めた上で、他の機関を博物館の性格の一部またはすべてを備えているものと認めることができる。

第3項　博物館専門職員

博物館専門職員は、第3条第1項および第2項の定義により博物館および博物館に相当する施設と認められた機関のすべての職員並びに職業上の資格において、博物館および博物館コミュニティーのためにサービス、知識、専門技能を提供することを主な活動とする個人を含む。

第4項　正当な会員

ICOMの正当な会員とは、入会の申し込みがこの規約の第4条第2項に定められた条件のもとで認められ、執行役員会によって定められた額の当該期間の年会費を支払った個人または団体である。

第5項　国

国内委員会の設立において、国は、国際連合またはその専門機関のいずれかに加盟しているか、国際司法裁判所規定の当事国となっている主権国家と定義される。

第4条　会員資格

第1項　会員

会員の資格は、博物館、ICOMに認められた機関および博物館専門職員に対して開かれている。

会員に選ばれる資格のある者は、ICOM入会の意思を表明し、ICOM博物館倫理規程を受け入れ遵守することに同意し、入会申込書に記入しなければならない。

ICOMの会員資格は、各国の法律および国際条約を勘案して、美術品、自然および科学標本を含む文化財の取引（すなわち利益目的の売買）をおこなう個人または団体（その職員を含む）には与えられない。同様に、ICOMの倫理基準に反する活動に従事する個人または団体にも会員資格は与えられない。

※新たな博物館の定義案については、p.185をご参照ください。

第2項　入会の承認

国内委員会は、新会員の入会申込書および年会費をICOM事務局にできる限り速やかに送付する。入会申込者が市民権を有する国に国内委員会がない場合は、直接にICOM事務局に申請する。さらに執行役員会は入会申込を審査させることができる。

本条第3項に定めるように、名誉会員のみがこの審査過程を免除される。名誉会員候補は執行役員会によって総会に提案され、総会は多数決によりその可否を決定する。

第3項　会員の範疇

ⅰ．個人会員―第3条第3項に定められた現職もしくは退職した博物館専門職員、または第4条第1項に定められたその他の者は、個人会員になる資格を有する。

ⅱ．団体会員―博物館、または第3条に定められた博物館の定義に合うその他の団体。

ⅲ．学生会員―博物館関連の学術的な課程に在籍している者は、国内委員会の提案によりこの範疇の会員としての入会を認められる場合がある。

ⅳ．名誉会員―国際的な博物館コミュニティまたはICOMのために格別の働きをした者、過去にICOM会長に選出された者はすべて名誉会員となる。

ⅴ．賛助会員―博物館および博物館間の国際的な協力に対する関心のゆえに、経済的およびその他の相当な援助をICOMに対しておこなう個人または団体。

この規約に記載されていないICOM会員の範疇は、いかなるレベルにおいても、ICOMによって正当または適用可能とみなされない。

第4項　会員資格の停止

ICOMの会員資格は、自発的に取り下げることができるとともに、以下の理由のいずれかに基づき、執行役員会の決定により取り消される場合がある。

ⅰ．職業上の身分の変化

ⅱ．ICOM博物館倫理規程への違反

ⅲ．ICOMの目的と実質的に相容れないとみなされる行為

ⅳ．正式な支払い請求を受けた後の会費の不払い

第5条　年会費

第1項　会費の額および支払い

ICOMの個人、団体、学生および賛助会員は、執行役員会が規定し総会によって承認された額の年会費を支払わなければならない。

第2項　会費の期間

年会費は当該の暦年に対するものである。

第6条　会員の特典

第1項　会員証カード

正当な会員には、会員証カードが発行される。

第2項　選挙に立候補する権利

正当な個人会員は、(1) 執行役員会、(2) 諮問会議長または副議長、(3) 国内委員会、国際委員会または地域連盟の委員長の選挙に立候補することができる。

第3項　指名された団体代表

団体会員は、国内委員会および国際委員会並びに大会および総会における自らの代表者を3名指名することができる。これらの代表者はICOMの個人会員でなくともよい。

指名された代表者の氏名は、状況に応じて、当該団体の責任者の署名入りの文書により、委員長または事務局長に通知されなければならない。

国内委員会、国際委員会または地域連盟の理事に選出された団体代表のうち、その任期中に団体会員の雇用を解かれる者は、(その資格があれば) 個人会員になるか、理事の地位を放棄しなければならない。

第4項　学生の参加

学生会員は国内および国際委員会の活動に参加することができ、また大会と総会にも出席・参加できるが、投票あるいはICOMの役職への立候補をおこなうことはできない。

第5項　特別な身分

名誉および賛助会員には会員の権利と特典が与えられるが、選挙によってICOMの役職に就くことはできない。

第7条　総会および執行役員会選挙における投票権

ICOMの正当な会員のみが投票権を有する。

第1項　委員会の投票

各国内および国際委員会は、総会までに提示された事柄に関して、自らの代表として投票する5名の会員 (個人会員または団体会員の代表として指名された者) を任命することができる。各委員会によって任命された投票権を有する会員は、5名を超える委任を行使することはできない。

第2項　地域連盟および加盟機関の投票

各地域連盟は3名の、また各加盟機関は2名の会員 (個人会員または団体会員の代表として指名された者) を、総会までに提示された事柄に関して自らの代表として投票する者として任命することができる。各地域連盟によって任命された投票権を有する会員は、3名を超える委任を行使することはできない。各加盟機関によって任命された投票権を有する会員は、2名を超える委任を行使することはできない。

第3項　投票権のない会員

学生、賛助および名誉会員は、ICOMの総会における投票権を有しない。

第8条　ICOMの組織

ICOMの組織構造は以下のとおりである。

ⅰ．総会

ⅱ．執行役員会

- 幹部執行役員：会長1名、副会長2名、財務担当役員1名
- 一般執行役員

ⅲ．諮問会議

ⅳ．国内委員会

ⅴ．国内連絡員

ⅵ．国際委員会

ⅶ．地域連盟

ⅷ．加盟機関

ⅸ．事務局

第9条　管理機構

ICOMの基本的な権限は会員にある。総会はICOMの最高意思決定機関であるとともに立法機関であり、すべての個人会員、指名された団体会員の代表者、学生、賛助および名誉会員によって構成される。

執行役員会は、総会において選出された幹部執行役員と一般執行役員によって構成され、ICOMの運営面を担当する。

諮問会議は、助言者的役割を担い、国内および国際委員会並びに地域連盟および加盟機関の委員長または委任された代表者によって構成される。

第10条　総会

第1項　権限

総会はICOMの最高意思決定機関であり、立法機関である。

第2項　会員

総会は、すべての個人、学生、賛助および名誉会員並びに指名された団体会員の代表者によって構成される。彼らは、国内委員会、国際委員会、地域連盟および加盟機関により代表される。第7条第1項に従って、国内委員会、国際委員会、地域連盟および加盟機関により代表投票者に指名された正当な個人会員と指名された団体会員の代表者のみがICOM総会における投票権を有する。

第3項　会議

通常総会－総会は通常の会議を最低年1回、諮問会議の年次会議と同時に開催する。

通常総会の定足数は、投票権を持つ会員の単純多数である。決議は出席者と代理人の単純多数決でおこなわれる。

この定足数に達しない場合は、遅くとも24時間以内に同じ場所で総会が再び召集される。そのときの出席者および代理人が何人であろうとも、総会は討議をおこなう権限を持つ。通常総会の決議は出席者と代理人の単純多数決によりおこなわれる。

通常総会は、執行役員会および諮問会議並びに国内・国際委員会、地域連盟および加盟機関の勧告について決定をおこなう。

ICOMの会長は、執行役員会、諮問会議長、事務局長と協議して、総会の議題を設定し、総会の議長を務めるものとする。

通常総会は執行役員を選出する。

通常総会は最低年1回、諮問会議の年次会議と同時に、かつ会計年度の終了後6ヶ月以内に、会計について決定するために開催される。

この規約の第19条に定められているように、大会が開催される年には、3年毎の大会を構成する要素の1つとして総会が開催される。

臨時総会―会長は執行役員会、諮問会議の過半数または国内委員会の3分の1の勧告により、以下をおこなうために臨時総会を招集する。

- この規約の第23条に定められた、規約改正の採択
- この規約の第24条に定められた、ICOMの解散

臨時総会のみが、規約の改正とICOMの解散をおこなう権限を持つ。

臨時総会の定足数は、投票権を持つ会員の3分の2である。この定足数に達しない場合は、遅くとも24時間以内に同じ場所で臨時総会が再び召集され、投票権を持つ会員の50%以上が出席していれば討議をおこなうことができる。

規約改正については本規約第23条に定められた通り出席者および代理人の3分の2、ICOMの解散については本規約第24条に定められた通り4分の3の多数で議決される。

第4項　総会への公式招待

ICOMの会長は、執行役員会、諮問会議長、事務局長と協議のもと総会の議題を定め、会議の開催予定日の少なくとも30日前に総会の招集をおこなう。通常総会への公式の招待状は、会議開催日の少なくとも30日前に、事務局長から総会を構成するすべてのICOM会員に送付される。

臨時総会への公式の招待状は、規約の改正が議題の場合には会議開催日の少なくとも60日前、ICOMの解散が議題の場合には会議開催日の少なくとも30日前に、送付される。

告知はICOMのウェブサイトでおこなわれ、最も効率的と思われる方法で伝達される。

公式招待状には、総会の期日、時間、会場および議題が記される。資料はICOM会員が考察や議論をおこなえるよう十分な時間的余裕をもって提供されなければならず、公式招待状と同時に送付されることが望ましい。

総会の会議は、Maison de l'UNESCO, 1 rue Miollis, 75732 Paris Cedex 15, France、または公式の招待状に示された他の場所で開催される。

第5項　参加者リスト

各総会中に、出席している会員および委任された代理人は、出席名簿に署名をする。会長は出席名簿を確認し、その正確性を保証する。

第6項　会長の権限

ICOM会長は、執行役員会、諮問会議長および事務局長との協議のもと、総会の議題を定め、総会の議長を務める。

第7項　議事録

各総会の討議および決議に関する報告は、事務局長によって作成され、会長により承認される。電子版または印刷版の複写または抄録が会員に提供される。

議事録には、総会の期日、場所、議題、開催の方式、出席会員または代理人の氏名、討議用に提出された文書および報告書、討議の要旨、決議文と投票結果並びに決定文を記載しなければならない。

第11条　執行役員会

第1項　構成

執行役員会はICOMの運営意思決定機関である。執行役員会は、9名以上、15名以下の選出された構成員、および職務上の資格をもつ諮問会議長により構成される。

執行役員は、通常総会によって選出され、3年間の任期を務める。当選後、一般執行役員も幹部執行役員も、同じ役職を2期連続して務めることができる。一般執行役員は後に幹部執行役員に選出されることが可能である。いかなる者も執行役員会の構成員を4期を超えて連続して務めることはできない。諮問会議の議長としての任期は、執行役員の任期と見なされる。

個人会員のみが執行役員会の構成員に選出される資格を有する。執行役員に選出された者は、執行役員会の了承がないかぎり、ICOM内で他の役職に就くことはできない。

諮問会議長を含む各執行役員は1票の投票権を持つ。賛否同数の場合は、会長が決定票を投じる。

第2項　会議

執行役員会は、通常会議を少なくとも年2回開催する。これらの会議のうちの1つは年次通常総会との同時同所開催とする。

第3項　執行役員会の義務

執行役員会は、総会により特定された戦略の実行についての責任を負う、選出された組織の最高機関であり、総会の決定を実行するために必要な行動をとる。

執行役員会は、ICOMの優良な運営を保証し、ICOMのさまざまな資源（財政的、人的、知的および技術的資源）とその発展を監督する。執行役員会は、ICOMの名声、国際的評価、公共の理解を維持することを保証し、事務局に指針を与える。

執行役員会は、会費の額を勧告し、総会の承認を得る。

第4項　定足数および多数

執行役員会の会議の定足数は単純多数である。また、執行役員会のすべての決定は単純多数による。

第5項　幹部執行役員会

幹部執行役員会の構成は以下の通りである。

- 会長1名
- 副会長2名
- 財務担当役員1名

会長の任期は3年であり、3年毎の総会において選出され、同期間で2期まで再選できる。会長は、博物館および博物館専門職員を代表する国際組織という権能をもつICOMの活動に関する戦略指針を定める。会長はすべての民事行為の範囲内でICOMを代表する。会長の署名によりICOMは第三者との協約を締結する。会長は総会および執行役員会の会議を招集し、議長を務める。

次の執行役員会の会議が開かれるまでの間に会長が下す決定は、戦略計画、予算およびその他の執行役員会と総会により取り上げられた問題や下された決定の枠内に留まるものでなければならない。

会長は、幹部執行役員との協力のもと、緊急の問題に対応し、暫定的な解決をおこなう。そのような行動は、当該の緊急事態およびそれに続く措置に関する説明とともに、最も早い機会に執行役員会に対して報告される。

会長は、ICOMの日常業務を管理する権限を事務局長に委任する。会長は、事務局長の上司として、事務局長が会長、執行役員会および総会により下された決定を確実に実行せしめる。

2名の副会長の任期は3年であり、3年毎の総会において選出され、同期間で2期まで再選できる。副会長は会長によって命じられた業務を遂行し、会長が必要とする補佐をおこない、会長が不在の時には会議を招集して議長を務める。

財務担当役員の任期は3年であり、3年毎の総会において選出され、同期間で2期まで再選できる。財務担当役員は、事務局長と協力してICOMの財政方針に必要なガイドラインを作成して執行役員会の了承を求め、ICOMの収支の結果を検討して執行役員会および総会に定期的に報告をおこなう。

第6項　欠員

会長が欠員となった場合または弾劾された場合は、執行役員会が2名の副会長のうちの1名を選び、総会によって執行役員メンバーの次期選挙がおこなわれるまでの間、その者が会長職に就く。

副会長に欠員が生じた場合は、執行役員会が一般役員のうちの1名を選び、総会によって執行役員の次期選挙がおこなわれるまでの間、その者が副会長職に就く。選出は単純多数決によっておこなわれる。

財務担当役員に欠員が生じた場合は、執行役員会が執行役員のうちの1名を選び、総会によって執行役員の次期選挙がおこなわれるまでの間、その者がその職務をおこなう。

一般執行役員に欠員が生じた場合は、総会によって次期選挙がおこなわれるまでの間、その役職は空席のままとする。

第12条　会計監査

執行役員会は年次会議において、有資格の個人または団体をICOMの監査役に任命する。監査役に任命された個人または団体は、ICOMの収支に関する年次報告書を作成する。

第13条　諮問会議

第1項　構成

諮問会議はICOMの助言機関である。諮問会議は国内および国際委員会、地域連盟並びに加盟機関の委員長（または指名された代表）により構成される。

第2項　諮問会議の機能

諮問会議は執行役員会および総会に対して、ICOMの方針、事業、手続き、財政に関する問題について助言をおこない、また、規約の改正を提案することができる。諮問会議は、執行役員会およびICOMのその他の部門が勧告するICOMの全体的な利益に資することがらや活動について助言をおこなう。諮問会議の活動は総会に報告され、次の会議で承認を得る。

第3項　議長、副議長、国内委員会全体の代表および国際委員会全体の代表並びに諮問会議長および副議長は、構成員により3年の任期で選出される。諮問会議長および副議長は2期連続で務めることができる。

諮問会議長は、諮問会議の会議を準備・招集してその議長を務め、職務上の執行役員、および地域連盟の理事会の職務上の構成員を務める。

副議長は、議長によって命じられた業務を遂行し、議長が必要とする補佐をおこない、議長が不在の時には会議を招集して議長を務める。

議長または副議長に欠員が生じた場合には、諮問会議が次の会議で構成員のうちの1名を選び、その者が、前議長または前長の残りの任期が終わるまでその代理を務める。

国内委員会全体の代表1名および国際委員会全体の代表1名は、それぞれ、国内委員会および国際委員会の委員長または委任された代表によって、大会直後の年から次の大会直後の年までの3年間の任期で選出される。

再選は1度までとする。

両代表は、それぞれ諮問会議の会議における国内および国際委員会の各全体会議を準備・招集してその議長を務め、諮問会議長と協力する。

国内または国際委員会全体の代表に欠員が生じた場合には、国内および国際委員会の委員長または委任された代表者がそれぞれ、次の会議で構成員のうちの1名を選び、その者が、国内または国際委員会全体の代表となり、前代表の残りの任期が終わるまでその代理を務める。

第4項　年次会議

諮問会議は、通常会議の範囲内で、総会と同じ期日と場所において、会議を少なくとも年1回開催する。

第5項　投票

国内および国際委員会、地域連盟および加盟機関はそれぞれ1票の投票権を持つ。

諮問会議の構成員（議長を除く）は、諮問会議の会議に別のICOM会員を代理として出席させることができるが、いかなる者も1名を超える委任を受けることはできない。

第6項　定足数および多数

諮問会議の会議の定足数は、構成員の半数（50%）である。この定足数に達しない場合は、24時間以内に同じ場所で諮問会議が再び召集される。そのときの出席者および代理人が何名であろうとも、諮問会議は討議をおこなう権限を持つ。諮問会議の決定は出席者および代理人の単純多数決によりおこなわれる。

第14条　国内委員会

国内委員会は、最低8名のICOM会員によって構成される単独の法人組織であり、執行役員会の承認を得て、その国において博物館および博物館専門職員の利益を代表し、またICOMの活動を企画することができる。国内委員会の活動はICOM国内委員会規則に沿うものでなければならない。

第15条　国内連絡員

ある国に国内委員会が存在しない場合、執行役員会は1名のICOM会員をその国のICOM国内連絡員に任命することができる。

第16条　国際委員会

最低50名のICOM会員によって構成される団体は、執行役員会の承認を得て、事業や活動を実施し、同じ学術的・専門的関心を持つICOM会員間の通信経路としての役割を果たす国際委員会を設置することができる。国際委員会の活動はICOM国際委員会規則に沿うものでなければならない。

第17条　地域連盟

地域連盟は執行役員会の承認を得て、その地域の国内委員会、博物館および博物館専門職員の情報交換および協力の場としての役割を果たすことができる。地域連盟の活動はICOM地域連盟規則に沿うものでなければならない。

第18条　加盟機関

執行役員会は、国際的なレベルで博物館または博物館専門職員の利益に資することを目的とする国際組織に、加盟機関としての地位を与えることができる。加盟機関は、地域別またはテーマ別に規定することができる。加盟機関の活動はICOM加盟機関規則に沿い、かつICOM博物館倫理規程に従うものでなければならない。

第19条　3年毎の大会

第1項　3年毎の集議

ICOMは3年おきに大会を開催する。

大会は、執行役員会の会議、諮問会議の会議および総会が開催されるだけでなく、すべての国際委員会並びにICOMのその他の部門の合同会議の場である。

大会では、執行役員と諮問会議長および副議長が選出され、ほとんどの国際委員会の選挙がおこなわれる。

第2項　決議

大会は討論中に提案された決議を総会での討議に提出することができる。

第20条　事務局

第1項　役割

事務局は、事務局長および他のICOM事務職員から構成される、ICOMの運営の中心である。事務局は諸事業を開始し、実行し、評価し、会員ファイルを扱い、財務を記録、管理し、ICOMのアイデンティティを保護、促進する。

第2項　事務局長

事務局長は、ICOMに雇用された最高運営責任者である。事務局長は執行役員会の承認に基づきICOM会長が任命し、会長に直属する。会長は事務局長の待遇を設定し、その業績を評価する。事務局長は、ICOMの効率的で効果的な運営、ICOMの運営や事務局の日常業務に必要な資源並びにICOMの利益の促進、またICOM会員、委員会、作業部会およびワーキンググループとの連絡について責任を負う。

第21条　収入および支出

第1項　収入

ICOMの財源は以下の通りである。

(i) 会員が納める会費
(ii) ICOMの資産および活動からの収入
(iii) 直接に受け取る補助金および私的な寄附金並びにICOM財団からの支援金
(iv) ICOMがおこなったサービスに対して契約の範囲内で受け取った支払い金

第2項　支出

ICOMの財源の使用は、財務担当役員が定めたガイドラインを基に作成され、執行役員会によって承認された年間予算に従うもののみが認められる。

第22条　言語

第1項　公用語

英語、フランス語およびスペイン語をICOMの公用語とし、ICOMの会合ではこれらの各言語を使用することができる。

第2項　他の言語

総会は、会員がその費用を負担するという条件のもとで、他の言語を採用することができる。

第23条　発効および改正

第1項　施行

この規約は総会による採択の後、直ちに発効する。

第2項　公式文書

ICOMは1901年7月1日法に準拠する団体としてフランスで登録されているため、この規約のフランス語版が公式文書として、今後作成されるすべての翻訳の原本となる。

訴訟または誤解が生じた場合には、確認の目的でフランス語の規約が参照される。

第3項　改正

執行役員会、諮問会議、国内および国際委員会、地域連盟並びに加盟機関は、この規約およびICOM内部規定の改正を提案することができる。

すべての会員が、第10条第4項に従って、正当に召集されなければならない。

臨時総会は、第10条第3項に従って、規約の改正を採択することができる。

第24条　解散

第1項　解散に関する権限

ICOM会員は、第10条第3項に従って、ICOMの解散を決定することができる。

すべての会員が、第10条第4項に従って、正当に召集されなければならない。

第2項　ICOMの資産

解散時にICOMが所有していた資産はすべて、フランスの1901年7月1日法（非営利社団契約に関する法律）の規定に従って、ICOMと同様の目的を持つ機関に譲渡される。

（2020年3月1日日本語訳修正）

現博物館の定義

ICOM ウィーン大会 2007 採択

A museum is a non-profit, permanent institution in the service of society and its development, open to the public, which acquires, conserves, researches, communicates and exhibits the tangible and intangible heritage of humanity and its environment for the purposes of education, study and enjoyment.

（ICOM 日本委員会訳）
博物館とは、社会とその発展に貢献するため、有形、無形の人類の遺産とその環境を、教育、研究、楽しみを目的として収集、保存、調査研究、普及、展示する公衆に開かれた非営利の常設機関である。

新たな博物館の定義案

ICOM 京都大会 2019 にて提案

Museums are democratising, inclusive and polyphonic spaces for critical dialogue about the pasts and the futures. Acknowledging and addressing the conflicts and challenges of the present, they hold artefacts and specimens in trust for society, safeguard diverse memories for future generations and guarantee equal rights and equal access to heritage for all people.

Museums are not for profit. They are participatory and transparent, and work in active partnership with and for diverse communities to collect, preserve, research, interpret, exhibit, and enhance understandings of the world, aiming to contribute to human dignity and social justice, global equality and planetary wellbeing.

（仮訳）
博物館は、過去と未来に関する批評的な対話のための、民主化を促し、包摂的で、様々な声に耳を傾ける空間である。博物館は、現在起こっている紛争や課題を認識し、それらを考察しつつ、社会のために託された資料や標本を保管し、未来の世代のために多様な記憶を保全し、すべての人々に遺産に対する平等な権利と平等なアクセスを保証する。

博物館は、営利を目的としない。博物館は、開かれた公明正大な存在であり、人間としての尊厳と社会正義、世界的な平等と地球全体の幸福に貢献することを目的に、多様なコミュニティと手を携えて収集、保存、研究、解釈、展示並びに世界についての理解を高めるための活動を行う。

第 25 回 ICOM（国際博物館会議）京都大会 2019 報告書

発 行 日：2020 年 3 月 31 日
発　　行：国際博物館会議（ICOM）
　　ICOM 京都大会 2019 組織委員会
編　　集：ICOM 京都大会準備室（担当：西 記代子）
印　　刷：佐川印刷株式会社
制　　作：ICOM 京都大会 2019 運営事務局（株式会社コングレ内）
　　三美印刷株式会社

ICOM KYOTO 2019 ロゴデザイン：榊原 健祐（Iroha Design）

非売品
Ⓒ 2020　国際博物館会議（ICOM）、ICOM 京都大会 2019 組織委員会
●本紙に掲載された著作物の著作権および、複製・翻訳・上映・譲渡・公衆通信（データベースの取込および送信可能加権を含む）に関する許諾権は国際博物館会議（ICOM）、ICOM 京都大会 2019 組織委員会が保有します。